

# ビルマの日々

ジョージ・オーウェル



*Burmese Days*

グーテンベルク 21

目次

一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	

解説

人も寄りつかぬこの荒野の奥の  
物悲しい構立ちの陰

——シエイクスピア『お気に召すまま』

ビルマ内陸チャウタダ地区の治安判事ウ・ポ・チンは屋敷のペランダにすわっていた。まだ八時半であったが、四月なのでむし暑く、昼間は長く息苦しくなりそうな気配だった。それとの対照で時どきかすかにそよ風が涼しく感じられ、軒下に吊された水を打ったばかりの蘭をゆり動かすことがあった。蘭の向こうには灰色の曲がった椰子の木、その向こうにはきらきら輝く群青色ぐんせいしょの空が見える。目がくらむほど高い上空では、教羽の禿鷹が羽を動かさず旋回していた。

ウ・ポ・チンは瞬きもせず、さながら大きな磁器の仏像のように強烈な日光を見つめていた。五十男であったが、太っているのが、ここ数年は椅子から立ち上がる時は、いつも人の手を借りた。それでいて、全身的には体型がよく、美しくさえあった。ビルマ人は白人のように、ぶくぶく太ることはなく、果物がふくらむように均斉のとれた太り方をする。顔面は広く黄色で、しわ一本ない。目は黄かつ色。足にはなにも履かず、ずんぐりと甲が高く、足指の長さはみな同じ。刈り込んだ頭も無帽であった。着ているものは緑と紫紅色のチェック模様のついた、あざやかなアラカ樹繊維でつくったロンジー、つまり腰巻のようなもの、これはビルマ人のふだん着だ。テーグルの上にある塗り箱から取り出したキンワキンワ〔コシヨウ科の植物〕の葉を噛みながら、過ぎし日のことを思い出していた。

それはすばらしく成功した人生であった。ウ・ポ・チンの最も古い記憶は一八八〇年代までさかのぼるが、当時、裸で太鼓腹の子供だった彼は、イギリス軍がワンダレーワンダレー〔ビルマ中部の都市〕に勝利の行進をしていくのを立って眺めていた。赤ら顔に赤い服を着た、あの大きな凶体をした肉食人種の隊列や、長いライフル銃を肩にかけ、ザックザックと重くひびく軍靴の音などに恐怖心を抱いたのを今も思い出す。しばらくその行進を見た後で逃げ出した。子供なりに、自国民はこの巨大人種にはとてもかなわないことが分かった。そしてイギリス側に立って戦い、その寄生虫になることが、子供のころの強い野望になってしまったのである。

十七歳の時、彼は官職につこうとしたが、貧乏で縁故ユキがないこともあって失敗、三年間ワンダレーのくさいくさい迷路のような市場で、米屋の店員をしたり、時には盗みをしたりした。それから二十歳のとき運よく恐喝で四〇〇ルピーの金があるころがりこんだので、すぐラングーンへ行き、政府の書記の地位を買ったのである。俸給は安いが、儲けになる仕事だった。当時は書記がぐるになり、国営店を私物化して着ちやくと収入を得ていた。（ウ・ポ・チンはその頃はまだまだあのポ・チンで、敬称としての『ウ』は後になって付いたものだが）ポ・チンもちろろんこれに手をつけた。しかし、みじめたらしく小銭をくすねながら書記の生活を続けるには、あまりにも才能がありすぎた。ある日、彼は、政府が下級役人不足のため書記の中から若干名を登用しようとしていることを知った。このニュースは一週間もすればひろまってしまうことだろうが、どんな情報であろうと、つねに他人よりも一週間早く入手するのがポ・チンの得意わざであった。やるなら今だと見ると、横領仲間を密告して有無を言わせなかった。連中の大部分は監獄に送られた。一方ポ・チンは正直の報酬として地区助役に任命され、それ以来着実に昇進してきた。五十六歳になった現在は地区治安判事であり、おそらく、さらに出世して、イギリス人を同僚ないし部下とする副総弁務官にまでなるだろうと思われる。

治安判事としての彼のやり口は単純であった。どんなに巨額の金を積まれても、収賄によって判決を売り渡すようなことは決してなかった。不正な裁判をする判事は、いずれは尻尾をつかまえられることを知っていたからだ。彼が実行したことはそれよりはるかに慎重であって、当事者双方から賄賂を受け取り、厳密に合法的な解釈に基づいて裁決することであった。これで彼は公正だという有利な評判を得た。訴訟当事者からの収入のほか、ウ・ポ・チンは自己の管轄内にある村落に対して一種の私設税制を敷いて、たえず税金を徴収した。もし納税を怠る村があれば、ウ・ポ・チンは懲罰措置をとった。たとえば、強盗団がその村を襲う、村の指導者たちがたためな容疑で逮捕される、などである。するとほどなく納税は完了する。またその地域で発生した大がかりな略奪による金品の分け前にもあずかっていた。（イギリス人はだいたい部下に不利なことは信じないので）ウ・ポ・チンの上司はともかくとして、それ以外の者はほたいいてい、当然、そのようなことは知っていた。にもかかわらず、これを暴露してやろうとすると必ず失敗した。略奪物を分けてもらって彼に忠節を誓う支持者がわんさといいたのである。告訴された場合、ウ・ポ・チンは自ら買収した証人を次つぎと繰り出して簡単にそれを否定し、逆訴訟によってさらに連打ち

をかけて自己の立場をますます強固なものにした。事実上、難攻不落であった。というのも彼は実に見事に人物判定をやるので、間違った手を打つことがなく、また、陰謀には全身全霊であつたので、不注意とか無知で失敗するようなことがなかったからだ。この正体が露見することは決してなく、次から次へと成功をおさめ、ついには数十万ルピーの財産と名譽につつまれて死ぬと言つてもほとんど間違ひなからう。

来世までもその成功は続きそうだ。仏教信仰によれば、現世で悪業をなした者は、鼠や蛙など、何か下等動物に生まれ変わるといふ。ウ・ポ・チンは信心深い仏教徒であるから、そんなことにならないように、晩年を善行に捧げ、それまでの生き方をはるかに凌ぐ功徳を積むつもりだつた。その善行とは、おそろく仏塔建立ということになるだろう。パゴダは四つになるか五つになるか、六つか七つか、いくつ要るかは僧侶が教えてくれるだろう。彫刻をした石や、こうもり傘形の金ピカ屋根があり、風が吹けば鳴り、そのひと鳴りひと鳴りが祈願になるという小さな釣り鐘も付いているようなパゴダを建立するのだ。そして人間の男として生まれ変わつてくるのだ。女は鼠や蛙なみ、よくても少々威厳のある象などぐらいには見られていないから。

このような考えが、さーつと、しかもたいていは絵の形でウ・ポ・チンの心の中を通りすぎた。頭はずるがしこくできているのだが、まったく野蠻なもので、何かはつきりした目的があれば活動し、ただ瞑想にふけるだけというのにはできない。彼が今到達したのは目標にできた地点であつた。椅子のひじ掛けにやや小さい三角の形をした手をかけたままちよつと向きを変え、せいぜいと喘ぐような声で人をつれ呼んだ。

「バ・タイ、おいバ・タイつ」

召使のバ・タイがペラソダの玉のれんをぐぐつて現われた。小柄であばたのある男で、臆病で少し腹がへつていふような表情をしていた。ウ・ポ・チンは貨銀を払つていなかった。バ・タイはウ・ポ・チンの一言で牢送りになる既決の窃盗犯だつた。バ・タイは前へ出ながら、後ずさりしているような印象を与えるぐらい低く頭を下げ合掌をした。

「はい、旦那さま」

「だれかわしに会いにきておるのか」

バ・タイは指で訪問者を教えた。「旦那さま、テイツピンジの村長が御進物を持ってきております。それに暴行事件の裁きを受けることになっている二人の村人。この二人も贈り物を持って。行政局の主任コ・バ・セインが旦那さまに面会を希望。それから、警察官のフリ・シャート、名前の分からない強盗団の一味。これはたぶん盗んだ金の腕輪のことで喧嘩したんですよ。さいごに赤ん坊連れの村娘がおります」

「その娘はどんな用件かね」

「赤ん坊が旦那さまの子だと申しております」

「ふうん。それで村長はいくら持ってきたのだ」

「一〇ルピーとワンゴルー籠だけだと思ひます、とバ・タイが答えた。

ウ・ポ・チンは言った。「村長に言つておけ、ニ〇ルピーでないといかん、と。もしあすまでにその金がここに届かないと、やつも村も面倒なことになると言つてやれ。ほかの連中にはすぐ会ふ。コ・バ・セインには、ここへ来るように言え」

バ・セインはすぐ現われた。姿勢がよくて肩幅の狭い男で、ビルマ人にしては大変背が高く、妙につるつるした顔はコーヒー入りグラモンジュ【クリーム状の食べ物】を思わせる。ウ・ポ・チンにとつてこの男は役に立つ道具だつた。想像力に欠けるがよく働く優秀な書記だつた。副総弁務官ワグレ氏は職務上の秘密はだいたいの男に打ち明けていた。ウ・ポ・チンはそう考へて機嫌がよくなり、笑顔でバ・セインを迎え、キンワ入れの箱に手を差しよすすめた。

「ところで、コ・バ・セイン、あの仕事の進みぐあいはどうかね。ワグレ氏がこの急に言葉が英語になり、「『かなーり進展してーる』と思つていいんだな」

バ・セインはこの軽い冗談ににこりともしなかつた。空いた椅子にぎごちなく背筋を伸ばしてすわりながら答えた。

「閣下、例の新聞が一部、けさ着きました。ごらん下さい」

彼は『ビルマ愛国者』という英語とビルマ語の二カ国語による新聞を差し出した。それは粗末なページの新聞で、吸取紙程度の悪い紙にひどい印刷をしたもので、紙面は『ラングーン・ガゼット』紙から盗用したニュースやら、弱よわしい民族主義的誇張表現で書かれた記事やらで構成されていた。最後のページは活字が滑って紙面が黒くなり、発行部数が少ないのを、喪に服して嘆いているようだった。ウ・ポ・チンの目にとまった記事は、ほかのとはかなり違っていて、次のような内容だ。

映画、機関銃、梅毒など多方面にわたるお恵みをもたらしてくれた、強力なヨーロッパ文明のおかげで、われら貧しき黒人の生き方が向上しつつある今日、いちばん興味ある話題はわがヨーロッパの恩人たちの私生活ではなかったろうか。そこで内陸のチャウタダ地区の、とくに副総弁務官ラゲレガー氏の話題は読者の興味をひくものと思われる。

ラゲレガー氏は、立派な老イギリス紳士で今日よく見かけるタイプである。彼は『家族持ち』であるというのが、イギリス人の評である。とても家族づぐりの得意な人で、チャウタダ地区に赴任後一年で、はや三人の子供がおり、その前にいたジュエーミーヨ一地区には、六人の子供を残している。ラゲレガー氏の手落ちといえば、この幼児たちを困窮状態に置き、さらにその母親たちの中には餓死の危険にさらされている者がいる、ということであろう。

同じ内容の別の記事もあり、お粗末ながら、ほかの部分より水準はかなり上回っていた。ウ・ポ・チンは老眼だったので、腕をいっぱい伸ばしその記事を注意深く読み終えた。それから考え込むように口もとをゆがめ、キンマの汁で真赤な小さくて丈夫な歯を何本もむき出した。

「この編集者は六ヶ月の禁固になるだろうな」と最後に言った。

「彼はそんなこと気にしませんよ。債権者たちが自分を一人にしておいてくれるのは、自分が監獄にいる時ぐらいなものだと言ってます」

「書記見習いのあのラ・ベ少年が自分ひとりでこの記事を書いたというだね。あれは大変利口なやつだ。見込みがある。官立高校は金の浪費だなど二度と言ってはならんぞ。わしはラ・ペをきくと書記にしてみせるからな」

「それじゃあ、なんですね。この記事で十分だとお考えで……」

ウ・ポ・チンはすぐに返事をしなかった。ハーハーと息を切る苦しそうな音をもらし始めていた。椅子から立ち上がり始めていたのだ。バ・タイはその音聞き慣れていたので、ピース玉のカーテンのうしろから姿を見せ、バ・セイと二人で両側からウ・ポ・チンのわきの下に手をやって立ち上がらせた。ウ・ポ・チンは魚肉の運び屋が肩の荷の均衡をとる時のような動きをして腹の重量を両足で調整しながら、しばらくの間立っていた。それからバ・タイに引き下がるよう手で合図した。

「十分とはいえないね」彼はバ・セイの質問に答えて言った。「決して十分ではないよ。まだまだやるべきことがたくさんある。しかし、これは手始めとしては当を得たものだ。いいかね、よく聞くんだ」

彼は手すりのところへ行つて、口中いつぱいの真赤なキンマを吐き出し、それから両手を背中に回して、小股でペラソダを縦横に歩き出した。太ももがこすれて、よたよたと歩きながら、官庁だけに通じる下品な言葉で、ビルマ語動詞や英語の抽象的な表現を混ぜながらしゃべった。

「さて、この件を最初から検討してみよう。我われは、刑務所長で同時に民間外科医師（ドクター）のペラスロミに一斉攻撃をかけ、中傷し、名声を打ち砕き、最終的には永遠にほうむってしまうつもりだ。この作戦はなかなかむずかしいぞ」

「そのとおりです」

「危険はないが、じっくりとやらんとせよ。我われはつまらん書記や巡査を訴えるつもりではない。高官を訴えようとしているのだ。高官の場合は、たとえインプンであっても書記を相手にするのはわけが違ふ。書記はどのようにしてほうむるか。簡単だ。告訴、二十数名の証人、解任、そして投獄という手順でよい。だが今度の場合それではだめだ。穏やかに、あくまで穏やかにやろうと思う。いかなる醜聞（スキャンダル）もたてないし、とりわけ公の取り調べもやらない。答弁の機会がある告訴も必要ない。それでいて三ヶ月以内に、あのドクターは悪いやつだということをチャウタダ地区にいるヨーロッパ人に思い込ませてやるんだ。やつどの点を非難するか。賄賂は駄目だろう。ドクターは賄賂を全然受け取らないから。そ

れでは一体何を？」

「刑務所内で暴動をやらせる手もあります」とバ・セインは言った。「そうなれば所長としてドクターは非難されるでしょう」

「いや、それは危険すぎる。わしは看守が四方八方にライフル銃を発砲するのは望むところでない。それに費用がかさむだろう。そうなるなら、それは背信行為で民族独立運動を扇動する宣伝になる。ヨーロッパ人に信じ込ませる必要があるのは、ドクターが反動的で反英的意見の持ち主だということだ。それは賄賂よりはるかに悪質だ。現地人の人は賄賂ぐらい受け取っていると思われている。だが現地人役人の忠誠心について少しでも疑いを持たせてみる。それでその役人は破滅だ」

「それを立証するとなればむしろいいですね」とバ・セインは反対意見をのべた。「ドクターはヨーロッパ人には大変忠実で、彼らに不利なことを言うとは腹を立てます。そのことを彼らは知っていますよ」

「そんなこと気にするこたない、馬鹿げているよ」ウ・ボ・チンはならこだわりなく言った。「ヨーロッパ人は証拠など全然問題にしない。黒い顔であれば、疑念が証拠になるんだ。匿名の手紙が二、三通あれば驚くべき効果が出る。しつこく主張し続けるかどうかの問題にすぎん。告発につぐ告発をくりかえしていく。これが連中への対処法なのだ。彼ら全員に、次つぎと匿名の手紙を送る。そして彼らが完全に疑念を抱いた頃に……」ウ・ボ・チンは背中に回っていた短い腕を片方前に戻し、指をぱちんと鳴らして、こうつけ加えた。「まず『ビルマ愛国者』のこの記事からはじめよう。これを見たヨーロッパ人は激怒してわめくだろう。そこで次に打つ手は、この記事を書いたのはドクターだと彼らに吹き込むのだ」

「ドクターにヨーロッパ人の友達がいる間はむしろいいでしょう。彼らは皆、病気になるまでドクターにかかります。この前の寒いとき、ラズレガー氏の腸にガスがたまつたのを治しました。とても上手な医者だとの評判です」

「コ・バ・セイン、お前はヨーロッパ人の心が分からないんだ。ヨーロッパ人がペラスラムのもとへ行くのは、チャウタダにはほかに医者がいないからにすぎない。ヨーロッパ人は黒い顔の人間を信用しないよ。いいや、匿名の手紙の場合だって、とことん書き送るかどうかの問題にすぎないのだ。ドクターに友人がいなくなるように、すぐに手を打とう」

「材木商のフロローリー氏がいます」とバ・セインは言った。（彼はポーリーと発音した）「あの人はドクターの親友です。チャウタダにいる時は毎朝、ドクターの家に行つてます。フロローリー氏は二度もドクターを夕食に招待していますよ」

「そりや、そのとおりだ。フロローリーがドクターの友人なら我われには不利だ。白人の友だちがいるインド人をやつつけることはできない。白人の友人があると——彼らが好んで使うあの言葉は何だったかな、そうだ、威信だ——威信が付くのだ。だがラズレガーが持ち上げればフロローリーはすぐに友人を見捨てるさ。あの連中には現地人に忠義立てしようという気持ちはない。それにたまたま知つたのだが、フロローリーは臆病者だしな。あの男はわしが処理する。コ・バ・セイン、お前の役目はラズレガー氏の動静を監視することだ。最近彼は総弁務官に手紙を出したかね。親展の、だよ」

「二日前に出しましたが、手紙を湯気にあてて、こっそり開封してみると、たいしたものではなかったです」

「うん、それじゃあ、書き送るべき中味を彼に提供しようじゃないか。そして彼がドクターに疑念を抱いたらすぐにかねてお前に言っていたもう一方の件に着手するのだ。かくて我われは——ラズレガー氏の言葉で言うと、ああそうだ、『一石二鳥』というやつだ。それどころか群がる鳥全部をやってしまうのだ——はつはつはつ」

ウ・ボ・チンの笑い声は、下腹の奥の方でラズレガーとあわ立つような音で、咳をする前ぶれのようなであった。しかしその笑いは陽気で子供っぽかった。彼は例の『もう一方の件』についてはそれ以上なにも言わなかった。内密にしておくべき事項だったのでペラソダでさえも話し合えないのである。バ・セインは会見終了とみて立ち上がり、折りたたみ式の物差しのように四角ばつたお辞儀をした。

「閣下、ほかにやっておくべきことがございましたらなんなりと」と彼は言った。

「ラズレガー氏が必ず『ビルマ愛国者』を入手するよう手配しておけ。ラ・ペには赤痢にかかったことにして仕事を休むように言っておくとよい。匿名の手紙を彼に書かせたいのだ。今のところそれだけだ」

「ではこれで失礼してもよろしいですね」

「元気でな」ウ・ポ・チンはうわの空で言い、すぐにまた大声で「タイを呼んだ。彼は時間を無駄にしなかった。てっとり早く他の訪問者たちを片付け、さらに村の娘にはその顔をよく見てから、覚えがないと断言し、何もやらずに違い返してしまった。もう朝食の時間だった。毎朝この時刻にきっちりど襲ってくる激しい空腹感が腹を責めた。彼はせつづつように言った。

「バ・タイ、おいバ・タイ！ キン、キンつ、朝めした。早うせい。飢え死にしそうだ」

カーテンの後方の居間では、テーブルがすでに用意され、大きなお碗には米飯が盛っており、たくさんの皿には、カレー、干し海老、切ったみずみずしいマソゴーなどが並んでいた。ウ・ポ・チンはテーブルの方によたよたと歩いて行って、ぶつぶつ言いながら座席につき、すぐに食べ物の上に身をのり出した。妻のワ・キンがうしろに立って給仕をした。四十五歳の瘦せた女で、優しい、薄褐色の痕のような顔付きだった。ウ・ポ・チンは食事中、細君を見向きもしなかった。鼻先にお碗を引き寄せ、せわしげな息づかいをしながら、素早く動く脂ぎった指で食べ物をかき込んだ。彼の食事はいつも迅速にして一心不乱かつ盛りだくさんであった。それは食事というよりはライスカレーの乱食カハクの宴ウチという感じであった。食事が終わると椅子の背にもたれ、何度もげつぶをして、細君に緑色のピルマ製葉巻を持ってくるように言った。彼は英国製煙草を決して吸わなかった。うまくないからなど言っていた。

ほどなくバ・タイに手伝ってもらってウ・ポ・チンは制服に着替え、居間の長方形の鏡の前に立って自分の姿にしばし見惚れていた。部屋の壁は板張りで、チーク材だとはつきり分かる二本の柱が棟木を支えており、ウ・ポ・チンが『エグレス風』を取り入れて化粧張りの食器棚や椅子、玉室の石版画および消火器を置いていたが、一般にピルマ人の家の中がそうであるように、うす暗くて乱雑であった。床は竹で編んだ敷きが一面に敷いてあるが、ライム果とキノコの汁が飛び散って汚れていた。

妻のワ・キンは部屋の隅の敷き物の上にすわり、縫い物をしていた。ウ・ポ・チンは鏡の前でゆっくりと回りうしろ姿を見ようとした。着ているものは薄いピンクのガウンパウン【儀式などでかぶる頭巾状の帽子】と、のりのきいた木綿のエンジー【ピルマの上衣】、それにマソゴー絹の華麗なサーモン・ピンクに錦織りのパニー【スカート式の下衣、ロンドンロンドンの古い呼び名】であった。彼はけんめいに首を回し、自分の巨大な尻にパニーがびったり合ってびかびかしているのを見て喜んだ。彼は太っているのが誇りであった。盛りあがった肉は自己の偉大さの象徴シンボルだと思っていたからである。かつては無名で、飢えていたが、今は太って裕福であり、人から恐れられていた。おれは敵の肉のおかげでふくらんでいるのだ、そう考えるのが彼なりの詩的な発想だった。

「なあ、お前、わしの真新しいパニーがニルピーとは安かったな」

ワ・キンは縫物の方へ首をかがめた。単純で古風な女で、ヨーロッパ風の習慣についてはウ・ポ・チンほどよくは知らない。椅子にすわれば苦痛を感じる。毎朝市場に行く時は村の女と同じように頭上に籠カゴをのせ、日暮れには庭にひざまずいて、町に高くそびえるバゴダの白いとんがり屋根に祈りをささげる。彼女は二十年以上にわたってウ・ポ・チンの陰謀を打ち明けられてきたのであった。「ウ・ポ・チン」【コは夫婦間のような身近な関係で使われる呼称】と彼女は夫に向って言った。「あなたはこれまで、随分悪いことをしてきましたね」ウ・ポ・チンは手を振った。「それがどうかしたか。わしが建立するバゴダがすべての償いをしてくれるのだ。時間は十分ある」

彼女は再び縫物の上に頭を垂れた。それは、ウ・ポ・チンがやることに賛成しない場合に示す意地っぱりな態度であった。

「だけど、ウ・ポ・チン、こんな計画や陰謀がどうして必要なのです。ペラソダでコ・バ・セイソとお話しなさっているのを聞きました。あなたはペラソダミ先生になにか悪いことを企んでおいでです。あのインド人の先生先生をなぜ痛めつけたのですか。あの人はいい方です」

「女のくせに職務上のことがわかるものか。ドクターはわたしには邪魔者だ。まず第一に、賄賂を受け取らない。それで我われにはことが面倒になるんだ。それになあ、つまり、お前の頭では分からないようなこともほかにあるんだ」

「ウ・ポ・チン、あなたは金持になり、有力者になりましたが、一体それがどのくらいあなたの爲になっているのですか。貧しかった時の方が私たちが幸せでした。あなたが町役場の吏員にすぎず、私たちが初めて家を構えた時のことをよく覚えています。小枝で編んだ真新しい家具や、金のクリップ付きのあなたの万年筆をどんなに誇らしく思ったことでは



う。イギリス人の若い警官が私たちの家にやって来て、一番上等の椅子にすわり、ビールを一本あげたことがありました。そのときはほんとうに光栄だと思いました。幸せはお金の中にはありません。もつともつとお金をためて、何が望みだとおっしゃるのですか」

「話にならん。なあおい、ぼかばかしいことをいうな、お前は料理や裁縫に精を出して、役所のごときは当事者にまかせておくことだな」

「ええ、私には分かりません。私はあなたの妻として、ずつとお仕えてきました。でも少なくとも善行を積むのに早すぎることはありません。もつと善行を積むようにして下さい、コ・ポ・チン。たとえば、生きた魚を買って、川に放流してやれないのですか。そうしたら大変な功德を施したことになります。けさ托鉢のお坊さんがおいでになり、僧堂に新しく二人の僧侶が参ったので、鯛えに苦しんでおるとのことでした。あの方たちに何かおあげになつてはどうでしょう、コ・ポ・チン。あなたがそうなされば徳を積めると思つたので、私自身は何も差し上げなかつたのです」

ウ・ポ・チンは鏡から顔をそむけた。この詭えに少し心が動いた。面倒なことをせぜにできる場合、彼は決して善行を積む機会を逃さなかつた。彼にしてみれば、自分が善行を積むことは一種の銀行預金で、永遠に増えていくものであつた。川に魚を放流したり、僧侶に施し物をするとはいづれも涅槃ニルヴァーナ〔永遠の至福の状態〕に一歩近づぐことである。こう考えて彼は安心した。そして村長が持つてきたゾンゴロー籠を僧堂に届けるように指示した。

しばらくして彼は家を出て、書類のとじ込みを持ったバ・タイを従えて道を歩き始めた。大きな腹のバランスを保つために、直立の姿勢で頭上には黄色い絹の傘をさし、ゆつくりと歩いた。薄桃色のパニーはなめらかなお菓子のように陽光を受けてびかびか光つた。彼はその日の事件を裁くために裁判所に向かつていた。

ちようどう・ボ・チンが朝の仕事に取りかかった頃、医師<sup>ドクター</sup>ペラスロミの友人で材木商『ボリー』氏は、家を出てクララへ向かうところだった。

フロリーは三十五歳ぐらいの中背の男で、体付きは不格好ではなかった。こわい黒髪を頭になでつけ、同じく黒い口ひげも短かく刈り込み、膚<sup>はだ</sup>はもともと黄ばんでいたのが、日焼けでもとの色が分からなくなっていた。まだ太つてはおらず、髪も薄くなっているようで年相応には見えた。しかしほおほけ、落ち込んだ目のあたりは力がないので、顔は日に焼けているわりにはやつれた感じを与えた。今朝はまだひげを剃っていないようであった。いつもの白シャツと、カーキ色の綿布製半ズボンにストッキング姿であったが、ヘルメット帽の代わりに、古ぼけたフェルト帽をかぶっており、その広つばを片方の目にかぶさるように折り曲げていた。皮ひも付きの竹のステッキを手に歩くと彼のうしろから、フロリーとい名の黒い小型スパニエル犬がゆつくりついていった。

とは言っても、今挙げた点はどれもあまり重要でないことであった。彼を見てまず目をひかれるのは、左ほおを目から口もとまでぎざぎざの三日月形に流れている、いやな感じの痣<sup>あざ</sup>だった。この痣は色が青黒いため、一見打ち身のように見え、左から見るとつおれたような悲しげな顔付きであった。

本人もこの痣の醜さは充分承知していた。それで人目があると、この痣を隠そうと身体を斜めにする癖があった。

フロリーの家は広場を登ったところで、密林に近かった。門のところから、日に焼けてカーキ色の広場が急傾斜で下に広がり、まばゆいばかりに白い小屋が数軒まわりに散在していた。どの小屋も暑さの中で震えおのいているように見えた。丘の中腹には白いへいに囲まれたイギリス人墓地があり、近くにはトタン屋根の小さな教会もあった。その向こうに、ヨーロッパ人のクラブがあり、このずんぐりした平屋の木造家屋こそ町の中心であった。インドではどの町でも、ヨーロッパ人のクラブが大英帝国の精神的とりであると同時に権力の台座であり、現地人の役人や大金持がいかに憧れても手の届かぬ涅槃である。特にこの町のクラブは極端で、教多いビルマのクラブでここだけが東洋人を会員にしたことがないのを自慢にしていた。クラブの向こうにはイラワジ河が滔滔<sup>たうたう</sup>と黄色く濁って流れ、布切れの上で日光を受けて輝くダイヤモンドさながらに、あちらこちらキラツと光っていた。さらに向こうには水田が果てしなく続いており、はるか地平線の黒ずんだ山並みあたりで消えていた。

現地人の町と、裁判所及び監獄は右手の方にあったが、青く繁った菩提樹の森の中にほとんど隠れていた。パゴダの尖塔が、黄金の穂先を付けた細身の櫓のように森の上に突き出していた。チャウタダはビルマ内陸の典型的な町で、マルコ・ポーロの頃から一九一〇年まで、ほとんど変わらなかった。この町が鉄道の終点に好都合な地点でなければ、あと一世紀は中世のままの姿をどどめていたことだろう。一九一〇年に、政府は町をこの地方の本拠地と『祭展』の拠点にした。つまり、町の一角に裁判所を設け、太った上にもなおがつがつしている弁護士の群れを置き、病院を建て、学校を建て、イギリス人がジブラルタルから香港までの至るところに建ててきた頑丈な大監獄をここにも建てたのである。人口は四〇〇〇ほどで、その中にはインド人が二三〇〇人に中国人が一〇〇人余り、白人も七人含まれていた。フランス人とサミュエル氏と呼ばれる混血児もいた。一方はアメリカのパパテスト派の、もう一方はローマ・カトリック派の宣教師の息子であった。町で珍しいものといえばインド人の托鉢僧ぐらいで、二十年このかた市場近くの木の上で暮らし、毎朝食物をバケツで木の上に引きあげていた。

フロリーは門を出て、あくびを一つした。昨夜かなり酔ったせい、強い日差しを浴びると不快になり、丘の下の方を見て「むさくるしいねぐらめ」と胸のうちでののしつた。犬以外は誰も付近にいなかった。赤く焼けた道を下って乾いた草をステッキで叩き切りながら、『尊し、尊し、尊し<sup>なれ</sup>汝よ』の節で、「いまいまし、いまいまし、いまいまし汝よ」と大声で歌い始めた。かれこれ九時近くで、日差しは一刻ごとに烈しくなった。熱気が大きな長まくらで頭をたたくように、たえず規則的にがらがらたたきつけてきた。フロリーはクラブの門前で立ち止まり、はいろいろか、それとも道をさらに下り、ペラスロミ先生を訪ねようかと迷った。それから今日はイギリスから郵便が着く日で、新聞も来ているだろうということを思い出した。彼はクラブにはいり、テニスコートの大きな金網のそばを通った。金網にはつる草が一面に繁り、星形で藤色の花を咲かせていた。

小径の縁にある花壇には、フロックス、ヒエン草、ひいらぎ、ペチユニアなどイギリスの花が何列も並び、烈しい日光で枯れもせずに、大きな花を豊かに咲かせていた。ペチユニアは喬木といえるぐらい大きかった。芝生はなく、代わりにビルワ原産の木や灌木の植え込みがあった。大きな雨傘に似て血のように赤い花をつけた鳳凰木、クリーム色で茎のない花を咲かせている夾竹桃（キョウトウ）に似た灌木、紫色のブーゲンビリア、真紅のむくげ、桃色の中国産ばら、胆汁を思わせる緑色をしたハズ、けばだった葉状体のタマリンツなど、色とりどりの花の群れが強い陽光に目が痛いほど照りはえていた。全裸に近いインド人の植木屋が如雨露（アメノツチ）を片手に咲き乱れる花の中を動き回っているのが、花の蜜を吸い回っている鳥を思わせた。

入口の踏み段には、髪がにんじん色のイギリス人が半ズボンのポケットに手を突っ込んで立っていた。口ひげは針のようにこわく、薄ねずみ色の目と目の間はおかしいほど広く、ふくらはぎは異常に細かった。当地の警視ウエストフィールド氏であった。退屈し切った様子で突っ立って身体を前後に揺さぶりながら、上唇を突き出して口ひげで自分の鼻をくすぐっていた。彼は頭を斜めに軽く振ってフロリーに会釈した。ものの言い方は切口上の軍人調で、省ける言葉は全部省いた。彼の言葉はたいいてい冗談のつもりだったが、声は力がなく沈んだ感じだった。

「よお、フロリー君か。いやな朝だな。どう思うね」「この季節はこんなもんだと思いますよ」とフロリーは答えた。彼はもう痣のあるほおをウエストフィールドの目から隠そうと身体をやや斜めに向けていた。

「その通りだ。いまましい。二、三ヶ月は続くだろう。去年は六月まで一滴も雨が降らなかつた。空を見るよ。畜生、雲一つないぜ。青いぼうろうの大鍋つてところだ。まいったな。ピカデリー〔ロンドン街の繁華街〕にでも行きたいよ」

「どこでイギリスからの新聞は着きましたか」

「ああ、あのなつかしい『パンチ』に『ペンカン』に『ラ・ヴィー・パリジェンヌ』がね。あれを読めばホームシックになるよな。中で一杯やろう、氷がとけてしまわぬうちに。ラッカーステインのやつ、アルコールを溶びてるぞ。そろそろアルコール漬けになってる頃だろうよ」

二人は中にはいった。ウエストフィールドはいつもの陰気な声で「かかって下され、マクダフ殿」〔シェイクスピア『マクベス』の中の句のもじり〕と言った。建物の中は石油臭いチーク材の壁板になっており、部屋は四つだった。その一つにはカピ臭い小説本が五百冊ほどびしく並んでおり、別の部屋には古ぼけた見すばらしい球突き台があったが、どちらもめつたに使われなかつた。ほとんど一年中虫がランゾに群がり、台の掛布の上を這い回るからであった。トランプ用の部屋と、『談話室』ということになっている部屋もあった。談話室は広いペランダ越しに河に面していたが、この時刻にはどのペランダにも青竹のすだれが降りていた。談話室とはいつてもくつろげる部屋ではなく、床に敷いたココヤシむしろの上に藤椅子とテーブルが並べられ、その上には写真入りの新聞が散らかつて光っていた。何枚もの仏教画とほこりをかぶつた大鹿の頭蓋骨がいくつか部屋を飾っていた。椰子の葉の揺りうちわがゆるく動いて、生温かい空気中にほこりを撒き散らしていた。

談話室には三人の男がいた。揺りうちわの下では、整った赤ら顔で太り気味の四十男が両手で頭をかかえ、テーブルの上になうつ伏して、苦しそうにうめいていた。これがラッカーステイン氏で、ある材木商会の支店長だった。昨夜からずっと泥酔状態で、今も苦しげだった。別の商会の支店長エリスは掲示板の前に立って、ある通知書をにがにがしげに夢中で読んでいた。こちらは、髪はこわく、青白い鋭い感じの顔付きで、小柄な身体をたえず動かしていた。地方林務官代理マックスウェルは、長椅子にすわって『フィールド』誌を読んでいたが、骨木の足と太く毛深い腕しか見えなかつた。

「この不良中年を見る」ウエストフィールドはラッカーステインの両肩を多少親愛の情を込めてつかみ、揺さぶりながら言った。「若者への見せしめってわけかね。神の恩寵とやらで、ああはなりたくないもんだ。四十になりやどんな姿になるか教えているってわけだ」

ラッカーステインはうめき声をあげたが、それは「ブランデー」と言っているように聞こえた。

「ひでえもんだ。見る、しよつちゆう大酒食らつてるから、酒が毛穴からにじみ出てるじやないか。こいつを見てると、昔よく蚊帳なしで寝ていた老連隊長を思い出すよ。皆にわけを聞かれた召使が答えたよ、『夜は旦那さまが酔っぱらいすぎて蚊に気がつかず、朝になると蚊の方が酔ってしまつて旦那さまに気がつかないのです』とね。見てみる。昨夜浴び

るほど飲んだのに、まだ欲しがってる。うら若い姪が同居することになってるといふのに。姪は今夜着く予定だろう、ラツカーステイオン」

「そんな酔っぱらい、放っておきなよ」エリスが振り向きもせずと言った。ロンボン訛りの意地悪げな口調だった。ラツカーステイオン氏はまたうめいた。「姪か、うーん、とにかくブランデーだ、頼む」

「姪には結構な教育だろうぜ、叔父さまが毎日欠かさず酔いつぶれてる姿は。おい、ボーイ長。ラツカーステイオンさまにブランデーを持ってきてやれ」

黒く頑丈なブラビダ人〔南インドの非アリアン系の種族〕で、澄んだ黄色の犬のような瞳をしたボーイ長がブランデーを眞鍮の盆にのせて持ってきた。フロローリーとウエストフィールドはジンを注文した。ラツカーステイオン氏はブランデーをスプーン五、六杯分ほど飲み、椅子にのけぞるようになおし、少しあきらめた調子でうめいた。肉づきのよい無邪気な顔に齒ブラジのような口ひげを蓄えていた。実に単純な男で、自分が『愉快』だと思えるように時を過ごすこと以外には何の望みもなかった。彼の妻がこの夫を抑えておける方法は唯一つ、つまり、一時間ないし二時間以上は、せつたいに目のとどかぬところへ行かせないことであった。結婚して一年ほど経った頃、一度だけ夫のもとを二週間ほど離れ、思いがけず予定より早く帰ると、酔っぱらったラツカーステイオンが、両脇を裸のビルマ娘二人に支えられ、もう一人の娘がウイスキーのびんを彼の口に傾けていたのである。その日以来、絶えず不平を鳴らしている彼に言わせると、「猫めが鼠の穴を見張るように」彼女は夫を見張ってきた。それでも彼はけっこうたびたび『愉快』に時を過ごしてきた。もつとも、ゆつくり過ごしたことは一度もなかったが。

「ごりや、俺の頭、けさは全くどうかしてるぞ。ウエストフィールド、ボーイ長をもう一度呼んでくれ。家内が来るまでにもう一杯ブランデーをおおつておかねばな」と彼は言った。それから、「姪が来れば、アルコールはソーダ割りを一日四杯までに制限するなど家内は言ってるんだ。いまいまいしい女どもめ」と憂うつそうに付け加えた。

「馬鹿騒ぎはそれぐらいにして、皆これを聞いてくれ」エリスが仏頂面で言った。彼は妙に人の気分を害するようなもの言い方をし、口を開けば必ずといってよいほど誰かを侮辱した。ロンボン訛りが言葉に皮肉な調子を与えるからか、わざと訛りを強くして言った。「君たちはワグレガーのやつが出したこの通知書を見たかね。皆へのささやかな花束だぜ。ワックスウエル、目を覚まして聞きたまえ」

ワックスウエルは『フィールド』誌を下ろした。つやつやした金髪の若者で、せいぜい二十五か六で地位のわりには若かった。手足が頑丈で、白いまつ毛が太く、荷車用の雄馬を思わせた。エリスは掲示板からその通知書を意地悪げにさつと手際よく剥がし、声をだしてたどるよう読み始めた。副総弁務官であり、クラブの名譽幹事もしているワグレガーが出した通知書だった。

「ちよつと聞いてくれ。『当クラブには今のところ東洋人の会員はいません。しかしながらだいたいにおいてヨーロッパ人は、官報に掲載された役人は、現地人であろうとヨーロッパ人であろうと、入会を認めるのが昨今の風潮であります。したがってチャウタダにおける我われのクラブも、この風潮に従うか否か考慮するように勸告されました。この問題は次回の総会で討論に付します。一方、次の点を指摘しておきたい……』これじゃ、あとを読む必要はなからう。あの男は通知書一つ書いても、下痢を起したような文しか書けぬやつだ。とにかく要はこうだ。クラブの規則を破り、かわいひい黒ん坊をクラブに入れてやつてくれと言うのだ。親愛なるベラスコミ氏などを。私はやつを『べらべらいやみ氏』と呼んでいる。うまいものだろう。ブリッジのテニス越しにんにく臭い息を吹きかけてくる太鼓腹の黒ん坊連中を入れるなんて。考えるのもいやだね。団結してこんな提案はすぐ踏みつぶさなけりや。どう思うかね。ウエストフィールド君は？ フロローリー君は？」

ウエストフィールドは仕方がないというようにやせた肩をすくめた。彼はさきほどからテニスの前に腰を下ろして、妙な臭いの黒いビルマ製葉巻を吹かしていた。「そりや我慢せにやならんだろう。現地人のやつら、近頃はどこのクラブへもは入り込んでるからな。ペギー〔イララジ河口の町〕のクラブまでそうだって話だぜ。この国がそうなっていくんだよ。今じゃ、ビルマでやつらを寄せつけていないのは、このクラブぐらいだろう」

「その通りだ。しかし、俺たちは絶対に守り抜いて見せるさ。黒ん坊などはいらぬよう、死守してやる」そう言う間にも、エリスは短い鉛筆を取り出していた。ほんのちよつとした動作にでも奇妙な意地の悪さをこめられる者がいるが、エリスもその一人で、そのようにして通知書を掲示板に留め直し、ワグレガー氏のサインの横に鉛筆でB・F〔大馬鹿〕と小さく書き添えた。「見るよ、やつらの提案はこんなところさ。来たらそう言つてやるう。フロローリー、君はどうかね」

フロリーは終始だまっていた。決して口数の少ない男ではなかったが、クラブの談話ではあまり意見を述べなかつた。先ほどから椅子にすわって、『ロンドン・ニューズ』紙に載っているG・K・チェスタートン〔英国の小説家、批評家〕の寄稿文を読みながら、左手でフロリーの頭をなでていた。エリスは他の連中にも意見を述べろと絶えずつつく類の男で、今もまた同じ言葉を繰り返した。フロリーが目を上げ、二人の目が合った。エリスの鼻の回りが色を失い、急に灰色に変わった。立腹したるしだった。何の前置きもなく、彼はいきなり激しく罵り始めた。毎朝これに慣れつこになつていたからよかつたものの、そうでなければ、みな驚いたことだろう。

「驚いたよ。あの臭い黒ん坊連中を白人だけで楽しめる唯一の場所から締め出しておけるかどうか問題の時、こんな時こそ、俺を支持してくれるぐらいの節度が君にはあると思つていたのだが。たとえばあの太鼓腹でお世辞たらたらの薄汚い黒ん坊医者めが、君の一番の親友にしるね。君が市場のくず野郎と友達になろうと、俺はいつこう構わぬさ。ペラスミの家に行き、黒ん坊の仲間たちとウイスキーを飲みたけりや、そうするのは君の勝手だ。クラブの外じや好き勝手なことをやればよからう。しかし黒ん坊をクラブに連れ込むとどうであれば、問題は全く違う。君はあのちびのペラスミを会員にしたいのだろう。白人の語に口をはさみ、汗臭い手で我われをなで回し、んにく臭い息を顔に吹きかけさせるつもりか。野郎の黒い鼻面がはいつてくるのを見かけたら、俺は絶対にやつを蹴り出してやる。太鼓腹の油臭いちびめが……」

これが五、六分は続いた。彼の言葉は妙に印象的であつた。本心から出ていたからだ。エリスは心から東洋人をきらつていた。何か邪悪で不潔なものをきらうようにいつも猛烈にきらつていた。材木商会の協力者だから、当然、生活でも仕事でもしよつちゆうビルマンと接触していながら、彼は黒い顔にはどうしても慣れなかつた。東洋人へ親しみの素振りを見せるのは、恐ろしく邪悪なことと思えた。頭はよく、有能な社員でもあるのに、東洋に来る資格のないイギリス人だつた。そのようなイギリス人がごろごろしているのは残念ながら事実である。

フロリーはエリスと目が合うのを恐れ、膝にいろフロリーの頭をなでながらすわつていた。非常に愉快な時でさえ、痣のために相手の顔をまともに見ることができなかった。何かおうとすると声が震えるのが自分でも分かつた。しつかりした口調が必要なときに限つて声が震えた。時には顔までゆがみ、どうにもならないことがあつた。

「落ち着けよ」やつと彼はむつとりと少し弱よわしく言つた。「落ち着けよ。そう興奮する必要はなからう。現地人を会員にするなんてこと提案したのは私じやないよ」

「ほう、そうかね。しかし君がそうしたがつてゐることは皆先刻承知だぜ。でなければやどうして、毎朝あの油臭いちびのインド人さまのところへお出かけになるんだ。白人と並ぶような具合にやつと並んでテーブルに向かい、黒い唇から出たよだれのついたグラスで酒を飲み——考えただけでへどが出る」

「すわれよ、まあ、すわれ」ウエストフィールドが言つた。「忘れろよ。一杯飲んで忘れてしまえ。いがみ合うほどのことでもなからう。この暑いのに」

「あきれたな」少し落ち着きを取り戻したエリスは二、三歩あるき回つて言つた。「驚いたよ。君らの考えは分からん。全く分からんね。あのマクレガーの馬鹿が、何の理由もなく黒ん坊をこのクラブに入れたがつてゐるのに、それを知つていながら、みな何も言わずにすわつてゐるとは。おい、俺たちはこの国で何をすることになつてゐるのだ？ 支配だぜ。でなきや、さつさと消えちまえ。俺たちはここで大昔から奴隷だつた黒ん坊たちを支配していることになつてゐるんだぞ。やつらに分からせる方法はただ一つしかない。それをやらすに對等に扱つて、お前たち馬鹿は皆それで当たり前だと思つてゐる。フロリーは、インドの何とか大学に二年通つただけで医者でござるとほざいてゐる黒ん坊さまと大の仲よしだ。ウエストフィールド、君はがに股で賄賂好きで腰抜けの警官たちを心から自慢にしてゐるだろう。マックスウエルはいつも混血の淫売婦の尻を追つかけて回してゐる。そうだろう、マックスウエル。お前がマズダレーでモリー・ペレミアとかいふ臭い淫売といひ仲だつたつてこたあ聞いてるぞ。当地に転属にならなけりや、あの売女と結婚するつもりだつたのだろう。君たちは一人残らず黒い野蠻人がお氣に入りのようだな。皆どうなつてしまつたのだ。俺にやさつぱり分からん」「なあおい、もう一杯飲めよ」ウエストフィールドが言つた。「おい、ポニー長、氷がとけぬうちにビールを少し持つてこい。ポニー長！ ビールだ」

ポニー長はミュンヘン・ビールを何本か持つてきた。

そのうちエリスも皆と並んでテーブルに向かい、小さな手で冷たいビールびんをなで回してゐた。顔には汗が吹き出てゐた。機嫌はまだ直つていながつたが怒りは消えてゐた。意地悪くひねくれているのは彼の常だつたが、怒りの発作はすぐにおさまつた。もつとも発作のことをわびたことはなかつた。口論もクラブの日課の一つであつた。ラッカースティン氏も少し気分が回復し、『ラ・ヴィ・パルジエヌ』誌の写真を眺めてゐた。もう九時は過ぎており、ウエストフィールドがふかす葉巻のいがらつばい匂いが漂う部屋は、息づま

るほど暑かった。皆汗まみれになり、シャツが背中にくっついた。姿は見えぬが、外で揺りうちわの綱を引いているボーイが強い日差しの中で居眠りを始めたようだった。

「おいボーイ長！」とエリスはわめきボーイ長が現われると言った。「外のボーイを叩き起こして来い」

「承知しました。ご主人さま」

「それからボーイ長」

「何でございましょうか、ご主人さま」

「氷はあとどれほど残ってるんだ」

「二十ポンドほどです。今日分だけだと思います。私は氷をとけないようにしておくことは非常に困難だと考えます」

「この野郎、なんだ、その口のきき方は。『非常に困難だと考えます』だと？ 辞書を丸暗記でもしたのか。『ご主人さま、氷とけなさいけません』これがお前らにふさわしい口のきき方だ。この男、英語が上達しすぎたらお払い箱にせんといかんぞ。英語を話す召使なんてご免だ。分かったか、ボーイ長」

「はい、ご主人さま」と言っただけでボーイ長は引き下がった。

「まいったな、月曜まで氷なしか」ウエストフィールドが言った。「フローリー、君は密林に戻るのかね」

「うん、もうあちらに着いてなけりやならないんですがね。イギリスから郵便が着くから、寄ってみたのです」

「俺も旅行するつもりだ。出張費を少し使わんとね。この季節に警察でじっとしてることあてきんよ。揺りうちわの下で伝票に次つぎとサインし、書類をいじくり回して。あーあ、もう一度戦争でも始まらんかなあ」

「俺はあさって出祭する」エリスは言った。「あのいやな巡回牧師が礼拝に来るのは、次の日曜じゃなかったかね。いざれにしろ、礼拝には出ないつもりだ。ひどい膝の訓練法だぜ、ありや」

「もう一つ先の日曜だ」ウエストフィールドが言った。「俺は出ると約束した。ワグレガーもだよ。牧師さんに気の毒だ。六週間に一度ここを訪れるだけだからな。お越しになった時ぐらいいは教会に集まらなきや」

「まっぴらだ。そりや牧師さんのためなら賛美歌を真顔で歌つてもやるさ。しかし、現地人のキリスト教徒めが教会に押し寄せるのには我慢ならん、ワトラス人の奴隷やカレン族の教師らがな。それにあの混血児フランシスとサミュエルもだ。やつらもキリスト教徒と称している。この前牧師が来た時には、ずうずうしく最前列に白人と並んで腰を下ろしていらる。誰かこのことを牧師に注意しておく必要があるな。宣教師たちをこの国に放つなんて、俺たちも馬鹿な真似をしたものだ。市場の掃除夫にまで、お前たちも白人と同じように立派なのです、などと教えてさ。『やあ、旦那さま、わたしキリスト教徒、旦那さまと同じね』だと。身のほど知らずめ」

「どうだね、この素晴らしい足は」ラッカーステインは『ラ・ヴィ・パリジェンヌ』誌をテーブル越しに渡しながら言った。「フローリー、君はフランス語が分かるんだろう。下に何と書いてあるんだい。あーあ、こんな写真見ると、思い出すなあ、昔パリにいたころを。初めての休暇だね。独身だったんだ。畜生！ もう一度パリに行けたら」

「『昔ウオーキングに女あり』って歌は聞いたことがありますか？ マックスウエルが言った。彼はどちらかと言えば無口な若者だが、ご多分にもれず、卑猥な歌は好きだった。彼はウオーキング娘の行状を歌った。笑い声が起こった。ウエストフィールドは『イーリングの絶品娘』という歌で応じた。続いてフローリーが『子防を忘れぬホーンヤムの青年牧師』を歌った。さらに笑いが大きくなった。エリスさえ態度をやわらげて、歌をいくつか披露した。エリスの冗談はいつも実に機知に富んでおり、しかも言い知れぬほど淫らであった。一同陽気になり、暑さを忘れるほどなごやかな気分になった。ビールは全部飲んでしまい、さらに何か酒を持ってこさせようとした。その時、外の踏み段を上がる靴音がした。床が震えるほど太い声がおどけた調子だった。

「やあ、実に愉快ですね。私も『ブラック・ウツド』紙に投稿した文には大抵それを取り入れました。今も覚えていますが、ブローム地方に配属された時にも、全く、何といたしますか、面白いことが起こって、それで……」

ラヴレガー氏がやって来たようだった。ラツカーズステイーン氏は「畜生！ 家内が来たっ」と叫んで、飲み干したグラスをできるだけ遠くへ押しやった。ラヴレガー氏とラツカーズステイーン夫人が並んではいつてきた。

ラヴレガー氏は四十を少し出た大男で、獅子鼻の人情豊かな顔に金縁の眼鏡を掛けていた。肩がいかつく、首を突き出す癖があるので、どこか妙に海亀を思わせた。事実ビルマ人は彼に『亀』というあだ名を付けていた。彼が着ている洗いたての絹服は両脇の下が汗で濡れていた。おどけて皆に敬礼したあと、にこやかな顔で掲示板の前に立ち止まり、学校の先生のように背中に回した手でステッキをもてあそんでいた。顔から見える人の良さは本物であったが、それでもなお、無理ににこやかな態度をとり、非番で地位を忘れていたのだと思わせているところがあつたので、この男の前では誰も十分にくつろげなかつた。話しぶりは、どうやら、子供のころ見たひょうきんな教師か牧師を真似ているようだった。長い言葉や、引用や、ことわざなどが頭の中で冗談としてまとまると、「えー」とか「あー」とかの前置きがあつたので、次には冗談が出てくるのが前もって分かつた。ラツカーズステイーン夫人は三十半ばで、のつべりと面長な、どこかスタイルブック型の美人だった。声はため息まじりで不満そうだった。はいつてきた彼女を一同は立ち上がりて迎えた。夫人はけだるそうに、揺りうちわの下の一冊上等の椅子に腰を下ろし、いもりのようにやせた手で顔をあおいだ。

「本当にいやだわ、この暑さ。何てひどいんでしょう。ラヴレガーさんが車で迎えに来て下さったんですよ。本当に思いやりのある方ですわ。ねえトム、あの人力車夫ったら、また仮病を使つてるのよ。あなた、あいつの性根を思い切つて叩き直してやらなきゃだめよ。この暑い中を毎日歩き回るなんて真つ平だわ」

夫人は家とクラヴの間の四分の一マイルを歩くこともできないので、ラングゼンから人力車を取り寄せていた。チャウタダにある車といえば、牛車にラヴレガー氏の車、それに彼女の人力車だけだった。この地方は全部合わせても一〇マイルほどの道路しかなかつたからである。夫を一人で行かせるくらいなら自分も密林に同行する方がましだと思つて、夫人はしづぐがしたたるテントにも、ひどい蚊にも、雑話だけの食事にも、どのようないやなことにも耐えていた。その代わり本部に戻つた時には、取るに足りないことにもいちいち不平を言つてはその埋め合わせをした。

「本当に最近の召使たちのなまけぶりにはあきれますわ」彼女はため息まじりに言つた。「そうお思いになりませんか、ラヴレガーさん。今じや現地人に対して白人のにはらみは効かないようですよわね。これも最近の一連のひどい改正法案とか、彼らに傲慢さを教えこむ新聞のせいですよ。彼らも本国の下層階級に劣らず、たちが悪くなつてきましたわね」

「いえ、それほどひどくはないと思いますよ。しかし、この国にも民主主義の精神が忍び寄つているのは確かですよわね」

「ほんの少し前、戦争の直前までは、まだ彼らは非常にきちょうめんで礼儀正しかつたのに。道ですれ違つた時の敬礼など突にかわいいものだったわ。今も覚えてますけれど、昔は月一ニルピーで召使頭（トーマス）が心から私たちに仕えたわ。近頃じや四〇ルピーも五〇ルピーも要求するのよ。召使を逃がさぬためには、給金の支払いを数ヵ月遅らせるに限るわ」

「昔風の召使は少なくなつてきましたね」ラヴレガー氏も相槌（カウチ）を打つた。「私の若い頃は、召使頭が無礼な態度を取れば、『この手紙の持参者を鞭で十五回叩いて下さい』という手紙を本人に監獄へ持つて行かせたものです。エヘウフガクス（悲しむべし、時は去りぬ）です。もうあんな時代は完全に終わつてしましましたよ」

「おつしやる通りだよ」ウエストフィールドが陰気な口調で応じた。「この国は二度と住むにふさわしい国には戻らないね。私に言わせりや、英国の支配は終わったのだ。『失われし領土』つてわけさ。ここから出て行く潮時だな」

それを聞いて一同はその通りだとつぶやいた。考え方が過激だという評判のフローリーや、この国に来て三年にもならない青年ワックスウエルさえ同意した。インド在住のイギリス人なら、インドが衰退してきたことを否定しないだろうし、否定したこともなかつた。インドも『パンチ』誌同様、かつての姿ではなくなつたのである。

その間にエリスは例のこしやくな通知書をラヴレガー氏の背後からはずし、ラヴレガー氏に突きつけて、ひねくれ口調で言つた。

「なあラヴレガー、この通知書を読んだ皆の意見が、現地人をクラヴへ入れるという案なんて全く」とこで言葉を切つた。実は「全く糞くらえだ」と言いかけたが、ラツカーズステイーン夫人が居ることを思い出して、出かかつた言葉をのみ込み、「全く好ましくないと」言つた。「とにかくこは我われが楽しみに来るところだ。現地人などにうるつき回つて欲しくくない。やつらから解放される場所が一つは残つて欲しいのだ。皆も完全に同意だよ」

彼は皆の顔を見回した。「聞いてくれ、おい」とラツカーズステイーン氏がぶつきら棒に言つた。今まで飲んでたことを妻が見抜くのは分かつていた。それで今しつかりした考え

でも述べれば許してもらえらると思つたのである。

ワグレガー氏は笑顔で通知書を受け取つた。自分の名前の横に『大馬鹿』と書き込まれているのを見て、エリスの態度は非常に失礼だと秘かに思つた。しかし彼はこれを冗談で片づけた。彼は勤務時間中は自分の威厳を保とうと努めたが、それに劣らざうラフでは気持ちのよい仲間にならうと大いに努めていた。「察するところ友人エリス君は、あー、同じアリアン系の同胞との交際はお望みではないようですね」

「お望みじゃないつ」エリスは嗜みつくように答えた。「それにモンゴル系の同胞もね。一言で言えば黒ん坊はいやだ」

ワグレガー氏は『黒ん坊』という言葉聞いて顔をこわばらせた。この言葉はインドでは歓迎されないからである。彼は東洋人に偏見を抱いていなかった。それどころか東洋人が大好きだった。自由さえ与えなければ、東洋人ほど魅力ある人種はいないと考えていた。彼らがいわれなく侮辱されるのを見ると、いつも彼の胸は痛んだ。

「黒ん坊呼びは絶対に正しいだろうか。その言葉はいやがられるよ。彼らは決して黒ん坊ではないのだから、それも当然のことだが。ビルマ人はモンゴル系だし、インド人はアリアン系かドラビダ系だ。いずれにしても全然違うよ」

「そんなことあ、どうでもよい」エリスが答えた。ワグレガーの地位など屁とも思っていないのである。「黒ん坊とでもアリアン系とでも、何とでも好きなように呼びたまえ。俺が言つてるのは、顔の黒いやつらをクラブに入れたくないということだ。投票で決めようというのなら一人残らず反対投票だぜ。もつともフローリーはあのご立派な友人ペラスワミを入れたがつてるがね」と最後の部分をつけ加えた。

「なあ、なあ」と、「なあ」をくり返したあと、ラツカーヌティーン氏が言った。「聞いてくれ。俺も反対投票をするよ」

ワグレガー氏は妙な顔で口を閉じた。彼は困つた立場にあつた。現地人から会員を選ぶのは彼の榮榮ではなく、総弁務官からの通達だった。しかし弁解はいやだったので、なだめ気味の口調で言つた。

「この問題に関する討論は、次の総会まで延期しようじゃやないですか。その間にじっくり考えればよいでしょう。ところで」彼はテーブルの方に歩み寄つてつけ加えた。「どんなか、あー、一杯おつき合ひ願えませんか」

ポーン長が呼ばれ、「おつき合ひの一杯」を持つてこい、と命じられた。気温はさらに上昇して、みんな喉がからからであつた。ラツカーヌティーン氏は酒を注文しようとしたが、妻と目が合つてしよげかえり、むすつと「いらん」と言つた。彼は両膝に手を置いて、妻がジン入りレモンスカッシュを飲み干すのを、情けない顔で見ながらすわつていた。ワグレガー氏は注文した酒の伝票にサインしたが、自分は普通のレモンスカッシュを飲んだ。チャウタダのヨーロッパ人で、彼だけは昼間は酒を飲むべからずという掟を守つていた。「まことに結構だがね」とエリスは両腕をテーブルに置いてグラスをいじり回しながら不満たらしく言つた。ワグレガー氏との議論でまたそわそわし始めたのだ。「まことに結構だよ。しかしさきほどの説は譲らないぜ。現地人は一人もクラブへは入れぬ。このような小さなことで絶えず譲歩してるから、大帝国を失つたのだ。やつらに對して弱腰だから治安が守れぬ。方法は一つ、ごみのようなやつらはごみ扱いすることだ。この重大な時こそ、できる限り威信を保たねばならん。一致団結して『我われが主人で、お前らは乞食だ』と言つてやらなきや——」エリスは細い親指で地虫でも押し潰すように卓上を押しながら「乞食めら、分を弁えろ！」と叫んだ。

「見込みないよ、君」ウエストフィールドが言つた。「まったく見込みないね。手を縛りにくる官僚的形式主義にどう立ち向かえるんだ？ 乞食の方が法律を心得てる。面罵めんばされて殴らうとしたとたんに、追いまわされることになる。どつしり構えてなきや何もできん。といつて、やつらに戦う勇気がない限り、どうしようもない」

「ワグレガーの兄さんがいつも言つていましたわ」ラツカーヌティーン夫人が口をはさんだ。「最後にはだまってインドを出て行くだけだろうつて。生涯働いても、侮辱され、思は忘れられるんじや、ビルマくん限りまで来る若者などいませんわ。出て行きましようよ。現地人が、どうか残つて下さいつて頭を下げたら、その時こそ言つてやりましよう、『そうしようと思えばできたのに、そうさせなかつたのはお前たちですよ。仕方ないわ。自分らでやつていくのね』つて。そうすれば彼らも肝に銘じるでしょうよ」

「結局、法律や命令に負けたのだ」ウエストフィールドが沈んで言つた。法律を設けすぎたためにインド帝国が崩壊したことが彼の頭から離れなかつた。彼に言わせると、全面的な反乱が起こつて戒厳令をしくような事態にでもならなければ、帝国は救えないことだった。彼は言つた。「書類をいじくり、覚え書を回してばかりいる。今じゃ現地人のお役



人さまがこの国の本当の支配者なんだ。我われの寿命は尽きたよ。一番いいのは、さつきと店をたんでやつらを困らせてやることだ。困っても自業自得だからな」

「私は反対だ。絶対に反対だ」エリスが言った。「その気になれば、ひと月でまともな状態に戻せるさ。ほんのちよつと勇気があればな。アメリカツツア〔インド北西部の都市〕の場合を見る。あのあとやつらは屈服したじやないか。ダイアー〔イギリス軍司令官、アメリカツツアの反乱で無抵抗の群集に警告なしに発砲、三〇〇名以上の死者、一三〇〇名以上の負傷者を出し、後に責任を問われた〕は、やつらの扱い方を心得ていた。あの男も気の毒に、いやなことだったろうな。本国にいる腰抜けらにこそ責任があるのだ」

皆からため息に似た声もれた。それはメアリー一世〔英国の女王で新教徒を迫害した〕に話が及ぶと集まったカトリック教徒からもれるのと同じため息だった。流血や戒嚴令はきらいなワグレガー氏でさえ、ダイアーの名前を聞くとき首を振って言った。

「ああ、気の毒な方だったね。パジツト〔二〇世紀英国女流作家。平和主義者〕かぶれの議員たちの犠牲になったのだ。彼らもいつかは自分たちの間違いに気づくだろうが、そのころにはもう手遅れだろうね」

「前の警察署長が次のような話をよくしていたな、インド現地人部隊の老軍曹に、イギリス人がインドを出て行けばどうなるだろうと聞くと、老兵は言ったそうだよ——」

フロローリーは椅子をうしろに引いて立ち上がった。このような話をこれ以上続けてはいけぬ、続けることはできない、いや、絶対に続けるべきではないのだ。私はすぐ部屋から出なければいけない。でないと頭が変になって家具を叩き壊し、ピンを絵に投げつけかねない。頭の悪い大酒飲みのとんま野郎たちめ。『ブラツク・ウツド』紙に載っている五流の物語を下手に模倣するような、相も変わらぬ意地の悪いたわ言を毎週毎週、来る年も来る年も、よくも繰り返したものだ。誰一人新しい意見を思いつかないのか。なんてところだ。なんてやつらだ。ウイスキーと、『ブラツク・ウツド』紙と、仏教画の上に架かれた、神を持たぬ文明なんて、どの程度の代物（レバネ）だと言うのだ。神さま、お救い下さい。私たちは皆このくだらぬ文明の一部なのです。

フロローリーは、このような気持ちは一切言葉にせず、顔色にも出さぬよう努めた。自分の人気に自信のない男がよくやるように、あいまいな笑いを浮かべ、身体を皆に対して少し斜めに向け、椅子のそばに立っていた。

「そろそろ失礼しなければなりません。残念ですが朝食前に片づけたいことがあるものですから」

「君、もう一杯どうだね」ウエストフィールドが言った。「昼までにはや大分間があるぜ。ジンでもやりたまえ。食欲が出るぞ」

「ありがたい、でももう失礼しなけりや。フロロー、さあおいで、奥さん、それに皆さん、さようなら」

「黒ん坊の友ブツカー・ロジントン〔一九〇〇〜二〇世紀の米国黒人教育家〕氏退場」フロローリーの姿が消えると、エリスは言った。エリスは、誰だろうと部屋を出て行ったばかりの人について、必ず何か不愉快なことを言う男であることは皆知っていた。「『べらべらいやみ氏』に会いに行つたのだな。でなきや皆に一杯おごるのを避けるために逃げ出したんだらう」

「いや、彼は悪い男じやない」ウエストフィールドが言った。「時に過激な意見を口にしますが、半分も本気じやなからう」

「もちろん非常に立派な方です」ワグレガー氏が言った。インド在住のヨーロッパ人は、特別不法な（エクス・パート）ことでもせぬ限り、職務上、（エクス・コクト）というより膚色の上で、立派な方である。つまり、名誉ある立場にあるのだ。

「やつは少し過激過ぎて気に入くわぬ。現地人と親しくするやつは好かぬ。やつには案外黒ん坊の血が流れているのかも知れないぜ。そう考えりや、顔の黒痣も納得がいく。雑種野郎め。それに髪が黒く膚がレモン色とくりや、腰抜けの黄色人種と変わりない」

フロローリーの噂がとりとめなく続いたが、それもしばらくの間だった。ワグレガー氏が噂話は好きでなかったからである。ヨーロッパ人たちはもう一杯ずつ飲むまでクラフに居残った。ワグレガー氏はブローム〔ビルマ中部の町〕での逸話を語ったが、それは状況をどのように変えても語れるような話だった。それから話は例のつきない話題へと移り、現地人の傲慢さ、政府の怠慢、イギリスの支配が名実ともにイギリスの支配であり、『この手紙の持参者を鞭で十五回叩いて下さい』が通用した懐かしい昔のことなどが話題になった。この話題が長い間取り上げられないことは絶対になかった。ひとつにはエリスが強迫観念にとりつかれているためであった。それにヨーロッパ人たちが憤慨するのも無理はなかつ

た。東洋人の中で暮らし、一緒に働くことは、聖人できえ我慢できないことだろう。ヨーロッパ人は皆、特に彼人はなぶられ、侮辱されることがどれほどいやなことかを知っていた。毎日と云っていいほど、ウエストフールドやワグレガー氏は、いや、ワックスウエルできえ、通りを歩いていてすれちがう若わかしく黄色い顔の高校生に冷笑を浴びせられた。彼らの顔は金貨のように滑らかな黄色で、むかつくばかりの軽蔑の色を一面に浮かべていたが、それがまたモンゴル系の顔に実によく合っていた。時には、ハイエナのような笑いや声が背後から浴びせられることもあった。インド在住イギリス人の生活は決して結構づくめではない。楽しみのない野営地、うだるような事務所、ほこりと石油の臭いがする陰気な宿舎などにいるうちに、彼らがいつの間にか不愉快な態度をとるようになって当然であろう。

もう十時に近く、耐えがたいほど暑くなっていった。皆の顔にも、男たちの裸の腕にも、平たい澄んだ大粒の汗が浮かんでいた。ワグレガー氏の緞の下衣の背には、汗で濡れた部分がありますよがっていた。外の眩しい光が、どういいうわけか青竹のヌグレを下ろした窓からもはいつてきて、そのために目は痛み頭は重苦しかった。誰もが消化の悪い朝食と、その後が続く長く恐ろしい時間を不快な気持ちで思いやった。ワグレガー氏は汗のため鼻からずり落ちた眼鏡を押し上げながら、ため息をついて立ち上がった。

「残念です、楽しい集まりが終りとは。帰って朝食をとらねば。大帝国の心配事は多いですね。同じ方向に行かれる人はありませんか。召使を車で待たせていますから」

「まあうれしい。私たち乗せていただけますかしら。この暑い中を歩かずにすむなんて大助かりですわ」ラッカースティーン夫人が言った。皆も立ち上がった。ウエストフールドは腕を伸ばし口を閉じたままあくびをした。「動いた方がましだろうな。これ以上すわっていると眠ってしまう。籠に何杯もの書類を相手に、警察署で一日中蒸されているなんて、あーあ、考えるだけでもいやだ」

「おい皆、夕方のテニスを忘れないでくれよ」エリスが言った。「ワックスウエル、君は実に不精だからな。今度はこそこそさぼるな。四時きっかりにラケットを持ってここに来いよ」

「奥さま、お先へどうぞ」と、ワグレガー氏は出口で礼儀正しく言った。  
「かかって下され、ワクダフ殿」と、これはウエストフールドだった。

一同は白熱の光の中へ出た。炉から出る熱風のような熱気が地面から立ち昇ってきた。花が日の光を貪欲に吸い、こそども揺れず、目に痛いほど強く輝いていた。その輝きが目にはいると身体中の力が抜けた。あの青空、目もくらむほどの青空が、ビルマ、インド、シヤム、カンボジア、中国、と雲一つなく、果てしなく広がっていると思うだけでも、何かぞっとした。

外に止めてあったワグレガー氏の車のグレートは、手で触れられないほど焼けていた。恐ろしい時間、ビルマ人に言わせると『足音もとだえる時間』が始まるうとしていた。生き物はほとんど動いておらず、動いているのは、人間と、暑さの刺激で道を横切って行くリボンのような黒蟻の列、それに、気流に乗って舞う尾なしの秃鷹だけだった。

フロローリーは、クラヴの門を出たあと左に曲がり、菩提樹の陰を選んで市場通りを下っていった。一〇〇ヤードほど先から音楽が響いてきた。ひよろ長いインド人憲兵分隊が緑に近いカーキ色の制服を着て宿舎に戻るところで、グルカ族〔ネパールに住むアリアン人種とモンゴル人種の混血で勇猛な種族〕の少年がバグパイプを吹き、先頭に立っていた。

フロローリーはベラスロミ先生に会いに行くつもりだった。ボクターの家は石造を塗った木造の長いバungalow〔ベランダつきの簡単な木造平屋〕で、杭の上に建っており、広い荒れた庭はクラヴの庭園に接していた。家の裏は道路に向いている。つまり玄関が病院の方に向いており、病院の向こうは河だった。

フロローリーが庭にはいつていくと、家の中から女たちがぎやあぎやあど声を上げ、ばたばた走る足音が聞こえた。どうやらボクターの奥方には一足違いで会いそこねたようである。フロローリーは玄関の方へ回り、ベランダに声をかけた。

「先生、お忙しですか、お邪魔してもかまいませんか」

黒い身体に白い服の小柄なボクターが、びっくり箱から飛び出したようにひよいと姿を見せ、ベランダの手すりに駆け寄り、大声で答えた。

「お邪魔してもかまいませんかですって。当り前でしょう。早くお上がり下さい。フロローリーさん、本当によくお立ち寄り下さいました。さあさあ、早く。何をお飲みになりますか？ ウイスキー、ビール、ペルモット、その他にもいろんな洋酒がありますよ。私は程度の高い話をしたくうずうずしていません」

ボクターは色黒で、丸まると太ったちぢれ毛の小男で、人の好きそうな丸い目をしていて、金縁の眼鏡をかけ、だぶだぶの白い綿布の服を着て、ズボンがぶ格好な黒い深靴の上に垂れ下がっているさまは、手風琴を思わせた。声には熱がこもっていたが、何かぶくぶく言っているような感じで、サ行が強く耳ざわりだった。フロローリーが階段を上がっていくと、ボクターはベランダの端まで早足で戻り、すず製の大型冷蔵庫の中をひっかき回して、さまざまな形のびんを手早く取り出した。

ベランダは広かったが、ぜんまいを入れた籠を数個低いひしに吊してあるせいかうす暗く、降り注ぐ日光の奥にあるほら穴みたいな感じだった。監獄で作られた藤張りの長椅子が備えてあり、片隅には本箱もあったが、主としてエマーソン、カーライル、ステイヴンソン風の随筆など、あまり読む気が起らない本が少し並んでいた。ボクターは大の読書家で、彼に言わせると『道徳的意味』を持つ本が好きだった。

「ところで先生」とフロローリーは切り出した。その間にもボクターは彼を長椅子に押し込まんばかりにしてすわらせ、横になれるように足台を出し、近くに葉巻とビールを置いた。「ところで情勢はどうですか。大英帝国の具合は。例によって中風ですか」

「あははは、元気がありません、フロローリーさん。本当に元気がありませんよ。重い余病を併発しそうです。敗血症、腹膜炎、神経節麻痺などを。専門医を呼ばねばならないと思います。はははは」

大英帝国をボクターに掛かりつけの婆さんに見立てるのが、二人の好きな冗談だった。ボクターは二年間飽きもせずこれを楽しんできた。

「ねえ先生」長椅子に寝そべりながらフロローリーは言った。「あのいまましいクラヴに行つたあととは、ここにお邪魔するのが本当に楽しいんです。お宅に寄せてもらうと、町から娼婦を連れ帰る非国教会派牧師のような気分になります。あいつらから解放されて、お祭り気分ですよ」と言いつつ彼はクラヴの方角を足で示した。「帝国建設にはげむ親愛なる同胞たちからです。イギリスの威信、白人の重荷、恐れと非難を知らぬまことの紳士からね。暫くでもあの悪臭から離れていられると本当にほっとしますよ」

「フロローリーさん、まあ待つて下さい。それは言い過ぎです。立派なイギリス紳士のことをそのようにおっしゃってはいけません」

「先生、ご立派な紳士たちの言うことに耳を傾ける必要などありません。けさは精一杯我慢してきました。『うす汚い黒ん坊』を繰り返すウエストマイルド、ラテン語で決まり文句を並べ、『この手紙の持参者を鞭で十五回叩いて下さい』とか書いてある手紙の話をするマクレガー。ですが、連中の話が例の老インド人軍曹、イギリス人がインドから離れたら、インドからイギリスまで、金はおろか、生線一人いなくなるなどとはぼざいたあの軍曹に及んだ時、もう勘忍袋の緒が切れてしまった。あんな軍曹など退役

リストに載せるべきだ。やつは一八八七年の聖年〔ローマ教皇の指定した特赦の年〕以来ずっと同じことを繰り返しているんだ」

例によって、フロローリーがクラブ会員の批判を始めるとボクターは興奮した。白衣を羽織っている太った背中をペラソダの手すりに付け、時どき何か身振りをした。言葉を探すときの癖だが、空中に漂っている着想をつかみ取ろうとするとどく、黒い親指と人さし指を重ね合わせた。

「でもフロローリーさん、本当にそんなふうにおつしやらないで下さい。なぜいつも、あなたの言葉をお借りすれば『立派な紳士』を悪く言うのですか。あの方たちは地の塩です。彼らの立派な業績を考えてごらん下さい。クライブ、ウオーレン・ヘイステイングズ、ダルハウヅジー、カーゾンなど、英領インドを現在の姿にくれた偉大な行政官たちを思い出して下さい。不滅のシェイクスピアを引用させてもらえば、一まじめにして考えると、彼らほどの人物群には二度とお目にかかれないうでしょう」

「へえー、じゃあのような人物群にまた現われてもらいたいのですか。私はもうごめんだ」

「イギリス紳士がどんなに気高いかも考えて下さい。お互いに対してすばらしく忠実で、パブリック・スクール〔英国の高級私立中学および高校〕魂がある。傲慢なイギリス人も確かにいますが、嘆かわしい態度を見せる人にも、我われ東洋人にはない立派な性質があります。外見は粗野でも、心は黄金です」

「金メッキでしょう。イギリス人とこの国の人たちの間にあるのは、偽りの友情です。激しくきらい合っているくせに、一緒に酒を飲み、食事をおごり合い、友達づらをするのがしきたりになっている。一致団結などと呼んではいるが、実は政策上必要だからにすぎないんだ。もちろん酒が潤滑油になっているので、それがなくなれば、一週間で気が狂って殺し合いが始まるだろう。先生の好きな、徳性を高揚してくれる随筆家たちの好きなような題材が一つあります。帝国の接着剤たる酒、というものです」

ボクターは首を振った。「フロローリーさんがどうしてそのように皮肉っぽくなられたのか、この私には全く分かりません。あなたにはおよそ不似合いな態度です。秀れた才能と人格をお持ちのイギリス紳士が、『ビルマ愛国者』紙に載せてもおかしくないほど扇動的な意見を口になさるなんて」

「扇動的ですって」とフロローリーは言った。「そうじゃないんです。私だってビルマ人たちにこの国から追い出されるのを望んではいません。それは困ります。他の連中同様、私も金を稼ぎに来ているんですから。私が反対しているのは、下劣な白人の決まり文句になっているたわ言なんだ。立派な紳士でござるというポーズだ。あれにはうんざりする。いつも嘘でかためた生活を送っているのだから、クワブの馬鹿どもでも、もう少しは付き合いやすいんだが」

「ですが、どんな嘘でかためていると言われますか」

「もちろん、掠奪するためではなく貧しい黒人を向上させるためこの国へ来ているのだ、という嘘です。きわめて当然の嘘ではありません。しかしそれが我われ白人を墮落させているのです。あなたには想像もつかないような形ですね。自分たちはこそ泥で嘘つきだという後めたい気持ちがいいつもあるものだから、四六時中苦しみ、自分を正当化しようとやっきになるのです。現地人に残忍な仕打ちをする原因の半分はそれです。自分は盗人だと認め、たわ言など言わずに盗み続けるのなら、インド在住のイギリス人だって何とか付き合えるんだが」

ボクターは我が意を得たように親指と人さし指を重ね合わせた。「あなたの主張の弱点は」と、これから言おうとしている皮肉にほおをくずしながら彼は言った。「それは、あなた方は盗人じゃない、という点でしょう」

「まあ待って下さい」

フロローリーは長椅子の上で身を起こした。背中のあせもが無数の針に刺されるように痛んだためでもあり、ボクター相手にお気に入りの議論が始まりかけたからでもあった。二人が顔を合わせると、必ずといってよいほどこの種の何となく政治と関係のある議論が交された。主張は逆だった。つまりイギリス人のほうはひどく反英的で、インド人が熱狂的なほどイギリスびいきだった。

医師ペラスロミはイギリス人を心から賞賛していた。何度も冷たい扱いを受けながら、彼のこの気持ちは揺がなかった。自分はインド人で、墮落した劣等人種である、と断固主張した。イギリスの裁判に間違いはないと信じ切っていたので、やむなく監獄で鞭打ちや縛り首の指図をしたあと黒い顔を灰色にして帰宅し、ウイスキーでもあおらなければやり切れないような時ですら、そのイギリス熱は衰えなかった。フロローリーの扇動的な意見に彼は驚いた。しかしながら、主の祈りがさかさまにこなえられるのを聞いた敬虔な信者が感じ

る、ある種の身が震えるような喜びも感じてはいた。

「先生」とフローリーは言った。「我われが盗み以外の目的でこの国に来ているなどと、どうして言えるんですか。見えすいています。役人がビルマ人を押さえている間に、実業家がボケットをさぐって強奪しているのですよ。私の会社を例にとれば、イギリスがこの国を押さえていなければ、材木の購入契約など結べますか。他の材木商会、石油会社、鉱山会社、農園主、貿易業者などはどうです。背後に政府が控えていなければ、米穀同盟によって衰れた百姓の搾取を続けることなどできません。大英帝国とは、イギリス人、というよりは一握りのエダヤ人とスコットランド人に通商を独占させるための策略にすぎないんです」

「でもそういう言葉をあなたの口から聞くのは悲しいことですね、本当に。通商のために来られたとおっしゃいましたね。もちろんそうでしょう。ビルマ人が自分たちの手で通商できませんか。機械、船舶、鉄道、道路など建設できますか。あなた方がいなければ何もできないんです。イギリス人がいなければビルマの森林はどうなります。すぐ日本人に売り渡され、荒らされ破壊されるでしょう。あなた方の管理下にあるからこそ、森林は改良されているのです。お国の実業家たちはこの国の資源を開発してくれ、またお役人たちは純粋な公共精神から、我われを教化し、あなた方の水準まで引き上げようと努めて下さる、これこそすばらしい献身の実例です」

「そんな馬鹿な。確かに若者にウイスキーとフットボールを教えはしましたが、それ以外は何も教えていません。学校をやらなさい。安っぽい書記の養成所です。インド人に役立つような手仕事は何一つ教えていません。できないんです。工業面で競争相手になられるのがこわいから。この国の産業をいくつもつぶすようなまねまでしたでしょう。インド・モスリンはどうになりました。一八四〇年代前後のインドでは、まだ遠洋航海用の船舶が建造されており、乗り組む船員もいました。今じゃ沖に出ることができない漁船も作れません。十八世紀のインド人は、少なくともヨーロッパの水準に匹敵するくらいの鉄砲を鑄造していました。イギリス人がインドに来て一五〇年経った現在では、どこに行っても真鍮製の葉莢（オリーブの葉）ひとつ作れません。東洋で短期間に発展した国といえば、独立国だけです。日本を例にあげたくはないが、シヤムの場合を考えても……」

ドクターは興奮して手を振った。概してフローリーの主張は一字一句にいたるまでいつも同じであった。そしてこの段階でドクターがフローリーの言葉をさえぎるのもいつものどどだった。シヤムの例を持ち出したためにフローリーが言葉に詰まるからだだった。

「いえねえ、あなたは東洋人の性格をお忘れになっていませんか。無感動と迷信に縛られた我われをどうやって発展させることができるといわれるんですか。少なくともあなた方は法と秩序を与えてくれました。揺ぎないイギリスの正義とイギリス（イギリス）の平和をね」

「イギリスの梅毒ですよ、先生。ポックス・ブリティカと呼ぶべきです。いざれにせよ、平和といっても誰のためです？ 金貸しと法律家のためですよ。もちろん我われは、自益のためにインドの平和を保っています。この法律とか秩序もせんじ詰めると何になりますか。銀行と監獄を増やす、それだけのことでですよ」

「それはひどい間違いですよ」とドクターは叫んだ。「監獄は必要ではないんですか。あなたがたは監獄以外のものは持つてこなかったんですか。腐敗と拷問と無知だけが支配していたテイエボ王〔ビルマ王、在位一八七八〜八五〕時代のビルマを思い出し、今あなたの周りをごらんになってください。ちよつとこのペラソダから眺めてみなさい。あの病院、右手の学校、警察署をごらんください。急増する現代進歩全体をよく見てください」

「もちろん我われがこの国をいくつかの点で近代化したことは否定しません。近代化せざるを得ないんです。ところが実はそれをやり終える前にビルマ古来の文化を破壊してしまっただけです。教化しているのじゃなく、こちらの泥を相手にこすり付けているだけなんだ。あなたの言う現代進歩の急増が行きつくところはどこなんですか？ 蓄音機と山高帽が置いてあるイギリスの昔と変わらぬ豚小屋のような住まいですよ。思うんですが、二百年も経てばこの世界が——」と言いつつ彼は足を地平線の方に向けて振った。「この世界が一切なくなつてしまつてしまつたら、森林も村も僧院もバゴタも。その代わりあの丘には見渡す限り、五〇ヤード間隔で桃色の住宅が次つぎと建ち並び、どの家でも蓄音機が同じ曲を流している。森林はみな削りとられて平らになり、材木は砕かれて『世界のニュース』紙用のパルプになつたり、削つて蓄音機のケースに加えられてしまつてしまつたり。でも『野鳴』〔ノルウェーの劇作家イブセンの作品〕の中で老人が言っているように、木は復讐します。イブセンは読まれたでしょう」

「いえ、残念ながら読んでいません。イブセンを偉大な指導者と呼びましたね、靈感の持ち主バーナード・ショウ〔英国の劇作家〕は。その作品は将来の楽しみにおきましょう。しかしあなたは見落としていますが、あなた方の文明なら最低のもでも私たちには進歩なのです。蓄音機、山高帽、『世界のニュース』紙、これらはみな東洋人のひどい怠惰

よりは立派です。イギリス人なら、最も靈感を欠いている人でも——」ボクターは適当な言葉を探し、おそらくステイヴンスンからの引用と思われる句を口にした。「進歩の道だいたいまつ持ち、と見ておられます」

「そうは思いません。イギリス人は当世風の清潔なひとりよがりのシラミです。世界中を這い回り、監獄を建てて歩き、それを進歩と呼んでいる」彼は少し残念そうなお口調でつけ加えた。ボクターがこのあてこすりに気がかないように思えたからである。

「フロローリーさん、あなたは監獄の問題をしつこく繰り返しますね。お国の人たちがなしとげた業績がほかにもあることを考えて下さい。道路を建設し、砂漠に水を引き、飢きんを克服し、学校や病院を建て、ペスト、コレラ、癩病、天然痘、性病と戦い——」

「自分たちが持ち込んだですよ」とフロローリーは言葉をばさんだ。

「違います」その手柄は同胞のものと強調しようとしてボクターは答えた。「違いますよ。この国に性病を持ち込んだのはインド人です。インド人が持ち込んだ性病をイギリス人が治す。これがあなたの悲観的扇動的見解への答です」

「どうやら我われの意見は絶対に合わないようですね。実のところあなたがこの現代の進歩とやらに好感を持っているのに反して、私はむしろ事態が少し腐敗気味であると感じたいのめです。ティーボ王時代のビルワの方が私には合っていたような気がします。前にも言ったように、我われが文明開化に影響を及ぼしているとするれば、それはただ大規模に掠奪するたにすぎません。得にならなければ、即刻投げ出してしまえますよ」

「あなたはそうお考えになってはいないでしょう。本当に大英帝国を認めていないのなら、こんなところでこそ話してはいないで、公然とそう主張なさるでしょう。フロローリーさん、私はあなたの性格を存じあげていますよ、ご本人以上にはつきりとね」

「残念ながら先生、私は世間に吹聴しようなんて思ってません。そんな度胸はありません。『失楽園』〔十七世紀英国の詩人ミルトンの長編詩〕の年老いた墮落天使のように、『卑しい安逸をよしとする』方です。その方が安全です。この国に来れば、立派な紳士gentlemanになるか、さもなれば死なねばならない。私はこの国に来て十五年になるが、あなた以外の人に本音を吐いたことはありません。ここで話すことが安全弁になっているんです。こつそりとやる悪魔のミサです、お分かりいただけますか」

この時、外で哀れつぼい泣き声があった。ヨーロツパ人教会の門番をしているヒンズー人マツツーじいさんが、日差しを浴びてペラソダの下に立っていた。彼は昔、熱病にやられたことがあり、人間というよりはキリギリスに近く、教インチ平方の汚いぼろ切れをまとっているだけだった。老人は教会の近くで、灯油の空罐をつぶして作った小屋に住んでおり、ときどきヨーロツパ人の姿を見ると、急いで出てきては右の手のひらを額に当てて平身低頭の額手礼チャムをし、月一ハルピーしかない施しチャムのことで泣きごとを言った。悲しげにペラソダを見上げながら、片手で土色の腹をなで、もう一方の手で口に物を入れるしぐさをした。ボクターはポケットをさぐって、ペラソダの手すり越しに四アナ銅貨を投げやった。彼が心やさしいのは有名で、チャウタダの乞食によくカモにされていた。

「ごらんなさい。あれが東洋の退廃です」とボクターはマツツーを指しながら言った。乞食は尺取虫みたいに身体を折り曲げ、泣くような声を言った。

「あのひどい足。ふくらはぎはイギリス人の手首ほどの大きさありません。あの卑屈な奴隷根性をごらんなさい。あの愚かさを見て下さい、ヨーロツパだったら精神病院以外では見られないような愚かさを。一度マツツーに年齢を聞くと、『旦那、わしは十歳です』と答えました。フロローリーさん、あなた方がこういう連中よりも生まれながらにして優秀な人種じゃないとどうして言えるんですか」

「可哀そうにマツツー老人は現代進歩の台頭には見落とされたようだ」と言って、フロローリーも手すりから四アナ銅貨を投げ与えた。「さあマツツー、それで酒でも飲め。できるだけ墮落しろ。そうすりや、ユートピアの到来を遅らせることができるぞ」

「ははは。ところでマツツーさん、ときどき思うんですが、あなたのおつしやることは皆——何と言うか——私をからかうのかな——そういうもんですよ。イギリス人のユーモア感覚なんだ。ご承知のように我われ東洋人にはユーモアがないんです」

「とすればもつつけの幸いでしよう。このおかしなユーモア感覚こそが我われを破滅させたのだ」と言いつつ彼は首に両手をやって、あくびをした。マツツーはさらに礼を言って、よ

るよると立ち去った。「あのひどい太陽があまり高く昇らないうちに帰らねばならん。今年は暑さがひどいだろうな。身体でそう感じられる。ねえ先生、議論に熱中しすぎてあなたのニュースを聞いてませんね。きのう密林から出てきたばかりですが、あさつてには帰らねばなりません。どうするかは考えてませんが。チャウタダで何か起こりましたか。スキャンダルでも」

ドクターは突然真剣な顔付きになった。眼鏡をはずしていたので、黒く澄んだ目をした彼の顔は黒い狼犬を思わせた。彼は目をそらし、今までより少しためらいがちな口調で言った。

「実を言いますと、非常に不愉快なことが起こってるんです。あなたには笑われそうです——取るに足りないことに思えるでしょうね——でも私は本当に困っています、というよりむしろ厄介なことに巻き込まれそうなのです。地下工作です。あなた方ヨーロッパ人の耳に直接はいることはないでしょう。ここでは」と言つて市場の方に手を振り、「いつも陰謀や策略が渦巻いています。あなた方の耳にははいらなんでしょうが、我われには重大事です」

「何が起こってるんです？」

「こういうことです。私に対する陰謀が仕組まれているのです。私の人格を傷つけ、社会的地位を破壊しようというゆるい陰謀です。イギリス人のあなたにはこういうことはお分かりにならないでしょうが、地区治安判事のウ・ポ・チンという男が私に敵意を抱いています。非常に危険な人物です。彼が私にどんな危害を加えるか想像もできません」

「ウ・ポ・チン？ 一体どんなやつかね」

「齒が多くて、太った大男です。家は通りを一〇〇ヤードほど下ったところですよ」

「ああ、あのでぶ野郎か。知ってる知ってる」

「いえ、いえ」とドクターは必死に叫んだ。「あいつのことをご存知のほずがありません。東洋人にしか分かりません。あなたがたイギリス紳士はウ・ポ・チンのような男の腹の奥は計れません。ただの悪党じゃありません。やつは——何と云えばよいか——言葉に困りますが、そう、人間の皮をかぶった鱷ワニです。鱷のずるさと残酷さと野蠻性をそなえています。やつは過去の知りなりましたら！ 今まで何度、暴行、ゆすり、収賄をしたことやら、母親の目の前で娘を犯して破滅に追いやつたり。イギリス紳士にはあんな人物など想像できないでしょうが、その男が私を破滅させてやると誓っているのです」

「私もいろいろところからウ・ポ・チンのことは随分聞いています」とフローリーは言った。「典型的なビルマ人治安判事だ。あるビルマ人が言つたことだが、戦時中ウ・ポ・チンが新兵募集の仕事をしていた時など、彼が生ませた私生児たちだけで歩兵大隊を一つ作ったそうだが」

「それは、まあ嘘でしょう」とドクターは言った。「その子供たちはまだ兵隊には幼すぎたでしょうから。でもやつが極悪非道であることは間違いないありません。そやつが今度は私を破滅させようと決心したので。私がやつに憎まれるのは、まずやつを知りすぎているからです。それにやつは少しでも正直な者は皆敬視します。あの手の人間のやり口でしようが、やつは根気よく中傷を続けます。私に聞してもぞつとするような、事実無根のひどい噂を広めるでしょう。いやもう始めていますよ」

「でも一体誰があなたよりあんな男の方を信じています？ やつは一介の下級治安判事、あなたの方は高官ですよ」

「フローリーさんは東洋人のずるさが分かっていませんね。ウ・ポ・チンは私より上級の役人を何人も破滅させています。嘘を信じ込ませる方法をいくつも思いつくでしょう。だから、今度のことは実に厄介なんです」

ドクターはペラソダを一、二歩行き来して、ハンカチで眼鏡をふいた。どうやら他にも言いたいことがあるようだが、相手の立場を思つて控えているようだった。一瞬彼が深く悩んでいるような様子を見せたので、フローリーは何か役に立てないかどうか聞いてみたくなった。が結局はそうしなかった。東洋人の争いに干渉することが無益であることを知っているからだ。ヨーロッパ人は誰も彼らの争いにははばいりこめない。いつもヨーロッパ人には何か理解できないようなものがある。陰謀の背後に陰謀が、策略の中に策略があるのだ。それに現地人の争いに巻き込まれないことが、まことの紳士の十戒の一つである。彼はあやふやな気持ちで尋ねた。

「厄介というのはどういふことですか」

「それはですね。フロアーリーさんはお笑いになるかも知れません。しかしこうなんです。もし私がヨーロッパの会員でありさえすれば、ということ。そうなりさえすれば、私の立場はどんなに違ってくることでしよう！」

「クラブですって、どうしてですか？ それがどんな助けになるんですか？」

「フロアーリーさん、この種の問題では威信がすべてなのです。ウ・ポ・チンだって私を公然とは攻撃しないでしよう。いえ、できません。中傷したり、陰口をきくだけだろうと思います。ただ彼の言うことが信じられるかどうかは、ひとえに私がヨーロッパ人とどういう関係にあるかにかかっているのです。インドではそうなんです。威信に恵まれば昇進し、さもなくば失脚します。ちよつと会釈と目くばせをしてもらえただけで、公式の報告書を無数に並べる以上の効果があります。ヨーロッパ人の会員になることができませぬ」人にどれほどの威信を与えるかお分かりにならないでしょう。クラブにはいれば、ヨーロッパ人になるのと同じです。中傷が届きませぬ。クラブの会員は侵すことができませぬ」フロアーリーは手すりから遠くを眺めた。もう帰るような格好で立ち上がっていた。膚が黒いからボクターはクラブに入れてもらえないという事実を二人の間で認めねばならないと、いつも彼は恥ずかしく不快な気持ちになった。親友が社会的には自分と対等でないというのはいやなことであるが、インドではこれは大気にまじりついでいるのである。

「ひよつとすると次の総会であなたは選ばれるかも知れませぬよ」と彼は言った。「断言はできませんが、あり得ないことじやありません」

「フロアーリーさん、私をクラブに推挙して下さいとお願ひしているなどとお考えになつてはいけません。決してそんなつもりではありません。そんなことができないうことであらうらいは分かっています。クラブの会員になれたら、こちらの立場は強くなるんだがと申しあげてはいるだけです」

フロアーリーは広つばのフェルト帽をだらしなく斜めにかぶり、ステッキでフロアーをつついて起こした。犬は椅子の下で眠っていた。フロアーリーは気持ちが全く落ち着かなかつた。もしエリスと何度かやり合うだけの勇気があれば、おそろくペラスミス先生を会員に選出させることができるだろうとは承知していた。何と言ってもボクターはビルマではただ一人と言つてよい友人であつた。二人は数え切れぬほど話し、議論もしてきた。ボクターは彼の家で食事をしたことがあるし、フロアーリーさんを家内に紹介します、と申し出たことさえあつた。もつとも敬虔なヒンズー教徒である彼の妻は怖気ついてそれを断つた。一緒に狩猟旅行にも出かけた。ボクターは弾薬帯と狩猟ナイフを持って、竹の葉で滑りやすい斜面をあえぎながら登つたり、獲物もないのに銃を撃つたりした。世間なみの礼儀作法からいつても、ボクターを支援するのが彼の義務だつた。しかしボクターは誰の支援も絶対に求めはしないし、東洋人がクラブに入会する前に醜い争いが持ち上がることもフロアーリーには分かっていた。いやだ、そんな争いはしたくない。それだけの値打ちがない。彼は言った。

「実を言えば、もうその話があつたんですよ。けさも、連中はそのことを議論していました。エリスのやつが例の『うす汚い黒ん坊』という御託を並べていました。ラゲレガーは現地人を一人選ぶように提案しています。そういう命令を受けているんです」

「ええ、私も聞きました。そういうことはいつも耳に入ります。それで先ほどあのようなことを考えたりしたんです」

「六月の総会で提案される予定です。どうなるかは分かりません。ラゲレガー次第でしょう。私はあなたに一票投じるが、それ以上のことはできません。申しわけないけれど、どうしてもできないんです。どれほどの争いが起こるかお分かりにならないでしょう。おそろく連中はあなたを選ぶでしょうが、それも文句たらたら、不愉快な義務としてですよ。彼らに言わせると、クラブは白人だけという主義を盲めつぼう信奉してきたのだから」

「そりやそうでしょう。ようく分かっています。私のためにヨーロッパ人のお友達と争うようなことは絶対になさつてはいけません。お願いですから、争いには巻き込まれないで下さい。あなたと友達だと知られてはいるだけで、あなたには思いもよらないほどのお蔭を私はこうわつてはいるんです。フロアーリーさん、威信は温度計のようなものです。あなたが家にお越し下さるところを人に見てもらうたびに水銀柱が半度ほど上がるんです」

「じやあ、晴天が続くようにしなければならぬなあ。先生にしてあげられることと違って、これくらいじやないだろうか」

「それだつてたいしたことですよ。お笑いになるかも知れませんが、そのことで気を付けていただきたいことがほかにあります。あなたが自身、ウ・ポ・チンに用心していただかなければということです。罎にはご用心下さい。私と親しくしてくださいることが知れたら、やつはきつとあなたを攻撃してくるでしょう」



「分かりましたよ、先生、鰐には用心します。ですが、やつごときがこの私にそれほどの危害を加えることができると思えないなあ」

「少なくとも、仕掛けてはくるでしょう。私はやつを知っています。おそろく私から友達を引き離そうという戦術をとるでしょう。ことによると大胆にもあなたに関してまで中傷をまき散らそうとするかもしれません」

「私に聞いてですって？ おやおや、私への中傷など誰一人信じないだろう。私はローマ市民なり、イギリス人だ。だから、疑惑の対象にならないよ」

「ですが、やつの中傷にはご用心下さい。やつを軽く見ないで下さい。そのうちあなたをどう襲ったらよいかを見抜きますよ。やつは鰐です。だから鰐のように」ここでボクターは親指と人さし指を強く重ね合わせた。イメージが時どき彼の心の中で混合することがあった。「鰐のように常に一番の弱点を襲ってきます」

「鰐はいつも一番の弱点を襲うんですか、先生」

二人は笑った。ボクターの妙な英語を時どき笑い合うほどに二人は親密であった。おそろくボクターも心の底では、フロローリーが自分をクラブに推薦すると約束してくれなかったので少し失望していただろうが、しかしそんな気持ちも口にするくらいなら、むしろ死んだ方がよいとも思っていたことである。フロローリーは、持ち上がらなかつたらよいがと思っていた不愉快な話題が終わったのでほっとした。

「さあ今度は本当に失礼しなければ。ごきげんよう。もうお目にかかれないかも知れません。総会がうまくいくことを願っています。ワグレガーは悪い人間じゃないから、おそろくあなたを選ぼうと主張するでしょう」

「そう願いたいですね。そうなればウ・ポ・チンが百人いいても対抗できます。いやたとえ千人いいても。じゃ、フロローリーさん、さようなら」

フロローリーは広つばのフェルト帽をきちんとかぶり直し、太陽がざらつく広場を横切り、朝食をとり家に帰った。しかし朝から長時間酒を飲んだり、煙草を吸ったり、話し込みだりしてきたので、食欲は全然なかった。

フロローリーは、シヤン族〔ビルマ山岳地方に住む種族〕風の黒ズボン以外何も身に付けずに、汗でべとつくベッドに寝ていた。今日は一日中何もしなかった。月のうち三週間ほどは野営地で、何日かはまとめてチャウタダで過ごすか、チャウタダに来るのは、主としてぶらぶらするためだった。彼には事務の仕事がほとんどなかったからである。

寝室は白壁の広びろとした四角い部屋で、入口の戸も天井もなく、あるのは雀が巢を作っている垂木ヒナギだけだった。家具としては四本柱の大きなベッド、それには折りたたまれたホーム型の蚊帳が付いており、さらに藤製のテーブルと椅子、小さな鏡、それに粗末な本箱が数個だけだった。本箱には本が数百冊並んでいたが、何度も雨季に遇ってかびがはえ、しみに食われていた。やもりが一匹、紋章の竜のように壁にびたつと張り付いていた。ペラソダの軒の向こうでは、日光が降り注ぎ、白く輝く油を思わせていた。竹藪で鳩が数羽、低くものうげに鳴いているのが、妙に暑さと合っていた。その鳴き声は眠けを誘ったが、子守歌というよりはクロロフォルムが与える眠さだった。

二〇〇ヤード離れたマクレガー氏のバンガローで、門番が起きた時計さながらに鉄製の手すりを四つ叩いた。フロローリーの召使コ・ヌアはその音で目を覚まし、調理場へ行って、薪の残り火を吹き起し、茶を入れる湯を沸かした。それから桃色のカウソバウンを巻き、モスリンのエンジャーを着て、茶の盆を主人のベッドへ持って行った。

（彼の本名はマウン・サン・ラで、コ・ヌアは略称であったが）コ・ヌアは背が低く怒り肩で、素朴な感じのビルマ人だった。色は非常に黒く、顔には苦惱の色が浮かんでいた。黒い口ひげの先は口の両端から垂れ下がっており、あごはビルマ人一般の風習に従ってきれいに剃っていた。この男はフロローリーがビルマに来た時以来の召使で、二人の年齢はひと月も違っていないかった。二人は子供のころから一緒にしぎや鴨を追い、マツチヤン〔虎を見張るための樹上の台〕の上で、出てきもせぬ虎を待ったこともあれば、野営や長旅で不快な生活を何度も共にしてきた仲だった。コ・ヌアはフロローリーのために売春婦を呼び、中国人の金貸しから金を借り、酔った時はベッドに運び、熱が出ている間ずっと介抱した。コ・ヌアから見ると、フロローリーは独身者のせいか、今も子供だった。一方のコ・ヌアは、結婚して五人の子供を持ちながら別の女と結婚し、二重結婚の隠れたる実践者であった。独身者に仕える召使の例に洩れず、コ・ヌアも急げ者で不潔ではあったが、フロローリーには心から仕えた。他の者にはご主人の給仕はおろか銃も持たせず、主人が乗っている小馬の口輪も取らせなかった。旅の途中で川にさしかかれば、主人を背負って渡った。この召使は、ご主人が気の毒な方だいつも思っていたが、一つには、彼が子供っぽく簡単に人にだまされるからであり、一つには例の痣のためだった。コ・ヌアにはその痣が恐ろしいものに思えたのである。

コ・ヌアは盆をベッドのかたわらのテーブルにそつと置き、ベッドの端に回り、フロローリーの足先をくすぐった。これだけが機嫌をそこねずに主人を起さす方法であると、彼は経験で知っていた。フロローリーは震返りをうち、口汚く罵り、額を枕に押しつけた。

「旦那さま、いま四時の合図が鳴りましたよ。あの女が来ると言っていましたので、コツプを二つお持ちしました」

あの女とは、フロローリーの情婦マ・ラ・メーだった。コ・ヌアはいつも彼女のことをただ、あの女と呼んだが、それは自分がその女に反対していることを示すためだった。フロローリーが情婦を囲うことに反対なのではなく、マ・ラ・メーが家で権力を振うことに嫉妬を覚えるためだった。

「旦那さま、夕方《テナス》をなさいますか」コ・ヌアが尋ねた。

「いや、暑すぎるよ」フロローリーは英語で答えた。「食事はいらん。こんなもの片づけて、ウイスキーを持ってきてくれ」

コ・ヌアは英語を話せなかったが、聞き取ることは充分にできた。彼はウイスキー一本と、フロローリーのテニスラのラケットを持ってきて、ベッドの向かい側の壁に意味ありげに立てかけた。彼の考えでは、テニスとは、イギリス人なら誰でも務めなければならない神秘的な儀式であり、したがって主人が夕方テニスを怠けるのを彼はいやがった。

フロローリーは、コ・ヌアが持ってきたバタートーストをむかつく気持ちで向こうへ押しやったが、紅茶の方はウイスキーを入れて飲み、それで少し気分がよくなった。昼からずっと寝ていたせいも、頭も身体中の節ぶしも痛み、口には紙の灰を食ったような味が残っていた。食事をおいしいと思つたことは、ここ何年もなかった。ビルマで食べるヨーロツッパ風の料理なんてどれも多少はうんざりする味のものはかりだった。パンはしゆる酒でふくらませたスポンジ状のもので、安い干しぶどう入りケーキの腐つたような味がしたし、バター

は罐入り、ミルクも罐入り、でなければ牛乳屋が持つてくる、水っぽい灰色のミルクまがいのものだけだった。コ・ヌラが部屋を出た時、外できするようなサンダルの音がし、ビルで娘特有のかなり高い声が聞こえてきた。

「あなた、起きてらっしゃる？」

「はいれ」フローリーはむつり声で言った。

入口で赤いラッカー塗りのサンダルを乱暴に脱ぎ捨て、マ・ラ・メーがはいつてきた。彼女には、お茶を飲みに来る権利は特別に与えられていたが、食事や、主人の前でのサンダル姿は許されていなかった。

マ・ラ・メーは二十二、三の娘で、背は五フイートぐらい、刺しゅうをほどこした淡青色の中国産しゅうすで作ったロンジーと、糊のきいた真白なモスリンのエンジーを着ており、金のロケットが幾つかぶら下がっていた。髪は漆黒で、堅く筒状に巻かれている様は黒檀を思わせ、ジャスミンの花を飾っていた。しゃんと伸ばしたきやしやな身体は木の薄肉彫りのようで、曲線がなかった。面長で表情の動かぬ新しい銅貨色の顔や、細い目も人形そっくりであった。それも異国風の、それでいて奇妙に美しい人形であった。彼女がはいつてくると、びやくだんとココナツ油の匂いが部屋に漂った。

マ・ラ・メーはベットまで来ると、その端に腰を下ろし、いきなりフローリーの首つ玉にかじりつき、低い鼻でビルマ風に彼のほおを嗅いだ。

「ねえ、どうして今日は迎えをよこしてくれなかったの？」

「寝ていたんだ。暑くてそれどころじゃないよ」

「ではマ・ラ・メーと寝るより一人で寝る方がいいのね。きっとあたしを醜女だと思ってるのね。あたしそんなにおす？」

「あつちへ行つてくれ。こんな時間に押しかけられるのはご免だ」彼はマ・ラ・メーを押し戻した。「じゃ、唇で触れるだけでもして下さいな」（と彼女が言ったのは、キスに当たるビルマ語がないからだった）「白人の男なら皆、自分の女にはするでしょう」

「じゃ、それ。これでいいだろう。さあ、もう一人にしておいてくれ。煙草をどうやって一本くれ」

「近頃はあたしを抱くのをやがってらっしゃるようね。どうして？ 二年前はこうじゃなかったのに。あのころは可愛いがつてくれたわ。金の腕輪や絹のロンジーもワンピースから取り寄せてくれたのに。でも」と言つて、マ・ラ・メーはモスリンを羽織ったきやしやな腕を突き出した。「見てちょうだい。今じゃ腕輪なんて一つもないのよ。先月三十個もあつたのが、全部質にはいつてるわ。いつも同じロンジーばかり着て、腕輪も付けずに市場に行けやしない。他の女の前で恥をかくわ」

「腕輪を買入れたのは、こちらの責任じゃあるまい？」

「二年前ならあたしに代わつて質受けしてくれたでしょうに。もうマ・ラ・メーを愛してないのね」

彼女はまた彼の首つ玉にすがりついてキスをした。彼が教え込んだヨーロッパの風習だった。びやくだんとにんにく、ココナツ油と髪に飾ったジャスミンの匂いが入り混じつて漂った。この匂いを嗅ぐと彼はいつも歯のうずく思いがした。半ば無意識にフローリーは彼女の頭を枕に押しつけ、奇妙なほど若わかしい顔、高いほお骨、切れ長な目、小さく形のよい唇を見下ろした。歯はやや小粒で、小猫の歯みたいであった。この娘は二年前に親もとから三〇〇ルピーで買って来た。彼は矜まがなしのエンジーから滑らかな細い茎のように突き出した褐色の喉をなで始めた。

「お前はおれが白人で金があるから好きなんだらう？」

「いえ、旦那さまを愛しているのです。この世の何よりも。なぜそんなことおっしゃるの。旦那さまを棄切ったことがあつて？」

「ビルマ人の恋人がいるだらう」

「まあいやだ。ビルマ人の黒い手で触さわられるなんて考えただけでもぞつとするわ。そんなことされたら死んでしまうわ」マ・ラ・メーはぞつとすると顔を見せながら言った。

「嘘つけっ」

彼は女の胸に手をやった。マ・ラ・メーはそうされるのを内心いやがっていた。ピルマ女の乳房は無いくらいに小さいのが理想なのに、胸に触られると、いやでも乳房があることを意識するからであった。彼女は寝たまま彼に好きなようにさせていた。人間にじつとなでられて猫と同じで、全く受身的ではあったが、その実喜んで微笑さえ浮かべていた。フロリーーの愛撫など彼女には何の意味もなかった。(実はコ・スラの弟バ・ベが彼女の隠し男だった)しかし彼が愛撫を怠ると、彼女の胸はひどく痛んだ。時には彼の食事に娯樂をこつそり入れることさえあった。彼女が愛しているのは困われ者の気楽な生活であり、晴着を着て故郷の村に帰り、『白人の妻』であるのを自慢できることだった。彼女は自分も含めて皆に、自分がフロリーーの正妻であると信じ込ませていた。

愛撫が終わると、フロリーーは疲れ果て、恥ずかしくなつて女に背を向け、左手で痣を隠すようにしてだまり込んでいた。恥ずかしいことをすれば必ず痣を意識した。いやな気持ちで、ココナツ油の臭いがするじめじめした枕に顔を埋めた。恐ろしく暑く、外では鳩が相変わらずものうい声で鳴いていた。マ・ラ・メーは、裸でそばに寝そべつたまま、テーブルから取つた藤うちわで彼を静かにあおいだ。

やがてマ・ラ・メーは起き上がり、服を着て煙草に火をつけた。それからまたベッドに戻つて、フロリーーの裸の肩をなで始めた。白い膚が彼女には魅力だった。不思議で、たくましい感じがしたからである。しかしフロリーーは肩の手を振り払つた。このような時には、彼女の存在は胸が悪くなるほどおぞましく、その姿が消えてくれることだけを彼は願つた。

「出て行つてくれ」

マ・ラ・メーはくわえていた煙草をフロリーーに差し出した。「なせ旦那さまはあたしを抱いたあとに限つて、いつも邪慳なさるの」

「出て行けと言つてるだらう」

マ・ラ・メーは、彼の肩をなで続けた。このような時には、彼を一人にしてやるのが一番だということが全く分かつていなかった。色の道は魔術のようなもので、それによつて女は男を操る魔力を身につけ、最後には男を薄のろの奴隷に変えられる、しかも愛撫を重ねるごとに、フロリーーの気力を吸い取り、その魔力がますます強くなる、と彼女は信じ込んでいた。彼女は愛撫を繰り返させようとして彼を苦しめ始めた。煙草を放して相手の首にかじりつき、そらした顔を自分の方に振り向かせ、キスしようとし、態度が冷たいと言つて彼をなじつた。

「出てけ、と言つているんだ。半ズボンのポケットの中を見る、金があるから。五ルピー取つて出てくれ」腹立たしげな口調だった。

マ・ラ・メーは見つけた五ルピー紙幣をエソジの胸にねじ込んだが、やはり出て行こうとせず、ベッドのそばでぐずぐずしてフロリーーを悩ませた。とうとうフロリーーは本気で腹を立て、いきなり起き上がった。

「部屋から出る！ そう言つてるだらう。いつまでもぐずぐずするな。もう用は済んだのだ」

「まあ、優しいお言葉ですこと。まるで売春婦扱いな」

「そうに違いなからう。とつとつ消えうせる」と言いながら彼は肩を突くようにして彼女を押し出し、出て行く彼女の方にサンダルを蹴とばした。会えたいといひ終わりはこうだった。

フロリーーは部屋の真ん中に突つ立ち、あくびまじりで愚案した。やつぱりクラブヘニスをしに行こうか。いや、そうなるとひげを剃らなきゃなるまい。まず二、三杯飲まなきゃ、ひげを剃る気も起こらない。彼はあごの無精ひげをなで、伸び具合を調べるために鏡の方にのつそり歩いて行つたが、途中で引き返した。鏡の中から自分を見返してくる、やつれた黄色い顔など見たくもなかった。しばらくの間、両手を垂らして、やもりが本箱の上の方にいる蟻に忍び寄るのを見ていた。マ・ラ・メーが捨てていつた煙草がいからつばい煙を出して燃えつき、紙が茶色になつていた。本棚から本を一冊取つて開いたが、面白くなさそうに投げ捨てた。本を読む気もなかった。あーあ、夕方まで残つている時間をどう過ごせばよいのだ。

フロアーがよちよちと部屋に来て、尻尾を振りながら散歩の催促をした。フロアーは寢室の続きにある石畳の狭い浴室へむつつり顔で行き、ぬるま湯のような水を浴びてから、シャツを着て半ズボンをはいた。日没までに何か運動をしなければならぬ。インドでは、日に一度は大汗を流さなければ、何度も色欲に耽ける以上に悪いことをしている気持ちになる。何もせずに一日を過ごして宵闇を迎えた時には、気が狂って自殺したくなるほど強い倦怠感に襲われる。そうなれば、仕事も、お祈りも、本も、酒も、談話も、何一つ効きめがない。汗で身体を洗い流す以外にないのだ。

フロアーは外に出て、丘に登り、密林にはいつていった。初めのうちは雑木林で、いじけた灌木が繁っており、木と言えそうなのは野生に近いマングローの木だけだった。この木にはテレピン油を塗ったようなすももぐらいの小さな実がなっていた。やがて道の両側の木が高くなってきた。この季節には木はどれも乾いて生気がなかった。ほこりをかぶった木が密集して両側に並び、葉はくすんだオリーブ色だった。目にはいる鳥といえば、つぐみを不格好にしたような褐色の野鳥だけで、灌木の下で不器用に跳んでいた。遠くでは別の鳥が「あはは、あはは」と、人の笑い声のように寂しくうつろな鳴き声を響かせていた。朽ちた葉からは高の臭いに似たむかむかする悪臭が立ち昇ってきた。傾いた日の光は薄黄色になっただけでも、暑さは残っていた。

ニマールほど行く道は終わり、浅い小川が流れていた。水があるせいか、その辺一帯はほかよりも青あおとしており、木も高かった。小川のほとりには大きなピーンカドの枯れ木があり、蘭が蜘蛛の足のようにながら木を飾っていた。野生のしなの灌木も何本かあつて、薔薇の白い花を咲かせ、ベルガモット香油の香りを漂わせていた。足早に歩いてきたので、シャツは汗まみれになった。汗は額からもしたたり落ちて目にしみた。汗を流したので気分はよくなった。それに沼地では珍しく澄んだこの小川の流れを見ると、いつも元氣になった。彼は踏み石伝いに流れを横切った。フロアーも水しぶきを上げながらついて来た。それから以前に通ったことのある灌木の間の小道の方に曲がった。これは水を飲みに来る家畜が踏みつけてきた道で、人間は滅多に通らなかつた。小道は五〇ヤードほど上流の水たまりまで続いていった。そこには菩提樹が生えており、巨人が木を撫なって作った大綱かと思えるほど、無数の大枝が終んで支え合っている、直径六フイートはある大樹だった。根もとがいつの間にかえぐられて大穴になり、澄んだ水が青あおとわき出していた。あたり一帯は、繁った葉が日光をさえぎって、緑に囲まれた自然の東屋東屋をなしていた。

フロアーは服を脱ぎ捨てて水たまりにはいった。水は空気より多少温度が低く、かがむと首まであつた。マーズアという鰻いわしぐらいの小さな魚の群れが寄つて来て、身体を突ついた。フロアーも水の中には入り、足に水かきがあるカワウソのように静かに泳ぎ回った。チャウタダ滞在中には何度も一緒に来るので、犬もここをよく知っていた。

菩提樹の楕が騒いで、ポットの湯が沸く時のような音がした。緑色の鳩の群れが、上の方で木の葉をついばんでいた。フロアーは緑のドーム形をした楕を見上げ、鳩の姿を見極めようとした。葉と全く同じ色なので姿は見えにくかつた。しかし群がっている鳩のせいで樹木全体が震え、まるで鳩の霊が揺り動かしているかのようだった。フロアーは楕の根にもたれ、姿の見えぬ鳥に向かって吠えた。一羽の緑鳩が舞い降りてきて、下の枝に止まった。見張られているとは知らないようだった。細い体で、家鳩より小さく、ひすい色の背はピロードのようにつややかで、首と胸は玉虫色をしていた。足は畜科医が使うピンク色の蠟そっくりだった。

降りてきた鳩は、枝の上で体を前後に揺り動かし、胸の羽毛をふくらませ、珊瑚を思わせるくちばしを羽毛に当てる。苦痛がフロアーの胸を貫いた。自分は独りぼつちだ。完全に独りぼつちだ。独りとは何とつらいことか。寂しい密林の中で鳥や花や木など、言葉では言い表わせぬほど美しいものをふと見た時に、その美しさを共に味わつてくれる人があれば、と今まで何度願つたことだろう。美しいものも一人で眺めていては意味がない。この寂しさを共にしてくれる人が一人でよいからいてくれたら……。鳩は下の人間と犬に気づいたか、突然、空に舞い上がり、羽音を響かせながら弾丸のように飛び去った。生きた緑鳩をこのように間近で見るのは珍しい。この鳩は空高く飛び、楕で暮らし、水を飲む時以外は地面に降りてこない。撃たれても即死でない限りは、死ぬまで枝にしがみついており、撃つた方が待ちくたびれて立ち去つたあと、随分経つてから落ちてくる。

フロアーは水から出ると、服を着て、再び流れを渡り、帰路についた。しかし来た道を引き返さずに、密林の奥へはいつて南に続く小道を通り、家に近く、密林の端にある村を抜けることにした。フロアーは何度も灌木の間にもぐり込み、長い耳をいばらに引っ掛けては吠えていた。以前この近くで野兎を追い出したことがあるからだ。フロアーはゆつくり歩いた。パイプの煙が円柱のように静かに真直ぐ立ち上つた。散歩のあと澄んだ水を浴びたので、心は楽しく安らいでいた。よく繁った木の下あたりには、とところ暑さが残っていたが、少し涼しくなり、光も柔らかくなつた。遠くからは牛車のまじみがのどかに聞こえてきた。

いつの間に道を間違えたのか、彼らは枯れ木やもつれ合う灌木の間をさ迷っていた。小道は行き止まりになり、葉蘭を大きくしたような、不格好で、葉先はどげが生えた鞭状になっている植物の群れが行く手を塞いでいた。螢が一匹、灌木の根もとで黄色の弱い光を放っていた。木が繁った所はもう黄昏色だった。さきほどの牛車が近くを並行して進んでいるのか、車のきしむ音が近づいてきた。

「そちらのお方、すみません」フローリーは、フローが逃げ出さぬよう首輪を抑えながら叫んだ。

「何だね」ビルマ人も大声で返事をしてきた。続いて、突進するひづめの音と、牛にたいしてどなる声が聞こえた。

「こちらへ来ていただけじゃないですか、そちらのお方。道に迷ってしまったのです。ちよつと牛車をお止め下さい。お願いします」

ビルマ人は、牛車を離れて、藁を斜で払い、密林を押し分けながら近づいてきた。いかつい片目の中年男だった。男はフローリーを案内して道まで引き返した。フローリーは平らで、すわりごこの悪い荷台に乗せてもらった。男は手綱を取り上げ、牛に声をかけ、尻を短い棒で叩いた。牛車は輪をきませながらがたがた進み始めた。ビルマでは牛車の車軸にグリースを塗らない。車軸のきしむ音が悪霊を追い払うと信じられているのだらう。もつとも理由を聞かれれば、貧しくてグリースを買う金もないからだと言中は答えるであろう。

牛車は、洗われて白い木膚を見せている仏塔のそばを通った。仏塔は人間ぐらいの高さで、半分は蔦が絡みついて隠れていた。道は曲がって村へはいった。かやぶきの隈れかかった小屋が二十軒ほど並び、なつめ椰子の木が数本群生していたが、実はなつていなかった。木の下には井戸があった。なつめ椰子に巣食う鶯が木立の上を白い矢のように飛んで帰ってきた。脇の下までロンジエを手繰り上げた太った女が、小屋を回って犬を追い、竹で叩こうとして笑い転げていた。犬も笑っているようだった。この村の名はニヤウンレピンといひ『四本の菩提樹』という意味だった。もつとも今は菩提樹など一本もなかった。おそろく一世紀前に切り倒され、それきり忘れ去られたのだらう。村の連中は、町とジャングルの間の細長い土地を耕し、牛車を作つてチャウタダで売っていた。どの家の下にも牛車用の車輪が転がっていた。直径五フイートもある大車輪で、スポークは粗雑だが頑丈だった。

フローリーは牛車を降りて、馭者にお礼として四アナ渡した。おちの野良犬が数匹、家の下から走り出てフローリーを嗅いだ。白人が珍しいのか、髪をてつべんで結び、太鼓腹を突き出した裸の子供の群れも現われたが、近寄つては来なかった。しわだらけで枯れ葉色の老人が小屋から出てきた。この村の村長であった。合掌礼が交わされた。フローリーは村長の小屋の昇り口に腰を下ろし、パイプに火をつけなおした。喉が渇いていた。

「村長さん、井戸の水は飲めますか」

村長は左足のふくらはぎを右足の親指の爪で掻きながら考えたあと答えた。「飲む者は飲み、飲まない者は飲まんですよ、旦那」

「なるほど、そりやそうだ」

さきほど野良犬を連れていた太った女が、黒くすすけた陶器のポットと、取っ手のない椀を持ってきて、薄い緑茶を注いでくれた。焦げ臭い味がした。

「じや、失礼します、村長さん。お茶をありがとうございます」

「お気をつけて、旦那」

フローリーは広場に通じる道を通つて帰った。すでに暗くなっていた。コ・ヌラが新しいエンジンを着て寢室で待っていた。湯浴み用に石油二罐分の湯を沸かし、石油ランプに灯を入れ、洗ひ上がりの服とシャツを出してあつた。ひげを剃り、服装を整え、夕食後クラブに出かけなさいと暗に勧めているのだ。時おりフローリーは、シヤン族風のズボンをはき、椅子で本を読んで夕方をただら過ごすことがあつた。コ・ヌラはそれをいやがった。主人が他の白人と違うことをするのがいやだったのだ。家ではしらふで通す主人が、クラブからは必ず酔っぱらつて帰つてくる。それでも主人はやはりクラブに行くべきだと、コ・ヌラは考えた。白人の場合酔っぱらうのは当たり前で、大目に見ることができたのである。

「あの女は市場へ行きましたよ」マ・ラ・メーが出かけたので、例によつてうれしそうな口調だった。「バ・ペもラントンを持って出かけました。あの女の帰りを迎えに」

「よからう」

あの女はさきほどの五ルピーでギャンブルに出かけたのだろう。

「旦那さま、お風呂の用意ができております」

「いや、先に犬の世話だ。くしを持ってきてくれ」

二人は床にかがみ込んで、フロアのなめらかな毛をとき、足先をさぐってだにを取ってやった。毎晩欠かせぬ行事になっていた。フローは昼の間にだにをたくさん拾ってきた。ピンの頭ほどの大きさに灰色の気持ち悪いだにが、犬にたかると血を吸って豆粒ほどにふくらんだ。取っただだにをコ・ヌラは一匹ずつ床に置き、足先で丁寧に踏みつぶした。

そのあとフローリーは、ひげを剃り、風呂にはいり、服を着て、テーグルに向かった。コ・ヌラは椅子のうしろに立って料理を渡し、藤うちわで主人をあおいだ。小さなテーグルの真ん中には、真赤なハイビスカスが彼の手で活けられていた。見かけ倒しのまがい料理だった。何世紀も前にインドでフランス人に仕込まれた召使の子孫だという、小利口で氣どり屋のコックなどが、いくら料理に細工しても、まともに食べられるものはできっこない。チャウタダにいる時はほとんど毎晩のことだが、今夜もまた、フローリーはクラブに行つてフリッジをし、泥酔した。

クラブでウイスキーを飲んできたのに、その晩フローリーはよく眠れなかった。野良犬の群れが月に向かって遠吠えしていた。それはほんの弦月にすぎず、真夜中には沈んでしまふのだが、犬は昼の激しい日差しの中で眠っていたので、さきほどから一斉に吠えだしていった。群れの一匹が、フローリーの家が気に食わないのか、身動きもせず、一定間隔をおいて家に向かって吠えだした。門から五〇ヤードのところを腰をすえ、時計で計ったようにきちんと三〇秒ごとに怒気を含んで耳をつんざくように吠えた。雄鶏が鳴き始めるまであと二、三時間続きそうな気配だった。

フローリーは何度も寝返りをうった。頭痛がした。動物は憎めないと言ったやつがいるが、インドで犬が月に吠える夜を二、三回遇ごしてみたら分かる。とうとうフローリーは我慢できなくなった。起き上がった、ベッド下のブリキ製衣装入れからライフル銃と薬莖やくせき二個を取り出して、ベランダに出た。弦月で少しは明かるかった。犬の姿が見え、銃の照準器も見えた。ベランダの柱で身体を支えて腰重にねらいを定めた。ところがその時、エボナイトの銃尾が肩の膚に直接触れたので、こりやいけないと思った。ライフル銃は撃つ際に強い反動があり、打撲傷が残る。肩の柔らかい肉は萎縮した。彼は鏡を降ろした。冷然と発砲する度胸がなかったのだ。

眠ろうとしてもできなかった。フローリーは上着を着て葉巻を手にし、両側に花がぼんやり並んで見える庭の小径をぶらぶらと行き来した。暑かった。蚊が彼を見つけて、ブーンとついてきた。道路では犬どうしで追っかけあっている影がぼうつと見えた。左手のイギリス人墓地で墓石が白っぽく輝いているのがうす気味悪く、昔は中国人の墓であったと思われる塚が近くに見えた。丘の中腹には幽霊が出るといううわさで、クラブのボーイたちは夜、その道を通って使いにやられそうになると泣き出したものである。

「お前は、ふ抜けの野良犬だ」とフローリーは自分に言い聞かせた。しかしそんなふうに見えるのには慣れていたので気持ちには冷静であった。「こそこそしてごうたらで、大酒飲みで、助平で、内省ばかりしている自己憐憫でいっぱい野良犬だ。お前が見くだして悦に入っているクラブのあのまぬけでもできえ、皆お前よりはました。少なくとも連中は馬鹿なりに男を通して。臆病者でも嘘つきでもない。死にかかっても、くさつてもいい。腐敗し始めているわけではない。ところがお前ときたら——」

彼には自分を罵倒するだけの理由があった。その晩クラブでいやな汚い事件があったのだ。ごくありふれた前例のあることとは言っても、やはり汚く卑劣な不名誉なことには違いなかった。

フローリーが着いた時クラブにいたのはエリスとワックスウエルだけだった。ラッカーズとインズ夫妻は、夜汽車で到着予定の姪を迎えにラゲルガー氏の車を借りて駅へ出かけていた。三人が仲よくブリッジをしていると、ウエストフィールドが浅黒い顔を怒り赤らめ、『ビルマ愛国者』という現地新聞を一部持ってはいつてきた。ラゲルガー氏を攻撃する反逆的な調子の記事が載っていた。エリスとウエストフィールドは激怒した。二人の怒りがあまりに激しいので、フローリーも彼らを満足させる程度におこったふりをするのがひどく苦勞だった。エリスは五分間も悪態をつき、それからどのようなどつびな推論をしたのか、医者へのラスロミがその記事の責任者だと断定した。彼はすでに反撃の手段も考えついていた。掲示板に通告を貼るということだった。ラゲルガー氏が前日掲示した通知書に答えて反ばくするためのものだった。エリスはすぐに小さな字ではつきりとそれを書いた。

『このたびわが副総弁務官に対して行われた卑劣な侮辱からみて、我われは当面黒ん坊を会員に選出するには最悪の時期であることを表明し、ここに署名する』  
ウエストフィールドは『黒ん坊』という語に異議を唱えた。それでその言葉は細線一本で消され、『現地人』に書き代えられた。署名者は、R・ウエストフィールド、P・W・エリス、J・フローリーであった。

エリスは自分の思いつきが大いに気に入ったのか、怒りはあらかた消え失せた。その通告自体は、何をどうすることができるといふものではないが、すぐにはうわさが町中に広まり、明日にも医師ベラスロミの耳にはいるだろう。事実上、ボクサーはヨーロッパ人社会によって公然と黒ん坊呼ばわりされたということになる。それがエリスにはうれしかった。その晩は掲示板からほとんど目を離すこともできないほどで、二、三分ごとにうれしそうに叫び声をあげていた。

「こうしてやりや、あのチビの太鼓腹も少しは考えるだろう。我われがやつのことをどう思っているか教えてやるんだ。それこそやつらに身の程をわきまさせ手段なんだ」



一方、フロリーは友人に対する公然の侮辱に署名してしまった。今まで教えきれないくらいそのようなことをしてきたが、今そうしたのも同じ理由からだ。つまり拒絶するのに必要な勇気のかけらもなかったのである。もともと、その気になれば断れたであろうが、そうすればエリスとウエストフィールド相手の口論を招くことになったろう。とにかく口論はいやだった、あら探しをしたり、あざ笑うのは、それを考えただけでひるんでしまった。ほおの志を感じた。唯がおかしくなり、声が単調で後めたい感じになるのが分かった。それだけご免だ。必ずドクターの耳にはいることは分かっているが、それでも彼を侮辱しておく方が楽だ、とフロリーは思った。

フロリーはビルマに来てもう十五年になる。この国にいると誰でも世論には逆らわなくなる。しかし彼の苦勞はそれ以前に始まっていた。母親の胎内でたまたまほおに青い痣がついた時に始まっていたのである。この痣から幼い頃に受けた影響を彼は思い出した。九歳で入学した日に皆からじろじろ見られた。数日後にはほかの少年たちがはやしたてた。『フュー・フレイ青坊主』というあだ名が付けられた。そのうち、今はたしか批評家になって、『ネイション』〔二〇世紀初頭の英国の急進的な雑誌〕にかなりの文を書いているが、当時学校で詩人とうたわれていた少年が次の対句を発表した。

新入りフロリーこそおかしけれ、  
猿のお尻にかも似たる顔なるがゆえ。

そこで『青坊主』が『猿のお尻』に変わった。それから数年後、日曜の夜など、年上の少年たちはスペインの宗教裁判というゲームをよくやった。一同に人気のある拷問は、少数の物知りだけが知っている『スベシャル・トーゴー』というもので、一人が犠牲者をつかまえて苦しめている間に、別の人間が一本のひもに通した柄の突でさらにぶんなぐるといったものだ。しかしやがてフロリーは『猿のお尻』というあだ名を返上した。彼は嘘をつくと、フットボールがうまかった。この二つは学校で名を揚げるのに絶対に必要だったのだ。卒業前には彼ともう一人の少年が、例の少年詩人に『スベシャル・トーゴー』を任掛け、その間にフットボールチームの主将が、ランニング用スパイクで彼を六回蹴とばした。ソネットを書いている現場をおさえたからだった。これはフロリーの発展期だった。

そのあと三流のつまらぬパブリック・スクールに進学した。貧弱でデタラメな学校だった。英国教会高教会派や、クリケット、ラテン詩の伝統をもつ一流パブリック・スクールをまねていた。『人生のスクラム』という校歌は神を偉大な審判員と称えていた。しかし、ここには一流校の特質である文科的教養の雰囲気があった。生徒たちはほとんど何も学ばなかった。面白くもない授業を生徒たちへのみにさせるだけの鞭打ちもなく、お粗末で薄給の教師たちも、生徒に知らず知らず知恵を吸収させるような教育者ではなかった。フロリーは卒業する時にも相変わらず粗野なまぬけだった。しかしその時でもまだ、あるいはやがて苦勞の種になるかも知れないが、とにかく自分にはいくつかの可能性が残っていることは分かっていた。しかしもちろん彼はそれをこの年になるまでに消し去ってしまった。幼い頃に『猿のお尻』などというあだ名を付けられた少年が、教訓を学ばぬはずがないのである。

ビルマに来た時はまだ二十歳に少し間があった。お人よしで息子には献身的だった両親が、材木会社に就職させてくれたのだ。二人はこの職を見つけるのに大変な苦勞をし、くわん工面できないほど多額の運動資金をばらまいた。あとになって彼はそのことに對する礼のつもりで、数ヵ月ごとに両親の手紙にぞんざいな走り書きの返事を出した。ビルマでの最初の六ヵ月はラングーンで過ごした。そこでは事務の仕事を覚えることになっていった。放蕩に明け暮れている四人の青年が彼と同宿だった。どれほど放蕩の限りを尽くしたことだろう。内心ではきらっているウイスキーをがぶ飲みし、ピアノを囲んで卑猥な馬鹿ばかしい歌をうなり、カネツ髯面で大年増のユダヤ人娼婦に何百ルピーも使った。これも彼の発展期だった。

ラングーンからランダレー北部に広がる密林の野營地キャンプへ回され、今度はチーク材の伐採が仕事になった。不快で、孤独で、それにこれがビルマ生活で一番ひどいものだが、不潔で変わり映えない食事などにもかかわらず、密林での生活も悪くはなかった。当時彼はまだ英雄崇拜に浸れるほど若く、会社には友人もいた。それに狩猟や魚釣りもあり、年に一回くらいは歯医者に行くというロ案で、あわただしくラングーンまで出向くこともできた。ラングーンは面白かった。イギリスから到着した小説を買いにスマートフォン・ムッカードム書店へ行ったこと。米詰めにして八〇〇〇マイルもかなたから取り寄せたピラキやバターを出してくれるアンダーソン亭での食事。あの大酒盛り。まだ若すぎたので、こういう生活を続

けているとどういふことになるかが分かっていかなかった。つまり前方には孤独で単調で人を墮落させる歳月が続いているのが見えなかったのである。

そのうちビルマの風土に慣れた。身体の調子が熱帯での季節変化が持つ奇妙なりズムに合うようになった。毎年二月から五月まで空には太陽が怒れる神のごとくぎらついた。それから突然、季節風が東から吹くと、最初は断続的に激しいスコールが、次いで篠突く雨で着物もベツトも食物さえも靴きそうにないほど、すっかりずぶ濡れになった。それでも暑さに変わりはなく、むっとする湿度の高い暑さであった。密林の低地帯を通っている径は沼に変わり、水田は見渡す限り汚い鼠色の淀んだ水でおおわれた。書物やブーツにはかびが生えた。ビルマ人はシエロの葉で作った一ヤードもある大きな帽子をかぶって、裸で膝まで水につかり、水牛を追って田を耕した。そのあと女、子供が小さな三つ又の熊手で苗を泥の中に押し込むようにして植えた。七月と八月中はほとんど雨がやまなかった。そのうちある晩、空高くで、姿は見えないが鳥が鳴いた。しぎが中央アジアから南方に飛んで行ったのだ。雨はおだやかになつてゆき、十月になるとやんだ。田んぼは干上がり、稲が実った。ビルマの子供たちはゴニソ〔インド原産の熱帯樹〕の種子で石蹴りに似た遊びをし、涼しい風の中で風揚げをした。この季節は、ビルマ奥地がわずかにイギリスの霏囲気を漂わす短い冬の初めだった。イギリスのとそっくりではないにしろ、非常によく似た野生の花が至るところで一斉に咲き出した。繁った藪ではすいかずら、梨のエッセンス入りのあめ玉の香りがする野ばら、暗い森の中ではすみれさえ咲いていた。太陽は空を低く回っていた。夜と早朝は非常に寒く、霧が大きなやかんから出る蒸気のように白く谷間を流れた。人は鴨やしぎ撃ちに出かけた。数え切れないほどのしぎがおり、雁の群れが鉄橋を渡る貨物列車のよな鼻音をあげて、大きな池の中から飛び立った。胸もとくらの高い高さに成長して黄色く実つてゆく稲穂は小麦のように見えた。ビルマ人は頭を布で包み、腕を胸もとで組み、寒さで黄色く縮みあがった顔で仕事に出かけた。朝になると、霧が深く、あたりと不調和な荒地や開墾地を通り抜ける。ずぶ濡れでほとんどイギリスと同じような牧草や、一枚の葉もない木が生えており、上の枝では猿がうずくまって日の出を待っていた。夜、寒い径を通って野営地に戻る途中、水牛の群れが少年たちに追いつかれてゆくのに出会った。大きな角が霧の中で三日月形に浮かび上がっていた。ベツトには毛布を三枚敷き、相も変わらぬ鶏肉ではなく、瓶で仕とめた獲物の肉入りパイを食べた。夕食のあとは大きなかがり火のそばで九犬にすわつて、ビールを飲んだり、狩猟の話をした。焔は真つ赤なひいらぎのように燃え上がり、光の輪を投げかけた。その輪の端に召使や人夫たちがうずくまっていた。彼らは遠慮して白人の中に割り込んでほしかったが、それでもいつの間にか夫のように火ににじり寄つて来ていた。ベツトに横たわっていると、大粒ではあるが穏やかな雨のように露のしたり落ちる音が聞こえた。まだ若く、来し方や行く末のことを思い煩う必要のない間は、それも結構な生活だった。

フロロリーが二十四歳で、帰国許可を受けられるようになった時に、大戦が勃発した。それまでは何とか兵役を避けてきた。当時ならたやすかつたし、当然のことと思われた。ビルマ在住の民間人たちは自分の仕事を見捨てぬことこそ眞の愛国心だという気休めの理屈を振りかざしていた。(英語とはすばらしい言語だ。『見捨てぬ』と言えば、『しがみつくと』というのとずいぶん感じが違う)入隊するために仕事を投げ出す人たちには秘かに敵意さえ抱いた。実を言うと、フロロリーは東洋で暮らしているうちに墮落してしまい、ウイスキーと召使とビルマ女に明け暮れる生活を、退屈な練兵場や残酷な行進の苦痛に変えたくないので、軍隊を避けていたのであった。

戦争は地平線のかなたで吹き荒れているにすぎなかった。危険から遠く離れ暑くてだらけたこの国での生活は、孤独で忘れられた感じだった。フロロリーは読書に取りつかれ、退屈な時は本を読んで暮らすようになった。大人になりかけて、子供じみた遊びには飽きてしまったのだろうか、否応なしに自分でものを考え始めていた。

二十七歳の誕生日は病院で迎えた。全身が見るも恐ろしいほどだされた。いわゆる『泥だれ』であったが、多分ウイスキーとひどい食物が原因だった。その結果、膚に小さなあばたがいくつも残つて二年間消えなかった。急に容貌だけでなく気持ちまで非常に老け込んだ。青春は終わった。八年間の東洋生活、熱病、孤独、常習的な飲酒がその跡を彼に残したのである。

以来毎年、孤独は深く厳しくなつていった。今彼の考えの中心にあつて、すべてを毒しているものは、回りの帝国主義的霏囲気に対して日ごとに強まる憎悪の念であった。誰も自分の頭が発達するのを抑えることはできないが、すでに間違つた生活様式にはまり込んでしまったあとになつて頭が発達し始めるのは、生半可な教育しか受けていない人間の悲劇である。彼も例にもれず、今頃になつてようやく頭が発達し始めたために、イギリス人と大英帝国の本当の姿がやつと分かつたのである。インド帝国は専制政治である。確かに慈悲深い政治ではあるが、専制であり最終目的が窃盗であることに変わりない。『サーヒブ・ロツグ』即ち東洋のイギリスについて言えば、フロロリーはその中で暮らしているうちいつか彼らを強く憎むようになったので、彼らに対して公正な判断をくだすことができなくなつてしまった。彼らだつて一般の白人より悪質とは言え、生活も羨むに足りない。ひどい

給料で外国生活を三十年間おくり、肝臓をこわし、藤椅子にすわっていたために尻がパイナップルのようになって帰国し、二流のクラブにはいつてその鼻つまみ者になるというのは何とも損な話である。一方、『東洋のイギリス人』を理想化してもいけない。『帝国の前哨地』にいる人びとは少なくとも有能で勤勉であるという考えが一般に根深いが、これは幻想である。森林局とか公共土木事業局など科学方面の仕事を除けば、インドにいるイギリスの役人が有能に仕事を片づける必要が特にあるわけでもない。イギリス本国の田舎町で郵便局長を務めている男程度の熱心さと勤勉さで働く役人さえほとんどいないのである。行政面の務めは主として現地人の部下が片づける。専制政治を真に支えているのは、役人ではなく軍隊である。軍隊さえ付けてもらえば、役人や実業家は馬鹿でも何とか無難にやっつけてゆける。実際彼らはほとんど例外なく馬鹿である。上品ぶった馬鹿たちが二十五万の銃剣に守られてその愚鈍さをますます大事に育てているのだ。

住むのが息苦しく馬鹿らしくなり、あらゆる言葉や考えが検閲される世界である。イギリスにいるとそのような雰囲気想像することさえ困難であろう。あちらでは誰もが自由だ。ところがこちらでは皆が公然と魂を売り渡し、そのあと仲間うちでこっそり買い戻している。白人全員が専制機構の畜車になってしまおうと、友情さえ存在しがたくなる。言論の自由など考えられない。もつともその他の自由はすべて許されている。飲んだくれ、怠け、臆病者になり、陰口を利くのは自由である。しかし自分で考える自由はない。少しでも重要な問題に関する意見はみな『まことの紳士法典』によって指令されるのである。

反抗心を隠しているとは病気を隠しているのと同じで、いつかは身体がやられてしまう。生活全体が嘘の塊になる。来る年も来る年もキツプリング（一九〜二〇世紀のインド生まれの英国詩人）かおれの小さなクラブに行き、右にウイスキー、左に『ピンカン』誌を置いて、ここの民族独立論者を油で煮殺せ、とまくしたてるボツジヤー大佐に心から賛意を表明する。友人の東洋人が『油臭いインド野郎』と呼ばれるのを聞けば、おっしやる通り『油臭いインド野郎』だと忠実に認める。学校出たてのまぬけが白髪の召使を蹴とばしている。そのうちに同胞への憎悪が燃え上がり、現地人たちが帝国を血の海に沈めんと蜂起するのを心から願う時がやって来る。このような気持ちは、立派さも誠実さもない。それというのも実は、インド帝国が専制であるうと、インド人がいじめられ搾取されようと、一向に構わないからである。自由な言論の権利が否定されていることだけが気にかかるのだ。専制政治の手先で、犯すべからざる一連のタブーによって、僧侶や未開人以上に強く縛られている『まことの紳士』だからである。

時が経つにつれて、フロリーは『紳士』の世界がますます居心地悪くなり、どのような問題についても、本気でしゃべれば厄介な立場に追い込まれることが多くなってきた。そのため本を読んだり、口には出せないことを秘かに考えたりして、内向的にひっそり暮らすようになった。ボクターとの話でさえ、一種の独り言であった。ボクターはよい男だが、こちらの言いたいことがほとんど理解できなかったからである。しかし本物の生活をこそ送っていると墮落する。生命の流れには従って生きるべきで、逆らうべきではないのである。人目をはばかる不毛の世界で自分を慰めながら黙って独りぼっちで生きるより、「四十年間ずっと」としゃっくり混じりに繰り返す突に頭の悪い『立派な紳士』でいる方がまだしもましだろう。

フロリーはイギリスに帰ったことがなかった。理由はよく分かっているが、説明しようとしてもできなかったろう。初めの頃は偶然の出来事が重なって帰れなかったのである。まず大戦が起こつた。戦後は、熟練社員が非常に不足したので、会社は二年以上もの間、彼をつなぎとめたのである。そのうちついに帰国の旅に出発した。本国を早く見たかった。もつとも、カレーを付けず無精ひげのままできいな娘に会うのを恐れるように、彼はイギリスに帰るのを恐れてもいた。国を出た時はまだ少年だった。恙はあるがハンサムで将来は有望だった。あれから十年経つただけなのに、今ではやせて、黄色く、飲んだくれで、習癖も外観も中年と言つてよかつた。それでもまだイギリスに憧れていた。船は冬の貿易風を受けて、荒打撃のような大海を越えて西に進んでいった。薄かつた血は、上等の食物と海の匂いで活気づいた。ピルマの淀んだ空気の中では忘れていたが、自分にはもう一度出発できるだけの若さがあるのだ、ということを思い出した。文明社会で一年暮らし、『立派な奥様』<sup>ハナ・スミス</sup>などでなく、教養があつて、顔の赤など気にしない女性を見つけ結婚し、もう十年か十五年間ピルマ生活に耐えよう。それから引退するのだ。引退の際、一万二千から一万五千ポンドの金は残しているだろう。片田舎でささやかな一戸建ちを買い、友人、本、子供、動物などに取り囲まれて。そうなれば『立派な紳士』の臭いからは永遠に解放されるだろう。自分を破滅のふちまで追いやつたピルマも忘れられるだろう。

コロンボに着いた時に電報がはいつていた。社員三名が急死、直ちにラングーンに引き返してほしい、できるだけ早い時期にまた帰国許可を与えるから、という内容だった。フロリーは運命を呪いながらもすさまじくラングーン向けの船に乗り、汽車で本部に戻つた。当時はチャタダではなく、奥地の別の町にいた。召使たちが皆ブラットフォームで

待っていた。後任者に彼らを一括して預けていったのだが、その男が死んでしまったのだ。顔なじみの召使たちに再会するのは実に奇妙な気持ちだった。急いでイギリスに向けて旅立ち、もうイギリスにいるような気分に戻っていたのはほんの十日前のことだった。ところが今またこうしてもとの活気のない舞台上に舞い戻ってきた。裸の黒い夫人たちが荷物のごとで言い争いをしており、道路では一人のピルマ人が去勢牛を大声で追いつけていた。

召使たちが彼の回りに集まって、褐色の優しいような顔を並べ、贈物を差し出した。コ・ヌラは大鹿の皮、インド人たちは砂糖菓子とキンセンカの花輪、当時少年だったバ・ベは柳細工の籠に入れたリスだった。牛車か荷物を運ぶために待っていた。フロローリーは首から大きな花輪をぶら下げ、間の抜けた顔で家まで歩いた。寒い季節の夕暮れの光は、黄色くおだやかであった。門では土色の老インド人が小鎌で草を刈っていた。料理人と植木屋の女房たちが、召使部屋の前にひざまずいて、石板の上でカレー粉をひいていた。

フロローリーの心の中で何か覆るものがあつた。人生で大きな変化と退化を意識する瞬間であつた。というのは突然、彼は帰つてきたことを内心喜んでいて自分気づいたからである。今まで憎んでいたこの国が、その瞬間、生地になり故郷になつた。十年間この国で暮らしている間に身体の要素が凡てピルマのものになつていた。黄ばんだ夕暮れの光、草を刈つてる老インド人、牛車の車輪がきしむ音、流れるように飛んでゆく白鷺の群れなどの姿がイギリスより馴じみ深いものになつていた。外国に深い、おそろくは最も深い根を下ろしてしまつたのである。

それ以来、帰国許可を申し出たことさえなかつた。本国では父が亡くなり、次いで母も亡くなつた。どうにも好きになれなかつた氣むずかしい馬面の姉たちは、結婚してほとんど接触がなくなつた。ヨーロッパとの絆は書物だけになつた。イギリスへ帰ることだけが決して孤独の救済法ではないことに気づいたのである。インド在住のイギリス人を持つている地獄がいかにも特異なものがあつたのだ。パーヌヤチエルトナム〔どちらもイングラントの町〕で退屈な話を繰り返しているあの老人たちこそ哀れでみじめな成れの果てなんだ。あの墓のような下宿屋には、インド在住経験のあるイギリス人たちがひしめてひどい生活を送つており、皆一八八八年にボグレイクラフ〔架空のインド地名〕で起こつたことばかり絶えずしゃべつてゐるのだ。氣の毒に、あの手合いは、いやな外国に魂を捨てて帰国したことがどれほど重大なことか思い知らされてゐる。

彼は覺つた。あのような状態に陥らない方法はただ一つ、本氣でピルマでの生活を共にしてくれ、人に隠している内面の生活を共にしてくれ、ピルマを去る時には自分と同じ記憶を持ち帰つてくれるような人を見つけることである。同じようにピルマを憎んでくれる人。何も隠さず、何でも話しながら暮らすのを可能にしてくれる人、自分を理解してくれる人、つまり友達だ。せんに詰めればそういうことになる。

友達だ。それとも妻ならどうだろう。全く鼻持ちならない、あのラツカーステイーン夫人のような女だろうか。カクテルを飲みながら陰口をし、召使にはロウさく、二十年も暮らしていながらこの国の言葉を一言も覺えないあのいまわしい黄色くやせた『奥様』か。神様、あんな女だけはお免ごうあります。

フロローリーは門に寄りかかつた。月は黒い壁のような密林の向こうに隠れかけていたが、夫はまだ吠えていた。ギルバート〔英国のユーモア詩人〕の詩が一節胸に浮かんで来た。俗っぽく馬鹿げた代物だが内容は適切だ。『複雑な精神状態について述べる』という件である。ギルバートは小才のきくやつだった。自分の悩みも結局あの程度だったのか。込み入つた男らしくない泣き言、哀れつぽい小柄な金持娘のぐちだつたのか。自分は現実にはない嘆きをねつ造るために怠惰を利用したぐうたらにすぎなかつたのだろうか。精神的なウイタリー夫人〔デイクレンズ作『ニコラス・ニッケルビー』に登場する典型的俗物〕だつたのか。詩情のないハムレットか。おそろくそうだろう。そうだつたにしても、それは悩みが我慢できるものになつたらうか。ちゃんとした人間に戻れる可能性があるか。自分か。自分が不名誉で全く無益な生活に流され腐つていくのをただ眺めているだけだ。きさまが、おそろく自分のせいだからといって、それだけ悩みが減少することはないのである。

ああ神様、我われを自己憐憫から救い給え。フロローリーはペラソダに戻り、ライフル銃を取り上げ、ちよつとためらつたあと、黄色い野良犬に向かつて発砲した。銃声が響き渡り、銃弾のはがはずれ、広場に突きささつた。打ち身が肩にできた。夫はおびえた鳴き声を上げて逃げ出したが、五〇ヤードほど走つてすわり込み、また調子よく吠え始めた。

朝日が広場を斜めに横切つて、バンガローの白い正面に金箔のようなやまぶき色の光を投げかけた。暗紫色の鳥が四羽舞い降りてきて、ペランダの手すりに止まり、コ・スラがフロリーのベッドのそばに並べたパンとバターを、飛び込んでかつさらおうとねらっていた。フロリーは被帳からはい出し、コ・スラにジンを持つてこいとどなり、浴室に行つて、トタンの浴槽の冷たくもない水にしばらく浸つた。ジンを飲むと少し気分がよくなったので、ひげを剃つた。彼のひげは黒くてすぐ伸びるので、普段は剃るのを夕方まで延ばしていた。

フロリーがむつつりと浴槽にすわり込んでいた頃、ラズレガー氏は寢室に特別に用意した竹マツトの上で下着と半ズボンだけになって、『すわることが多い者のためのノリデンフリヒト式体操』の第五番から九番までに励んでいた。彼は朝の運動を怠けることは減多になかった。第八番の『仰向けに寝て膝を伸ばし足を垂直に持ち上げる』運動は、四十三歳の男には実にこたえた。第九番の『仰向けに寝た姿勢から身体を起こし手の指を足先に触れる』のは一層こたえた。しかしいくらつらからうと身体の調子はたえず整えておかねばならない。身体を足先の方に無理に曲げると、レンガ色の赤味が首から上に広がり、顔が充血して、脳卒中になりそうな気がした。脂肪で太った胸に汗が光つた。頑張れ。頑張れ。何としても身体の調子を保たねば。召使のモハメッド・アリがラズレガー氏の新しい衣服を腕に掛け、半開きのドアの陰から見ていた。アラビア人独特の黄色い細面には、理解の色も好奇の色も浮かんでいなかった。主人がこうして身体をねじ曲げるのは、何か神秘的で厭しい神への折りだと思つていた。彼はこれを毎朝五年間も見てきた。

ウエストフールドは朝早く家を出たので、その時刻にはもう警察にいて、インキで汚れた傷だらけの机に向かつていた。太った警部補が警官二人に監視された容疑者を取り調べていた。容疑者はさえない顔色のおどおどした四十男で、膝までしかないぼろぼろのロンジーをまもつていて、その下から、ひよろ長く点てんにに食われた跡のある曲がつた足が出ていた。

「だれかね、その男は」とウエストフールドが訊いた。

「窃盗犯です。非常に高価なエメラルドが二個付いた指輪を所持していたので逮捕しました。事情を説明しません。貧しい人夫がエメラルドの指輪など持つておりまして。盗品でしょう」

警部補は残忍そうな顔を容疑者に向け、山猫のように顔を相手の間近に寄せ、大声でどなった。

「盗んだものだなっ」

「いいえ」

「常習犯だろう」

「いいえ」

「前科があるな」

「いいえ」

「むこうを向いてかがめ」ふと思いついて警部補は叫んだ。

容疑者は色の悪い苦痛にゆがんだ顔をウエストフールドの方に向けたが、ウエストフールドは目をそらした。二人の警官は彼の身体をつかんでぐるっと回し、背を押えつけた。警部補は容疑者のロンジーをはぎ取つて尻をむき出した。

「この傷跡を見て下さい、警部どの。竹で叩かれた跡です。常習犯ですよ。したがつて指輪も盗品に違いありません」

「分かつた、留置場にほうり込んでおけ」ウエストフールドは、ポケットに手を入れてゆつくり机を離れながら、洗んだ声で言った。彼は内心このような貧しいこそ泥など物留す

るのはいやだった。強盗や反逆者ならよい。しかしおどおどしたこそ泥などほうり込んでどうなるというのだ。「マウン・バ、現在留置場には何人いる？」  
「三人です」

留置場は二階にあり、太さ六インチの木の棧まきを入れた檻おろで、カービン銃を持った警官が一人見張っていた。非常に暗く、息づまるような暑さで、土砂散布式便所だけがあって、鼻持ちならぬ悪臭を放っていた。二人の囚人が棧の近くにすわっていた。もう一人ぼつんと離れているのはインド人の人夫で、鑑鑑かと思えるほど全身輪癖りんへきにおおわれていた。警官の妻のたくましいビルマ女が、檻の外にびざまずいて、しやもじで飯と水つぼい豆をブリキの小皿に盛っていた。

「食事ほうまいか」ウエストフールドは聞いてみた。

「おいしいです、旦那さま」囚人たちは声をそろえて答えた。

政府は囚人の食費を一人一食につきニアナ半支給していたが、この警官の妻がそこからアアうまくくすねていた。

フロローリーは外に出て、雑草をスレッジで土の中に押し込んだりしながら構内をぶらついた。この時間にはまだ何もかも美しく柔かい色に包まれていた。淡彩画のように、木の葉は薄緑、土も木の幹も桃色に近い褐色をしていたが、陽が高くなり光が強くなると、その色も消えるのであった。市場の方では、褐色の小鳩の群れが低く飛んで追いかけており、はちくいは鳥は鮮緑色の体で、のろまなつばめのように飛び回っていた。掃除夫たちが一列に並び、衣服の下にごみを隠すようにして、密林のはずれにあるごみ捨て用の汚らしい穴の方へ歩いて行った。手足は棒さながらで、膝は伸ばすこともできないほど弱く、土色のぼろをまとったみじめな瘦身は、さながら服を着て歩いている骸骨だった。

植木屋が門に近い鳩小屋のそばで、新しく花壇を作るために土を掘り起こしていた。鈍重で間抜けなヒンズーの若者で、今まで他人とはほとんど口を利かない生活を送ってきた。彼のマニアック（ビルマに接するインド北東の地方）方言は、誰にも、ゼルパダイ族出身の彼の妻にも分からなかった。おまげに舌が口の割に大きすぎた。彼は手で顔を隠すようにしてフロローリーに低く敬礼し、また鍬くわを振り上げ、乾いた土を不器用な手つきでのろのろ打ち砕いた。細い背中の筋肉はけいれんしていた。

「キヤーツ」というかん高く耳ざわりな声が召使の詰所から聞こえてきた。コ・スラの妻さいたちが、日課になっている朝の喧嘩を始めたのだ。ネロという名の鬪鷄が胸を張り、フロローリーを胸がってジグザグに小径を歩いてきた。あとからバ・ペが米をボールに入れて出てきた。バ・ペとフロローリーはネロと鳩に米をやった。召使部屋からまた叫び声が聞こえ、争いを止めようとする男たちのしわがれ声もそれに混ざった。コ・スラは自分の妻妾たちにひどく苦しめられていた。本妻マ・ブはやせて人相の悪い女で、たびたび子供を産んだため、骨と皮だけになっていた。『若妻』マ・イは本妻より五、六歳若く、太って無精な女だった。二人は、フロローリーが本部に出かけて自分たちだけになると、たえずつかみ合いをした。一度、マ・ブが竹を持って追っかけてくるので、コ・スラはフロローリーの背に身を隠したことがあったが、その時はフロローリーが足を強く打たれた。

マダレガー氏が太いスレッジを振り動かしながら、足早に大腿で道を登ってきた。カーキ色のターバン布のシャツに綿布製半ズボン、猪狩り用ヘルメット帽という姿であった。体操に加えて、時間が許せば毎朝でも、ニマールほどの速歩をすることにしていたのである。

「おはようございます」と彼は朝の明るい声にアイルランドなまりを込めてフロローリーに挨拶した。彼は、早朝にはいつも冷水浴をしたような気持ちよく爽やかな態度を見せた。それに昨夜読んだ『ビルマ愛国者』紙に載っていた中傷記事で気分を害していたので、それを隠すためにことさら陽気な態度を装っていた。

「おはよう」フロローリーもできるだけ明るく答えた。

お調子ものめ！ 道を登って行くマダレガー氏を見て、フロローリーは心の中で咳いた。カーキ色の細い半ズボンをはくと、やけに尻が突き出てるじやないか。新聞の写真でよく見かけるいやらしい中年ボーイヌカウト隊長と同じだ。やつらは一人残らずホモ野郎だ。おかしな服装をし、太ってくぼみのできた膝まで出して、朝食前の運動が紳士の義務であるからだと？ 胸糞が悪いわい。

ビルマ人が白と赤紫の光をまき散らしながら丘を登ってきた。フロローリーの書記で、教会に近い事務所から来たのだ。門まで来ると合掌礼をし、ビルマ風にたれぶたの先に切手を貼った汚い封筒を差し出した。

「おはようございます」

「おはよう。何だね、それは」

「現地人からの手紙です。けさ着きました。差し出し人の名前はなと思います」

「めんどうなことだな。よし、分かった。十一時頃には事務所へ行くよ」

開封すると、二つ折り大判洋紙に書かれた次のような手紙だった。

拝啓 謹んで貴殿にお知らせ及び御注意申し上げます。この情報は必ず貴殿の御爲になることと思ひます。

貴殿が外科医ベラスロミと御懇意で、たびたび彼を訪問し、貴家に彼を招いておられることはチャウタダでは周知の事実ですが、失礼ながら、あの医者は決して善良な人物ではなく、ヨーロッパの紳士方が友となさるにあざわしくありません。非常に腹黒く、不実で、収賄好きな官吏です。たびたび賄賂を受け取り、金品をゆすり取っているだけでなく、病院の患者には着色した水を与え、薬は外で捌はいています。身内が金を送ってこないと言つて二人の囚人を竹で打ち、傷に唐辛子を擦り込んだことがあります。おまけに彼は民族独立党と関係があり、最近『ビルマ愛国者』紙に掲載された、副総弁務官ワレガ一般を攻撃した非常に悪質な一文の資料を提供しました。

彼は入院中の女患者に関係を強要しています。

従つて貴殿がこの医師ベラスロミを回避せられ、貴殿の名誉を傷つけるだけの人物とは交際なさらぬことを当方は強く望んでおります。

貴殿の健康と繁栄をいつまでもと祈りつづ。

友より

手紙は市場で仕事をしている代書屋の丸っこい震えるような筆跡で書かれており、酔っぱらいの手習いのようなようだった。しかし代書屋は『回避』などという語を知っているはずがなかった。書記が口述したものであろうが、もとはと言えばウ・ポ・チンの手紙に間違ひなかつた。『鱈』の手紙だとフローリーは思った。

手紙の調子が気に入らなかつた。おためごかしの脅迫だ。「ドクターを見殺しにして、でなきやお前をひどい目に合わせるぞ」手紙が言わんとしているのは結局そんなところだった。これがそれほど問題だといふのではなかつた。イギリス人なら誰だつて東洋人が本當に自分に危害を加えるなどとは思つてもない。

フローリーは手紙を手にしてためらつていた。匿名の手紙に対して打つ手は二つ、握りつぶすか、当人に見せるかのどちらかである。公明正大なやり方はベラスロミ先生にこの手紙を見せて思い通りの行動を取らせてやることだろう。

しかしこの件には全く関与しない方が安全であつた。現地人同士の争いには巻き込まれないことが肝要である（おそらく紳士の十戒中最も重要な戒めだろう）。インド人には誠実さや眞の友情を抱いてはならぬ。好意、いや、愛情なら差しつつかえない。実際イギリス人は、現地人の役人や、森林警備隊員、獵師、事務員、召使などにしばしば愛情を抱く。土民兵は連隊長殿が引退すると子供のようになき悲しむ。親交を結ぶことさえ許される。しかし彼らと結託したり徒党を組んでは絶対にいけない。現地人同士の争いの黒白是非を判断することだけでも威信の失墜につながる。この手紙を公にすれば、騒ぎが起き、その筋から調べられるだろう。そうなれば結局、ドクターと組んでウ・ポ・チンに当たるという賭に踏み切つたことになる。ウ・ポ・チンは問題にならぬが、ヨーロッパ人は厄介だ。もしフローリーがドクターと組んでいことがはつきりすれば、ことは非常に面倒になる。手紙など受け取らなかつたことにおく方がはるかによい。

ドクターは確かにいい人だが、白人紳士たち全部の怒りを買つてまで擁護するのはまづらごめん。良心を痛めぬために世間全体の反感を買うようなことをして、一体何の得になるというのだ。フローリーは手紙を引き裂き始めた。手紙を公にする危険など取るに足りない漠然としたものにすぎない。しかしインドでは漠然とした危険こそ気をつけなければならぬ。何よりも大切である威信自体がとらえ所のないものではないか。彼は手紙を用心深く細かに引き裂き、門の外に投げ捨てた。

その時おびえたような悲鳴が聞こえた。コ・スラの妻たちとは全然違う声だった。植木屋が鋸を下ろし、悲鳴が聞こえた方をばかんと眺めた。コ・スラも悲鳴を聞きつけて帽子

もかぶらず召使部屋から走り出てきた。フロリーは急に立ち上がって激しく吠えた。また悲鳴が聞こえた。裏手の密林からで、おびえて叫んでいるらしいイギリス女性の声のようだった。

裏手には出口がなかった。フロリーは門によじ登り、向こう側に飛び降り、とげで膝に怪我をした。彼は敷地の塀を回り、密林に駆け込んだ。フロリーがあとに続いた。建物の真うしろで一番外側の灌木を越えたあたりが狭いくぼ地になっており、真ん中に水たまりがあるので、ニヤウレピン村の方から水牛がよくやって来た。フロリーは灌木を押し分けて進んだ。くぼ地まで行くと、イギリス娘が灌木に背を押しつけ、真つ青な顔をして立ちすくんでおり、水牛が一回、三日月形の角で彼女を脅かしていた。騒ぎの原因らしい長い毛に覆われた子牛がそのうしろにいた。もう一頭の水牛が首まで泥水につかかって、先史時代のおだやかな表情で、何事だろうと言いたげに見ていた。フロリーが近づくと娘は恐怖にゆがんだ顔を向けた。「ねっ、早く、早く助けて。お願い！」恐怖のあまり、怒っている時の息詰まるような調子で叫んだ。

フロリーは驚きのあまり何も聞かずに娘の方に駆け寄り、手ごろな棒もないので、平手で水牛の鼻面はなづらを一発強く叩いた。水牛は大きな体でおずおずと不格好に向きを変え、ゆつくり立ち去った。子牛もあとに続いた。もう一頭の方も泥水からのつり出て行つた。娘は恐怖のあまり抱きつかんばかりに駆け寄つてきた。

「ありがたい、本当に。ああ怖かった。いったい何で動物？ 殺されるかと思つたわ。恐ろしい動物だこと。何ですの、あれ」

「ただの水牛ですよ。上の方の村から来るのです」

「野牛ですか」

「野牛じゃありません。水牛と呼んでいます。ピルマ人が飼っている家畜ですよ。大分脅かされたようですね。お気の毒に」

娘はまだ彼の腕にすがつたままだったので、震えが伝わつてきた。フロリーは娘の方を見下ろしたが、顔は見えず、帽子をかぶつていないので、男の子のように短い金髪のてっぺんだけが目にはいった。彼の腕にすがつている片方の手も見えたが、長細くて若わかしく、手首にはそばかすがあつて女学生の手を思わせた。そのような手を見るのは久しぶりだった。フロリーは、自分に押しつけられている柔かく若わかしい身体と、温かい息を意識し始めた。胸の中で何かが温かく溶けていくような気がした。彼は言った。

「もう大丈夫、水牛は行つてしまいました。恐いことはありませんよ」

娘もようやく恐怖がおさまつてきたのか、少し身体を離し、片手は彼の腕にかけたままと言つた。

「大丈夫です。何でもありません。怪我もしませんでしたわ。牛はこちらの身体には触れませんで。ただ恐ろしそうに見えただけなのです」

「実際は何の危害も加えません。角が随分うしろにありますから、相手を刺すことなどできません。鈍い動物ですよ。子牛を連れてくる時だけ鬮う素振りを見せるのです」

二人の身体はもう離れており、急にどちらもちよつときまり悪い気持ちになつた。フロリーは痣を娘の目から隠そうと、身体を横に向けていた。

「妙な引き合わせですね。どうしてここに來られたのかまだお尋ねしておりませんが。どちらからお越しになつたのかお尋ねしても差しつかえないでしょうか」

「叔父の家の庭からちよつと出てきました、気持ちのいい朝だから散歩でもと思つて。そしたらあの恐ろしそうなのが追つかけてきたのです。この国は全く初めてなものですから」  
「叔父さん？ ああ、なるほどそうですね。ラツカーステイン氏の姪ごさんですね。お越しになることは何つてました。どうです、広場まで参りましょうか。どこかに道があるはずですよ。チャウタダでの最初の朝に、とんだことでしたね。ピルマツてひどいところだと思われたでしょう」

「いいえ、でも何もかも少し変わつてますね。灌木がよく繁つてますこと。どれもからみ合つて異国風ですわ。ちよつとつかかりすると道が分からなくなるとしようね。これが密林というものですか」

「灌木の密林ですよ。ピルマ全体が密林です。緑ばかりのいやな国ですよ。私ならあんな雑草の中は散歩しません。雑草の種子がストッキングにくつついて、膚まで食い込んできま

すからね」  
顔を見られない方が気楽だったので、彼は娘を先に歩かせた。女性にしては背が高い方で、細い身体にライラック色の木綿の上着を着ていた。手足の動きを見てみると、二十歳をそれほど起えていないようだった。顔はまだよく見ていないが、丸いべつ甲の眼鏡をかけ、髪が彼に劣らず短いことは分かつた。髪の短い女性は新聞の写真では見かけたが、目のあ



たりに見るのは初めてだった。

広場に出た時フローリーが肩を並べたので、娘は彼の方に顔を向けた。卵形の顔で、小ざんまり整った目鼻立ちだった。美人とは言えぬにしても、申し合わせたように黄色くやせたビルマ在住イギリヤ婦人の中におくと美人に見えるだろう。痣を見られる恐れもないのに彼は顔を大きく相手からそらせた。やつれた顔を聞近から見られるのには耐えられなかった。目の縁が傷跡のようにたるんでいるのが自分で感じられるような気がした。しかし今朝ひげを剃ってきたのを思い出して、少しは勇気がわいてきた。

「あんなことがあって少し動揺してらっしゃるでしょう。帰る前にちよつと私のところに寄って休んで行かれませんか。それに帽子をかぶらずに外を歩き回る時間じやないですよ」

「ありがたい。じゃあそうさせていただきます。こちらですか、お宅は」彼女にはインド人流のたしなみは分かっていないな、と彼は思った。

「そうです。表の方に回らなければなりません。召使に日傘を用意させましょう。髪が短いと、この日差しは危険ですよ」

二人が庭の小径を歩いて行くと、フローリーが注意を引こうとしてじやれ回った。この犬は初めて会う東洋人には必ず吠えるが、ヨーロッパ人の体臭は好きであった。日差しがますます強くなった。小径のわきに咲いているペチュニアの方から、黒すぐりの芳香が波のように漂ってきた。鳩が一羽舞い降りてきたが、フローリーが飛びかかったので、すぐにまた舞い上がった。フローリーと娘は、言い合わせたように花を見ようと立ち止まった。幸福感がわけもなく二人の胸をよぎった。

「本当に帽子をかぶらずにこんな強い日差しの中に出てはいけませんよ」フローリーはまた繰り返した。なぜか、そう言えば観しみが増すように思えた。どうしても彼女の短い髪にことに触れずにいられなかった。本当に美しい髪だった。言葉で触れるだけで、まるで手で触れるような気がしたのである。

「まあ、膝から血が！ 助けに来て下さった時にお怪我なさったのじゃありません？」と彼女が尋ねた。

少し血が流れたが、もう半乾きで、カーキ色のストッキングに付いて赤黒くなっていた。「何でもありません」と彼は言ったが、その時の二人には決して何でもないことには思えなかった。二人は花のことを奇妙なほど熱を入れて話し始めた。「私は花に『憧れて』います」と娘は言った。フローリーは小径を案内しながら、あれこれ草花のことを雑弁に語った。

「ごらんなきい、このフロックスを。よく繁つてるでしょう。この国じや半年も咲き続けるんですよ。日差しが強いほどよいのです。そちらの黄色い花は色が桜草とよく似てますね。桜草なんて十五年も見てません。ニオイアラセイトウもね。そちらの百日草は見事でしょう。しぶい見事な色具合など絵のようですね。こちらの花はフリカ産のセンジュ菊です。平凡な雑草に近い花ですが、色が非常に鮮やかで強烈だから、つい好きになつてしまいます。インド人もこの花は特に好きなのです。連中がいたところには必ずこれが咲いてますね。密林が広がって人が住んでいた形跡がなくなつても、これだけは何年も咲き続けていますよ。ペラソグの方にいらつしやいませんか。蘭をごらんに入れましょう。黄金の鈴そつくりの花が咲く蘭を育てているのです。せひごらん下さきい。本当に黄金色ですよ。香りも気が遠くなるほど強い蜂蜜の香りです。花だけが、このひどい国の取り柄でしょうね。花にとつては素晴らしい土地なんです。花作りはお好きですか。こんな国にいますと、花作りが一番の慰めです」

「私、本当に花作りには憧れていますよ」

二人はペラソグへ行つた。コ・ヌアは急いでエンジンを着て、取つておきの桃色の絹製ガウンソックスをつけ、ジンヒグラスと煙草を盆に載せ、家の中から現われた。持つてきたものをテーブルに並べ、娘を少し不安そうに眺めたあと、両手をびたり合わせて合掌礼をした。

「朝のこんな時間に酒をお勧めしても無駄だとは思いますが……朝食前にジンを飲まない人もいるのだといくら言つて聞かせても、召使には分らないんです」

コ・ヌアが差し出したジンを片付けるようにと手で合図して、フローリーもその種の人の仲間入りをすることにした。娘はコ・ヌアがペラソグの端に置いた藤椅子に腰を下ろしていた。蘭の黒ずんだ葉と黄金色の花が、彼女を肩ごしにのぞき込んで、強い蜜の香りを放つていた。フローリーはペラソグの手すりにもたれ、斜めに娘の方を向いてほおの痣を隠していた。

「本当に見事な眺めですこと」丘の下に目をやりながら娘が言った。

「すばらしいでしょう、日が昇りきるまでの黄金色の光につつまれた光景は。広場のくすんだ色や、深紅のしたたりを思わせる鳳凰木が私は大好きです。それに地平線の山並み。黒ずんだあの山の向こうが私の野営地です」

娘は遠視だったので、眼鏡をはずして遠くを眺めた。澄みきった青色、いとしゃじんの花より淡い青色の目だった。目のふちの膚は非常にきめが細かく、花びらを思わせた。それを見て彼は自分の年齢とやつれた顔を思い出し、一層彼女の視線から身体をそらし、何か衝動に駆られたように言った。「あのう、あなたのような方にチャウタダへお越しただけで本当に幸運です。お分かりいただけないかも知れませんが、新しく来られた方にお会いすると本当に心楽しくなります。何か月も同じ顔ばかりで、うんざりしてますから。たまたま役人が視察にくるか、世界旅行をしているアメリカ人がカメラをぶら下げてイラワジ河を上がってくるぐらいです。イギリスから直接お越しですか」

「いえ、直接じゃありません。こちらに来るまではパリにいました。母が画家だったものからです」

「パリですって。本当にパリにおられたんですか。パリからチャウタダに！ 驚きましたね。このような穴倉で暮らしていると、パリのような都があるとは信じられませんよ」

「パリはお好きですか」

「見たこともありません。しかし何度夢見てきたことでしょうか。パリと聞けば、カフェ、並木路、アトリエ、ヴァイヨン、ボードレール、モーパッサン……何もかもごちゃやませで胸に浮かんできます。ここでヨーロッパの街の名前を聞けばどんな気持ちになるか、お分かりにはならないでしょう。本当にパリですか。絵を勉強している外人とカフェで腰を下ろし、白葡萄酒を飲みながらマルセル・ブルーストを語り……」

「まあ、そんなところね」娘は笑って相づちを打った

「ここでの生活はまるつきり違いますよ。ここじや白葡萄酒とマルセル・ブルーストどころか、ウイスキーとエドガー・ウオラス〔英国の大衆小説家〕でしょうね。本をお望みでしたら私も持ってます。好きな本をお読み下さい。クラフの図書室にあるのはくだらぬものばかりです。と言っても私だって本に関しては何となく遅れです。たいていはお読みでしょうね」

「とんでもありません。でも私って本には憧れてますのよ」

「本が好きなお会いできたなんて。それも、クラフにあるくだらぬ本じゃなく、立派な本が好きなお方にね。お許し下さい、私ばかり話して、本の存在を知っている人にお会いすると、言葉がどつとあふれるのです、暖かいビールびんが破裂するような具合に。こんな所にいるとそうなります。大目に見て下さい」

「あら、私も本のお話は好きですわ。書物って本当にすばらしいと思えますもの。いえ、書物のない人生なんて考えられませんわ。何と言いますか、本当に……」

「孤独な魂が逃げ込むところですね、確かに」

話題はつきなかつた。熱のこもった会話が書物から狩猟のことに移った。娘はこの話題に興味を示し、フロローリーに狩猟の話が続けさせようとした。フロローリーが数年前に象を殺した模様を述べると、娘は胸を躍らせて聞き入った。彼が一方的にしやべっているというところに、本人はもちろん、相手も気づいていなかったろう。語るのがあまり楽しいので、フロローリーは自分を抑えることができなかつた。それに娘は聞く気持ちになつていく。何といても水牛から殺つてやつたのだ。彼女は今なお、あの恐ろしい動物が危害を加えないとは信じられなかつた。今の彼女の目には彼が英雄に映つた。人生で人の信頼を得るのは、たいてい本人の知らぬ行爲によるものだ。今のような場合は会話が楽に自然に流れ、いつまでも話し続けることができそうだった。しかし急に楽しい気持ちが消え、ぎくつとして二人はだまり込んだ。人の気配に気づいたのである。

向かい側にある手すりの間から、大きな口ひげを生やした真っ黒な顔が、強い好奇の目でのぞいていた。気取り屋のコック、サミー爺さんの顔だった。うしろには、マ・プロピヤ、イ、コ・ヌラの上の四人の子供たち、どこの子か分からぬ裸の子、それに『イギリス娘』が見られると聞いて村からやってきた二人の老婆まで集まつていた。オーファートほどもある葉巻をくわえ、チーク材の木像のような顔で二人の老婆は『イギリス娘』に目を見張っていた。ちやうどイギリスの田舎者が勲章を飾り立てたズール一族〔南アフリカの一民族〕の戦士でも見るような目だった。

「まあ、あの人たちつたら」娘はそちらに目をやりながら不快そうに言った。

サミーは、見つかったと知ってはつとうなだれ、ターパンを直すふりをした。木像のように無表情な二人の老婆以外は残りの者もみな少しだじろいだ。「ずうずうしいやつらめ」とフローリーが言った。強い失望が胸を貫いた。いずれにしろ、娘をこれ以上ペランダに引きとめておいてもどうにもならない。二人は同時に相手の名前さえ知らない他人同士であることを思い出した。娘は少し顔を赤らめ、眼鏡をかけた。

「あの連中にはイギリスのお嬢さんが珍しいのでしよう。悪気はないんです。おい、あつちへ行かんか」彼は怒って連中を手で追いかつた。一同はすぐに消えた。

「あの、勝手ですが、もうおいとまさせていただきますわ。ほんとに長居してしまって、家の者は、一体どこに行つたのかと思つてることでしょう」と言つて娘はもう立ち上がった。

「本当にお帰りでですか。まだ早いでしょう。帽子かなにか用意させますから」

「でも本当にもう……」

言いかけた言葉を切つて彼女は戸口の方を見た。マ・ラ・メーがペランダに出てくるところだった。

マ・ラ・メーは片手を腰に当てて近づいてきた。自分にはここに来る権利があるのだと言わんばかりに落ち着き払つて出てきた。二人の娘はフロントも離れずに向かい合った。これほど奇妙な対照はなかつた。一方はりんごの花を思わせる淡い膚色、もう一方は黒くてげげげげしく、漆黒で筒状の髪は金属のように光り、ロンジーはサーモンピンクの絹だった。マ・ラ・メーの顔が真っ黒で、細く硬そうで兵士のようにぎくしゃくした身体がいかにも異国的で、曲線と言えば花瓶形の腰もただけだということに、フローリーは初めて気づいたような気がした。彼は完全に無視されたかたちで、ペランダの手すりにもたれて二人を見ていた。たつぷり一分間はどちらの娘も相手から目を離さなかつた。どちらの方が相手を奇妙で異様な姿だと思つたのかは分からない。

マ・ラ・メーは、鉛筆で引いたように細く黒いまゆを寄せ、相手からそらした顔をフローリーの方に向け、むつつり声で聞きたでした。

「だれ？ この女」

フローリーは召使に命令するようなさりげない口調で答えた。

「今すぐ消えうせろ。少しでも騒ぎ立てたら、あとであれば骨が全部折れるくらい竹で叩くぞ」

マ・ラ・メーはためらい、小さな肩をすくめて立ち去つた。残つた方の娘は去つて行く娘の背をじつと見送り、好奇心に駆られて聞いた。

「あれ男？ 女？」

「女ですよ。召使の妻です。いえ、ただ洗濯もののを聞きにきたんです」

「まあ、ビルマ女つてあんな姿なの。変な姿ね、こちらへ来る列車の中でも随分見かけましたわ。実を言えば、男の子だとばかり思つてました。オランダ人形そっくりですわね」彼女は姿を消したマ・ラ・メーにはもう興味がなくなつて、ペランダの階段の方へ向かつた。フローリーは彼女を止めなかつた。マ・ラ・メーが引き返してきて、ひと騒ぎ起こすことも考えられたからである。もつともそうなんでも大した問題にはならなかつただろう。どちらの娘も相手の言葉はちんぷんかんぷんだったから。フローリーはコ・スラを呼んだ。コ・スラは、油引きの絹張りで柄が竹の大きな傘を持つて駆けてきて、階段の下でうやうやしくそれを聞き降りてくる娘に差し掛けた。フローリーも門まで送つていった。門のところまで立ち止まつて、二人は握手を交したが、フローリーの方は強い光の中で身体を少し斜めにして痣を相手から隠した。

「この男に家まで送らせます。お立ち寄りいただいて本当にありがとう。お会いできたことを心から喜んでいきます。あなたがお越しになつて、チャウタダの町も随分楽しくなるでしょう」

「では失礼いたします……あら大変、まだお名前も伺つてませんわ」

「フローリーです。ジョン・フローリー。お嬢さんは？ ラッカーステインさんですわ」

「ええ、エリザベス・ラッカーステインです。では失礼いたします。フローリーさま。本当にありがとうございました。恐ろしい水牛だったこと。本当にあなたは生命の恩人です

わ」

「何でもありませんよ。今晚クラブでお会いできるといいですね。叔父さん叔母さんもクラブに行かれるのでしよう。じゃまたその時に」

彼は門のところ立って、去って行く二人を見送っていた。エリザベスさんか。可愛い名前だな。近頃は臧多に出くわさない名前だ。ザの綴りがZであるといいんだが。コ・スラは彼女のうしろから傘を差し掛け、できるだけ身体を離して歩いたので、不格好で歩きにくそうだった。涼しい風が丘を吹き上がってきた。ビルマでは寒い季節に時どき吹き抜けてゆく風で、どこからともなく吹いてきて、冷たい海溝や、人魚の抱擁、滝や氷の洞窟などへの憧れと郷愁を胸一杯に広げてくれる風だった。風は鳳凰木の枝の大ドームをくぐり抜け、フローリーが半時間ほど前に門越しに投げ捨てた手紙の断片を吹き散らしながら通り抜けていった。

エリザベスはラッカースティーン家の客間でソフナーにすわり、足を上げ、頭にクッションをあてて、ライケル・ブーレンの『この魅力的な人びと』を読んでいた。ライケル・ブーレンは何とお気に入りの作家であったが、本格的なものを読みたい時には、ウイリアム・J・ロツクの方を好んだ。客間は厚さ一ヤードの石灰塗りの壁で、涼しく色調が軽い部屋であった。実際は広いのだが、狭く見えた。臨時テールやペナレス産の真鍮装飾品が散らかっているためであった。厚地サラサと枯れかかった花の匂いがした。

ラッカースティーン夫人は二階で眠っていた。外の召使部屋では、召使たちが木枕に頭を寄せて死んだように昼寝をしていた。ラッカースティーン氏も、道路を下ったところにある木造りの狭い事務所において、多分眠っていることだろう。エリザベスとポニー以外は誰も動いていなかった。ポニーはラッカースティーン夫人の寝室の外で仰向けになってローアの輪に一方のかかとをかけ、椰子の葉で作った揺りうちわを動かしていた。

エリザベスは二十二歳になったばかりで孤児だった。父は叔父のトムほど飲んだくれではなかったが、よく似たタイプだった。お茶の仲買人で財産は大きくふくらんだが、もともと非常に楽観的な氣質であったので、儲かっている時に貯えておくことができなかつた。母は無能で世間知らずでほら吹きで自己憐憫の強い女で、ありもしない感受性を口実にして、生活上当然の義務を一切避けていた。婦人参政権や高等思想をいじくり回して何年もつぶし、文学を手がけて何度も失敗を繰り返して、あげくの果てに絵画にまで手を出した。絵画は才能や努力なしにやれる唯一の芸術である。ラッカースティーン夫人は、当然ながら彼女の夫を始めとする教養のない俗物どもの中へ投げ込まれた芸術家を氣取つた。このポーズで彼女は完全な厄介者になった。

大戦の最後の年、それまで兵役を何とかうまく避けてきたラッカースティーン氏が大金をつかんだ。終戦の直後、夫妻はハイグイト〔ロンドンの高級住宅地〕にある広大で真新しいが、ややものさびしい邸宅に移つた。温室、灌木、馬小屋、テニスコートなどがいくつもついていていた。ラッカースティーン氏は召使をたくさん雇い入れた。実に楽天的だったので、召使頭まで雇つた。エリザベスは二学期間、非常に授業料の高い寄宿学校へやつてもらつた。ああ、あの大きな喜び、あの二学期間の忘れがたい喜びと云つたら！生徒のうち四人は貴族の出であつた。ほとんど全員が自分の小馬を持っており、土曜の午後、乗馬が許されていた。誰の人生にも性格が永遠に決定してしまう短い時期がある。エリザベスの場合は、金持ちの子弟と交際したあの二学期間であつた。その後、彼女の生活信条は唯一の簡潔な信念に要約された。(彼女が『すてきな』ものと呼んでいた)喜きものとは、高価なもの、上品なもの、貴族的なものと同義語である。(『けがらわしい』)悪しきものとは、安価なもの、低俗なもの、みずぼらしいもの、骨の折れるものであつた。費用のかかる女子校が存在するのは、おそらくこの信条を教えるためであらう。この気持ちは彼女が成長するにつれてますます強くなり、考え方全体に行き渡つた。靴下から魂まであらゆるものが、『すてきな』ものと『けがらわしい』ものに分けられた。ラッカースティーン氏の繁栄は続かなかつたので、彼女の生活を支配したのは残念ながら『けがらわしい』ものばかりであつた。

一九一九年の暮れに、抜き差しならない破滅がおとずれた。その学校をやむなく退学し、安くつげがらわしい学校を転々とした。それも、父親が授業料を払えない時には、一学期か二学期の空白が何度もできた。彼女が二十歳になつた時父親が死んだ。インフルエンザだつた。ラッカースティーン夫人には五〇ポンドの年収が残された。それは彼女が死ぬまで保証されていた。夫人のやりくりでは、女二人がイギリスで週三ポンドでは暮らせなかつた。二人はパリに移つた。パリなら生活費はもつと安いし、夫人は芸術に全面的にうち込みたいと思つていたのである。

パリで暮らすなんて。フロローリーはプラタナスの緑蔭でひげ面の芸術家と交わす果てしない会話を想像したが、これは少し的はずれであつた。エリザベスのパリ生活はそんなものではなかつた。彼女の母はモンパルナス地区にアトリエを借り、すぐにむさくしくごたごたした怠惰な生活に落ち込んだ。金のことには頭が働かず、収入が支出に追いつく状態ではなかつた。数ヵ月間、エリザベスは食べるものも十分になかつた。それから彼女は、フランス人の銀行支配人の家へ家庭教師として英語を教えに行くようになった。家の人たちは彼女のことを『我らのイギリス婦人』と呼んだ。銀行家はモンパルナスから遠い十二番区に住んでいたので、エリザベスは近くの下宿屋に部屋を借りた。下宿屋は裏通りにある狭く

で陰気な感じの家で、野豚の臭い死体を一面につるした鳥肉屋に面していた。この鳥肉屋には、よぼよぼのサチロス〔ギリシア神話に出てくる半人半獣の森の神で、酒と女が大好き物〕のような老紳士たちが毎朝おとずれ、長い間なめ回さんばかりにその臭いを嗅いでいった。鳥肉屋の隣りには、『友情のカフェー、極上ビール』という看板を掲げた汚い食堂があった。

エリザベスはこの下宿屋が我慢ならなかった。女主人は、下宿人が手洗い鉢で靴下を洗う現場をおさえようと思つて、階段を爪先立ちで昇り降りするようなまねを生涯繰り返してきた、黒服の卑しい婆さんであった。辛辣な言葉づかいで不機嫌な同宿の未亡人たちは、この家で唯一の男性、ラ・サンワリテームで働いている温厚なはげ頭の男を、パンくずをつき回す雀のようにしつこく追いかけて回した。食事時には、誰が一番量が多いかとお互いの皿を見合つた。浴室はうるこ米の壁に囲まれ、暗い穴蔵みたいで、浴槽に生ぬるい湯を二インチほどそいだあととは頃として言うことを聞かなくなる、ぐらぐらの湯沸かし器が付いていたが、緑青に覆われていた。

エリザベスに子供たちを教えるもらつてはいる銀行の支配人は疲れたような丸顔の五十男で、はげ頭のでつぺんは黒ずんだ黄色で、駝鳥の卵みたいだった。この男は、彼女が到着した次の日に子供たちが勉強している部屋にはいつて来て、エリザベスのそばにすわり、すぐさままひをつねりにきた。三日目にはふくらまはぎをつねり、四日目には膝のうしろを、五日目には膝の上の方をつねった。その後毎日、二人の間には沈黙の闘いが繰り返された。彼女は手を机の下にやり、相手の白いたちのような手を払い除けようと懸命に頑張つた。

下劣だけがらわしい生活だった。実際エリザベスは以前その存在すら知らなかつたほど『けがらわしい』ところまで落ちてしまつた。しかし彼女を最も落胆させ、恐ろしい下層世界に沈んで行く気持ちでいつばいにさせたのは、母親のアトリエだった。ラウカーステイン夫人は召使を奪われると完全に参つてしまうタイゾの女だった。絵画と家事にはさまざまれ、落ち着かない悪夢のような毎日を過ごし、どちらにも精を出さなかつた。時どき思い出したように『絵画教室』に出かけては、『わいせつ画』に技術の基礎を置いている先生の指導のもとで、さえない静物画を製作した。その他の時は、茶びんとフライパン相手に家で下手な家事にいそしんだ。アトリエは、エリザベスには気が滅入るどころではなく、邪魔で悪魔的だった。うすら寒く汚い豚小屋に似て、床一面に本の山や紙切れが散らかつており、新田さままで油だらけのジチエー鍋がさびついたガスストーブの上にかけてつばなになつており、ベッドは午後まで乱れたままで、うっかり歩くと踏んだり蹴ったりしそうなところに、やたらに絵の具で汚れたテレビン油の罐とか、冷えたメーブルソップが半分くらい残つたポットが置かれていた。椅子のクッションを持ち上げると、下にはゆで卵の残りがはいつている皿があつた。エリザベスはいつも部屋にはいつたとたん悲鳴を上げていた。

「まあ、お母さんつたら本当にどうしてこんなまねができるの。この部屋、こんな暮らし方、本当に恐ろしいわ」

「お前、部屋がどうしたつて？ 散らかつてる？」

「散らかつてるどころじゃなくつてよ。お母さん、ベッドの真ん中にオートミールがゆの皿を置いてく必要があるの？ それにあの手鍋。本当にぞつとするわ。だれかがはいつてきたらどうするんです？」

少しでも仕事が生じるとラウカーステイン夫人がわざと浮かべて見せる、我を忘れて別世界にいるような色がこのような時にはいつもその目に浮かんだ。

「母さんの友達だつたらだれもそんなことは気にしません。徹底した放浪者よ、私たち芸術家は、私たちがみな絵にどれだけ心を奪われているかはお前なんかに分りません。お前には芸術的気質などないんですよ」

「とにかくこの手鍋は私が洗います。お母さんがこんな暮らし方をしていると考えるだけで我慢なりません。たわしはどこ？」

「たわし、そうね、えーと、どこかで見ただわ。ああそうだ。きのうパレットを洗うのに使つたんだわ。でもテレビン油でよく洗えばたぶん大丈夫よ」

ラウカーステイン夫人は腰を下ろし、クレヨンでスケッチ帳を汚していた。

「いい娘だね、お前つて。よく働いて。だからそんな才能を受け継いだのやら。母さんには芸術だけが文字通りすべてなの。芸術が私の身体の中から大波のようにわき上がつてくるのが、本当に感じられるみたいだわ。その波が卑しくけちなことは全部、沈め消してくれるのよ。きのうは皿洗いで時間をむだにするのを避けるため、『ナッツ・マガジン』誌を受け皿代わりにして昼食をとつたの。すばらしい思いつきだつたわ。きれいな皿がほしければ、一枚破り取つたらいいのよ」万事がこの調子だった。

エリザベスはパリに友人がいなかった。母の友人といえば、同じような女か、でなければ低収入で暮らし、木坂を彫ったり、磁器に絵を描くようならぬ芸術まがいの仕事をしている無能な独身の中年男たちであった。そのほかにエリザベスが見かける連中といえ、外人だけでは皆きらいだった。少なくとも外国の男は皆安っぽい服を着て不愉快なテーブルマナーを見せるのできらいだった。当時、一つだけ大きな慰めがあった。シリゼー通りにあるアメリカ図書館へ行って、写真入りの新聞に目を通すことだった。時どき日曜日や仕事のない午後などには、大きなびかびかのテーブルに何時間もすわって、『スケッチ』『タトラー』『ゲラフイック』『スポーティング・アンド・ドラフティック』などの各紙を読みながら夢想にふけた。

そこには実に楽しい写真が載っていた。『パロウティーン卿のウオリックシャーにある大邸宅、チャールトン・ホールの芝生で行われた獵犬大会』、『この夏、クラフトの獵犬大会で二等になったすばらしいドイツ・シエパード犬、クビライカンを連れて公園を散歩されるタイクボウルビイ閣下夫人』、『カソヌの日光浴。左から、パーバラ・ピルグリック嬢、エドワード・チエーク卿、パメラ・ウエストローブ夫人、タビイ・ベナカー大尉』

本当にすばらしい世界だ。昔の同級生の顔が紙上からエリザベスを見つめていることが二度あった。それを見ると彼女の胸は痛んだ。かつての同級生は皆あの世界で馬や自動車を乗り回し、騎兵と結婚している。一方彼女はこんなところにおいて、ひどい仕事、ひどい下宿屋、ひどい母親に縛られている。本当に逃げ出せないのだろうか。二度とあのまもな世界に帰るあてもなく、永遠にこの汚い卑俗な世界に縛られているのが自分の宿命だろうか。

目の前に母親という見せしめがあったのだから、彼女が芸術に健全な嫌悪感を抱いたのも不思議ではなかった。それどころか、彼女に言わせると、いわゆる『頭でっかち』ということになる知性の過剰まで『けがらわしい』ものの中にはいるような気がした。雷鳥を射ち、アスコット〔競馬場がある〕へ行き、カウズでヨット競走をする本物の人物、まともな人びとは頭でっかちではないように思えた。あの人たちは本を書いたり、絵筆をいじくるような馬鹿げたことに熱中しない。社会主義だとか何だとかいった知識人ぶった考えは一切追いやめない。彼女にとつて『知識人』というのは、にがにがしい言葉であった。一、二度、銀行や保険会社に身を売るよりは一生文無しで頑張りたいたいという本物の芸術家にたまたま出会った時、母など遊び半分の中よりはるかにその方を軽蔑したものだ。一人の男が健全でちゃんとしたことだから故意に背を向け、何の得にもならないくだらぬことの犠牲になるのは、恥ずべき墮落した悪であった。彼女は未婚で終わることを恐れたが、何回生まれ変わろうと、そんな男と結婚するより生涯独身に耐える方がまだましだと思つていった。

パリに来てほぼ二年経った時、母がブトライン中毒で急死した。もつと早く死ななかつたのが不思議なくらいであった。エリザベスには一〇〇ポンドに少し足りない程度の金だけが残された。彼女の叔父と叔母が直ちにピルマから電報で、私たちのところに来なさい、あとから手紙を出します、と云つてきた。

叔母のラツカーズティーン夫人はペンを口にくわえ、考え深い蛇のような三角形の細面で便箋を見下ろして、しばらく手紙の文面を考えていた。

「とにかく一年ぐらいはあの子をここに置いてかねばならないでしょうね。本当にうんざりだわ。だけど、ちよつとは見栄えのする顔をしてたら、たいてい一年も経たぬうちに結婚してしまいます。トム、どう言つてやりましょうか」

「どう言うかだつて、本国よりはるかに簡単に亭主が見つかるでも言つてやればよい。まあ、そんなところだろう」

「まあ、トムったら。何ていやなことを言うんです」

ラツカーズティーン夫人は次のように書いた。

もちろんここはとても小さな駐屯地で、おまけに私たちはたいてい密林のほうにいます。パリでいろいろ楽しんだあとでは、恐ろしく退屈することでしょう。でも実際このような小さな駐屯地にも年頃の娘には好都合な点が幾つかあります。当地の女王になれます。未婚の男性は寂しがつてるので、女性が仲間入りするのを心から有難がるのです。

エリザベスは夏用のドレスを買うのに三〇ポンドを使い、すぐに出航した。船は身をくねらせながら進むイルカの群れに先導され、地中海の波を切つて進む、スエズ運河を通つ

て、目に痛いほどの藤色をした海にはいり、やがて波が荒い緑のインド洋に達した。飛魚ヒコウイサの群れが、近づいてくる船を恐れて海面をかすめるように飛んでいった。夜の海原は磷光を發し、船首が起こす波のうねりは緑色の光を放って飛んでいく矢じりだった。エリザベスには船上の生活が『すてき』だった。夜の甲板でダンスをするのが好きだったし、男性の乗客が皆おどりがっているようであるカクテルや、甲板でやる数かずのゲームも好きだった。もつとも彼女も他の若者たち同様、しばらくするとゲームには飽きてしまった。母の死後二ヵ月しか経っていないことなどは何でもなかった。それに乗客は彼女のことなど何も知らなかった。下卑た生活を二年送ったあと、再びこうして金持になったような雰囲気を楽しむのは大層すばらしいことだった。この人びとがたいたいは金持だからというのではなく、船上ではだれもが金持ちのように振舞うからだった。インドも大好きになるだろう。船客の話聞いて、彼女はインドのすばらしい姿を胸に描いていた。「イーダル・アオー（こつちへ来い）」「ジャルディー（早く）」「サーヒブ・ローグ（主人たち）」などヒンズスタン語の重要語句をいくつか覚えてしまった。パタパタと動く椰子の葉製の揺りうちわ、うやうやしく額手礼をするはだして白いターバンを巻いた少年など、クラブの心地よい雰囲気や、口ひげを短く刈り込み青銅色をしたイギリス人たちがポロのボールを打ちながら、馬を疾駆させている広場などを想像しては楽しいだ。インドの暮らしは本当の金持ちになるのに劣らぬほどすばらしい。

鏡のような緑の海原を航行してコロンポに入港した。あたりの水面では亀と黒蛇が目を浴びながら泳ぎ回っていた。サンパン〔中国などの伝馬船〕の一群が先を争って船の方にやってきた。唇をキンワ汁で血より赤く染めた鼻つ黒な男たちが漕いでいた。男たちは船客が降りる間、渡し板の回りで叫んだり争ったりしていた。エリザベスと友人たちが降りてくると、サンパンの船頭が二人それぞれ船首を渡し板の方に向け、大声を上げて客引きをした。

「あの男のサンパンに乗ってはいけません、お嬢さん。あいつは悪目ですよ。あいつは悪いやつで、お嬢さんを乗せる柄ではありません」

「あいつの嘘を聞いてはいけませんよ、お嬢さん。胸糞の悪い卑しい奴です。性の悪い卑劣なごまかしをやっているんだ。いやらしいこの土地特有のごまかしをね」

「お前ら二人、馬鹿騒ぎはやめろ。やめないと、どちらか蹴とばすぞ」とエリザベスの友人の夫が言った。彼は農園主だった。三人は一方のサンパンに乗り移って、光がまぶしい波止場の方に向かった。客引きに成功した方の船頭は振り向いて、長い間口いっばいに貯めていたらしいつばを相手に吐きかけた。

これが東洋だ。ココナツ油、びやくだんの木、肉桂、うこんなどの香りが、暑く流れる空気に乗って水面を漂ってきた。友人がラビニア山へ車で彼女を連れて行ってくれた。彼女たちはコココーラのようにあわ立つ生ぬるい海で泳いだ。彼女は夕方船に戻り、友人たちは一週間後にラングーンに着いた。

ラングール北方に広がる乾ききった平原を、木を燃料にしている汽車が時速一ニマイルでのろのろ走って行った。平原の果てには丘陵が青く連なっていた。大白鷺が青鷺のように空中で静止しており、乾燥中の唐辛子の山は陽を受けて鼻つ赤であった。時どき白いパゴダが仰向けに寝た大女の乳房のように平原からそびえ立っていた。熱帯の夜は訪れるのが早く、汽車は揺れながらゆっくり進み、野蛮な大声が暗闇から聞こえてくる小さな駅で何度も停車した。髪をうしろで結んだ半裸の男たちがたいまつを明りを受けて、エリザベスの目には悪魔のように恐ろしい姿で動き回っていた。汽車は森林にはいり、目には見えない木の枝が窓をかすめた。チャウタダに着いたのは九時頃で、叔父と叔母がワグレガー氏の車で迎えに来ており、たいまつを持った召使も数人いた。叔母が進み出て、とかげのような細い手でエリザベスの肩をつかんだ。

「姪のエリザベスね。お会いできて本当にうれしいわ」と言っただけでキスをした。  
ラツカーズテイーン氏はたいまつを頼りに妻の肩越しにのぞき、軽く口笛を吹いて叫んだ。

「ほう、これは」それからエリザベスを抱いてキスをしたが、それには不必要なほどの熱がこもっているとエリザベスは思った。叔父夫妻に会ったのは今度が初めてだった。夕食後、客間の揺りうちわの下でエリザベスと叔母は話した。ラツカーズテイーン氏は庭を散歩していた。ラングールの木の匂いを楽しむのだとおっしゃっていたが、実際は召使の一人が裏口から差し入れた酒をこっそり飲むためだった。

「まあ、美しいわね。もう一度顔を見せてちょうだい」と言っただけで叔母は彼女の肩に手を置いた。

「イー-ton風の短髪が本当によく似合うわ。パリでその髪型にしてもらったの？」



「ええ、イートン刈りが流行しました。頭が小さめの者には似合います」

「可愛いこと。それにベツ甲の眼鏡だつて。よく似合う流行スタイルね。南アメリカの……あのう……水商売の女性が皆そのような眼鏡をかけるようになったそうですよ。こんな愛くるしい美人の姪がいるなんて知りませんでした。いくつだつて言いました？」

「二十二です」

「二十二ですつて。あすクラブにあなたを連れていったら、男の人は皆どれほど喜ぶことでしょう。新しい仲間に加多に会わないので、可哀そうに皆本当に寂しがつています。丸二年間もパリにいたんでしよう。これほどの美人を独身でほうっておくなんて、パリの男たちは何をしてたんでしようね」

「男の人にはあまり会いませんでした。外人だけです。ひっそりと暮らさなければならなかつたのです。それに私は働いてましたし……」と不名誉なことを告白するような口調でつけ加えた。

「そうでしょうとも、分かるわ」とラツカーステイン夫人はため息まじりに応じた。「どこでも同じことを聞きます。美しい娘が生活のために働かねばならないという話をね。本当に恥ずかしいことですわ。相手を探している貧しい娘がこんななたくさんいるというのに、男の人が独身でいるなんて、すごく利己的だわ、そうじゃないかしら」

エリザベスが答えないので、ラツカーステイン夫人はもう一度ため息をついてつけ加えた。「私が娘だつたら、誰とでも、文字通り誰とでも結婚するわ、絶対に」

二人の目が合った。ラツカーステイン夫人には言いたいことがいっぱいあつたが、今は遠回しに暗示するだけにしておくつもりだつた。彼女の話は大半が暗示だつた。しかしながら、全般的には自分の意向をかなり明瞭に伝えようと骨折つた。彼女は一般的な話題を論じるように、ややさりげない調子で話した。

「もちろん、これは言っておかねばなりません。女の子が結婚できないのは、本人のせいだという場合があります。当地でも時どきそのようなことがあります。つい最近の例を覚えてます。ある娘がやつてきて兄さんのもとにまる一年いました。その娘は警官、森林関係の役人、将来有望な材木会社の社員など、いろいろな男性に求婚されました。それを全部断つてしまったの。聞いたところでは、彼女はインド文官と結婚したかつたそうよ。それでどうなつたと思います？ もちろん、兄さんもいつまでも妹を自分のもとに置いておけなかつたわ。今じゃ可哀そうに本国で家政婦として働いているそうよ。召使と同じことだわ。たつた十五シリソングの週給ですつて。そんなこと考えただけで恐ろしいでしょう」

「恐ろしいわ」とエリザベスはおうむ返しに答えた。

この話題はそれで打ち切られた。朝、フロローリーの家から戻つたあと、エリザベスは叔父夫妻に自分の冒険のことを説明していた。三人は花を生けたテーブルで朝食をとつており、揺りうちわが頭上でばたばた動き、白いスーツとターバンを身に付けた煙突のように背の高いマホメット教徒の召使頭が盆を手にラツカーステイン夫人のうしろに立つていた。

「それにねえ、叔母さま、大変おもしろかつたわ。ビルマ娘がペラソグダにきたの。今までビルマ娘は見たことがなかつたわ。少なくとも娘かどうか分からなかつたんです。本当に奇妙な小娘だつたわ。黄色い丸顔で黒髪を上の方でねじるように結わえていたので人形そっくりだつたわ。十七歳くらいにしか見えませんでした。フロローリーさんは自分の洗濯女だと言つてましたがい」

インド人召使頭の長身がこわばつた。彼は黒い顔の大きな白眼で彼女の方を斜めに見下ろした。彼は英語がよくできた。ラツカーステイン氏はフオーケー杯の魚を皿から途中で持ち上げ、鈍感そうな口を開けたまま手を止めた。

「洗濯女？」と彼は言つた。「洗濯女だと、馬鹿な。何かの間違ひだ。この国じゃ洗濯女なんてものはいないんだぜ。洗濯は男がするんだよ。教えてやろうか、実はな……」

その時、だれかがテーブルの下で彼の足先を踏んだのか、彼は急にだまり込んだ。

その夜フローリーは、インド人の床屋を呼びにやれとコ・スラに命じた。この町で床屋といえばその男だけだった。彼は月ヘアナで隔日にインド人夫を相手にひげ剃りをして生計を立てていた。ほかに床屋がないので、ヨーロッパ人も彼に剃らせていた。フローリーがチニスから戻ると、床屋はペラソダで待つていた。フローリーは鉢を熱湯とコンディ液で消毒したあと、髪を刈らせた。

「コ・スラ、一番上等のバーム・ビーチ織夏服を出しておいてくれ。絹のシャツ、大鹿皮の靴、先週ラングーンから送ってきた新しいネクタイもな」

「もう出してあります。旦那さま」とコ・スラは答えたが、それはこれから出しますという意味だった。フローリーが寝室にはいつて行くと、コ・スラは服を取りそろえ、仏頂面で待つていた。明らかにコ・スラは、フローリーが（エリザベスに会えると思つて）着飾るうとして知っていることを知っており、そのことに反対しているようであった。

「何を待つているんだ」

「着替えをお手伝いしようと思ひまして」

「きようは自分でやるから、下がっていい」

朝剃ったひげをもう一度剃るつもりだったが、ひげ剃り道具を浴室に持ち込むところをコ・スラに見られたくなかつた。一日に二度も剃ることなど、ここ数年来ないことだった。つい先週新しいネクタイを注文したのが、神の恵みと言おうか、何とタイミンクがよかつたことだろうと彼は思った。非常に丁寧に服装を整えたあと、こわい質なので散髪のあとではなでつけるのに苦労する髪を十五分もかけてなんとか見苦しくない形にした。

その直後に、はやもうフローリーはエリザベスと広場の道を散歩していた。クラアの図書室に行くときエリザベスが一人で行っていたので、急に勇気を奮い起こして彼女を外に誘ったのであつた。彼女が叔父、叔母に声もかけず、唯唯としてついてきたのには驚いた。実はあまりビルマ生活が長いので、彼の方がイギリスの風習を忘れてしまつていたのである。市場への道は、両側に並んでいる菩提樹の葉が三日月を隠しているので非常に暗かつた。葉がとぎれたところでは、見えない糸でつるしたランプのような星が、低くあちこちで白い光を放つていた。飽きるほど甘い夾竹桃の香りや、医師ペラスロミのパンガローと向かい合った小屋からかすかに流れてくるこやしと堆肥のむかつく悪臭など、さまざまな臭いの波が次から次へと押し寄せてきた。少し離れたところではドラムが鳴つていた。

ドラムの音を耳にした時フローリーは、道を少し下がつたところにあるウ・ポ・チンの家の前でプウエ（現地人の祭り）が行われていることを思い出した。費用はともかくとして、このプウエのお膳立てをしたのは外ならぬウ・ポ・チンだった。大胆な考えがフローリーの胸に浮かんだ。エリザベスをプウエに案内してやろう。彼女の気に入るだろう。気に入らない。目のある者ならプウエ踊りの魅力には抵抗できないはずだ。長い間外出したあとで一緒に戻れば、クラアの連中はとかく二人のことを噂するだろうが、畜生、噂などどうでもいい。この娘はクラアの馬鹿どもとは違ふ。それに二人でプウエに行くのも、おつなもんだらう。その時、騒がしい音楽が急に始まり、笛が耳ざわりに続き、カスターネットに近いカタカタいう音、ドラムの低い響き、その中でひときわ高く太いわめき声が届いてきた。

「一体何ですの、あの音？ ジャズ・バンドのようですわね」エリザベスは立ち止まった。

「現地人の音楽ですよ。プウエをやつてゐるんです。ビルマ人の芝居ですが、歴史劇と喜劇を一緒にしたようなものと思えばよいでしょう。おもしろいですよ。この先の道を曲がつたところですよ」

「そう？」と彼女は少しうさん臭そうに答えた。

道を曲がると真昼の明るさだった。道は三〇ヤードにわたつてプウエの見物客で埋まつていた。後方に一段高く舞台を設け、上には石油ランプをあかあかとつるし、舞台の前ではオーケストラが騒がしい音を立てていた。男が二人、舞台上で半月刀を手に身構えていた。二人の服装を見てエリザベスは中国のパゴダを連想した。白いモスリンを着た女が道端いつ

ばいに背中を並べ、肩に巻いたピンクのスカーフと黒い筒状の髪を見せていた。むしろに横になって寝込んでしまった者もいた。中国人の爺さんが盆にピーナツを載せ、群集をかき分けながら悲しげな声で「ミーベ [ピーナツ]、ミーベ」と売り歩いていった。

「よかつたらちよつと見ていきませんか」とフローリーが言った。

ランゾのまぶしさとオーケストラの肝をつぶす騒がしさに、エリザベスは気も失わんばかりだったが、とりわけ驚いたのは群集が残敷にでもすわるように平然と路上にすわっていることだった。

「いつも道の真ん中で芝居をするのですか」

「たいていはね。粗末な舞台を設け、翌朝には取り壊すんです。芝居は一晩中続きます」

「でも道を塞ぐ許可は得ていますの？」

「もちろんですよ。もつともここには道路交通法なんてありません。そもそも規制するほどの交通量がありませんからね」

彼女はそれを非常に奇異に感じた。そのころにはもうむしろの上の観衆がほとんど全部振り返って、このイギリス娘に目を見張っていた。群集の中ほどには椅子が数個置かれてあり、事務員や役人がすわっていた。ウ・ポ・チンもその一人で、極端に太った身体をねじ曲げて、二人のヨーロッパ人に挨拶していた。音楽がやんだ時、あばた面のバ・タイが群集をかき分けながら急ぎ足で近づき、おどおどした様子でフローリーに低く合掌礼をした。

「白人の旦那さま。主人ウ・ポ・チンが、あなたさまと白人のご婦人にお越しいたただいてしばらく見物願えないかお伺いしると申しております。椅子を用意してございます」

「あちらにおすわり下さいと言っているんです。そうしましょうか、おもしろいですよ。舞台の二人はすぐ退出します。そのあと踊ります。しばらくでしたら構いませんか」  
エリザベスは懸念の気持ちが強かった。体臭の強い現地人の中にはいるのはなんとなく具合が悪く、危険であるような気さえした。しかしおそらくフローリーが万事心得ていると思ひ、彼を信頼し、彼にまかせることにした。ピルマ人たちはむしろにすわったまま道を開け、彼女のうしろ姿を見ながら何かしきりに喋っていた。彼女の足がモスリンを着たピルマ人たちの温かい身体に触れ、野性的な汗の臭いがした。ウ・ポ・チンは彼女の方にできるだけ低く身を屈め、鼻にかかった声で言った。

「お嬢さま、どうぞお掛け下さい。お近づきになれて本当に光栄です。今晩は、フローリーさま。思いがけないことです。お越しいただけると分かっていますしたら、ウイスキーなどヨーロッパ風のお飲み物を用意いたしましたのに。はっはっはっはっ」

笑うとキノコの実で赤く染まった歯がランゾの光を浴びて錫箔のように光った。彼があまり太って醜いので、彼女は思わず後じさりした。紫のロンジーを着ているやせた若者が頭を下げ、氷を浮かせた黄色いシャーベット入りグラスを二つ、盆に載せて彼女の方に差し出していった。ウ・ポ・チンは手を強く打ち鳴らし、かたわらの少年を「おい小僧」と呼び、ピルマ語で何か指図した。少年は人混みを押し分けて舞台上に行った。

「私たちのために一番上手な踊り子を登場させるよう伝えに行つたんです。ほら、出てきますよ」とフローリーが説明した。

舞台の裏で葉巻をふかしながらしやがみ込んでいた娘が、ランゾの下まで進み出た。非常に若く、なで肩で、胸のおくらみもなく、足まで隠れる淡青色のしめす製ロンジーを着ていた。エンジーのすそは昔風にわくを入れて腰から丸くふくらませてあり、下向きに咲いた花を思わせる姿だった。吸いかけの葉巻をものうげな手付きでオーケストラの男に投げ与え、細い腕の一方を差し伸べ、筋肉を振りほぐすような具合に液打たせた。

オーケストラが急に騒ごうしくなった。風笛に似た笛があり、竹の板でできていて、小型ハンマーで叩く妙な楽器もあった。中央では一人の男が、背が高く大きさはさまざまなど二個のドラムに囲まれていた。男はあちらこちらのドラムにす早く手を伸ばして、手の平で叩いていた。娘がいきなり踊り始めた。初めのうちは首をリズムカルに動かし、手を構え、肘を曲げるだけで、踊りというよりは旧式回転木馬の上の操り人形だった。とくに首と腕の回し方などは操り人形そっくりだったが、それでいて動作は信じられぬほど柔らかであった。揃えた手の指を蛇の鎌首のようにくねらせたり、腕にくつつくほど深く反らせたりした。次第に動作が速くなり、足にからみつくロンジーには構わずに、横に跳んだり、会釈するように急に膝を深く曲げたかと思うと、すぐまた信じがたいほどの速さで立ち上がりたりし始めた。膝を曲げてしやがみ込んだ妙な格好のまま、上体を前に突き出し、伸ば

した腕を波打たせ、頭をドラムに合わせて動かした。音楽の速さが最高潮に達した。娘が立ち上がってこまのような勢いで回るので、エンジーのわくが雪の華の花弁のように腰の回りにぱつと聞いた。やがて音楽は、始まった時と同様に突然終わった。娘はもう一度膝を曲げておじぎをした。騒ぞうしい叫び声が観衆から起こった。

エリザベスは驚きや退屈や恐怖に近い感情などが混じった複雑な気持ちで踊りを見ていた。出された飲み物は一口飲んでみると、ヘアー・オイルの味がした。足もとのむしろでは三人のビルマ娘が同じ枕に頭を並べて寝込んでいた。三つ並んだ小さな卵形の顔が猫を思わせた。音楽の騒ぞうしさにまぎれて、フローリーはエリザベスの耳元へささやき声で踊りの説明をした。

「おもしろいと思われるのは分かってました。だからお連れしたのです。あなたはいろいろ本も読み、文明の中で暮らしてこられました。当地にいたる私たちのような哀れな野蛮人と違います。でもこの妙な踊りも見ると価値はあるでしょう？ あの娘の動作をごらんなささい。操り人形のような妙な姿勢で上体を突き出し、攻撃に移ろうとしているコブラの頭のように腕を波打たせて。奇妙な、醜いと言ええる踊りですが、あの醜さは意図的なものです。不吉な意味もあります。モンゴル人は皆少し魔性があります。でもよく見れば、背後には素晴らしい芸術性、何世紀にもわたる文化があります。踊り子が見せている動きの一つ一つが何世代も人の手で研究され伝えられてきました。東洋諸民族の芸術を詳細に眺めると、いつもそのことに思いあたります。時代は違っても結局は同じ一つの文明であり、それが西洋人がホンバタイセイの葉だけを身体に付けていた大昔から連続と続いているのです。言葉では説明できませんが、ビルマの生活と精神のすべてがあの腕の波打つ動きの中に集約されているのです。踊りを見てみると、すべてが目に見えられます。水田も、チークの木陰の村も、パゴダも、黄色い衣の坊さんも、朝早く川で水浴びをする水牛も、タイボアの宮殿も……」

音楽がやんだので彼の説明も急に途切れた。彼がとりとめもない話を不用意に続けた理由はいくつかあったが、ブアエの踊りもその一つであった。しかし今フローリーは自分が小説、それも三文小説の登場人物のような口の利き方をしていたことに気づいた。彼は目をそらせた。エリザベスの方は背筋が寒くなる思いで言葉を聞いていた。初めは、この人一体何の話をしているのだろう、と思った。おまけに『芸術』といういやな言葉が何度も出てきた。フローリーさんって、私は全然知らない人だわ。そんな人と二人つきりで外に出るなんて賢明ではなかった。彼女は今更ながらそう思った。周囲を見回し、無数の黒い顔と薄気味悪いランプの光を目にした時、彼女はその光景の異様さに怯えんばかりの思いだった。自分は今こんなところで何をしてるんだろう。にんにくと汗の臭いにつつまれ、回りの黒人に触れ合はんばかりのところにするわっていいのかしら。クラブに戻ってほかの白人と一緒にいなきや。この人、どうして私を現地人の群れの中などに連れてきて、ぞつとするほど野蛮なものを見物させたんでしょう。

音楽が鳴り出し、ブアエの娘がまた踊り始めた。非常に厚化粧をしていたので、その顔といったら目だけ動いている白亜の面だった。仮面のように真白な卵形の顔が木の操り人形のように動いているのは、悪魔が怪物のようであった。音楽の調子が変わり、娘が金属音の声で歌い始めた。テンポの速い強弱調で、陽気だが猛烈な調子の歌だった。群衆がそれに合わせて歌い、百人もの耳ざわりな声が歌の文句を合唱した。相変わらず上体を折り曲げた妙な姿勢のまま娘は半回転し、臀部を観衆の方に突き出して踊った。絹のロンジーが金属のように光った。手と腕を回し続けながら、今度は臀部を左右に振った。そのあとなんと驚いたことに、音楽に合わせて左右の尻を別べつに振り動かすという妙技を披露したが、それがロンジーを透かしてはつきりと見えた。

観衆から賞賛の叫びが起こった。むしろで寝ていた娘たちが三人同時に目を覚まし、激しく手を叩き始めた。事務官らしい男が二人のヨーロッパ人のために鼻にかかった英語で「ブラボー、ブラボー」と叫んだ。ウ・ポ・チンは顔をしかめ、やめると手で合図した。彼にはヨーロッパ人がよく分かっていた。しかしエリザベスの方はもう立ち上がっていた。「帰りますわ。もう帰らねばならない時間よ」あらぬ方を見ながら取ってつけたように言ったが、フローリーには彼女が顔を赤らめているのが見えた。

狼狽したフローリーは並んで立ち上がったが、彼女を引きとめようとした。「でも本当にもう少し見てもいいじゃないですか。たしかに遅くはなりましたが、あの娘は特別私たちのために予定の二時間も前に舞台に出てくれたんですよ。どうです、もう少しぐらいい」

「いえ、帰らないわけにはまいりません。もつと早く帰らなきゃならなかったんですわ。本当に叔父さん叔母さんに何と言われることやら」

エリザベスが返事も待たずに人混みの中を歩き出したので、フローリーもあとを追った。一座の人が示してくれた好意に礼を言うひまもないほどあわただしかった。ビルマ人たちは不満そうな態度で道を開けた。わざわざ一番上手な踊り子を呼び出して予定を変更させておきながら、本番前に帰ってしまうなんて、毎度のことではいるが、イギリス人つ

でどういうつもりなんだ。二人が帰ったあと、蜂の巣をつついたような騒ぎが起った。娘の方は踊りを続けようとしないうし、観衆の方は続けることを要求した。二人の道化が舞台に駆け上がり、爆竹を鳴らし、卑猥な笑い話をしたので、ようやく騒ぎは治まった。

フロリーは情けない気持ちで彼女のあとから道を登って行った。彼女は顔をそむけたまま早足で歩き、しばらく口も利かなかった。二人の間が調子よくいき始めていたというのに、何でことになったんだ。フロリーはしつこく言い訳を続けた。

「ごめんなさい。夢にも思っていないかったです。まさかあなたが……」

「なんでもございませぬわ。何をお詫びになるんです。ただ帰らなきてやならない時間だと申し上げただけですよ」

「私がうつかりしてました。この国にいます、そういうことには気がつかなくなるんです。礼儀作法が我われとは違えます。ある意味じゃこの国の方がきびしいんですが、でも……」

「そんなことじゃございません。そんなことじゃ！」エリザベスは本当に腹を立てて叫んだ。

つまらぬことを言ってよけい気まずくなったのが分かった。フロリーは彼女のあとから歩いて行ったが、どちらも何も言わなかった。彼の方はみじめな気持ちで、俺はなんて馬鹿なんだと考えていた。それでもなおなせこの娘が自分に腹を立てているのか、本当のところは全然分かっていなかった。彼女が機嫌をそこねたのは、ブウエの娘の変な踊りのためではなかった。それは引き金になっただけだ。わざわざあのようなものを見に行つて、臭い現地人と肩を触れ合わせるようにし向けた彼に腹を立てたのである。白人の男性がやるべきことじゃないわ、と彼女は思いついていた。それにあの妙なとりとめもない話したら。詩でも引用しているような長つたらしい言葉をやら使つて。時どきパリで出会つた気持ちの悪い芸術家たちの話しぶりと変わらないうじやないの。彼女はにがり切つた気持ちで考えていた。夕方会うまでは本当に男らしい方だと思つていたのに。そこまで考えてエリザベスは、けさの冒険と素手で水牛に立ち向かつた彼の姿を思い出し、少し怒りがおさまつた。

クラフアの門に着いたところには、エリザベスは彼を許してやってもよい気持ちになつていた。フロリーの方も口を利くだけの勇気を回復していた。彼が足を止めたので、彼女も立ち止まった。木の間から星明りが洩れ、彼女の顔がかすかに見えた。

「あの、本当にきょうのこと怒つておられないでしょうね」

「ええもちろんですよ。そう申し上げたでしょう」

「あんなところにお連れすべきじゃなかったんです。お許し下さい。あの方、どこに行かれたか私は誰にも言わないつもりです。庭を散歩してきたとか何とかおつちやつた方がよいでしょう。白人の女性が現地人の芝居を見に行つたなどと聞けば、みな変に思うでしょうから。私は誰にも言いません」

「私だつて何も申しませぬわ」彼女はフロリーが驚くほど暖かい口調で答えた。それで彼も許してもらつたのかは、相変わらず分かつていなかった。

二人は暗黙の了解で別べつにクラフアへはいつた。散歩は明らかに失敗だった。その夜の談話室はお祭り気分だった。当地のヨーロッパ人全部がエリザベスに挨拶しようとして待ち構えており、ボーイ長と六人のボーイも糊のきいた一張羅の白服を着てドアの両側に並び、ほほえみながら額手礼をしていた。ヨーロッパ人たちの挨拶がすむとボーイ長は『お嬢さま』のために召使が用意した大きな花輪を捧げ持つて進み出た。ワグレガー氏がユーモアをまじえて歓迎の辞を述べ、皆を順に紹介した。ワックスウエルは「当地の樹木に関する専門家」であり、ウエストフィールドは「法と秩序の番人で、えーっと、当地の強盗にとつては恐怖の的」であるといった調子で紹介された。一同大いに笑つた。可愛い娘の顔を見てみな上機嫌だったので、ワグレガー氏の歓迎の辞でさえ面白く感じた。もつともこれはワグレガー氏が夕方からずつと案を練つていたものであった。

エリスはねらつていた機会をとらえるや、いたざらつばい顔でフロリーとウエストフィールドの腕を取り、ゲーム室の方へ引っ張つて行った。普段よりはるかに上機嫌であり、細く堅い指でフロリーの腕を冗談まじりに強くつねつた。

「なあ君、みな捜してただげ。一体今までどこに行つてたのだ」

「散歩してただけだよ」

「散歩だって、誰と」

「ラッカーステイン嬢とだよ」

「やほりねえ。じや君が針を飲み込んだか。そんなものにひっかかるほど青くないと思っていたのになあ、全くのところ」

「どういふことだ」

「どういふことだ？ おい見ろよ、無理に分からぬ顔してさ。もちろん、ラッカーステイン夫人が可愛い甥にしようと思つて君に白羽の矢を立てたつてことさ。用心しろよ。でないとなあウエストフールド君」

「おつしやる通りだよ。手頃な独身の若者だからね。結婚という手綱をつけられてつてなことになるよ。君は目をつけられたんだ」

「どうしてそう考えるのか。僕には分からんね。あの娘は到着して丸一日にもならないんだよ」

「いや、それでも君が庭へ散歩に誘い出すにや十分な時間だった。気をつけるよ。大酒飲みにや違くないが、トム・ラッカーステインだつて、生涯の面倒を見ようと思つた馬鹿者じゃないからな。それにあの娘だつて、どちらが得かちやんと計算してさ。だから君も用心して、自分からわなにかかるようなまねはせぬことだ」

「やめてくれ、そんな風にとやかか言うのは。いづれにしる、あの娘はまだ子供だし……」

エリスは新しいスキヤングルの種を見つけたので、親愛をこめてと言えるほどの態度でフローリーの上着のえりを持つて言った。「相変わらず馬鹿だな、君つてやつは。馬鹿げたたわ言はよせよ。あの娘なんか簡単に扱えると思つてゐるんだろうが、そうはいかんぜ。本国からやつてくる娘なんて皆同じだ。『結婚できるとなりや何でもする。結婚できなきゃ何もせぬ』それがあの手合いのモットーだ。なぜあの娘がこんなところに来たと思つかね」

「なぜ？ 知らないよ、そんなこと。たぶん来たから来たんだろう」

「何を馬鹿な！ もちろん亭主をつかまえるためさ。我われがそんなことを知るまいと思つてゐるんだろうか、あの娘は。年頃の娘は、どこへ行つても亭主がつかまらぬと、最後にヤインドに来るんだ。インドじや男が皆、白人娘に焦がれてゐるからな。インド結婚市場と彼女らは呼んでるよ。肉市場と呼ぶべきだな。冷凍羊のように、毎年何隻もの船で運ばれてきては、君のような性悪な独身者に品定めされるんだ。ここが冷凍庫です。これは氷の中から出したてのおいしい肉です」

「いやなことを言うなよ」

「牧場育ちの極上のイギリス肉ですよ。今送られてきたばかりです。最高の品質は保証します」とエリスはうれしそうに続けた。

彼は好色そうな顔付きで肉のにおいでも嗅ぎ分けるしぐさをして見せた。この悪ふざけは長持ちしそうだった。実際彼の悪ふざけはたいへい相当長く続いた。それに女性の評判を踏みにじることほど彼にとつて楽しいことはなかつた。

その夜フローリーはあまりエリザベスと顔を合わさなかつた。皆が談話室に集まり、例によつて取りとめもない馬鹿話をしてにぎやかに楽しんだ。フローリーはこの種の談笑を続けるのが苦手だった。しかしエリザベスの方はプロエでおかしなことがあつたので、こうしてクラブの洗練された雰囲気に入れ、白人に囲まれて写真入り新聞や仏教画を覗く眺めてゐると気分が落ち着いた。

ラッカーステイン夫妻は九時に姪とクラブを出たが、同行したのはフローリーではなくマダレガー氏だった。彼は鳳凰木の木立が投げかけてゐる曲がりくねつた薄い影をぬつて、人なつっこい怪物とかげのような格好で、エリザベスと肩を並べてゆつくり歩いた。プロームの逸話やその他たぐさんの話が、初めて聞くエリザベスの耳に吹き込まれた。チャウタダに新しくやつて来た人は例外なく、かなりたつぷりマダレガー氏の話相手をさせられる。古顔は皆彼を案に退屈がつており、彼の話の腰を折るのがクラブの習わしだからである。しかしエリザベスはもともと聞き上手なほうだった。マダレガー氏はこれほど聡明な娘に会つたことがないと思つた。

フローリーは少し遅くまで残つて他の者と酒を飲んでゐた。エリザベスをだしにして、きわどい話がいちいち交された。医師ベラスワミを会員に選出するかどうかという口論は当

分の間お預けだった。昨夜エリスが貼り出した通知書もいつの間にかはがされていた。実は今朝ワグレガー氏がそれを見かけ、いかにも公正な人らしく、すぐその通知書ははずすように主張したからだった。したがって通告は黙殺されてしまったわけだが、皆に知らせるといふ目的は一応果たしたのである。

次の二週間は多くが起こった。ウ・ポ・チンと医師ペラスワミの反目は頂点に達した。治安判事を始め市場の掃除人にいたるまで一人残らずどちらかに加わり、町全体が二つの党派に分かれてしまい、皆必要とあらば偽証する覚悟でいた。しかし両派を較べるとボクサー側ははるかに少数で、相手に対する侮辱も下手だった。『ピルマ愛国者』紙の編集者は暴動教唆と侮辱罪で裁判にかけられ、保釈は認められなかった。彼の逮捕によってラングーンにちよつとした暴動が起こったが、警察に鎮圧された。死者は二人だけだった。獄内で編集者はハンストを始めたが、六時間後に挫折した。

チャウタダでもいろんなことが起こっていた。ガ・ジュエー・オーという名の強盗団員が謎につつまれた脱獄をした。この地域に現地人の一斉蜂起が計画されているという一連の噂が流れた。まだ非常に漠然としていたが、トンソクとかいう村あたりが源だった。マックスウエルがチャークの樹皮を輪状にはぎ取る作業をしている野営地はその村に近かった。

魔法使いが一人どこからともなく現われて、イギリス勢力の滅亡を予言し、魔法の防弾チョッキを配っているらしかった。マズレガー氏は噂など本気にしなかったが、憲兵隊の増援を求めた。イギリス人將校指揮下のインド歩兵中隊が間もなくチャウタダに派遣されることだった。もちろんウエストフィールドは騒ぎが起こりそうな懸念、というより希望が生じたとたんにトンソクへ急行していた。

「ぐそつ、一度でいいから連中が反乱に立ち上がってくれたら」彼は出発前にエリスに言った。「しかし今度も、例によってひどいのはずれに終わるだろう。こういう反乱の語はいつでも同じだ。実際に始まるか始まらぬうちに立ち消えになってしまう。信じがたいだろうが、私はまだ人に、強盗団員に向けてすら発砲したことがない。大戦を勘定に入れなければ、十一年の間、一人も殺していないんだ。うつとしいことだよ」

「じやあ、連中がことを始めなけりや、首謀者たちをつかまえ、人目につかぬところで思いきり鞭を加えてやればよからう。その方が監獄とかいう療養所で大切に保護してやるよりやいいたらう」とエリスは言った。

「ふむ、多分ね。だが最近じやそんなことはできない。生ぬるい法律とやらを守らねばならぬ。愚かにも制定した限りはな」

「ふん、法律なんてくだらん。鞭打ちだけがピルマ人に思い知らせてやれるやり方だ。ぶたれたあとの姿は見たことがあるかね。俺はある。牛車で監獄から運び出され、泣き叫ぶやらの尻に、子どもがつぶしたバナナを塗りつける。こういう目に会って初めてやつらも少しは思い知るのだ。俺の思い通りにやれるのなら、トルコ人のようにやつらの足の裏に鞭を食わせてやる」

「まあね。連中が今度こそ少しは戦意を見せる度胸があるように願っておこう。そうなりや憲兵隊、ライフル銃、その他なんでも動員するさ。数十人に弾丸を打ち込んでやりや、様子が一変するだろう」

しかし待ち望んだ機会は訪れなかった。ウエストフィールドには十人ほどの警官がトンソク村に同行した。人に短剣を使ってみたくてうずうずしている丸顔で陽気なゲルカ人の若者たちだった。しかしその地域は気が滅入るほど平穏だった。どこにも反乱の影さえないように思えた。人頭税の支払いを避けようと、農民たちが季節風のように毎年きまっつて繰り返す試みがあるだけだった。

ますます暑くなってきた。エリザベスにも初めてあせもができた。クラブでもテニスなどはほとんど行われなくなった。気の抜けたような試合をセットしただけで椅子にすわり込み、ライム果汁を何杯も飲み干した。果汁は生ぬるかあった。氷はマンダレーから週二回来るだけで、それも二十四時間もせぬうちに溶けてしまうためだった。森林の炎のような輝きは最高潮に達していた。ピルマの女たちは子供を太陽光線から守るために、顔に黄色い化粧品をいく筋も塗り付けてやった。そのうちに子供たちはアフリカの祈とう師のような顔になった。緑の鳩やあひるほどもある大鳩の群れが市場通りに並んでいる大きな菩提樹の実を食べに来た。

一方、フローリーはマ・ラ・メーを家から追い出してしまった。



単劣で汚いやり口だった。金の葉巻入れを盗み、市場で食料品店と、もぐりの質屋をしている中国人リ・イエイクの店に質入れたことなど、追いつく口実はいくらでもあった。しかしながらそれは口実にすぎなかった。エリザベスのためにマ・ラ・メーを追い出そうとしていることはフロリー本人にも、マ・ラ・メーにも、召使全員にも分かつていた。マ・ラ・メーに言わせると、「髪を染めたイギリス女のために」追いつかれたのであった。

最初マ・ラ・メーは騒ぎ立てなかった。一〇〇ルビエの小切手を切り、リ・イエイクが市場のインド商人がこれを現金に換えてくれるだろう、これが手切れ金だ、と言ってやると、ふくれつ面で聞いていた。フロリーは相手以上に取っつきかかった。女の顔を見ることができず声も一本調子でやましい感じになった。牛車が使女の荷物を取りに来た時は、作業が終わるまで寢室に隠れていた。

車輪が車道でしり、男たちの叫び声が出た。突然、恐ろしい金切り声が上がった。フロリーは外に出てみた。数人が門に近い日なたで争っていた。門柱にしがみついているマ・ラ・メーをマ・ラ・メーが引き離そうとしていた。マ・ラ・メーは怒りと絶望でいつばいの顔をフロリーに向け、「旦那さま、旦那さま、旦那さま！」と何度も叫んでいた。追いついたのにまだ自分を旦那さまと呼んでいるのを聞くと、胸が激しく痛んだ。

「どうしたんだ」と彼は聞いてやった。

マ・ラ・メーとマ・イが一つの入髪いんぱつを取り合っているようだった。フロリーはマ・イにその入髪をやり、マ・ラ・メーには代わりにニルビーやった。牛車は揺れながら去っていった。マ・ラ・メーは小枝細工の籠のそばにふくれ面で背を伸ばしてすわり、膝の小猫をなでていた。ほんの二カ月前に贈り物としてやった猫だった。

マ・ラ・メーはマ・ラ・メーが追いつき出されるのを長い間望んでいたが、いざそれが実現するとあまり喜びはしなかった。彼は主人が『イギリス人パゴダ』つまり教会に行くのを見かけて、いつそうおもしろくない様子だった。巡回牧師が到着する日曜日にもまだフロリーはチャウタダにいて他の連中と同じように礼拝に出席したからである。会衆は十二人でフランクとサミュエル氏、それに六人の現地人キリスト教徒もまじっていた。ラツカーステイン夫人がペダルの一方がつぶれた小オルガンで『主よ、私のもとに留まり給え』を演奏した。葬式を除けば、フロリーが礼拝に出席したのは十年ぶりのことだった。『イギリス人パゴダ』で一体何が行われるのかマ・ラ・メーは全然知らなかった。しかし礼拝に出席するのが世間体のためであることは十分に承知していた。そしてこんな態度を独身者の召使の例にもれず、マ・ラ・メーは徹底的に憎んでいたのである。

「厄介なことになるぞ」と彼は他の召使たちに元氣なく言った。「十日前からあの人（つまりフロリー）を見ていると葉巻は一日十五本に減らしたし、朝食前にもジンを飲まなくなった。毎晩ひげを剃る。馬鹿なお方だ、こちらが気づいていないと思っている。それに新しい絹シャツを半ダースも注文した。おかげでわたしや裁縫台の前に立つて、仕上げを急げ、と裁縫屋にせつかなければならなかった。悪い兆しだ。あと三カ月。それでこの家の平和もおしまになる」

「何だつて、あの人結婚するとか？」とパ・ペは言った。

「まず間違いない。白人がイギリス人パゴダに通い始めると、いわば終わりの始まりなんだ」

「今まで多くの主人に任せてきたが」とサミー老人は言った。「いちばんひどかったのはウインポール大佐殿だ。バナナの揚げまんじゅうを出しすぎると言っては、従卒に私の身体をテールへ押し寄せさせておき、うしろから走ってきて、どつい深靴で蹴とばしたものだ。酔った時には召使部屋の屋根から連発銃をおち込んだ。弾は我われの頭上をかすめたよ。それでも、がみがみ屋の奥様オカサマのもとで一週間働くよりや、ウインポール大佐のもとで十年働く方がましだ。旦那さまが結婚したら、その日にお暇をいただこう」

「わしは暇をとらない。十五年間あの人に任せてきたんだ。しかしあの女が来るとどういうことになるかは分かっている。家具にはこりがついていると言ってはどなりちらし、昼寝の時間に起こして茶を持ってこさせ、始終台所に首を突っ込んで、シチュー鍋が汚れているとか、粉箱にごきぶりがいるとか文句を言う。あの手の方は夜も寝ないで、召使を苦しめる新事を考えているんだと、わしは信じているよ」

「あの連中は小さな赤い帳面を持っている」とサミーは言った。「そして亭主が一切金をくすねることができないように、これにニアナ、あれに四アナと買物の費用をそこに記入するのだ。亭主には一切金がいってこない。女どもときたら、亭主が五ルビエのことで騒ぎ立てるより、玉ねぎ一個の値段のことでもつとうるさく騒ぎ立てるんだから」

「ああ、わしにははつきり分かっている。あの女はマ・ラ・メーより賢ちからが悪いだろうな。くそつ、女なんて」マ・ラ・メーは心得顔で、ため息まじりにつけ加えた。

このため息は他の者、マ・ブヤマ・イにまで感染した。この女二人は、コ・スラの言葉が女性への酷評だとは思わなかった。イギリス女はまるっきり違う人種で、人間とすら言えず、非常に恐ろしいので、イギリス男性が結婚すると、召使は全員、長年働いてきた者まで逃げ出してしまおうと思いついていたからである。

しかし実はコ・スラの心配も時期尚早だった。エリザベスと知り合つて十日にもなるのに、フローリーは初めて会つた日以上に彼女と親しくなつてはいなかつたからである。たまたまこの十日間はヨーロッパ人がほとんど全部密林の方に行つているので、フローリーがエリザベスを独占しているような具合だった。実はフローリー自身も本部で無爲に過ごしていることはできなかつた。この季節は材木の切り出しが一年のうちで最も盛んであり、彼がいないと、無能な混血人監督のもとでは万事が減茶苦茶になるからである。それに彼はわざわざ熱を口実にして町に残つた。現場監督からはほとんど毎日、やけ気味の手紙が届き、象が頭病氣になつた、チーク林を川まで運ぶ軽便鉄道の機関車が故障した、人夫が十五人逃亡した、などと不慮の出来事をあれこれ伝えてきた。フローリーとしては、エリザベスがいる限りチャウタダを離れられず、いつまでも町でぐずぐずして、初めて出会つた日の気楽で楽しい間柄を取り戻そうと努めていた。もつとも今までのところ、たいした成果はなかつた。

確かに毎朝毎晩会つてはいた。夕方には決まつてテニスのシソグルをした。ラッカーステイーン夫妻は加わらなかつた。この季節になると夫人は元気がなくなり、ラッカーステイーン氏も肝臓の調子が悪くなつて、ともにテニスどころではなかつたのである。テニスのあと、四人は談話室でグリッジをし、談笑した。しかし何時間もエリザベスと一緒に過ごし、二人きりの時間も多かつたのに、フローリーは彼女に対してどうしても気楽な気持ちになれなかつた。取るに足りない話題を案に気楽に語り合いながら、二人の間には初対面同士のような距離があつた。エリザベスが前にいると彼はつい固くなり、顔の痣を意識してしまつた。一日に二度もひげを剃るのであごはひりひり痛み、エリザベスの前では酒と煙草を控えていたので、身体がそれを強く要求した。十日経つても二人の間は相変わらずフローリーが望む状態には近づくなかつた。

それはフローリーがエリザベスに対してはなぜか思い通りに口が利けないからだった。何でもよい、話さえすれば。これは至極簡単なようであるが、こちらが本音を吐けば決まつて神を恐れぬ言葉だとする連中に囲まれて、中年に近い年になるまで全く独りぼちで過ごしてきたのに、今になつて口を利くことが何よりも必要になつたのである。しかしエリザベスが相手だと堅い話はできないような気がした。魔法にかけられたように、話をすれば必ずコードだとか犬だとかテニスのラケットなど、クラフアの雑談独特の味もない平凡陳腐なものになつてしまつた。エリザベスはそのような話しか望んでいないようだった。フローリーが少しでも興味のある話題に触れると、その話題を避けようとして、彼女の口調は必ず、存じませんわと言わんばかりの調子になつた。彼女の本の好みも、知ればぞつとするほど低俗だった。しかしこの娘はまだ若い。それにパリではグラタナスの木陰で白葡萄酒を飲みながらサルセル・ブルーストのことを語らつていたので、もう少し年をとれば必ずや自分の話も分かるようになり、必要な話し相手になつてくれるはずだ。多分まだこちらが相手の心をつかんでいないだけのことだろう。彼は自分にそう言つて聞かせた。

エリザベスが相手の時に限つて、彼の話は間の抜けたものになつた。独りぼちで暮らしてきた者の例にもれず、彼も話を相手に合わすより概念に合わすほうが得意だった。表面は内容の浅い話をしていても、エリザベスは時どき彼の言葉よりも言葉の裏にある含みにいらした。言葉ではうまく表現できない、口論の一步手前のような気がつたり状態が生じた。この国での生活が長い者と初めて来た者が顔を合わすと、古顔の方はつい新参者の解説役を買つて出る。エリザベスは今ビルマの姿を学び始めていた。当然ながらフローリーが解説役で、あれを説明し、これを批判した。ところが彼の言葉や言い方が彼女の胸にわけの分からぬ強い不満を抱かせた。現地人のことが話題になれば必ず、フローリーが彼らをはめることに気づいたからである。ビルマ人の風習や性格を必ず賞賛した。イギリス人よりすばらしいとまで言つた。

聞いているエリザベスは不愉快であつた。とやかくおつしやつても——現地人はそりや確かに面白い人種かも知れませんが結局は被支配民族だし、顔の黒い劣等民族にすぎませんでしよう。この方の態度には本當に我慢ならなわ。フローリーの方も、自分のどこがエリザベスの反感を買つていのかまだ分かつていなかつた。エリザベスもビルマが好きになり、白人女性特有の鈍く好奇心のない目でビルマを眺めることはやめてくれるようにと彼は願つた。誰であろうと異国では現地人を軽蔑している時だけ安心しておられることを、彼は忘れていたのである。

フローリーはエリザベスにも東洋の風物に興味を抱かせようとやつきになりすぎた。例えば彼女にビルマ語の手ほどきをしてやろうとしたが、これは無駄だった。(彼女の叔母

は、ビルマ語を話すのは伝道にたずさわる女性ぐらいであって、ちゃんとした女性なら料理用のウルドゥ語〔インド・パキスタンの回教徒が用いる〕だけで十分だと教えていた) どのような食い違いは無数にあった。フローリーのような考え方はイギリス人なら持つべきでないことを、エリザベスはうすうす感づいていた。自分にもビルマ人を好きにならせようとし、賞賛させようとしてしまっているのだ、見るのもいやな黒い顔の野蛮人たちを賞賛させようとしているのだ、ということを知った。

このことはさまざまな形で現われた。現地人の群れが道を通る。エリザベスは見慣れていないので、半ば好奇心、半ば嫌悪感から目を見張る。そのあとフローリーに言う。もつとも誰にでも同じことを言ったろうが。

「ぞっとするほど醜いわね、あの人たち」

「そうかなあ、私はいつも、ビルマ人って魅力あるなあと思っていますよ。みごとに体格でしょう。あの男の肩なんかどうです。銅像さながらでしょう。イギリス人が同じように半裸で歩き回ったら見られませんかよ」

「でもないやな形をした頭ね。猫の頭みたいにしてろへせり出してわ。それにあの額！ 上の方で引つ込んで。悪相ね。雑誌で頭の形のこと読んで覚えあるけど、引つ込んで顔って犯罪者型ですって」

「いや、まあ、それはちよつと大き過ぎるでしょう。世界中の人間の半分ぐらいはあんな額をしてるんだから」

「そりや有色人種も入れるとそれぐらいになるでしょうけど」

また女たちの列が井戸に向かっていっていると。赤銅色のたくましい百姓衆たちが水がめを頭に載せ、背を伸ばし、雌馬のようにみごとな尻を突き出して歩いている。エリザベスは男よりも女をいつそう毛嫌いした。同性だけに自分に近いものを感じ、顔の黒い女が自分に近いことをきらうのである。

「まったくぞつとするわね、あの下品な姿ったら。まるで動物ね。あんな女にだれが魅力を感じるかしら？」

「ビルマの男は感じますよ」

「そりやそうでしょうね。でもあの黒い膚。よく我慢できるわね」

「でもね、黒い膚もそのうちに慣れますよ。この国に五、六年もいると、白い膚より黒い膚の方が自然な気がするようになりますと皆言いますが、実際その通りだと思います。それに事実黒い膚の方が自然なんです。世界中見てごらんなさい。白い方がおかしいんですよ」

「あなたって本当に妙な考え方なさるのね」

万事この調子だった。フローリーの言葉がエリザベスにはいつも何か不備で不健康なものに思われた。皆から見捨てられた二人の欧亜混血児フランクとサミュエル氏が、クラブの門の外でフローリーと話し始めた時など、特にそう感じた。たまたまエリザベスの方が、五、六分早くクラブに着いた。門のあたりでフローリーの声があったので、テニス場の金網を回って彼の方に行った。二人の混血児は、遊んで欲しがっている犬のようにフローリーに近寄り、彼を困らせていた。もつぱらフランクが話していた。南部出のインド女が生んだ子で、やせて葉巻色の膚をしており、激しやすい男だった。サミュエルの方はカレン族の女が母親で、膚は薄黄色、髪は色のくすんだ赤毛だった。やせた二人がみすぼらしい綿布の服を着て大きなヘルメット帽をかぶっている、二本のきのこのようだった。

小径をやってくるエリザベスの耳に、長く複雑な身の上話がところどころ聞こえてきた。白人相手に、特に自分の身の上話をするのをフランクは日頃大きな楽しみにしていた。何か月ぶりかでヨーロッパ人が自分の話に入ってきてくれると、生い立ちから今までのことがせきを切ったように彼の口からほとぼり出た。今も鼻にかかった一本調子の声で信じられないほど早口に話していた。

「お父さんのこと、ほとんど覚えてないよ、旦那。でもお父さん非常に怒りっぽい人だった。節だらけの竹の棒で私と腹違いの弟とお母さん二人を何度も叩いた。それに監督が来る時、お父さん、弟と私にロンジー着せてビルマの子供の中に隠した。お父さん、監督になれなかつたよ、旦那。二十八年間でただ四人政宗させただけ。それに中国の火のような酒大好きだった。皆うるさく言った。それで、ラングーンのパラナス教会出版社からお父さん出した『飲酒の罪』というールピーアナのパンフレット売れなかつた。私の弟もい気

候の時死んだ。せきばかりしていた」という具合だった。

混血児たちはエリザベスがいることに気づいた。二人はヘルムット帽を脱ぎ、頭を下げ、見事な歯を見せて笑った。イギリスの女性に話しかけたことなどどこ何年もなかっただろう。フランスの言葉は一層激しくあふれ出た。明らかに、言葉をさえぎられ、会話を切られるのを恐れているからだ。「今晩はお嬢さん、今晩は、今晩は。お会いして本当に光栄です、お嬢さん。毎日うだるように暑い天気ですね。でも四月のわりにはいい天候です。ひどい暑さでお苦しみじゃないでしょうか。キノアの寒つぶして炎症につけるの、絶対に効きます。私每晚苦しんでいます。炎症我われ《ヨーローパ》人は皆かかります」

彼は『マーチン・チャズルウィット』[ドイツ文学の小説]に出てくるチヨロツプ氏のように、ヨーローパ人と発音した。エリザベスは何も答えず、少し冷たい目で混血児たちを眺めていた。この二人は一体誰でどのような連中なのか、エリザベスにはよく分からなかった。とにかく自分に話しかけてくるなんて無礼だと思った。

「ありがとう、キノアのことば覚えておくよ」とフロローリが言った。

「有名な中国人の先生の特効薬です。それにお嬢さん、ご忠告します。フェルト帽しかかぶらないこと、四月には賢明ではありません。現地人には十分ですが。彼らの頭、鉄壁です。でも我われには日射病、本当に恐ろしいです。太陽、ヨーローパ人の頭には致命的です。でもお嬢さん、私の話、あなたをお引きとめていきます？」

失望した口調でフランスは言った。実はエリザベスはこの混血児など相手にするまいと決めたのである。二人が話し続けるのをフロローリが許している理由が分からなかった。エリザベスは背を向けてテニスコートの方に向かいながら、ラケットの素振りや試合の時間が遅れていることをフロローリに示した。フロローリもそれに気づいて、あとを追ったが、しぶしぶの足どりだった。うんざりする話ではあっても、フランスを無視してやりたくなかったからである。

「失礼しなければならぬので、じや、さようならフランス。さようならサミュエル」

「さようなら、旦那。さようなら、お嬢さん。さようなら、さようなら」また帽子を振りながら二人は去って行った。

追いついてきたフロローリにエリザベスが聞いた。「一体何者？ あの二人。妙な連中なこと。日曜日には教会にも来てたわ。一方は白人と言っても通るほどね。まさかイギリス人じゃないでしょうね」

「いえ、混血児ですよ、白人の父と現地人の母のね。親しみを込めてイエロー・ベリー[黄色いやつ]というニックネームを献上していますよ」

「でもあの二人はどこで何してるんですか。住んでいるところは？ 仕事はしていませんか」

「市場で何かやってるんでしょう。確かフランスはインド人金貸しの事務員で、サミュエルの方は弁護士事務員だったと思います。しかし現地人の施しがあればこそで、それがないと二人とも食うのにも困ることでしょう」

「現地人の施しですって。現地人相手に乞食の真似ごとをしているとおっしゃるんですか」

「そんなところだと思います。その気になれば簡単にできますからね。ピル人は誰にも飢え死にさせないでしょう」

このような話は聞いたこともなかった。少しは白人の血が混じっている連中が、こともあろうに現地人の間で尾羽打ち枯らしているなど聞いて、驚きのあまりエリザベスは立ち止まった。チニスを始めるのがさらに五、六分延びた。

「そんなひどいこと！ いえ、恥さらしよ。私たち白人が困っているのと同じだわ。二人のために何とかしてやれないのですか。寄付でも集めてどこかへ行かせるとか」

「そんなことをしてもたいして役に立たないでしょう。どこへ行っても二人の立場は同じですよ」

「でも何かまともな仕事につけませんの？」

「どうでしょうかね。実を言えば、彼らのように市場育ちで教育もない混血児は初めから駄目なんです。ヨーロッパー人も彼らにはステッキでさえ触れようとしません。下級官吏への道も閉ざされています。白人面つらするのをやめない限り、衣食でもする以外にないのです。彼らが白人面をやめるとも思えませんね。身体に混じっている白人の血だけが連中の全財産なんです。気の毒に、フランスは会えば必ず『ひどい暑さですね』を始めます。現地人なら暑さなどこたえないというんです。もちろんたわ言にすぎませんが、聞いた人は信じ

みます。日射病云々だって同じですよ。あの大きなヘルメット帽をかぶってるのも、自分たちの頭はヨーロッパ製だと触れ回るためなんです。一種の紋章ですね。逆並行斜線〔盾の左上部から右下部へ引いた線で、庶子のしるし〕ってどこでしょうか」

そう言われてもエリザベスは納得できなかった。フロローリーは例によって混血児にも内心同情しているようだった。混血児の姿はエリザベスの胸に今まで味わったこともない嫌悪感を抱かせた。彼女はもう混血児に評価を下していた。彼らはメキシコ人やイタリヤ人など、色が茂黒く、映画では悪役を演じる連中と同じなんだわ。

「あの二人、恐ろしく墮落した感じですよ。やせて、ひよろひよろで、ぺこぺこ頭を下げてばかりいて。それに顔つきも決して正直そうではないわ。あの二人、墮落し切ってるってところね。混血児って必ず両方の血の欠点ばかりを引き継ぐって読んだことがあるけど、本当かしら」

「本当かどうか分かりませんが、あまり立派な連中にはいませんね。育ちを考えると無理もないとは思いますが。でも連中に対する我われの態度だってよくないですよ。彼らはさまざまな欠点を背負って、きのこのように地から生え出ただけと言わんばかりですよ。何と言っても混血児がいるのは、結局我われ白人の責任ですからね」

「白人の責任？」

「とにかく父親がいて生まれたのですから」

「そう言えばそうでしょうね。でもとにかくあなた自身の責任じゃないでしょう。つまり、あの……現地人の女と関係するのは非常に程度の低い男だけでしょう」

「その通りです。ですがあの二人の父親はどちらも教団所属の牧師だったと思います」

フロローリーは一九一三年にワシントンで誘惑した混血女ローザ・マックグレイを思い出した。いつも馬車のシャッターを下ろしてこっそり女の家に行ったものだ。あの女はらせん状の巻き毛だった。女の母親はしなびた婆さんで、しだで編んだ籠が並び、やなぎ細工の長椅子がある居間で茶を出してくれた。のちにローザを捨てた時、女は香水をふった便箋に書いたいやな手紙で何度も泣きついてきた。最後の手紙は開封もしなかった。

テニスあとでエリザベスはフランスとサミュエルの話をまた持ち出した。

「例の二人と関係のある方は当地にいませんか？ 二人を家に招くとか」

「とんでもない。彼らは全くの除け者で、実際連中と話をすることでさえ不都合なことだと見られています。たいていはおはようぐらいは言いますが、エリヌなどそれさえ言いません」

「でもあなたは話してらっしゃったじゃないですか」

「いや、私は時どき規則を破ることにしてゐるんです。実はまことの紳士で通したけりや、連中と話しているところを人に見られてはいけません。私は時どき勇気がわいた時だけ、紳士にふさわしくないことをやってみてゐるんです」

この言葉は軽率だった。もうエリザベスも『まことの紳士』がどのような意味で、どういう人物を指しているのか十分にわかっていった。フロローリーの言葉を聞いて、二人の考え方の違いをエリザベスははっきり知った。フロローリーに投げた彼女の視線には敵意に近い色が込められており、奇妙なほど冷たかった。年が若く花のようになめらかな膚をしているくせに、彼女の表情は時として意外に冷たくなることがあった。流行のベツ甲眼鏡が非常に落ち着きはらった感じを与えた。眼鏡は奇妙なほど豊かな表情を人に与える。自そのものより表情が豊かである。

まだフロローリーにはエリザベスという娘がつかめず、その信頼も十分には得ていなかった。しかしともかく表面上は、二人の関係は悪化しなかった。エリザベスは時どき彼の態度をいら立たしく思うことはあったが、初めて出会った日の朝、彼が与えた好印象はまだ彼女から消えていなかった。妙なことだが、そのころはまだエリザベスは彼の痣を全然と言つていいほど気にしていなかった。それに彼の話の中にも、聞きたい話題はあった。例えば狩猟の話などがそれで、彼女は娘には珍しく狩猟が大好きだった。馬も好きだったが、フロローリーは馬のことはそれほど知らなかった。フロローリーはいずれ準備でき次第、エリザベスを日帰りの狩猟旅行に連れていく計画を立てた。二人ともその日を強く待ち望んでいたが、その理由は食い違っていた。

フローリーとエリザベスは市場通りを下つていった。朝ではあるが非常に暑かったので、炎熱の海を歩いているようだった。ビルマ人の群れが幾組もサンダルをきしらせながら市場の方からやってくるのだとすれ違った。娘たちが四、五人ずつ並んでしゃべりながら、小股でせかせか歩いて行った。つや出しをした髪が光っていた。監獄の手前で、石のパゴダが菩提樹の丈夫な根に砕かれて、引っくり返り、破片が散らばっていた。怒り顔の魔神像が草の中に倒れたままにらみ上げていた。近くの菩提樹は椰子の木にからみつき、十年は続いた格闘の末に相手を根こそぎにして、後方に押し曲げていた。

二人は監獄のところまで来た。大きな正方形の一回で、一辺が二〇〇ヤードあり、高さ一〇フイートのびかびかしたコンクリート壁だった。監獄の人気者であるくじやくが胸壁の上を内股で気取って歩いていった。囚人が六人首を垂れ、インド人の看守に見張られて、土を積み上げた手押し車を重そうに引いていった。長期刑の囚人で、足どりは重く、粗末な白の囚人服を着て、坊主頭には、できの悪い生徒に罰としてかぶせる小さい紙帽子みたいなものをかぶっていた。顔は灰色に近く、おどおどして妙に平べったかった。足かせがちらんちらんと澄んだ音をたてていた。女が頭に魚籠を載せて通りすぎた。二羽のからすが籠のまわりを飛びながら、魚に向かつて突進していた。女は片手を大儀そうに振って追いついていった。

少し離れたところで騒ごうしい人声があった。

「市場はその角を曲がったところですよ」とフローリーは言った。「けさは市がたつていっていると思います。おもしろいですよ」

彼は前から市場をのぞきに行きましよう、おもしろいですよ、とエリザベスに勧めていた。二人は角を曲がった。市場はだだっ広い牛檻（牛舎）のような囲いで、たいていは椰子の葉で屋根をふいた低い売店が縁に並んでいた。中では人の群れが騒ごうしく叫びながら押し合っていた。さまざまな色の服が入り混じって、瓶から流れ出た何百、何千もの餅りレースみだいたった。市場の向こうに、濁った大河が見えた。木の枝や、長い筋を引く泡が時速七マイルで流れていた。堤近くの杭にサンパンが何そうもつながら揺られており、ペンキで目を描いた、鋭いくちばしみたいな船首をこちらに向けていた。

フローリーとエリザベスはしばらく眺めていた。女が何列も頭に野菜籠を載せて通った。子供たちは目を丸くしてヨーロッパ人を見た。年老いた中国人があせて空色になった作業服を着て、豚の腸だろうか、何か分からないような血まみれの塊を大事そうにかかえて急いで通りすぎた。

「ちよつと売店をのぞいて回リませんか」とフローリーは言った。

「あの人混みの中にはいつでも大丈夫ですか。何もかもすぐ汚らしいわ」

「いえ、大丈夫です。我われには道を開けてくれますから。おもしろいですよ」

エリザベスは疑わしげに不承不承ついて行つた。この人つたら、なぜいつも私をこんな場所に連れてくるのかしら。なぜいつも現地人の中に引つ張ってきては、彼らに関心を持たせようとしたり、不潔でいやな習慣を見せようとするのかしら。なぜか分からないけれど、とにかくこれは全くいけないことだわ。しかし彼女はいやだという気持ちを持ってきかないような気がして、あとについて行つた。息を詰まらせるような空気が流れていた。なんに、干し魚、ほこり、アニス（にんじん科の薬用植物）、丁子の木（ショウブ科）、うこん（しょうが科の植物）などが入り混じった悪臭だった。回りに人垣ができた。顔が褐色でずんぐりした百姓、灰色の髪をうしろで束ねたしわだらけの年寄り、尻に裸の赤ん坊を載せた若い母親などだった。フローリーは足を踏まれて激しく吠えた。低く頑丈な肩がエリザベスにぶつかつた。商売が忙しくて白人女を見る暇さえない百姓たちが売店で動き回っていたからである。

「ごらんなきい」とフローリーはスツッキで、ある売店の方をさして何か言っていたが、パイナップルのことでごぶしを振り上げて言っている女二人の金切り声にかき消された。エリザベスはさきほどから悪臭と騒音に尻ごみしていたが、彼は気づかずに、さらに奥の方へ彼女を連れてゆき、あちこちの売店を指さした。商品は異国風で奇妙で貧弱だった。ひもにつるした緑色の月のようなかいかいザボン、赤いバナナ、うみざり蟹（カニ）ぐらいで薄紫色の手長海老、もろい干し魚の束、深紅の唐辛子、切り開いてハムのようにくん製に

したあひる、まだ青い椰子の実、サイ甲虫サイカガムシの幼虫、砂糖きび、短剣、漆塗りサンダル、格子じまの絹製ロンジー、石けんに似た大きな丸薬形の媚薬、高さ四フイートで上薬をかけた陶製のつば、にんにくと砂糖で作った支那ボンボン、緑と白の葉巻、紫色のなす、柿の種で作った首飾り、枝編み細工の籠でびよびよ鳴いているひよこ、真鍮の仏像、心臓型をしたキノコの葉、びん入りのクルージュン塩、入れ毛、紅粘土の料理鍋、牛の蹄鉄ヒツテツ、張り子の採り人形、魔力がある鱈皮のひもなど。エリザベスは頭がぐらくらくしてきた。市場の外れでは、日光が巨人の耳を突き刺すように、真っ赤な僧侶の日傘に射し込んでいた。

ある売店の前で、四人のドラビダ女が大きな木白キナと四本の棒でうこんの根を叩いていた。熱っぽい臭いの黄色い粉が舞い上がり、鼻孔を刺激したので、エリザベスはくしやみをした。もう一刻も耐えられず、彼女はフロローリーの腕に手をかけた。

「ひどい雑踏、それに恐ろしく暑いわ。日陰にはいません？」

彼は振り向いた。実を言うと、自分の話に夢中だったので、相手が暑さと悪臭に参っていることには気がつかなかったのである。もっとも周囲が騒がしいために、彼の話はほとんど彼女には聞こえていなかったが。

「やあ、どうもすみません。すぐ出しましょう。そうだ、リ・イエイク老人の店に行こう。中国人の食品雑貨商です。何か飲み物があるでしょう。ここはちよつと息が詰まりますね」「いろんな薬味のためにちよつと息が詰まるんです。魚でしょうか、あのひどい臭いは何ですか」

「ああ、あれ、手長海老から作るソースの類です。数週間上に埋めておくんです」

「まあ本当にぞつとするわ」

「全然不潔なことではないと思います。こらつ、こつちへ来い」とフロローリーは、えらにとげがありカマツカに似た小魚の籠を嗅いでいるフロローリーをしかつた。

リ・イエイクの店は市場の反対側に面していた。エリザベスは実際、すぐにもクラブに引き返したかったのだが、ランカジャー綿シャツや信じられぬほど安いドイツ時計を積んでいるリ・イエイクの店がヨーロッパ風だったので、市場を回ったあと、彼女の気持ちはいくぶん慰められた。二人が店の階段を昇りかけた時、ロンジーに青色のクリケット用ブルザーコート、あざやかな黄色の靴というひどい装いで、『イギリス風』に髪を分けて油を塗った二十歳ぐらいのヤせた若者が人群れから離れて、二人のあとを追ってきた。若者は合掌礼を無理に控えているかのように、ぎこちなく身体をちよつと動かしてフロローリーに挨拶した。

「何だね」

「手紙です」彼は汚れた封筒を差し出した。

「失礼します」とフロローリーはエリザベスに断つて開封した。マ・ラ・メーからだつた。というより誰かに代筆してもらい、本人はそれにX印で署名しているだけだが、脅迫めいた調子で五十七ペニーを要求していた。

フロローリーは若者をわきに引つ張つていった。「おい、英語は話せるか。あとで処理するとマ・ラ・メーに言つとけ。脅迫しようとしたら、びた一文やらないとも言つとくんだから分かつたか」

「分かりました」

「さあ行け。俺のあとをつけ回すな。さもないと面倒なことになるぞ」

「分かりました」

「書記が仕事を探しているんです」と階段を昇りながらフロローリーはエリザベスに説明した。「あの連中は始終つきまといつてうるさいんですよ」考えてみるとあの手紙の調子はおかしい。マ・ラ・メーがこんなにも早くゆすり始めるとは意外だつた。しかしその時はこれがどういふことなのか考える時間がなかつた。

二人は店にはいった。これまで戸外にいたので暗く感じた。カウンターがないので、商品の籠の間にすわつて煙草を吸っていたリ・イエイクは、はいつてきたのが誰だか分かるど、びつこをひきながら懸命に進み出てきた。フロローリーとは友達だつた。膝が曲がった老人で青い服を着ていた。弁髪で、慈悲深い人の骨相とでも言おうか、ほお骨ばかりであご



のない黄色い顔だった。本人はピルマ語のつもりだがまるで雁の鳴き声みたいな鼻声でフローリーに挨拶し、すぐまた茶葉子を持ってくるよう命じるために店の奥へはいつて行った。

ひんやりとして甘ったるい阿片の匂いが漂っていた。墨で字を書いた細長い赤紙が何枚も壁に貼ってあった。一方には、縫い取りをした礼服を着て大きく穏やかな顔の人物二人を描いた肖像画が小さな祭壇に飾ってあり、前で二本の線香がくすぶっていた。年寄りと娘の中国女が二人ワットにすわり、とうもろこし色の麦わらと、刻んだ馬毛のような煙草を使って葉巻を作っていた。黒い絹ズボンはいた足は、甲がはれ上がり、人形用ほどの大ききで踵が赤い木の部屋ばきに押し込まれていた。裸の赤ん坊が黄色い大蛙のように床をゆつくりと這い回っていた。

「あの足、ぞつとするわ。どうすればあのような形になるのですか。全く不自然ですわ」リ・イエイクが背を向けるのを待っていたようにエリザベスはささやいた。

「いえ、彼女らはわざと足の形をゆがめているのです。本国ではすたれてきていると思いますが、当地の中国人は時代遅れなんです。リ・イエイク老人の弁髪だって時代錯誤です。中国人の考えでは、あの小さな足が美しいのです」

「美しいですって！ 恐ろしく見ていられないほどですわ。この人たちは根っからの野蛮人でしょう」

「とんでもない。高度の文明人です。我われ以上でしょう。美は好みだけの問題です。この国には女の長首を賞賛するパラアンという種族がいます。娘は首を伸ばすために幅広い真鍮の首輪をはめます。首輪をどんどん増やしていつて、ついにはきりんのようになりす。これだってスカートは腰当てや張り骨入りスカート〔硬い布で裏張りしてふくらませたスカート〕同様、全然奇妙でもありません」

この時リ・イエイクが姉妹らしい太った丸顔の娘二人を連れて戻ってきた。二人はくすくす笑いながら椅子二脚と半ガロンはいる青い中国式茶びんを持ってきた。リ・イエイクの妻であるか、妻であった女たちだろう。老人はチョコレート入りの罐を出し、ふたをこじ開けようとしながら父親のようなほほえみを浮かべ、煙草のやんで黒くなった長い歯を二本のぞかせていた。エリザベスはいやな気持ちで腰を下ろした。こんな人たちのもてなしを受けるなんていけないことだと思いついていた。ピルマ女の一人がすげうしろに回って、フローリーとエリザベスをうちわでおおぎ始めた。もう一人は二人の足もとにひざまずき、湯呑みに茶を入れた。エリザベスは女におおがれ、中国人に歯をむき出して笑われている自分が全く馬鹿馬鹿しくなった。フローリーがいつも自分をこんな不愉快な立場に追いつまわすように思えた。エリザベスはリ・イエイクが差し出した罐からチョコレートを一つ取ったが、礼を言う気にはならなかった。

「本当に大丈夫ですの」とフローリーに小声で尋ねてみた。

「大丈夫です？」

「いえ、こんな家にすわってなければならぬんですかということなの。少しばかり、あとう、体面にかかわるんじやありません？」

「中国人は大丈夫です。この国じや恵まれた連中です。考え方も非常に民主的です。対等にあつかうのが一番いいんです」

「ひどい色ね、このお茶つたら。完全に緑色だわ。ミルクを入れるだけの常識もないのかしら」

「悪くはありませんよ。リ・イエイクさんが中国から特別に取り寄せたお茶です。オレンジの花がはいっているんですよ」

「うっ！ 土そっくりの味」と一口飲んで彼女は言った。

リ・イエイクはきせるを手に立っていた。長さ二フイートで、どんぐり大の金属の火皿が付いているきせるだった。彼はヨーロッパ人が茶を賞味しているかどうかじつと眺めていた。椅子のうしろの娘がピルマ語で何か言うとうと、娘二人はまた急にくすくす笑い出した。床にひざまずいているほうが、あどけなく賞賛するような目でエリザベスを見上げた。それからフローリーの方を向いて、イギリス婦人はコルセットをしているのかと聞いた。彼女は『コルシエット』と発音した。

「チッ！」とリ・イエイクは憤慨した様子で娘をだまらせようと足の指でつついた。「とても本人には聞けないね」とフローリーは言った。

「ねえ旦那さま、お聞きになって下さい。本当に知りたいたんです」

押し問答をしていると、うしろの女もおおぐのを忘れてかわって来た。どちらも一度は『コルジェット』の実物を見たいものと長い間思っていたらしい。今までさまざまな説明を聞いてきた。まっすぐなチョッキという方針に基づいて鋼鉄で作られ、身体を非常に強く押さえつけるので乳房が完全になくなるという説明だった。二人は身ぶりですそうと太った肋骨に手を押し当てた。フロロリーさん、お願いですからイギリス婦人に尋ねて下さい。奥に部屋がありますから一緒にお越しいただいて、そこで服を脱いで下さい。何としても『コルジェット』が見たかったです。

そこで突然言葉が途切れた。エリザベスは小さな湯呑みを手に身をこわばらせてすわっていた。二度と茶を飲む気にはなれず、こわばり気味の笑顔を浮かべていた。東洋人たちはひびつとした。イギリス嬢が自分たちの話にはいってこれられないので落ち着きを失っていることに気づいたのである。少し前にはうつとりさせてくれた優雅さと異国風の美しさが、少し恐ろしくなった。フロロリーさえ同じような気持ちになった。東洋人と一緒の時に経験する恐ろしい瞬間、何か言おうとするが何も言えず、互いに目を避ける瞬間が訪れたのだ。その時、奥で籠を引っかき回していた裸の子供がヨーロッパ人のすわっているところへ這ってきた。しばらく彼らの靴や靴下を大変めずらしそうに眺めてから、上の方を見ると白い顔が見えたので、急におびけづいた。子供は激しく泣き出し、床に小便をもらした。

年寄りの中国女が目を上げて舌打ちし、葉巻を巻き続けた。ほかの者は誰も全然注意を払わなかった。水たまりが床に広がった。エリザベスはぞつとし、あわてて湯呑みを置いたので、茶がこぼれた。彼女はフロロリーの腕をひつつかんだ。

「あの子供ったら。見て。あんなことしてるわよ。ねえだれか、ほんとにひどいわ」

一瞬、誰もが驚いて彼女を見た。次いで皆は事態を知って息をのんだ。狼狼のあまり一斉に舌打ちした。それまで誰一人子供に注意していなかった。全く当たり前のことだから注意しなかったのである。しかし今は皆恐ろしく恥ずかしくなった。誰もが子供に罪をなすりつけ始めた。「知らずめ。いやな子だ」とロぐちに叫んでいた。年寄りの中国女が、まだ泣き叫んでいる子供を戸口に連れていき、海綿をしぼるような格好で階段の方に突き出した。ほぼ同時にフロロリーとエリザベスは店から出た。フロロリーはエリザベスのあとを追って道路に出た。リ・イエイクと家の者たちは狼狽して、二人のうしろ姿を見送っていた。

「あれがあなたのおつしやる文明人ですかっ」と彼女はわめいていた。

「すみません、まさか……」と彼は弱よわしく言った。

「なんてまあいやな人たちなんでしょう」

彼女は激怒していた。顔が紅潮して一日早く咲きすぎたけしの花のように、すばらしく美しい桃色に変わった。これ以上は染まれないほどの色だった。彼は市場を通り抜け、本通りまでエリザベスのあとを追った。五〇ヤードほど行ってやつと彼女に話しかけた。

「こんなことになって本当に申し訳ありません。リ・イエイクは本当に礼儀正しい爺さんなんです。あなたを怒らせたと思って残念がることでしよう。せめてもう二、三分いたほうがよかったです。お茶のお礼でも言つて」

「お礼？ あんなことがあったのに」

「でも正直いって、この国じゃあんなことは気にすることじゃありません。この人びとは我われと考え方がまるつきり違います。こちらから合わせるべきです。かりに中世に戻つたとしたら……」

「そんな議論したくありません」

正面きつて喧嘩したのは初めてだった。フロロリーは非常にみじめな気持ちになり、どうしてエリザベスの機嫌をそこねたのか考えることもできなかった。東洋の事物に関心を持たせようと絶えず努めることが、よこしまで紳士の道にはずれ、汚くいやらしいものを意識的に追いかけていることになるのだという印象を彼女に与えていることに彼は気づかなかった。この期に及んでも、彼女がどんな目で現地人を見ているかが分かっていなかった。分かっていることといたら、自分の生き方や思想、審美感を分かちあおうと努

めるたびに彼女がおびえた馬のように尻ごみするということだけだった。

少し遅れ気味に彼女の左側を歩きながらフロローリーは道路を登っていった。そむけたほおや、広つばのフェルト帽からのぞいているうなじの短い金髪を彼は見つめていた。どれほど彼女を愛しく思っていることか。どれほど愛していることか。自分の醜い顔を見せる勇氣もなく、きらわれながらあとからこそそそついてゆくこの瞬間ほど、彼女を愛していることはなかったように思えた。何度か話しかけようとしたが、思いとどまった。声はふるえ気味になるだろうし、彼女を怒らせるような恐れのないことは言えそうになかった。ようやく、何もたいした問題じやないんだと弱よわしく独り決めして、元気の無い声で言った。

「ひどく暑くなってきましたね」

日陰でも華氏九〇度はあるのだから、これは気のきいた言葉ではなかった。ところが驚いたことに、彼女はかなり喜んでそれに答えてきた。振り向いてふたたびほえみさえ浮かべていた。

「ほんと、焼けつくようすわ」

これで仲直りできた。この馬鹿げた月並みな文句がクラブでの無駄話のように緊張をほぐし、彼女の気持ちをみごとに和らげた。うしろをのろのろ歩いていたフロローリーが、はあはあよだれを垂らしながらそばに飛んできた。すぐに二人はいつものように犬の話始めた。帰るまで、その話題はほとんど途切れることなく続いた。犬は尽きぬ話題である。昇る太陽が薄地の服を通して炎のように肩を焼いてくる中で、道を登りながらフロローリーは思った。ああ、いつまで犬の話なのだ。犬以外のことは何も話し合わない。犬でなければ、レコードかテニスのラケットが話題になる。このようなたわいもないことを話し続けている限り、気楽に気持ちよくしていられるのだ。

堀が白く輝いている共同墓地のそばを通り過ぎ、ラツカーステイン家の門にたどり着いた。鳳凰木が回りに生えていた。高さ八フィートのタチアオイの木立もあり、娘の赤ら顔みだいな丸く赤い花が咲いていた。フロローリーは木陰で帽子を脱ぎ顔をあおいだ。

「どうやら暑さがあまりひどくならぬうちに帰れました。市場見物は上首尾とは言えませんが」

「いいえ、とんでもない。楽しかったわ。本当に」

「いえ、ただよくは分かりませんが、残念なことが必ず起こるようすですね。あつ、そうだ。あさつて狩猟に行くことをお忘れじやないでしょうね。ご都合はいかがでしょう」

「結構ですわ。叔父が銃を貸してくれるそうす。本当におもしろいでしょうね。狩猟を一から教えていただきたいと思つています。心から楽しみにしています」

「私もです。今は狩猟の季節じやありませんが、精一杯がんばりましょう。じゃあ、きようはこれで失礼します」

「さようなら、フロローリーさん」

彼はエリザベスと呼んでいたが、彼女のほうはまだフロローリーさんとしか呼んでくれなかった。二人は別れてそれぞれの方向に進みながら狩猟のことを考えていた。どちらもこれが事態を好転させてくれると思つていたのである。

不快で眼けをもよおすほど暑苦しく、玉のれんのせいで薄暗い居間の中で、ウ・ポ・チンは自慢話に耽りながらゆっくり歩き回っていた。時どき手を肌着の下に突っ込んで、脂肪で乳房のように大きく垂れた汗だらけの胸をかいていた。マ・キンはマツトにすわって、細身の白っぽい葉巻をふかしていた。寢室のドアが開けっ放しになっていたので、チーナ村の支柱には靈きゆう車のように彫刻を施してある、大きく角張ったベッドの片隅が見えた。ここで彼は何度女を犯したことだろう。

ウ・ポ・チンが医師ベラスロミに仕掛けてある攻撃の裏にある『もう一つの事情』のことを、マ・キンは今初めて聞いた。マ・キンの頭の程度を軽蔑していながら、ウ・ポ・チンは結局いつかは彼女に大抵の秘密を打ち明けた。身近な者のうちマ・キンだけは彼を恐れないので、彼女に強い印象を与える話を聞かせるのが彼には楽しかった。

「おい、キン。なあキンよ。万事計画通りにいったぞ。わしが出した匿名の手紙はもう十八通にもなる。どれもみごとな出来ばえだったよ。お前が分かるなら手紙の文句を聞かせてやるんだが」

「でも匿名で出した手紙など、ヨーロッパ人たちが無視したら、一体どういうことになりますの」

「無視するだって？ はっはっはっ。そんな恐れは全然ないさ。ヨーロッパ人の考え方なら少しは分かっているつもりだ。いいか、キン・キン、このわしにできることといえば、まづ匿名の手紙を出すことなんだ」

それはその通りだった。ウ・ポ・チンが書いた手紙は、特に第一目標のラゲレガー氏にはもう効き目が現れていた。

ほんの二日前のこと、ラゲレガー氏は、医師ベラスロミが果たして政府に対する反逆者であるかどうかを判断しようとして一晩中頭を悩ました。もちろんポクターが公然と反逆行爲をしたかどうかではなかった。それはまったく無関係であった。問題はポクターが治安の妨害になるような考えを抱く男かどうかという点にあった。インドでは何をしたかではなく、どのような人間であるかによつて判断される。不忠義者かもしれないまよ、と陰でささやかれただけで、現地人の役人にとっては命取りになる。ラゲレガー氏は公正な賢たちの人だったので、たとえ現地人でも黒であると即断するのは避けた。彼は真夜中過ぎまで機密書類の山を前にして迷った。自分宛の匿名の手紙が五通と、サボテンのとげで留めてウエストマイルドから転送されてきた手紙が二通、その中に混じっていた。

彼を迷わせたのは手紙だけではなかった。ポクターの噂はいたるところから耳にはいつてきた。ポクターを反逆者と呼ぶだけでは不十分であり、彼の声望をできる限りいろんな角度から叩くことが必要だということは、ウ・ポ・チンが十分に承知していた。ポクターへの非難は治安妨害のことだけではなく、職務を利用して不当に金銭を取得したことから始まって、強姦、拷問、不法な手術、泥酔状態での手術、毒殺、交感術を利用した殺人、牛肉を食った、人殺しに死亡証明書を売りつけた、パゴダの境内で靴を脱がなかった、憲兵隊の少年鼓手とホモ関係を結ぼうとしたなどと、あらゆることに及んでいた。これらの非難を聞いていると、ポクターとは実にマキヤウエリとヌウイー・トッド〔伝説に語り伝えられる散髪屋。客が金持だとみると散髪用の椅子にすわらせたまま、床下へ落として殺したという〕とサド侯爵を合わせたような悪者であるように思えることだろう。初めのうちはラゲレガー氏もたいして気にとめていなかった。このようなことは見あきっていた。しかし最後に出した匿名の手紙によつて、ウ・ポ・チンはラゲレガー氏に対してもみごとな成果を上げた。

その手紙はチャウタダの監獄から強盗犯ガ・シユエ・オーが逃亡した件に触れていた。ガ・シユエ・オーはうまく立ち回って七年に縮めた刑期をもう半分は務め終えていたが、数ヵ月かけて逃亡の準備をしていた。手始めに、外の仲間がインド看守に賄賂を送った。一〇〇ルピーの前金を受け取った看守は、危篤の身内を見舞うという口実で休暇をとり、マソダリーの売春宿で五、六日あわただしく遊んだ。時はいたずらに過ぎ、逃亡は何度か延期になった。一方、看守の方は以前遊んだ売春宿への思いが日に日に募るばかりで、どうとう逃亡の計画をウ・ポ・チンに売って金にしようとした。ウ・ポ・チンにとってこれは絶好の機会だった。彼は一切口をつぐんでいなければ恐ろしい罰を与えると言つて看守をおどしつけ、どうしても阻止できないように逃亡予定の前夜になつてから、ラゲレガー氏に匿名の手紙で計画を密告した。当然ながら手紙には、監獄の監督である医師ベラスロミが

賄賂を取って逃亡を黙認していると付け加えられていた。

翌朝、ガ・シユエ・オーの逃亡を知って監獄はごった返し、看守や警官が走り回っていた。(シユエ・オーは、ウ・ポ・チンが用意したサンパンではるか河下に逃げている)。今度はワグレガー氏もあわてた。誰が例の手紙を書いたにせよ、その人物が逃亡計画をひそかに打ち明けられていたのはまず間違いないことであり、ボクターが黙認したという情報もおそらく間違いはなからう。ことは重大だ。賄賂をもらって凶人の逃亡を見逃すような監督は何をしでかすか分からない。だから……。この論理は十分に筋が通っていないかもしれない。しかしワグレガー氏にはつきりと筋が通っているように思えた。ボクターは反逆者だという非難の本筋は十分信じられるものと思えてきた。

ウ・ポ・チンは他のヨーロッパ人たちにも手を回していた。ボクターの友人で彼の名声を支えているフローリーに対して、ボクターを見捨てるように脅迫するのは、赤子の手をねじるようなものだ。ウエストフイルドの方は少し手ごわかった。彼だけは警官なので、ウ・ポ・チンの人物を熟知しており、陰謀を覆される恐れがあった。警官や判事は本来敵である。しかしウ・ポ・チンはそれさえ利用する術を心得ていた。彼は、賄賂好きで世間に隠れもない悪党ウ・ポ・チンとボクターはぐるになつていっていると非難した手紙を、もちろんこれも匿名で書いた。これにはウエストフイルドも騙された。エリスには匿名の手紙などを送る必要はなかった。彼は誰よりもボクターを悪者扱いしていたからである。

ウ・ポ・チンはラツカーステイーン夫人にまで匿名の手紙を出していた。ヨーロッパ人の間で女性が持っているからである。その手紙には、医師ベラスロミがヨーロッパ人女性を誘拐し強姦するように現地人をそのかしていると書かれていた。それ以上詳しいことは書いてなかったし、書く必要もなかった。ウ・ポ・チンはラツカーステイーン夫人の弱点をみごとに衝いていた。『反逆』『民族主義』『反乱』『自治』などの言葉を聞いて夫人が思い浮かべる場面といえれば、白い目をぎよろつかせた真つ黒な人夫たちに輪姦される場面だけだった。そのような場面を想像するだけで夜も眠れぬことがあった。万事この調子だったから、ヨーロッパ人がボクターに今までどれほどの好意を寄せていたにしても、そのような好意など見るまに消えていった。

ウ・ポ・チンはうれしそうに言った。「だから分かるだろう、わしがあいつの評判を傷つけてやったのが、あいつは根元を切られた木のようなものだ。こつんと叩けば倒れてしまう。三週間もせぬうちに、このわしがこのこつんをやつてやる」

「どのようにして？」

「これから話すぎ。お前にもそろそろ聞かせてよかろう。お前はこのようなことは全然分からないが、ロだけは堅いからな。トソワ村でくすぶっている反乱のことは聞いたことがあるだろう」

「ええ、聞きましたよ。それにしても馬鹿ね、あの村の人たちは。短剣と槍だけでインド兵に立ち向かつて何ができるといふんです。獣のように撃たれるだけでしょうに」

「もちらろんだ。戦いが起こりや、虐殺されるだけだろうな。しかしあの連中など迷信好きな百姓にすぎない。馬鹿なやつらだ。配られた防弾チョッキとやらに効き目があるなどと思っている。軽蔑するほかないね、あの無知な輩は」

「かわいいそうに、なぜ止めてやらないんです、ウ・ポ・チン。逮捕者を出す必要なんてないでしょう。あなたが村に行つて、お前たちの目論見は全部分かっているとさえ、それでもやろうという勇氣などあの人たちにはないでしょうに」

「そりやあその気になれば、わしなら止められる。しかしそんな気はないね。こちらには都合があるんだ。なあキン・キン、これはだまっておれよ。言ってみれば、わしが反乱するようなものなんだから。今度のことを計画したのは、ほかでもないこのわしなんだ」

「何ですって！」

驚きの余りワ・キンは吸っていた葉巻を落とし、目を皿のように見開いたので、黒目の回りに、青みがかった白目が全部見えただだった。こわくなってワ・キンは叫んだ。

「コ・ポ・チン、今何と言いました？ まさか本気じゃないでしょうね。あなたが反乱を企てているなんて、まさか！」

「いや、そのまさかだよ。それもみごとに運んでいる。ラングーンから連れて来た魔術師が頭の切れる男でね。サーカスの魔術師だと触れ込んでインド中を回ってきた男なんだ。防弾チョッキはホワイトウエイ・アソド・レイドロ商會から手に入れた。一着ルビーヘアナした。そうとうの出費だよ」

「そりやそうでしょうが。ね、コ・ポ・チン。反乱だなんて、こわいわ。戦いで撃たれて死ぬのは気の毒な百姓たちでしょう。あなた、気でも狂ったんですか。自分が撃たれるのはこわくないんですか」

ウ・ポ・チンは驚いて足を止めた。

「あきれたね、女ってこれだからな。一体何を考えてるのやら。このわしが政府に対して反乱を起こすでも思っているのかね。三十年も勤めてきた役人だよ。ほんとうに何を言うやら。わしが言ったのは、このわしが反乱の種を蒔いてやったということなんだよ。誰があんな連中と一緒に戦うもんか。危ない目にあうのは村の馬鹿どもで、わしじやない。まさかわしが反乱と関係があるなどとは誰も夢にも思っていないし、これからも思うまい。パ・セイソト一、二を除けばな」

「でもたった今、あの人たちに反乱を吹き込んだのは自分だとおっしゃったじゃありませんか」

「言ったとも。わしはペラスロミが政府への反乱を焚き付けているのだと言った。だから反乱を起こさぬわけにはいかないだろう？」

「分かったわ。じや反乱が起こつたらペラスロミ先生の責任だと言うつもりなんですか」

「まったくもの分かりの悪いやつだな、お前も。馬鹿でも分かりそうなものだが。わしが反乱を起こさせようとしているのは、鎮圧するためなんだよ。わしはね、マズレが一さんは何と呼んでいるかな？ そうだ！ 間諜だ。と言っても分かるまい、ラテン語（実際はフランス語）だからな。わしはその間諜なんだよ。まずトソク村の馬鹿どもに反乱をそのかす。そのあと連中を捕える。反乱が起こる寸前に首謀者に躍りかかり、一人残らず引つ捕えて牢に放り込むんだ。あとでちよつとした戦いぐらいはあるだろう。多少は殺されもしようし、アンダマン群島（ベンガル湾にある群島）に流される者も出てこよう。しかしその間、わしは第一線で活躍する。ウ・ポ・チンって？ ああ、危険極まりない反乱を未然に防いだあのお方ですか、つてな具合にね。わしはこの地方の英雄になるんだ」ウ・ポ・チンは自分の計略に当然ながら悦にいきり、両手を背に回して笑いながら部屋を歩き回り始めた。マ・キンはしばらく無言で計略のことを考えていたが、ついに言った。

「コ・ポ・チン、あなたがどういうわけでそんなことをしているのか、どう考えても分かりません。その先どうなるんですか。ペラスロミ先生と何の関係があるんですか」

「キン・キン、お前はいつまでたつても利口にならないね。ペラスロミがわしの邪魔になるのだと、初めに言っただろう。今度の反乱こそ、やつを除く手だてなのだ。もちろんやつが反乱に対して責任があるのだと証明して見せるつもりはない。だがそれがどうしたというんだ。ヨーロッパ人は皆、やつが何かの形で反乱に関係があつたと思ひ込む。それがあ連中の考え方だよ。そうなればやつの一生涯はおしまいだ。やつが落ちれば、わしが浮かび上がる。やつをうまく悪人に仕立て上げれば上げれば、わしの行動は立派に見えてくるとだろう。分かつたか」

「ああ、今はつきりとね。それにしても何と卑劣で、よこしまな計略なんです。よくまあ口に出して取っかしいと思いませんのね」

「おい、キン・キン。まさかいつもの馬鹿馬鹿しい説教をおつ始めるんじゃないだろうね」

「コ・ポ・チン、あなたがつて人はどうして悪いことをしてるときか楽しめないんです？ なせ他の人びとを苦しめることしかないんですか。先生や村人たちのことを考えてあげたら。気の毒に、先生は地位を追われるし、村人たちは撃ち殺され、竹で叩かれ、終身監獄につながれるなんて……そんなことをする必要はあるんですか。もう十分に財を積んだのに、これ以上金を稼いで一体どうするつもりですか」

「金だつて？ 誰が金目当てだと言つた？ この世にや金以外に欲しいものがたくさんあることは、女のお前でもいつか分かるだろう。名声だつて欲しい。偉くもなりたい。反乱で忠誠を示せば、ビルマ政府がそれを称えて胸に勳章を飾ってくれるかも知れんのだぞ。お前はそんな譽れをうれしいと思わんのかね」

マ・キンは別に感心もせず、首を振つて言った。「コ・ポ・チン、あなたはこれからさき千年も生きるわけじやないつてことがいつになつたら分かるのです？ 生前に悪いことをした人間はどうなるか、考えたことがあるんですか。ねずみや蛙の姿に変えられるかも知れない。地獄まであるんですよ。昔、坊さんが地獄の話をしてくれたことがあります。パリー語（インド古代の通俗語）の仏典から翻訳したということでしたが、そりや恐ろしかったわ。『十万年に一度ずつ、眞つ赤に焼けた二本の楯先がその人の心臓の中で合わされるのです。そうするとその人は自分に言つて聞かせます。ああ、また十万年分の苦しみが終わつた。しかし今後も今まで以上にこの苦しみが続くんだ』こんな話だつたわ。コ・ポ・チ

ン、このことを考えてもこわくないんですか」

ウ・ポ・チンは、パゴダを建てりやいいさ、という意味で笑いながら無造作に手を振った。

「あなたなら最後が来た時でもそうして笑っていることでしょうね。でも私はご免ですよ。そんな人生を振り返りながら死んでいくなんて」ウ・キンは夫を非難するように、やせた肩をウ・ポ・チンに向け、消えた葉巻にもう一度火をつけた。ウ・ポ・チンはなおしばらく部屋を行ったり来たりしていた。それからまた喋り始めたが、今度は少しまじめになり、はにかんでいる気配さえ感じられた。

「なあキン・キン、実を言うと、今度の計略の裏にはもう一つ別の事情があるんだ。まだお前にも他の誰にも言っていないが。パ・セインにも知らせてはいない。しかしお前にはそろそろ打ち明けてもよからう」

「また何か悪だくみというのなら、もう聞きたくありません」

「ちがう、ちがう。さきほどお前は、わしの本当の狙いは何かと聞いただろう。どうやらお前は、わしがペラスロミを陥れようとしているのは、ただやつがきらいで、賄賂に対するやつの態度がはた迷惑だからだと考えているようだね。実はそれだけじゃないんだ。もつと大事なことがあるのだ。わしにもお前にも関係のあることが」

「何です、それは？」

「キン・キン、お前はもつと上流の生活を望んだことがないのか。わしらが、いや、わしがこれほどの出世をしながら、二人の生活は相変わらず昔のままだとは思わないか。今じゃ二〇万ルーピーもの財産があるというのに、生活の方はどうだ？ この部屋は何だ。百姓部屋と全然変わらんじやないか。相変わらず手づかみで食らい、ビール人どばかり、金もなく程度も低い連中とばかり付き合つて。町の小役人のようなみずばらしい生活じやないか。金だけじゃ駄目なんだ。ああ出世したなあと思えるようになりたいんだ。お前も時にはもう少し、何と言うか、程度の高い生活をしたいたいと思わないか」

「これ以上望めるなんて思えません。私がまだ村の小娘だった頃は、こんな立派な家に住める日が来るなどとは思っていませんでした。そのイギリヌ製の椅子をごらん下さい。私はまだその結構な椅子にすわらせてもらったことはありません。でもその椅子を見て、これが全部自分のものだと思つて鼻高だかな気持ちになりますよ」

「何を馬鹿な！ お前なんかずつと村で暮らしてりやよかつたんだ、キン・キン。お前など石の水がめを頭に載せて、井戸端会議をやつてるのが似合いだよ。しかし有難いことに、わしには大望がある。ペラスロミを陥れる計略をめぐらす本当のわけを教えてやろうか。わしは本当にでかいことをしようという腹なんだ。気高く暮れることをな。東洋人が望める最高の榮譽をね。と言えどももちろん分かるだろう、わしの言つてることが」

「分かりません。どういふことですか」

「おいおい、わしの生涯で最大の働きになるんだぞ。何かぐらいは分かるだろう」

「ああ、分かつた。車を買うんでしょう。しかしね、ウ・ポ・チン、私がそんな車に乗りがつていては思つてゐるなら当てはずれですよ」

ウ・ポ・チンはうんざりして両手を広げた。「車だつて。お前の頭は市場のピーナツ売り程度だな。車など欲しけりや二十台でも買えるが、こんな町で車を買つてどうするんだ。もつともつと壮大なことだよ」

「じや何です？」

「それはな、たまたま耳にした話だが、ひと月もすればヨーロッパ人たちは現地人を一人クラブの会員に選出するらしい。そうしたいと思つてはいないだろうが、いずれ総弁務官からその旨通達があるだろう。そうなれば彼らも従わないわけにはいかない。普通なら当然ペラスロミが選ばれるだろう、この地方一の高官だからね。しかしわしはペラスロミの名前を汚してやつた。だから……」

「どうなると言ふんです？」

ウ・ポ・チンはしばらく答えないうでウ・キンを見ていた。彼の大きく黄色い顔はゆるみ、広いあごは垂れ下がつてたくさんの歯が見え、子供のような顔になり、黄褐色の目には今

にも涙が浮かんできそうだった。今から言おうとしていることの大きさに圧倒されたのか、何かを恐れるような低い声でウ・ポ・チンは言った。

「分からぬか、お前には。ベラスロミの評判が落ちれば、代わりにこのわしがクラブの会員に選ばれることになるのが」

最後の言葉は決定的だった。マ・キノの口からは、もはや反論の言葉が出てこなかった。ウ・ポ・チンの計画の大きさには彼女も肝を潰した。

それもそのはずで、ウ・ポ・チンがこれまでに成しとげたことなど、今やるうとしていたことの比ではなかった。下級官吏がヨーロッパ人のクラブには入り込むなんて、特にチャウタダではまさに離れ技だった。ヨーロッパ人のクラブこそ、遠くから望む神祕の寺院であり、涅槃ネはんよりもなお近づき難い聖地中の聖地だった。マソダラーの貧民窟に裸で育ち、こそそ物をくすねる程度の書記で、名もない木っ葉役人だったポ・チンが、クラブという聖地にはいつて、ヨーロッパ人に「やあ、君！」と呼びかけ、ウイスキー・ソーダを飲んで、緑のテーブルで白い球を打ち合う。椰子の葉で屋根をふいた竹小屋で生まれた、田舎女のマ・キノが、高い椅子に腰を下ろし、足には絹のストッキングにハイヒールをはいて、（そうだ、クラブに行けば本当にハイヒールをはくことにしよう！）ヒンズスタン語でイギリスのご婦人方とリソネル製赤ちゃん用品の話をする。そのような場面を想像すれば誰だって目もくらむ思いだろう。

ヨーロッパ人のクラブとそれに連なる華やかな場面の数かずを思い浮かべて、マ・キノは口を開けたまま長い間何も言わなかった。ウ・ポ・チンの陰謀を非難する気にならないのは結婚以来初めてのことだった。このようにマ・キノの優しい心に大それた望みの種を蒔いたことこそ、クラブに無理やり入れてもらうよりも一層みごとな離れ技かも知れなかった。



フロローリーは病院の門を清る時に、ぼろ服の掃除夫四人とすれちがった。袋地にくるんだ人夫の死体を密林に掘った深さ一メートルの墓穴へ運んでいくようだった。病棟に囲まれた中庭は煉瓦タイルのように堅かった。広いペラソダの至るところにシートも敷いていない簡易ベッドが並んでおり、人びとが灰色の顔で口も利かず、身動きもせずに横たわっていた。切断された手足をむさぼり食うと言われている汚らしいのちが大が数匹、建物の基礎杭くいの間で、眠つたりのみを取ったりしていた。病院全体にだらしなく腐った雰囲気を感じられた。ペラスロミ先生はここを清潔にしようと思命に努めていたが、ほこりつぽさ、給水の悪さ、掃除夫や中途半端な教育しか受けていない外科助手の無気力さはどうにもならなかった。

ボクターは外来患者用の病棟にいたことだった。その部屋はテーブルが一つに椅子が二脚備えてあり、壁はモルタルで、ヴァクトリア女王の汚れた肖像画が大きくねじれて掛かっているだけだった。色あせたぼろ着の下から節くれだった腕をのぞかせているピルマの百姓たちが、テーブルのところまで一列に並んでいた。ボクターは汗だくのワイシャツ姿だった。フロローリーを見ると急いで立ち上がり、うれしそうに叫び、例によってせかせかと空いた椅子にすわらせ、テーブルの引出しから葉巻の罐を取り出した。「フロローリーさん、ほんとによくお訪ね下さいました。まあ、このようなどころですが、まず気楽になさって下さい。あとで私の家に行つて楽しくビールでも飲みながらお話ししましょう。診察がありますので失礼します」

フロローリーは腰を下ろした。とたんに熱い汗が吹き出し、シャツはびしょぬれになった。暑さで息詰まるほどだった。百姓たちは毛孔という毛孔からにんにくの臭いを吹き出していた。患者がそばに来るたびに、ボクターは椅子から飛び上がるような勢いで立ち、患者の背中をつつき、胸に黒い手をあてた。それから柄の悪いピルマ語でたみかけるようによく質問をし、急いでテーブルに戻り、処方せんに何か書き込んだ。患者は中庭を横切つて処方せんに薬剤師のところを持って行つた。薬剤師は水とさまざまな植物性薬液がはいったびんを与えた。薬剤師は主として薬を売りさばいて生計を立てていた。政府からはひと月二五ルーシしか出なかつたからである。しかしボクターはこのことを全然知らなかつた。

朝はたいいボクター自身が外来患者を診る時間がないので、外科助手に任せていた。助手の診察は簡単だった。「どこが痛みますか。頭？ 背中？ それともお腹ですか」と尋ね、答えを聞くと、前もつて用意しておいた三種類の処方せんから適当に一枚取り出すだけだった。患者にはこのほうがはるかに好評だった。ボクターは性病にかかつたことがあるかときく癖があつた。これは失礼で無意味な質問だった。時には手術をする必要があると言つて一層こわがらせた。患者はこれを『腹切り』と呼んでいた。大半の者は『腹切り』されるぐらいなら死んだ方がよほどましだと思つていた。

最後の患者が終わると、ボクターは椅子に深ぶかど腰を下ろし、処方せんで顔を扇いだ。

「ああ暑い。にんにくの臭いがいつまでも鼻に残るような気がすることにさえありますよ。驚くじやありませんか、血の中にまでにんにくがしみ込んでいます。息が詰まりませんか、フロローリーさん。あなた方イギリス人は嗅覚が異常なほど発達しています。この不潔な東洋では本当に苦しい思いをなさつてのことでしょう」

「こちらに来る者すべからく鼻を捨てるべし。どうです、スエズ運河にそのような立て礼を掲げたら。けさは忙しそうですね」  
「相変わらぬね。ですがこの国で医者をするのは実に張り合ひがありません。村の連中ときたら不潔で無知な野蛮人ですよ。こちらにできることといえば、連中を病院に引つ張つてやることだけです。メスで切られるくらいなら《えそ》で死ぬか、十年間もメロンほどもある腫れ物をぶらさげている方がいいと思つていらっしゃるやうなやつらです。医者と称する連中が与えている薬といつたら、新月の朧につんだ薬草、虎のひげ、犀の角、小便、月経を混ぜたものなのです。あのような物を飲むことができるなんて、考えただけでぞつとしますよ」

「でも、絵にはなりますね。ピルマ薬物標本を編集なさいませんか。カルペパー〔十七世紀のヴァージニア総督〕の作つた標本に劣らず立派なものになるでしょう」  
「野蛮な畜生どもめ！」とボクターは言いながら白い上衣を着ようとした。

「家に参りましょうか。ビールがありますし、氷も二、三片残つています。十時に手術があります。緊急の脱腸手術ですが、それまではひまです」

「じゃあそうしましょうか。実はお話ししておきたいことがあるんです」

二人は中庭を横切り、ボクターの家のペランダへ階段を昇った。冷蔵庫の水は全部生ぬるい水に変わっていた。ボクターはビールの栓を抜き、召使にぬらした妻やら製吊り袋にビールをたくさん入れておくと命じた。フロローリーは帽子のままペランダの手すりから向こうを見ていた。実のところ、彼は言い訳のために来たのである。クラブでボクターを侮辱する掲示に署名した日以来、実に二週間近くも会うのを避けてきた。しかし言い訳はしなければならなかった。ウ・ポ・チンの人を見る目は確かに鋭いが、フロローリーをおどして友人から永遠に遠ざけるには、匿名の手紙二通で十分だと考えたのは間違いだっただけだ。

「ところで先生、私が何を言いたいか、お分かりでしょう」

「私が？ いいえ」

「いや、お分かりのほうです。先週あなたに仕掛けたあの卑劣な仕打ちのことです。エリスがクラブであのような掲示をし、私がそれに署名した時のことです。もうお聞きになっているでしょう。そのことで説明したいんです」

「いえ、とんでもない」ボクターは固り果て、フロローリーに駆け寄り、腕をつかんだ。

「説明などなさらなくて下さい。何もおつしやらないで。よく分かっています、十二分に」

「いや、お分かりにはなっていない。無理な話です。どのような圧力を加えられればあのようなまねをするのか、お分かりではないはずですが。実のところ、署名の強制はなかったのです。たとえば私が拒絶していても、どうってことはなかったでしょう。東洋人に対してひどい態度をとれという法律もないしね。いやその逆ですよ。ですが、東洋人に忠義立てする勇気がないんです。他の連中と対立することになりますから。そうなればどうしようもありません。署名にあくまで反対していたら、一、二週間はクラブで爪はじきになったことでしょう。いつものことですが、それがこわかったんです」

「おやめください、フロローリーさん。お願いします。でなければ、それこそ私は不愉快な気持ちになります。まるでこの私があたなの立場など一切酌量できないと言わんばかりですよ」

「我われのモットーはですね、『インドではイギリス人のまねをしる』です」

「もちろんですとも。非常に立派なモットーです。あなたの言われる『団結』です。イギリス人が我われ東洋人よりすぐれている秘密はそこにあるんです」

「まあ言い訳などしても始まりません。きょうお邪魔したのは、二度とあんなことはしなさいと申しあげたためです。実は」

「ねえフロローリーさん、その話はもう打ち切りにして頂ければ有難いですが。もう終わったことです、忘れましょう。ビールをあげて下さい、お茶のように熱くならないですよ。ところで私にもお話ししておきたいことがあります。私からの情報はまだ尋ねてくださいませぬね」

「ああ、あなたからのね。どんな情報ですか。近頃はどんな具合ですか、英帝国イギリスの病状は。まだ瀕死の状態ですか」

「あははは、低調です、大變。でも私ほどではありません。私は水中に深く沈んでいるんです」

「何です？ またウ・ポ・チンの野郎ですか。まだ悪口を言いふらしてませんか」

「悪口を言いふらしてるところじやありません。こんどは、何というか、実に凶悪なんです。この地方で起こりそうだとかいう反乱のことは聞いていませんか」

「噂なら何度も聞きましたよ。ウエストフレイドは皆殺しの意気込みで出かけたが、反逆者など見つからないらしい。例によって税金を払おうとしないハンズデン十七世紀の英國政治家でチャールズ一世の課した製鐵税を拒絶した流の農民しかいないそうですよ」

「そうでしょうね。とんでもない馬鹿者たちだ。支払いを拒んでいる税額がどれだけご存知ですか。たったの五ルピーなんです。まもなく飽きておうでしょう。こんな騒ぎは毎年あります。でも反乱と称されているものには、表面に見えている以上のものが隠されています」

「ほおー、何ですか」

フロリーが驚くほど、ボクターの怒りの動作が激しかったので、ビールがほとんど全部こぼれてしまった。彼はペラソダの手すりにグラスを置いて吐き出すように言った。  
「またウ・ポ・チンのしわざです。あの極悪人め、あの情なし鱈め、あの……あの……」

「もともとと。『あの吹出物だらけで胴だけの助平野郎、水ぶくれ野郎、汚い強欲野郎め』まだまだ足りないよ。で、今度は何を企んでいるんですか」

「前代未聞の悪事です」ここでボクターは見せかけの反乱という陰謀を概説した。ウ・ポ・チンがマ・キンにしたのとほぼ同じ説明だった。ボクターが知らないのはただ一つ、ヨロツパ人クラブの会員に選ばれようというウ・ポ・チンの魂胆だけだった。ボクターの顔は正確には紅潮していると言えなかったが、怒りのために大分黒みを増していた。フロリーは驚きのあまり突っ立ったままだった。

「ずる賢い老いばれ悪魔め。そんなことを企んでは誰が考えただろう。でもあなたはどのようにしてそれを突きとめたんです」

「いやあ、私にも友達の間、三人は残ってますよ。けれどあの男がどのような破滅を私に対して企んでいるかお分かりですか。もう至るところで私のことを中傷しました。この馬鹿げた反乱が起これたら、それと私の名前を結びつけるのに全力を注ぐことでしよう。忠誠心に少しでも疑惑がかけられれば破滅です、破滅なんです。私がこの反乱に同調してるときやかれたら、それでおしまいです」

「何を馬鹿馬鹿しい。何か自分で身を守る方法があるでしょう」

「何の証明もできなければ、どうして身を守れるんです？ 陰謀が否定できない事実だということを知っていても、それが何の役に立つんですか。公開尋問を要求しても、こちらが証人を一人出せば、向こうは五十人も出してくるでしょう。この地方でウ・ポ・チンの影響力がどんなに強いかわかるお分かりになっていません。誰もあの男に不利な証言をする勇氣ありませんよ」

「でもなぜ証明が必要なんです。なぜマガレガーさんのところに行つて、そのことを話さないんです？ あれなりに大変公平な人です。言い分は最後まで聞いてくれますよ」

「そんなことしても、なんの足しにもなりません。フロリーさんは陰謀など無縁のお方だ。『弁解する者は自白している』と言うじやありませんか。私に対して陰謀が企まれています、などと叫んでみても何にもなりません」

「じや、どうするつもりですか」

「私にできることなど何もありません。ただじつと我慢して、フナギ威信が苦境を切り抜けさせてくれるのを願うだけです。現地人役人の地位が危うくなるこの種の事件では、証拠や証言などは問題になりません。万事ヨロツパ人との関係次第なんです。関係がよければ、中傷は信じられなくなり、関係が悪ければ信じ込まれるでしょう。威信がすべてなんです」

二人はしばらくだまっていた。フロリーは「威信こそすべてだ」という言葉の意味が十分飲み込めなかった。こういうつかみどころのない争いには慣れていない。疑惑が証拠より、そして評判が千の証言より重きをなすような争いである。ある考えが頭に浮かんだ。三週間前なら決して浮かんでこなかったような、不愉快で寒気を催す考えだった。自分の義務にはつきり気づき、何としても逃れたいと思いつつも、やはり果たさなければならぬと確信するような瞬間だった。

「例えばの話ですが、もしあなたがクラブの会員に選ばれたら、威信がいくらかでも高まりますか」

「もしクラブの会員に選ばれたら？ もちろんですとも、クラブは難攻不落の要塞です。いったんあそこにはいれれば、あなたやマガレガーさん、その他のヨロツパ人の紳士方の場合と同様、誰も中傷など耳を傾けなくなるでしょう。ですが偏見を抱かれています。選出されることなど望みません」

「まあ先生、聞いてください。いい考えがあります。次の総会であなたの名前を提案しましょう。その時に議長がこの問題を上程しなければならぬのは分かっています。候補者の名前が出たら、エリス以外誰も反対投票はしないでしょう。そのうちに……」

「フロリーさん、本当に」

ボクターは感情が高ぶつて、息が詰まりそうだった。彼はフロリーの手をつかんだ。

「フローリーさんって本当にご立派な方ですね。でもそれじや分に過ぎます。またヨーロッパ人のお友達ともんちやくを起こされることになるでしょう。例えばエリスさんがあなたの提案を黙認するでしょうか」

「畜生、エリスめか。しかしあなたを選出させると確約できないことはご承知いただきたいんです。ワグネル氏が言うか、他の会員がどんな気持ちか次第です。完全な失敗に終わるかもしれません」

ボクターはまだ丸っこい湿った両手でフローリーの手を握っていた。眼鏡のせいで大きく見える目に涙が浮かんで、澄んだ犬の目のように光り、ボクターはフローリーを見つめていた。

「フローリーさん、選ばれさえすれば心配事などぶっ飛んでしまえます。しかし今も申しましたように、このことではせつかちにならないで下さい。ウ・ポ・チンに用心して下さい。今じやあなたも敵のひとりには教えていることでしょう。やつは敵意はあなたにとつてさえ危険です」

「いや、私には手出しできませんよ。今までのところ何もしてません。馬鹿げた匿名の手紙が二、三通だけです」

「どうでしょうか。やつは巧みに襲撃します。私がクラブの会員に選ばれないように全力を尽くすでしょう。あなたに弱点があれば、用心して下さい。きっとさぐり当てますよ。やつはいつも一番の弱点を突いてきますよ」

「罫のように」フローリーはそれとなく言った。

「ええ罫のように」ボクターは真剣な顔で同意した。「しかし万ヨーロッパ人クラブの会員に選んで頂けたら、申し分ありません。ヨーロッパ紳士の仲間に加えて頂くなんて実にご名譽なことですよ。しかし今まで口にしたくなくかつたことがもう一つあります。はつきりご承知しておいてもらいたいんですが、私はクラブを利用するつもりなど毛頭ありません。会員になることだけを望んでいるのです。たとえ選ばれても、厚かましくクラブに顔を出そうなどとは思っていません」

「クラブには来ないのですか」

「ええそうです。ヨーロッパ紳士に私との交際を押しつけるようなことは絶対にいたしません。会費だけ払うべきだと思います。それでも私にとつては随分大きな特権です。分かっていただけますね」

「ようく分かっていきますよ」

フローリーは丘を登りながら、笑いを押さえきれなかつた。自分はボクター選出を提案するとはつきり約束してしまつた。他の連中が聞いたら大変な騒ぎになるだろう、めちやめちやの大騒ぎに。しかし驚いたことに、そう考えても笑いがこみ上げてくるだけだつた。ひと月前なら、そのような事態を予想すれば度を失つたであろうが、今はかえつてうきうきした気分になつた。

なぜだろう。それにどうしてあんな約束をしたのだろうか。取るにも足りないことで、それほどの危険を冒すわけでもなく、雄々しいところなど全然ないが、それでも自分には珍しいことだつた。長年用心深く『まことの紳士』らしく過ごしてきたのに、これほどいきなり規則をすべて破つたのはなぜだろうか。

理由は分かつていた。エリザベスが生活の中に登場して、以前の汚くみじめな歳月など一切なかつたように思えるほど大きく生活を変えてくれたからである。彼女の出現は、彼の精神の活動範囲まで変えてしまつた。イギリスの雰囲気を甦らせてくれた。思想は自由であり、劣等人種強化のため『まことの紳士踊り』を永遠に舞い続ける必要などない、あのかつかしいイギリスの雰囲気を。以前の生活はどこへ消えたのだろうか、と彼は思った。彼女がいてくれるだけで彼は立派な振舞いが楽しめるようになった。

門から庭にはいつた時にまた思った。以前の生活はどこに行つたのだろうか、と彼は思った。救いは存在する、人生はやり直しがきくと信心深い人びとは言うが、その通りだといふことに気づいたからである。小径を歩いてみると、家も花も召使も、ほんの少し前まではまだ倦怠とホームシックに浸つていた生活全体が、どういふわけか新しく、大切に、かつ無限に美しいものになつた。体験を共にしてくる人がいさえすれば、すべてがどれほど楽しくなることだろう。独りきりでさええなければ、この国が心から好きになるだろう。ネロが小径に出て、日差しをもとせせず、植木屋が山羊にえさを運ぶ途<sup>もろ</sup>中落とした物を拾つていた。フローリーがあえぎながらネロに駆け寄つた。ネロはばたばた飛び上がり、フローリー

リー肩にとまった。フロリーはこの小さな雄鶏を腕にかかえ、絹のような首と、なめらかでダイヤモンド型の羽根に覆われた背を撫でながら家の中にはいった。ペラソダに足をかける前にもうワ・ラ・メーが中にいるのが分かった。悪い知らせですという顔付きをしたコ・ヌラが家から急いで出てくるのを待たずもなかった。フロリーはびやくだん、にんにく、椰子油、髪のリサスミンなどの匂いをすでに嗅ぎつけていた。ネロをペラソダの手すり越しに庭へ落としてやった。

「女が帰ってきました」とコ・ヌラは言った。  
フロリーは鼻が青になった。青ざめると、痣のために恐ろしく醜くなった。劇痛が氷の刃のように内臓を貫いた。ワ・ラ・メーは寝室の入口に姿を見せしており、うつ向いて、上目づかいに彼を見ていた。

「旦那さま」と彼女はふあいそで同時に思いつめたような声で低く呼びかけた。

「立ち去れ」フロリーは恐怖と怒りをコ・ヌラにぶつけた。

「旦那さま、寝室に来て下さらない？ お話があるの」とワ・ラ・メーは言った。

彼は彼女に付いて寝室にはいった。まだ一週間にしかならないのに彼女の身なりは異様に墮落していた。髪はグリースで汚れ、首飾りのロケットは全部なくなり、ニルビー入アナの花木綿のワンピース・ロンジを着ていた。おしろいをこすり塗った顔は道化師の仮面みたいだった。髪は生えきわはおしろいがないので、褐色の皮膚がリボン状にのぞいていた。どう見ても売春婦だった。フロリーは目をあわせるのを避けて、渋い顔で、聞いた戸口からペラソダの方を眺めていた。

「このように戻ってきて、一体どういうつもりだ。なぜ村に帰らなかった？」

「チャウタダのいとこの家にいるわ。あんな目にあわされてどの顔さげで村に帰れるの？」

「それに人をよこして金をせびろうとはどういうつもりだ。一週間に一〇〇ルピーくれてやったばかりじゃないか。まだ欲しいなどと言えた義理か？」

「帰れません」と彼女は相手の言葉など無視して繰り返した。声がかん高くなったので、彼は女の方を振り返った。女は黒いまゆを寄せ、口を尖らせて、ふくれっ面のまま直立していた。

「なぜ帰れないんだ？」

「あんな目にあわされて、あんな仕打ちを受けて」

突然女は激しく攻撃し始めた。市場の女たちが喧嘩する時のヒスリックな品のない金切り声になった。

「村にまで帰れないわ。今まで軽蔑していたあの低級で低脳な百姓どもにあざ笑われ、うしろ指をさされるだけよ。白人の妻だったのよ私は。なのに親父の家に帰って、醜い婆さんや、夫も見つからない醜女たちと一緒に福かごを揺すれますか。そんな恥さらしな。二年もあんなの妻だった。あなたは可愛がり、世話してくれたわ。それを何の予告も理由もなく、犬のようにこのあたしを追い出したのよ。無一文で、宝石や絹のロンジを全部なくして村に帰らななきゃならない。皆あたしを指さして言うわ。『利口ぶってたワ・ラ・メーだ、見てやれ。白人の亭主に追っ払われたんだ、例によって』とね。身の破滅だわ。二年もこの家で暮らした女と結婚してくれような男がいますか。あたしの青春を奪って、恥しらす！」

彼は女の顔をまともに見ることができず、なす術もなく、青い卑屈な顔で立っていた。女の言うとおりだった。ああするよりほかなかったのだ。どうして言えようか、あのまま囲い者にしておく方が侮辱であり罪だったのだなどと。フロリーは女から逃げ出しそうになった。黄色い顔に痣がインクのようにばつと浮き上がった。本能的に話を金の方に変え、一本調子の声で言った。これまで金のカでワ・ラ・メーをなだめるのに失敗したことがなかったからである。

「金をやろう、お前が要求した五〇ルピーを。あとになればもつとやる。来月までそれだけしかないんだ」

これは事実だった。女に一〇〇ルピーやり、服も買ったので、手持ちの金はほとんど消えた。驚いたことに、女はわつと泣き出した。仮面のような白い顔にしわがより、涙が急にあ

ふれ出てほおを伝った。止める間もなく女は彼の前にひざまずき、手を合わせ、ひたいを床にすり付けて、あさましく叩頭こつとう礼をした。「おい、立て」と彼は叫んだ。首を垂れ、殴ってほしいと言わんばかりに身体を折り曲げ、恥知らずに卑屈な叩頭礼をされると彼はいつもぞつとした。「そいつは我慢ならん。早く立て」

女はまた泣きわめき、彼の足首をつかもうとした。彼はあわてて足を引いた。

「さあ、立て。そんな恐ろしい声を出すな。お前が何を泣いているのか分からん」

女は立ち上がりず膝で立ったまま、まだ泣きわめいた。「なぜお金をくれるんですか。金だけが欲しくて戻ってきたと思ってるの？ 犬みたいに追いつきながら、まだ金ばかり欲しがって泣いていると思ってるんですか」

「立て」と彼は繰り返した。つかまらないうちに五、六歩離れていた。「金でなけりや、何が欲しいんだ」

「なぜこんなに憎むの。葉巻入れを盗んでもあんたは怒らなかつた。あんたがあの白人女と結婚するつもりなのは、あたしも、ほかの皆も知ってるわ。でも、それがどうしたというの。なぜあたしが追いつき出されなまきやならないの。なぜ憎まれなまきや」

「誰もお前を憎んでいない、説明できませんが……もう立つてくれ、頼むから」

女は、もはやなりふり構わず泣いていた。結局、まだ子供にすぎなかつたのだ。泣きながらも心配そうに彼の方を見て、同情が少しでも浮かんでこないかと顔色をうかがっていた。それから、あろうことか今度はうつ向けに長ながと寝そべった。

「こら、起きろ。我慢ならん、ぞつとする」と彼は英語で叫んだ。

それでも女は起き上がりず、みみずみたいに彼の足もとまで這って来た。汚い床に大きく跡がついた。女は祭壇の前でやるように顔を隠し、腕を伸ばして彼の前にひれ伏した。

「お願い、旦那さま」女はすすり泣きながら言った。「あたしを許して。今度だけ、ほんとに今度だけお願い。ワ・ラ・メーを戻して。あんたの奴隷になる。いえ、それ以下でもない。追いつきされさえしなまきやどうなつたつて」

女は彼の足を抱き、本当に靴にキヌをしていた。彼のほうはどうしようもなく、ポケットに手を入れたまま見下ろしていた。フロローがゆっくり部屋にはいつてきて、ワ・ラ・メーのところまで来ると、ロンジーをくんくん嗅いだ。匂いを覚えていたのか、フロローは軽く尻尾を振った。フロローは耐え切れずに、かがみ込んでワ・ラ・メーの肩をつかみ、ひざまずかせた。

「さあ、立つんだ。そんな姿を見るのはつらい。できるだけのことはしてやる。泣いてなんになるんだ」

希望がわいたのか女は即座に叫んだ。「それじゃ戻してくれるの？ ねえ、旦那さま、ワ・ラ・メーを戻してちょうだい。誰に知られなくてもかまわない。あの白人女が来れば、あたしはここに引き下がってるわ。あの女はあたしなど召使の妻ぐらいに思うでしょう。戻してくれるわね」

「それはできません。不可能だ」と彼はまた背を向けながら言った。

彼の語調に最後通告を感じとつたのか、女は激しくぶざまな叫び声をあげ、また床にひたいを叩きつけるようにした。それを見るとぞつとした。何よりもいやで胸が痛んだのは、懇願の裏に、まったくはしたなく下劣な気持ちが見え隠れしているからだ。というのは、そこには愛情などみじんも見られなかつたからである。彼女が泣き伏しているのは、かつて愛人として与えられていた地位、急情な生活、ぜいたくな衣服、召使に対する支配権を取り戻すためだけであつた。そこには名状し難い哀れさがあつた。こちらを愛している女なら、これほど良心のとがめを感じないで家から追いつき出すことができただであらう。高潔さのかけらもない悲しみほど痛ましいものはない。彼はかがんで女を抱き起こした。

「いいか、ワ・ラ・メー、お前を憎んでるわけじゃないんだ。お前は何も悪いことをしていない。悪いのはこちらだ。だがもうどうしようもないんだ。家に帰れ。金はあとで送る。やる気があつたら、市場に店を出してやる。お前は若いんだ。金がいって亭主が見つかれば、こんなことはなんでもなくなるさ」

「もうお仕舞よ」女はまた泣き声を出した。「死んでやる、突堤から河に飛び込んで。こんな恥をかかされて生きてゆけるもんか」

彼は女を腕に抱き、愛撫せんばかりだった。女は彼にしつかりしがみつつき、顔をシャツの胸に埋め、身を震わせるようにすすり泣いていた。びやくだんの匂いが漂ってきた。この期に及んでも、女は男の背に腕を回し彼の身体にくっつくことで、かつての力を取り戻せると思っているようだった。彼は静かに相手をふりほどき、次いでもうひどまざかないことが分かったので、女から離れた。

「もうたくさんだ。帰ってくれ。そら、約束の五〇ルピーをやる」

彼はベッドの下から真鍮の衣類ケースを引き出し、一〇ルピー紙幣五枚を取り出した。彼女はだまってそれをエンジーの胸におし込んだ。涙が突然止まった。相変わらず無言のまま女は浴室にはいり、しばらくして出てきた時には、おしろいを落として褐色の皮膚に戻り、髪と服も整えていた。顔付きは不機嫌そうだったが、ヒステリーはやんでいた。

「これが最後よ、あたしを戻すつもりはないの？ それが最終的な返事ね」

「そうだ。どうしようもない」

「じゃあ、帰るわよ、旦那さん」

「そうか。では気をつけて」彼はペラソタの柱にもたれ、女が強い日差しの中を小径づたいに去って行くのを眺めていた。つんと背を伸ばして歩いていく女の背中と頭には激しい怒りがあふれていた。女に言われたとおり彼は青春を奪ったのだ。膝がどうしようもないほど激しく震えた。コ・ヌラが忍び足でうしろに来て、フローリーの注意をひくために、軽く非難するような咳をした。

「また何の用だ」

「旦那さまのお食事が冷えかかっています」

「朝食はいらん。何か飲み物を、そうだジンを持ってきてくれ」

以前の生活はどこに消えてしまったのだろうか。

フロローリーとエリザベスに乗せたニそうのカヌーは、イラロジ河の東岸から奥地へ続く支流を、編物用釣針カミタビの動きのように曲がりくねりながらさかのぼっていった。銃鞭の旅を予定していた日だった。とはいつても二人いつしよに密林で夜を過ごすことはできないので、午後半日だけの短い旅だった。夕方少し涼しくなつてからニ、三時間ほど撃ち、夕食の時間にはチャウタダに戻る予定だった。

丸太をくり抜いただけのカヌーは水上を滑るように進み、暗褐色に濁った水面にはさざ波も立たなかつた。ホテイアオイが、スポンジ状の葉を繋らせ青い花を咲かせて流れをせき止めんばかりに繁茂しているので、水路は幅が四フメートルぐらいで帯状に曲がりくねっていた。からみ合った木の枝を通つてくる日光は緑色を帯びていた。頭上でおうむの鳴く声か聞こえたが、蛇が一度ホテイアオイの間にすばやく泳いで逃げ込んだ以外には、動物の姿は見かけなかつた。

「村まであとどれほど？」エリザベスがフロローリーの方を振り返つて叫んだ。フロローリーは大きい方のカヌーであとから進んでいた。フロローリー・スラもいつしよに乗っており、ぼろをまとつたしわだらけの老婆が漕いでいた。

「どれほどだろうね、お婆さん」フロローリーはカヌーを漕いでいる老婆に尋ねた。

老婆はくわえていた葉巻を離し、かいを膝の上に置いて考え、しばらく考えた後で答えた。「叫び声が届くくらいかのう」

「あと半マイルほどです」フロローリーは換算して答えた。

すでにニマイルは進んだであろうか。エリザベスは背中が痛くなつてきた。不用意に動けばカヌーが転覆するので、乗っている者は身体を真つ直ぐに伸ばした姿勢で、背の寄りかきりもない席に腰を下ろし、足はできるだけ船底の湾曲部から離して大きく開いていなければならなかつた。しかも船底は乗っている者の重みでたわみ、死んだ母老がその船底に転がっていた。エリザベスが乗っている方のカヌーを漕いでいるのは六十歳ぐらいの半裸のビルマ人で、枯葉色の膚をし、若者のようにみごとな体付きだった。顔はやつれてはいるが、優しさとユーモアにあふれていた。ふさふさした黒髪は他のビルマ人の髪より細く、片方の耳の上でゆるく結んであり、一房か二房ほどほおにかかつていた。エリザベスは叔父から借りた鏡を大事そうに膝に抱いていた。フロローリーが持つてやろうと言つたのを彼女は断つた。鏡の感触が心地よく、とても手放す気にはなれなかつたのである。鏡を手にするのは今日が初めてだった。彼女は粗地のスカートに粗革の靴、男もののような絹シャツという装いだつたが、これが今日かぶつてきた広つばのフェルト帽にはよく似合うと思つていた。背中は痛み、顔には暑い汗が流れ、まだらの大きな蚊が足もとでぶんぶんいつていたが、エリザベスは心から幸せな気持ちに浸つていた。

流れの幅が狭くなり、ホテイアオイの花は見られなくなつて、代わりに、陰しくなつた両岸で泥がチョコレート色に光り始めた。柱を川底に打ち込んだかやぶきの小屋がいくつか、危つかしい格好で川の上に乗出すように並んでいた。裸の男の子が小屋の間で、緑色の昆虫を糸に結んで風のように飛ばしていた。ヨーロッパ人の姿を見てその子が叫び声をあげたので、他の子供たちがどこからともなく集まつてきた。先を漕いでいた老人は泥に椰子の木を一本置いただけの突堤にカヌーを着けた。木にはえぼし貝が一面にくつついていたので、手ごろな足掛かりになった。老人が先ず跳び移つて、エリザベスに手を貸した。他の者も獲物袋や爆薬を持つて続いたが、こんな時にはいつも何かへまをしでかすフロローリーは、肩まで泥にはまり込んでしまった。紫紅色のパンツを着て、ほおのぼくろに一ヤードもあるかと思えるほど長い灰色の毛が四本はえた、骨と皮ばかりの老人が合掌礼をしながら近づき、突堤に群がる子供たちの頭を叩いた。

「あれが村長です」とフロローリーは説明した。老人は先に立つて一同を自分の家へ案内したが、リユーアチを患つているのと、小役人の悲しきで毎日合掌礼ばかり強いられるのとで腰が異常に曲がり、まるでローマ字のしが逆立ちして歩いているような姿だつた。子供の群れも足早に付いてきた。次第に数を増した犬が一斉に吠えるものだから、フロローリーがこわがつてフロローリーの足もとに小さくなつて付いてきた。どの小屋の入口でも田舎臭い丸顔がたくさん『イギリス娘』が通るのを口をあげて見ていた。村全体が幅広い葉をつけた木の陰になり、やや暗い感じだつた。雨季には川が氾濫し、そのため下流の地域は、小屋こそ汚い木の小屋ではあるが、水の都ヴェネチアに似た姿を呈し、村人たちは小屋の前からカ



ヌーで住来した。

村長の小屋は他の小屋より少し広かった。屋根は鉄のなまこ板で、雨季には我慢ならぬ騒音を立てるけれども、村長の自慢の種になっていた。彼はパゴダの建造よりも先にこの屋根に金をかけたために、涅槃にはいる機会からかなり遠のいていた。村長は急ぎ足で階段を昇り、ベランダで寝ていた若者のわき腹を軽く蹴った。それから振り向いて、もう一度二人のヨーロッパ人に合掌礼をし、おはいり下さい、と言った。

「はいりませんか。どうせ出参まで半時間はありますから」フローリーが言った。

「ベランダに椅子を持って来るように伝えて下さいませんか」とエリザベスは頼んだ。リ・イエイクの家であのようなことがあったので、現地人の小屋に足を踏み入れるのはできるだけ避けようと彼女はひそかに決めていた。中では何か大騒ぎをしていたが、やがて村長と若者、それに女が二、三人椅子を二つ引きずり出してきた。椅子は赤いむくげの花でござで飾り立ててあった。空の石油罐に植えたハイビスカスの花も一緒に持ち出してきた。どうやらさきほど中で大騒ぎしていたのは、ヨーロッパ人のためにこの玉座を二つ用意するためだったようだ。エリザベスが腰を下ろすと、村長はティーポットと、あざやかな緑色で非常に長いバナナを二房、それに石炭色をした葉巻を六本持って再び現れた。しかし注いでくれた茶をエリザベスは首を振って断わった。あり得ることか、リ・イエイクが先日出してくれた茶よりもひどい色だったからである。

村長はきまり悪げな顔をこすった。彼はフローリーの方を向いて、このお嬢さまはお茶にミルクをお入れになりたいのでしょうか、と尋ねた。ヨーロッパ人は茶にミルクを加えるのだと聞いていたのである。もしお望みなら村の者に牝牛をつかまえて乳を絞らせましょう、と言いつつ添えた。それでもエリザベスはお茶を断わった。しかしのどが渇いたので、コ・ヌアが持ってきた袋にはいつているソーダ水を一本取ってくるように、フローリーを通して頼んだ。それを見て村長はようやく引き下がったが、準備に手落ちがあったのを申し訳なく思い、ベランダの方はヨーロッパ人に任せた。

エリザベスはまだ銃を膝に抱いていた。フローリーはベランダの手すりにもたれ、素知らぬ顔で、村長が持ってきた葉巻をふかしていた。エリザベスは早く射撃がしたくてたまらず、フローリーに質問の矢を浴びせていた。

「あとどれくらいで出参ですか。弾薬は十分かしら。勢子は何人連れて行きますか？ うまくいけばいいんですけどね。何か撃てるとお思いになりますか」

「さあ、たいしたことはないでしょうね。必ず獲れるのは鳩が少し、それにうまくいけば、密林の鶏ぐらいいかな。シーズンじゃないが、雄鶏なら撃つてもかまわんでしょう。このあたりには豹が出るという噂で、先週も村のすぐ近くで牛を襲って殺したそうですよ」

「まあ、豹が！ 豹を撃つことができれば本当に素敵でしょうね」

「まず無理でしょう。獲物を期待しないこと、これがピルマで狩猟する時の絶対の掟です。失望を味わうだけですからね。そりゃ、密林には獲物がうようよしてますよ。しかし発砲するチャンスさえつかめないことが多いんです」

「どうして？」

「密林は深いですからね。野獣というのは五ヤードの近くにいっても姿は見えないものです。勢子もたいていは気づかずに通りすぎます。目にはいつてもほんの一瞬ですからね。それに水がいたるところにありますから、一カ所にじっとしている野獣なんていません。虎など必要なら何百ヤードでも歩き回ります。おまけに餌食の小獣はいくらでもいるんだから、虎でも豹でも、怪しいと思えば、殺した獣のところには舞い戻る必要がないんです。わたしも子供の頃、虎に殺された牛の近くで虎が舞い戻るのを幾晩も見張っていたことがあります。牛の死骸は悪臭を放ち出しましたが、とうとうその虎は現われませんでしたよ」

エリザベスは背中を椅子にこすりつけた。これは彼女が本當にうれいしい時に見せるしぐさだった。このような話をしていられる時のフローリーが彼女は大好きだった。狩猟のことならどんな話を聞いても彼女の胸はおどった。本や芸術やぞつとする詩のことなど語らずに、いつも狩猟のことを聞かせてくれさえしたらいいのに。本當は素敵な方なんだという気持ちが急にわいてきて、エリザベスは、フローリーさんも結構ハンサムだわ、と心ひそかに思った。本當に男らしいわ。ターバン布で作ったシャツの脚元を少しはだけ、半ズボンにグートル、狩猟用の長靴というフローリーの姿が、エリザベスの目には突に男らしく映った。顔も日に焼けてしわが寄り、軍人のようなだった。彼は痣のあるほおを彼女から隠して立つて

いた。エリザベスは話の続きをせがんだ。

「虎退治のお話、もつと聞かせて下さい、お願いしますわ。本当におもしろいんです」

彼は何年も前に雇っていた人夫を一人食い殺した、汚い年老いた人食い虎を撃った時の話をした。蚊に苦しめられながら監視台の上で虎を待っていました。暗い密林の中をランゾのように緑色に光る大きな目で虎が近づいてきました。台の上の杭に縛った人夫の死体を食っているのか、虎の荒い息づかいとよだれの音が聞こえてきました。語っているランゾリーの口調は淡々としていた。話がおもしろくないことで評判のインド在住のイギリス人は、口を開けばいつも虎狩りの話ばかりするじやないか、と彼は考えていた。しかしエリザベスはまたうれしそうに背中を椅子にこすりつけた。このような話ならエリザベスは気持ち落ち着くので、普段こちらの話に退屈していららしている気持ちがそれで償われているのだ、という事実にはランゾリーは今なお気づかなかつた。

短剣を背負った乱髪の若者が六人、うす汚いが身のこなしは敏捷な白髪の老人を先頭にやってきた。一同は村長の小屋の前で立ち止まり、一人がしわがれ声で「ほーい」と叫んだ。叫び声を聞いて、村長が姿を現わした。あれが勢子です、と説明したあと、村長は、一同出発の準備が整いましたので、お嬢さまがまだ暑すぎるとお思いでなければそろそろ、と付け加えた。

一行は出発した。この村の一方は川で、反対側は高さ六十メートルで厚さ十二メートルもあるサボテンの植え込みで守られていた。しばらく進むと、サボテンにはさまれた小道は牛車のわだちが残っているほこりっぽい道に変わり、両側には旗竿ほどの高さの竹がびっしり生えていた。勢子たちは一列に並んで、足早に先頭を進んだ。彼らは広刃の短剣を胸に当てて持っていた。年寄りの猟師はエリザベスのすぐ前を歩いてしたが、ロンジーを腰布のようにからがけていたので、やせたものが丸出しだった。ももには青黒い入墨いんぼくをしていたが、襟袷が非常に複雑なものだから、レーズのパンツそっくりな感じだった。手首の太さぐらいの竹が倒れかかって行手を塞いでいた。先頭の勢子が短剣で下からその竹を切り払うと、中にたまっていた水がざつと流れ出し、ダイヤモンドさながらにきらめいた。半マイルほど行くとまわりが開けてきた。日差しは強いし、道を急いだので、誰も汗だくになっていた。

「あそこですよ、猟場は」ランゾリーがあなたを指さして言った。手前の方は縮の切り株が残っている鈍いどび色をしたただだつ広い畑で、泥の畦あぜによって一エーカーか二エーカーぐらいずつに分けられていた。おそろしく平坦で、純白の鷲以外には生き物は見当たらなかつた。向こうの果ては密林で、大木がいきなりそびえて立つて深緑の絶壁を思わせていた。勢子たちは二〇ヤードほど先にあるさんざしに似た低木のところまで行き、一人が木の前にひざまずいて合掌礼をし、早口で何か唱えた。年寄りの猟師がびんで不透明な液体を地にまき、他の者たちは教会にいる時のような真剣で同時にうんざりした顔でそれを見守っていた。

「一体何をしてらんですか、あれは」エリザベスが尋ねた。

「地神イヒトカミに犠牲を捧げているんです。ナット神と呼ばれる森の精ですがね。幸運を祈っているんです」

猟師が二人のところに戻ってきて、右手の雑木林を手始めに、あとで密林に移る予定です、としわがれ声で説明した。どうもナット神の助言に従っているようだった。猟師はランゾリーとエリザベスに、あそこにはいて下さい、と短剣でその場所を指した。六人の勢子は雑木林に飛び込んだ。遠回りをして畑の方に獲物を追い出すつもりなのだ。密林の三〇ヤードほど手前に野ばらの繁みがいっつかあったので、ランゾリーとエリザベスは繁みの一つに身を隠した。コ・スラはそこから少し離れた繁みの陰にうずくまり、ランゾリーの首輪をおさえ、頭を撫でて気持ちを鎮めてやっていた。ランゾリーは猟場ではいつもコ・スラを離れたところに追いやった。コ・スラには、ランゾリーが撃ち損じると舌打ちをする癖があり、それを聞くたびにランゾリーのほうがいらいらしたからだ。

やがて遠くの方から木を叩く音と妙に空るな叫び声ウツがこたましてきた。狩り出しが始まったのである。エリザベスは急に起こった身体の震えがどうしても止まらず、銃身を押さえることもできなかつた。つぐみよりやや大きく、翼が灰色で胸が炎のように赤いみごとな鳥が一羽、木の中から飛び出し、地をかすめるように飛んできた。木を叩く音と叫び声ウツが近づいてきた。密林の端にある灌木が激しく揺れ、何か大きい動物が飛び出しそうな気がした。エリザベスは銃を持ち上げて、しつかり構えようとした。しかし実際に現われたの

は、短剣を持った裸の勢子の黄色い姿だった。やぶを抜けてしまったと知って、彼は他の勢子を呼び集めた。

エリザベスは銃を下げて言った。「どうなったんですか」

「なんでもありません。追いつきが終わったんですよ」

「じや何もいなかったわけですね」エリザベスはがっかりして、叫ぶような声で言った。

「どうってことはありませんよ。最初の追いつきじや何も獲れないもんです。この次はもっとうまくいくでしょう」

二人はでこぼこの切り株畑を越え、畑を隔てている泥の畦を渡って、緑色にそびえる壁のような密林の正面で止まった。エリザベスはもう弾の込め方を覚えていた。次の追いつきが始まったとたんにコ・ヌラが鋭く口笛を吹いた。

「抜かるな。早く。来るぞ！」フロローリーが叫んだ。

緑色をした鳩の群れが四〇ヤードほど上空を信じられぬスピードで飛んできた。石弓から撃ち出された石のような猛スピードだった。エリザベスは興奮のあまり、なす術を知らなかった。しばらくは身動きもできなかったが、それからいきなり銃身を上空の鳩の群れに向け、引き金を強く引いた。しかし何も起こらなかった。それもそのはずで、彼女は実は《用心がね》を引いていたのだ。群れが頭上を越えようとした時によりやく指が引き金に掛かったので、両方の引き金を同時に引いた。耳をつんざくような轟音が起こり、彼女は一歩うしろによるめいた。鎖骨が折れたかと思った。彼女が撃ったのは、群れの三〇ヤードほど後方だった。同時にフロローリーが振り向いて銃を構えるのが彼女の目に映った。二羽が急に飛ぶのを止めて宙返りをし、そのあと矢のように落ちてきた。コ・ヌラが叫び声をあげ、フロローリーと一緒に落ちた鳩の方へ走っていった。

「ほら、大鳩だ。あれを撃つんだ」フロローリーが言った。

大きく太った鳩が群れからはるかに遅れて頭上を飛んでいた。エリザベスは先ほどしくじったので、二度と発砲する気はなく、フロローリーが弾を銃に込めて構えるのを眺めていた。白煙が銃口から筒状に立ちのぼった。今度の鳩は翼を打ち抜かれ、どすんと落ちてきた。フロローリーとコ・ヌラが興奮して走ってきた。フロローリーは大鳩を口にくわえ、コ・ヌラはにやにや笑いながらカチン族ふうの袋から緑色の鳩を二羽取り出した。

フロローリーは緑色の小さな鳩を一羽受け取って、エリザベスに見せた。「ごらんなさい。美しいでしょう。アジアにいる鳥のうち一番美しいんです」

エリザベスは指先でなめらかな羽根を撫でてみた。自分の手で仕とめなかつただけに心から羨ましかつた。一方フロローリーの射撃の腕をまのあたりに見て、彼に対するあこがれにも似た気持ち奇妙なほど強く胸に湧いてきた。

「胸の羽毛をごらんなさい。宝石のようでしょう。こんな美しい鳥を撃つなんて、まったく人殺しですね。白人がこの鳥を殺すのを見ると、ビルマ人は吐き気をもよおすそうです。連中は言いたいんですよ、『ねえ旦那、鳩はわたらの全財産なんだ。わたらは旦那たちのものは取ってない。なぜ旦那たちはわたらの生命ともいえる鳩を殺すんです？』ってね。確かに、ビルマ人が鳩を殺すところは見たことがあります」

「肉はおいしいんですか」

「非常においしいですよ。でもやはり鳩を撃つと、かならず何か悪事を働いたような気持ちになります」

「あなたぐらいみごとに撃てたらうれいんですけど」エリザベスは羨ましげに言った。

「こつですよ。すぐに覚えられます。立派に銃を構えられるじやないですか。初めてにしては立派なものです。たいいには構えることもできませんからね」

しかし次の追いつきでも、その次の追いつきでも、やはりエリザベスは何も仕とめられなかつた。引き金を二つ同時に引くことだけは何とか避けられるようになったが、興奮しすぎてどうしても狙いを定めることができなかつた。フロローリーはさらに教羽仕とめたが、中に一羽、翼全体が青銅色で、背だけは緑青のようにさええた緑色をした小鳩が混じっていた。密林の鷄は至るところでこつこつと鳴いており、一度か二度は雄鷄もラッパのような鳴き声をあげたが、ずる賢いので姿は見せなかつた。

もうかなり密林の奥深くへ来ていた。あたり一帯が灰色の光に包まれ、ところどころ目がくらむほど強い陽光がこぼれていた。どちらを見ても、目にはいるものはただ無数に重な

りあう木々と、もつれあう灌木、それに棧橋の脚にまどいつく波さながらに木の根元にまどいついてはいる鶉の類ばかりで、見通しは全然きかなかつた。非常に密集している木は、いばらの茂みが何マイルも続いている感じで目を圧倒してきた。鶉の中には蛇のように太いものもあった。フロローリーとエリザベスは、野獣の通り道だろうと思われる狭い道を苦労して通り抜け、いばらで服を引っかけながら足場の悪い斜面を登って進んだ。二人のシャツは汗でぐしょ濡れだった。息づまるばかりに暑く、木の葉を踏むと強烈な匂いが立ちのぼった。時どき姿は見えないが金属音のようなかん高い蟬の鳴き声は何分も続き、そのあとこのギターの弦のうなりに似た鳴き声はたとやんで人を驚かせた。

五番目の追いつき場所に向かう途中に大きな菩提樹があり、こずえで大鶉が鳴いていた。遠くから聞こえる牛の声に似ていた。一羽の鶉が飛び出して天辺の枝にぼつんととまり、灰色がかつた小さな姿を見せた。

「とまっているのを撃つてごらんなさい。十分に狙いを定め、すぐさま引き金を引くんですよ。左目も開けたままでね」

フロローリーに言われてエリザベスは銃を上げた。また銃身が震え始めた。勢子たちが立ち止まり、かたまつて彼女を見ていた。思わず舌打ちをする勢子もいた。女が銃を扱う姿が奇妙で、多少ショックでもあったのだ。できる限り意志を統一して、エリザベスは、ようやくほんの一瞬だけ手の震えを押さえ、引き金を引いた。銃声が耳にはいらなかつた。普通、命中した時には銃声は聞こえないものである。鳥は枝から飛び上がったように見えたが、そのあと一本の枝から大きく垂れ下がっている鶉に近づいた。鶉は大人の太ももほどあり、ねじあめのように短剣を置いて、何か計るような目でその枝をちよつと見上げた。そのあと一本の枝から大きく垂れ下がっている鶉に近づいた。鶉は大人の太ももほどあり、ねじあめのようにねじれていた。勢子は梯子でも登るような身軽さで鶉を登りたい枝の上を腰もかがみずに渡り、獲物の端を取ってきた。鶉はエリザベスに手渡された時にはまだ柔らかく温かだった。

エリザベスはその感触にうっとりとなり、手から放せなかつた。キスして抱きしめたいほどの気持ちだった。男たちはみな、フロローリーもコ・スラも勢子たちも微笑を交しながら、エリザベスが獲物を愛撫しているのを眺めていた。しぶしぶながらようやく彼女はそれをコ・スラに渡し、袋に入れてもらった。フロローリーにすがりついてキスしたい気持ちがある自分でもおかしいほど慕ってくるのが分かつた。いくぶんかは鶉を殺した興奮のためでもあつたらう。

五番目の追いつき場所が終わった時に、密林を切り開いて作ったパイナップル畑を越え、向こうの密林でまた追いつきをする予定である、と猟師はフロローリーに説明した。薄暗い密林から日光の中に出ると目がくらんだ。パイナップル畑は、背の高い草を一部刈り取ったような具合に、密林をエーカーか二エーカー切り開いた長方形の空き地で、いばらに似てとげのあるパイナップルの木が何列も並び、その木を覆い隠すほどに雑草がはびこっていた。低いいばらの生垣が畑を真中で二つに分けていた。畑を通り抜けた時、生垣の向こう側から、こげこつこというかん高い鳴き声が届いてきた。

「あらつ、待って、密林の鶉かしら、今の鳴き声」エリザベスが足を止めて言った。

「そうです。今時分はよく餌を探しに出てくるんです」

「撃ちに行けません？」

「お望みなら行ってみましょうか。ずる賢いやつですよ。あいつの真向かいまで、生垣のこちら側を進みましょう。音をたてないように」

コ・スラと勢子たちはそのまま行かせ、二人は畑を迂回して、生垣ぞいにそろそろ追いつき進んだ。姿を隠すために身体を二つ折りにして進まねばならなかつた。エリザベスの先に進んだ。顔を伝い落ちる熱い汗が唇で止まってくすぶつた、胸は早鐘のように打っていた。フロローリーがうしろからかかとを突つくと感じが感じられた。二人は同時に立ち上がり、生垣越しにのぞき込んだ。

一〇ヤードほど先で、チャボぐらいの大ききの雄鶉が地面を忙しくつつき回っていた。長い首は絹のような羽毛につつまれ、房に似たとさかがあり、弓なりの尾は月桂樹の葉に近い緑色をした美しい鶉だった。雌鶉が六羽いっしょにいた。雄鶉よりは小さく、褐色で、背は蛇のうろこのような菱形の羽毛で覆われていた。その姿がフロローリーとエリザベスの目に映ったのはほんの一瞬で、次の瞬間にはもう鶉の群れは鳴き声をあげ、羽根をばたばたさせて舞い上がり、密林目がけて弾丸のように飛び出した。ほとんど機械的にエリザベスはすぐさま銃を上げて発砲した。特に狙いを定めもせず、手中の銃すら意識せずに、ただ精神力で弾丸を的に射込むような撃ち方だった。まだ引き金を引かぬ前から必ず射止めることがエリザベスには分かつていた。雄鶉は三〇ヤード先でもんどり打って、羽毛をまき散らしながら落ちてきた。

「みごと、みごと！」フローリーが叫んだ。興奮のあまり二人は銃を手から放し、生垣を押し分け、鶏が落ちたところへ並んで走っていった。

撃った本人に劣らざフローリーも興奮し、また叫んだ。「実にみごとだ。初日に飛ぶ鳥を撃ち落とすなんて初めて見たよ。撃つ手も見せない速さだね。すばらしい」

二人は、撃った鶏を中に向かい合ってひざまずいた。彼の右手と彼女の左手が強く握り合ったままであるのに気づいて、いまさらながら驚いた。並んで走っている間に、いつの間にか手を取り合っていたのだ。すぐあとで必然的に起こる重大な場面を感じとったのか、二人は急にだまり込んだ。フローリーは空いた手を彼女の方に伸ばし、もう一方の手も握った。彼女は喜んでその手も相手にゆだねた。しばらくはひざまずいたままで手を握り合っていた。焼けつくような太陽が照りつけ、熱気が二人から立ち昇った。暑さと喜びのために、まるで雲の上に浮かんでいるような気持ちだった。彼は腕をたらえて彼女の身体を引き寄せた。

それからフローリーは急に顔をそむけて立ち上がり、エリザベスを引き起こし、とらえていた腕を放した。自分の痣を思い出したのだ。今はできない、こんなまぶしい光の中では。痣のために冷たくあしらわれることが彼にはこわかった。間の悪さを取り繕うために、フローリーはかがみ込んで仕止めた鶏を拾い上げ、静かに言った。

「みごとでしたね。教わる必要なんありませんよ、あなたは。もう立派に撃てるじやないですか。それじゃ次の追い出し場所まで行きましょう」

生垣を越えて銃を拾い上げた時に、密林の端から叫び声が立て続けに聞こえてきた。勢子が二人、腕を激しく振り動かし、大股で跳ぶように走ってきた。

「何でしょう？」エリザベスが言った。

「さあね。何か獣を見かけたのでしょうか。あの様子じやいい獲物のようですよ」

「まあ素敵！ 行きましょう」

二人は急に走り出し、パイナップルと堅くとげだらけの雑草をかき分けて急いだ。コ・ヌラと五人の勢子が集まってロぐぐちに何か言っており、残る二人が興奮した様子でフローリーとエリザベスを手招きしていた。近づくと、皆に囲まれて一人の老婆が立っており、片手でぼろぼろのロンジをたくし上げ、大きな葉巻を持ったもう一方の手を振り動かしながら何か説明していた。エリザベスには「チャー」とか何とかいう言葉が繰り返して出てくるのがようやく聞きとれた。

「一体なんて言ってるのです？」エリザベスは聞いた。

勢子たちがフローリーのまわりを集まってきて、密林の方を指さしながら熱を込めてロぐぐちに何か言った。二、三聞きたただいたあと、フローリーは手を振って一同をだまらせ、エリザベスの方を向いて言った。「こりや運がよかった！ この婆さん、密林から出てきたそうですが、今のあなたの銃声を聞きつけたのか、豹が道を横切るのを見かけたと言ってます。この連中なら、豹が隠れそうなところは知ってます。急げば、逃げてしまわないうちに取り囲んで、追い出すことができるかも知れません。やってみますか」

「ええ、ぜひ。おもしろいですわ。豹が撃てたら、本当になんて素敵でしょう！」

「お分かりでしょうが、危険ですよ。皆がばらばらにならないように気をつければ多分大丈夫だとは思いますが、なにしろこちらが徒歩ですから、絶対に安全というわけにはいきません。それでもいいですか」

「もちろんですわ。もちろんです。こわくなんありません。ねえ、早く行きましょうよ」

「勢子のうち一人は私たちと一緒に来て案内してくれ。コ・ヌラ、お前はフローリーをつないで引っぱり、他の連中と行ってくれ。この犬は私たちのそばにいとじつとしていないからな。じやエリザベスさん、急ぎましょう」

コ・ヌラと勢子たちは密林の端に走って走っていった。途中で密林の中にはいり、奥の方から追い出すつもりなのである。残った勢子は先ほど木に登って鳩を拾ってきた若者で、彼は直ちに密林に飛び込んでいった。フローリーとエリザベスは若者のあとに続いた。若者は駆け足に近い小刻みの早足で、迷路のような獣道を先に立って案内した。灌木が非常に低く枝を垂らしているので、三人は時には這って進まなければならなかった。おまげに藪がロープを張りめぐらしたように行く手をふさいでいた。足もどほほこりつぽいので足音がしなかった。何か目じるしがあるところまで来て勢子は立ち止まり、ここがいいというふうに地面を指さし、声を出さないようにという意味で口に指をあてた。フローリーはポケットから大型弾を四発取り出して、無言のままエリザベスの銃に込めた。

背後でかさつとかすかな音がしたので、三人はぎくつとした。どこから現われたのか、全裸に近い現地人の若者が石弓を携え、灌木をかき分けながら出てきた。若い勢子の姿を見て裸の若者は首を振り、道の向こうを指さした。二人はしばらく手真似で話しかけていたが、やがて勢子がうなずいた。四人とも口はいっさい利かずに、道をさらに四〇ヤードほど先に進み、そこで曲がると立ち止まった。同時に、恐ろしく混乱した叫び声が数百ヤード先の方で起こり、フロローが吠える声もそれに混じった。

エリザベスは勢子の手が彼女の肩を押さえて、かがんでくささい、と合図するのを感じた。四人は、ヨーロッパ人が前にビルマ人がうしろになって、とげのある灌木の陰にかがみ込んだ。遠くからは六人の小人数があげているとは思えないほど騒がしい叫び声と、短剣で木を叩く音が聞こえてきた。勢子たちは豹が向きを変えて自分たちに襲いかからぬように気を配っていた。薄黄色の大きな蟻が兵隊のように一列に並んで灌木のとげを乗り越えて行くのが、エリザベスの目にはいった。一匹が彼女の手の上に落ちて腕を這い登ってきたが、手を動かしそれを払い落とすこともできなかった。心の中で彼女は「神さま、豹が出ますように。お願いです、豹を出してください！」と祈っていた。

突然、落ち葉が大きくばさつと鳴ったのでエリザベスは銃を上げたが、フロローが強く首を振って、その銃身を押さえた。鶏が騒がしく大股に道を横切った。

勢子の叫び声はそれ以上は全然近づいてこないように思えた。四人が隠れている密林のこの外れあたりは、覆いをかぶせた墓のように静まり返っていた。例の蟻がエリザベスの腕を痛いほど強く噛んで地面に落ちた。エリザベスは絶望し始めた。豹は現われないかも知れない。どこかで包囲の輪から抜け出たらしい。連中は豹を見失ったんだわ。失望が苦しいほどに強かつたので、エリザベスは豹のことなど初めから耳にしなかつた方がよかつたのだとさえ思った。その時、勢子がびびをつねるのを感じた。勢子は彼女のうしろから首を伸ばしていたので、その黄褐色のなめらかなほおは彼女のほおから二、三インチのところであり、髪にぬったココナツの油が匂つてきた。荒れた唇は口笛でも吹くような具合にすぼめられていた。何か音を耳にしたのだ。フロローリーとエリザベスの耳にもかすかにその音が聞こえてきた。まるで鳥か何か非常に軽いものが、足だけ地面をかすめながら密林の中を進んでいるような音だつた。それと同時に、豹の頭と肩が繁みの下から二〇ヤードほど先の道に現われた。

豹は前足だけを道に出して止まった。耳をびたり伏せた頭と、むき出した牙、それに大きく恐ろしい前足が目にはいった。陰の中になると黄色よりはむしろ灰色に見えた。豹はそのままじつと耳を澄ましていた。フロローリーが急に立つて銃を上げ、すぐさま引き金を引くのがエリザベスの目に映つた。銃声が轟き渡り、ほとんど同時に豹が草に倒れるどさつという音が聞こえた。「気をつける。やつは死んでないぞ！」フロローリーが叫び、再び発砲した。弾が命中して、またどさつという音がした。豹は喘ぐような声を出した。フロローリーは銃を荒つぽい手付きで開き、手探りでポケットからつかみ出した弾薬を全部地面に投げ出し、ひざまずいてそれをひつかき回した。

「こん畜生！ 大型弾が一発もない。一体どこへ入れたんだろう」

豹は倒れながらもう姿を隠していた。傷ついた大蛇きながら草の上でのうち回りすすり泣きのようななり声を上げていた。獐猛シウモウそうでしかも衰れつぽい感じがした。声が四人の方に近づいてくるようであつた。フロローリーがひつかき回した弾薬はどれも端に『六号』とか『八号』と記されていた。残りの大型弾は全部コ・スラの手元にあるのだ。草を踏みつぶす音となり声はほんの五ヤードの近さにまで迫っているのに、姿は全然見えないほどあたりの草木は密集していた。

うしろのビルマ二人は「撃て、撃て！」と叫んでいたが、叫び声は逆にそこから離れていった。二人は近くにある登れそうな木を求めて、逃げて行つたのだ。すぐそばの繁みでばしやばしやと激しい音がし、エリザベスのすぐそばの灌木までが揺れ動いた。

「畜生め！ 間近まで来てやがる。何とかして追ひ払わなけりや。銃声でおどかしてやろう」

エリザベスが銃を上げた。膝はカスネットのようにがたがたと音を立ててぶつかり合うほど大きく震えていたが、手はしつかりして、たじろぎもしなかつた。彼女は続けて発砲した。一発、また一発と。ばしやばしやと鳴っていた音が離れていった。豹は負傷していてもすばしこく、相変らず姿を見せずに這いながら逃げていった。

「でかしたぞ。うまくおどしたようだ」

「でも逃げて行くわ。逃げてしまおう！」エリザベスは動揺のあまりはね回って叫んだ。彼女は豹のあとを追おうとした。フロローリーが飛びついて、彼女を引き戻した。

「大丈夫。ここでじつと待ってるんですよ」フロローリーは小型弾を二発銃に込めて、音をたよりに豹のあとを追つた。しばらくは、フロローリーの姿も豹の姿もエリザベスには見えなかつた。彼らの姿が三〇ヤードほど先の空き地に急に現われた。豹の方は腹を地面にくつつけ、のたうつようにして進みながら、すすり泣きの声を出していた。フロローリーが四〇

ヤードほどの間合いから銃を構えて発砲した。豹は叩かれたクッションのように跳び上がり、転がり落ちて丸くなり、それっきり動かなくなった。フロローリーは銃身で豹の体をついてみた。全然動かなかった。

「もう大丈夫だ、死んでる。こっちに来て、見てごらんさい」

ビルマ二人が木から飛び降り、エリザベスと一緒にフロローリーのそばにやってきた。豹は雄だった。頭を前足ではさむような格好で丸くなって死んでいた。生きていた時よりはるかに小さく見えた。豹の死体そっくりで、少し衰れを感じさせる姿だった。エリザベスはまだ膝が震えていた。彼女とフロローリーは寄り添いながら豹を見下ろしていたが、今度は手を握り合っていないかった。

すぐにコ・ヌラと残りの者たちもうれしそうに叫びながらやってきた。フロローリーは豹の死体をちよつと嗅いでみてから急にしつぽをたれ、五〇ヤードも飛んで逃げ、ペそをかくように鼻をならしていた。いくら呼んでやっても、死体のそばには二度と近づこうとしなかった。一同は豹を囲んでうずくまり、その姿に目を見張った。兎のように柔らかな美しい腹を撫でたり、大きな足先を聞いて爪を出したり、黒い唇を引きむいて身を調べたりした。やがて二人の勢子が長い竹を切り取り、豹の足をそれに縛った。それから尻尾を引きずったままそれを担いだ。一行は意気揚々として村に向かった。まだ明るかったが、誰一人鞭を続けようとは言わなかった。ヨーロッパ人もビルマ人も一人残らず、早く帰り、手柄話をしたくうざうざしていた。

フロローリーとエリザベスは切り株が残っている畑を肩を並べて歩いていった。他の者は銃と豹を持って三〇ヤードほど先を歩き、フロローリーだけははるかうしろからこそそついできた。夕日がイラワジ河のあなたに沈みかけていた。夕べの光が畑の面と並行に流れて、切り株を金色に染めており、黄金色の柔らかな光は、一同の顔にも注がれた。エリザベスとフロローリーは肩が触れあうほど寄り添って歩いた。汗でぐしょ濡れになったシャツがいつの間にか乾いていた。言葉はほとんど交さなかった。二人はことを成し遂げて疲れ果てたあとに訪れる無上の幸福に浸っていた。どれほどの肉体的喜びも精神的喜びも、いや、この世の何ものも、この幸福感とは比較にならない。

「豹の皮はあなたのものですよ」村も近くなつた頃、フロローリーが言った。

「まあ、でも仕とめたのはあなただわ」

「いいじゃないですか。皮は取っておきなさい。この国の女であなたのように豹の前で姿勢も崩さず立派に構えられる者が果たしてどれだけいますか。たいいてい悲鳴をあげて気絶してしまうでしょうね。皮はチャウタダの監獄で仕上げてもらいましょう。毛皮をピロードのように柔らかく仕上げるコツを心得ている囚人がいるんです。七年食らい込んだおかげで、監獄でそのコツを覚えたそうです」

「そうですか、本当にうれしいわ」

それだけで当座の話は途切れた。汗とほこりを洗い流し、食事をして休んだあと、クラブで再び会えるだろう。特に約束はしなかったが、どちらとも会うことを暗黙のうちに了解していた。フロローリーがエリザベスに結婚を申し込むこともまた、ロには出していないが暗黙の了解になっていた。

村に着いた時に、フロローリーは勢子全員に入アナずつ謝礼を渡し、豹の皮をはぐ作業を監督した。勢子頭にはビル一本と大鳩二羽を与えた。豹の毛皮と頭蓋骨がカヌーに積み込まれた。ひげの方は、コ・ヌラが取られないようにと努めたが、結局、全勢引き抜かれ、持ち去られました。村の若者たちは心臓やその他の器官を食べるために死骸を運び去った。彼らの間では、豹の内臓を食べば豹のように強く敏捷になると信じられているのである。

フロロリーがクラブに着くと、ラツカーズテイーン夫妻が恐ろしくむつりしていった。夫人は例によって揺りうちわの下の一等席にすわり、ビルマ貴族年鑑とも言うべき『在ビルマ文官一覧表』を読んでいた。夫人は夫に腹を立てていた。クラブに着いたそうそう、夫人の意に逆らってシャンペン割りブランデーの大コップを注文したからである。おまけに『ピソカン』誌を読んだものだから、一層夫人を怒らせた。エリザベスはせまくて暑苦しい図書室でひとり、古い『フランク・ウツ』誌をめくっていた。

フロロリーと別れたあとエリザベスは非常に不快な目にあっていた。浴室から出て、晩さんのために着替えをしているところへ、突然叔父が狩猟のことをもつと聞きたいという口実で部屋にはいつてきて、露骨な態度で彼女の足をつねり始めた。そつとした。自分の姪に手を出せる男がいるなど考えたこともなかった。生きているといろいろなことを経験するものだ。叔父は自分の行爲を冗談にごまかそうとしたが、あまりにぎごちないし、酔っぱらっていたのでうまくいかなかった。運よく妻の耳にははいらなかったが、もしはいつておれば第一級の醜聞スキャンダルになったことだろう。

そのあとの晩さんは実に不快だった。ラツカーズテイーン氏はふくれつ面をしていた。この雌どもめ、とり澄ましやがっておもしろい思いもさせてくれぬ。馬鹿馬鹿しい限りだ。この娘ときたら『ラ・ザイ・パリジェニス』誌の写真を思い出させるほどの美人なのに……畜生め、俺が食わしてやってるんじゃないか。あんな態度をとるなんて、けしからん。しかしエリザベスにとって事態は深刻だった。彼女は文なしで、叔父の家以外に帰るところがなかった。はるばるハ○○○マイルも船でやっ来て、たった二週間で叔父の家にも住めなくなつたらと思つて恐ろしかった。

したがつてある決心が心の中で次第に固まつていった。フロロリーが求婚してくることはまず間違いないが、そうなれば彼を受け入れようということだった。こんな時でなければ、別の決断を下していたかもしれない。その日の午後は、あの華ばなしく血湧き肉躍る本場に『すてきな』冒険に魅せられていたので、フロロリーに愛情に似た気持ちまで抱いていた。それは彼に対して彼女が歩み寄れるぎりぎりのところであった。それでもなおフロロリーへの疑念が戻ってくる可能性はあった。フロロリーにはいつも疑わしいところがあった。年齢、癖、奇妙で強情な口の利き方、つまり、分かりにくいだけでなく、聞いていて不安を感じるあのインテリぶつた話し振りなど。今までも彼がいやな日があった。けれども現在、叔父の振舞いが形勢を一変させた。どんなことがあつても叔父の家から逃げ出さねばならない、それまでできるだけ早く。そうだ、フロロリーが求婚してきたら絶対に結婚に応じよう。

フロロリーは、図書室にはいつた時、彼女の顔に返事を読みとることができた。態度が以前より優しく従順だった。彼女は、二人が初めて会ったあの朝と同じライラック色のドレスを着ていた。見覚えのあるこのドレスを見ると勇気がわいてきた。時どき彼の気力を失わせるような新奇さや優雅さがエリザベスから消えて、彼女が自分に近づいたような気がした。

フロロリーは彼女が読んでいた雑誌を取り上げて何か言った。しばらく二人はいつも通りの平凡な雑談をした。たわいないことを言う癖がいつも奇妙に顔を出す。しかしおしやべりをしながら二人はいつの間にか外に出て、ほどなくテニスコートの横のランジパニの大木のどこにきた。その夜は満月だった。目が痛いほど明るく、白熱の硬貨のように輝いている月が、くすんだ青色の空を勢いよく昇つてゆき、それを横切るように黄色つぼい雲が二、三片漂っていた。星は全然出ていなかった。昼間なら黄痘の月桂樹のように恐ろしく見えるはずの灌木が、月光で幻想的な木版画みたいにぎざぎざの白黒模様に変つていた。クラブの塙ぎわの道をドラビダ人の人夫が二人白いぼろ着をきらきら光らせてくぐつていくのが美しかった。自動販売機から発生する化合物のような我慢ならない臭いが、生ぬるい空気を通してランジパニの大木のほうから流れてきた。

フロロリーが言った。「ねえ、ちよつとあの月をごらんさない。白い太陽みたいですね。イギリスの冬の昼間より明るいですよ」

エリザベスは月光で銀の筵べ棒のように見えるランジパニの枝を見上げた。月光はあらゆるものに限りなく豊かに降り注ぎ、地面やざらざらの樹皮を眩しい盞のように覆っていた。葉にはすべて雪のような固形の光が積もつて見えるように見えた。そのようなものには無関心なエリザベスさえ驚くほどだった。



「すばらしいわ。本国じゃこんな月光なんて見られません。本当に、何というのでしょうか」「明るい』という言葉以外は何も浮かんでこないの、彼女はだまってしまった。理由は違うが彼女にもローザ・ダートルのように言葉を途中で切る癖があった。

「ええ、この国じゃ、満月を過ぎたところが最高です。いやな臭いですが、あの木は。いやな熱帯樹です。一年中花の咲く木なんていやですわ」

人夫たちが見えなくなるまで時間をつぶすために、彼は半ばうわの空でしゃべっていた。人夫の姿が消えるとエリザベスの肩に腕を回し、彼女が驚きもせず何も言わなかったの、自分の方に向けて引き寄せた。彼女の顔が彼の胸に埋められ、短い髪が彼の唇に軽く触れた。彼は彼女のあごの下に手をやって、顔を自分の方に引き寄せた。彼女は眼鏡をかけていなかった。

「かまわないでしょう」

「ええ」

「私の……これがいやでないかということなんです」彼はちよつと首を振って痣のことだと態度で示した。これを確かめてからでないといキスできなかった。

「ええ、もちろんですわ」

唇が重なるとすぐ彼女がむき出しの腕を首に軽く回してぐるのが分かった。二人は一分以上も身体と唇を押しつけ合つて、なめらかなフランジパニの幹にもたれていた。木のいやな臭いにエリザベスの髪が混じった。その香りをかぐと彼は無力感に襲われ、腕の中にいるエリザベスがどこか遠くへ去ってしまったような気持ちになった。彼にとつてその異国の木が象徴しているもの一切、流浪、人知れず浪費した歳月などは、二人を隔てている理めがたい溝であった。こちらが望んでいることを理解してもらうにはどうしたらいいだろう。身体を離し、木に相手の肩を軽く押しつけて顔を見た。月光はうしろから差し込んでいるが、彼女の顔ははつきりと見えた。

「私にとつてあなたがどれほど大切な方か、とても口では言えません。『大切な方』なんて本当にはつきりしない言葉ですが、どれほどあなたを愛しているか、あなたはお分かりでないでしょう。分かるはずがありません。でも思い切つて申しあげなければなりません。聞いていただきたいことが山ほどあるんです。もうクラブに戻ったほうがいいでしょう。皆が探しにくるかもしれません。ペラソダでもお話できますし」

「私の髪、乱れてませんか？」

「美しいですよ」

「でも乱れてるでしょう。撫でつけてちょうだい」

彼女は彼の方に頭を傾けた。彼は手でその短く冷たい髪を撫でつけてやった。このように頭を傾けてくれると、妙に親近感を覚えた。キスよりはるかに親密で、すでに彼女の夫になつていような気持ちになつた。ああ、この人を自分のものになければならない。彼はそう確信した。彼女と結婚して初めて自分の人生は救われるのだ。今すぐ結婚を申し込もう。二人はゆつくりと綿の木の間に縫つてクラブに戻つた。彼はまだ彼女の肩に手を回したままだった。

「ペラソダで話しましょう」と彼は繰り返した。「なぜか今までゆつくりお話ししたことがありませんね。私はこの数年来、話相手を心から求めていました。こんなことをしゃべり出したら切りがありません。こんな話は退屈でしょう。退屈だろうと思います。ちよつとだけ我慢して聞いて下さい」

彼女は『退屈』という言葉に抗議するような声を出した。

「いいえ、退屈なことは分かっています。我われ在印イギリヌ人はいつも退屈な連中だと思われています。また実際そうなんです。でもどうしようもありません。実は、何とか、我われの身体の中には、おしやべりに駆りたてる悪魔がいるんです。お互いに分かちあいたいと願っているから、なぜかそうできない記憶の山を背負つてるんです。それがこの国にまたために支えねばならない代償です」

二人は側面のペラソダにいたので邪魔される心配は少なかった。ペラソダ側に直接聞くドアがなかったのである。エリザベスは枝編み細工の小テーブルに腕を置いてすわつていたが、ローリーは依然として上着のポケットに手をつ突っ込んで歩き回り、ペラソダの東のひさしから差し込んでいる月光の中に出たり、暗がりに戻つたりしていた。

「あなたを愛していると、たった今言いましたね。愛しているなんていうのは、無意味になるくらい使い古された言葉ですが、説明させて下さい。今日の午後、一緒に狩猟していた時思ったんです。ああ、どうとう人生を共にできる人、しかも本当に人生を分かちあい、共に生活できる人が現われたと。分かっていただけですか」

彼は結婚の申し込みをしようとしていた。実際、これ以上ぐずぐずせずに申し込むつもりだった。しかし肝心の言葉はまだ口にせず、自分勝手なことをしゃべり続けた。どうしてもそうなるでしょう。この国で自分がどのような生活を送ってきたかを少しは理解してもらい、さらに彼女に解消してもらいたいと願っている自分の孤独感の本質を彼女が理解してくれることが重要だった。説明するのは恐ろしくむずかしいことだった。名状しがたい苦痛にさいなまれることはつらい。分類が可能な程度の病気に苦しんでいる人びとは幸せだ。貧乏人、病人、恋路の邪魔をされている人びとも。なぜなら少なくとも彼らの場合、他人はどこが悪いのか分かってくれ、不平を聞いて同情してくれる。しかし放浪の苦しみは経験した者にしか分からない。エリザベスは彼が行き来し、月光の輪から出たりはいたりするのを見ていた。月光が彼の絹の上衣を銀色に染めた。彼女の心臓は先ほどのキスでまだどきどきしていた。しかし彼が話している間、彼女は別のことをぼんやり考えていた。この人、私に求婚するつもりなのかしら。なんてぐずぐずしてらんだら。何か孤独とかなんだと言ってるようだけど。もちろん、この人は結婚後、密林の中で耐えなきやならない孤独のことを話しているんだわ。そんなこと心配する必要のないに。誰だって密林にはいれば、時にはちよつと淋しくなるんじゃないかしら。どこへ行くにも何マイルも離れており、映画も舞踏会もない。二人のほかに話相手もなく、夜など読書以外にすることがない。そりや、少しは退屈でしょう。でも蓄音機は持つていけるでしょう。それにあの新型携帯用ラジオがピルラに出回れば、事情は随分変わってくるでしょう。彼女がこのように言うおうとした時、彼は次のように付け加えた。

「私の言っていること、少しはお分かりいただけただけでしょうか。ここでの生活が想像できますか。違和感、孤独、憂うつ。異国の木や花や風景、それに異国風の容貌。皆、星に劣らず遠い存在です。ぜひ分かっていたいただきたいのです。ねえ、別の惑星で暮らすのも、そんなに悪くはないと思われませんか。いや、むしろ限りなく楽しいことと思われませんか。一緒に暮らしてくれる人が、一人でもいてくれさえすれば、それも自分と同じ目でものを見てくれる人が……この国は今まで私には孤独の地でした。大抵の人にとってそうです。でも独りでなければ、ここだって天国になるかもしれません。下らない話だと思われませんか」

彼はテーブルのそばに立ち止まっており、彼女の手を取り上げた。薄暗がりの中で彼女の顔は花のような淡い楕円形にしか見えなかったが、触れた手の感じでこちらの話を相手は全然理解していないことが分かった。そんなことを求めるのが間違っている。無駄だ、こんなとりとめもない話は。すぐ言おう、結婚してくれませんか、と。おしやべりする機会は今後いくらでもある。彼は彼女のもう一方の手を取って静かに立たせた。

「下らないことはかり言つて申し訳ありません」

「かまいませんわ」キスを予想しているのか、声は聞きとりにくかった。

「いえ、下らぬ話です。言葉で説明できることと、できないことがあります。それに自分のことごとくどと愚痴をこぼすなんて失礼です。でも私はあることを申しあげたかったんです。ねえ、それはこうなんです。あの……」

「エリザベスー！」

ラッカーステイン夫人が鋭く悲しげな声でクラヴラの中から呼んでいた。「エリザベス！ どこにいるの、エリザベスウー」

夫人は正面のドア近くにいるようだった。すぐベランダに現われるだろう。フロアーはエリザベスを引き寄せた。二人は急いでキスをした。彼は彼女の身体を離し、手だけ握っていた。

「早く、ほんのちよつと時間があります。これだけは答えて下さい。あなたは……」

しかし、言葉がそこでぎれた。同時に、ただならぬ事態が足もとで起こった。床が海のようにうねり横揺れした。彼はよろめき、目がくらんで激しく倒れた。床が彼の方に迫ってきて、二の腕をどつんとぶつけた。倒れたままだと、地下に何か巨大な動物がいて、その背に乗せた建物全体を揺さぶっているような具合に自分の身体が激しく前後に揺さぶられている感じだった。

酔っぱらった状態から床が急に正常に戻り、フロローリーは上半身を起こした。目くらみがしたが、たいした怪我はしていなかった。漠然と分かったことといえば、エリザベスがばで腹這いになっており、クラブの中から金切り声が聞こえることくらいだった。門の外では、二人のビルマ人が長髪をなびかせて月光を浴びながら走っていた。彼らはありったけの声を張り上げて叫んでいた。

「ガ・インが身を震わせてるんだ。ガ・インが身を震わせてるんだあ」

フロローリーは何のことか分からず彼らを眺めていた。ガ・インとは誰のことだろう。ガという音は犯罪者に付けられる接頭辞だ。ガ・インは強盗団員のことにはちがいない。じやあ、なぜそいつが身を震わせているんだろう。それから彼は思い出した。ガ・インとはギリシヤ神話の巨人、テュポエウスのように、地下に埋められているとビルマ人たちが信じている巨人のことだと。もちろん、これは地震のことだったのである。

「地震だ」と彼は叫んだ。それからエリザベスのことを思い出し、助け起こそうとして彼女のの方に近づいた。しかし彼女はもう上半身を起こして後頭部をさすっていた。怪我はしていなかった。

「地震だったのですか」と彼女は少し恐ろしそうな声で言った。

背の高いラツカーズ夫人が、長いとかげのような格好で壁にへばりつき、這うようにしてペラソダの角を回ってきた。彼女はヒステリーみたいに叫んでいた。

「まあ、地震だわ。ああ、本当に驚いた。もう駄目、心臓がもたないわ。なんてことでしょう。地震だなんて」

ラツカーズ夫人は一つには地面がまだ微動しているため、一つにはジンに酔っているためにまともに歩けず、よろよろとあとから付いてきた。

「畜生、地震だ」と彼は言った。

フロローリーとエリザベスはゆっくり立ち上がった。皆揺れる船から岸へ移る時のように、足の裏が妙な感じで建物の中にはいった。老ポニー長は頭にターバンを押しつぶしながら召使部屋から急ぎ足で出てきた。あとからポニーの一群がぺちやぺちやぱりながらついてきた。

「地震です、地震ですよ」と彼はせき込んで言った。

「確かに地震だったよ」とラツカーズ夫人は用心深く椅子に腰を下ろしながら言った。「おい、ポニー長、酒を持ってこい、あんな目に遭ったのだから一杯飲めたら助かる」皆何か飲んだ。ポニー長ははにかみながらも晴れやかな顔で、盆を手に片足でテーブルのそばに立ち、「地震です、大地震です」と熱心に繰り返していた。話をしたくでうずうずしていた。その点に関してはほかの誰も同じだった。揺れる感じが足もとから消え去ると、『生きている喜び』が異常なほど強く全員を襲ったのだ。

過ぎ去ってみれば、地震は大いに愉快な出来事である。残骸の山に押し潰されても不思議ではなかったのにと、誰だつてうれしさがこみ上げてくる。一同は一斉にしゃべり始めた。驚いた、あんな震動は初めてだ、ぼつたり仰むけに倒れた、のら犬が床の下で体をかいてるのかと思った、どこかで爆祭があったにちがいないと思ったよ、といった具合のよくある地震談義だった。ポニー長さえ話に加わっていた。

「本当にたぐさんの地震を覚えてるでしょうね、ポニー長」とラツカーズ夫人が、彼女としてはまったく愛想よく言った。

「ええ、奥さま、大変多くの地震を覚えています。一八八七年、一八九九年、一九〇六年、一九一二年、たぐさん、たぐさん思い出せます、奥さま」

「一九一二年のはかなり大きかったな」とフロローリーは言った。

「そうですね、でも旦那さま、一九〇六年の方が大きかったです。とてもひどい地震でした。寺院の大きな異教の神像が、仏教徒のタタナイン僧正の上に倒れてきました、奥さま。ビルマ人はこれを稲の不作とか、牛や羊の口蹄疫こうていえきの悪い前兆だと言います。また一八八七年には、私が覚えている最初の地震がありました。当時私はポニーでした。ラツクラガン少佐殿はテーブルの下に這いつくばって、翌朝、禁酒の誓いに署名すると約束なさっていました、地震だとは気がつかれなかったのです。屋根が落ちて二頭の牛が死にました」といった具合にとどまるどころを知らなかった。

ヨーロッパ人たちは真夜中までクラブにいた。ポニー長は新しい逸話を話そうとして、五回も六回も部屋に現われた。それをはねつけるどころか、ヨーロッパ人たちはもつと話す

ようにもちかけた。人びとを集めるのに地震ほど結構なものはない。もう一度か、あるいは二度くらい震動があったら、彼らはポニー長を自分たちのテーブルにすわらせようとしたであろう。

その間、フロアーリーの求婚は進まなかった。地震の直後に結婚の申し込みはできない。とにかくその晩はエリサベスと二人きりになる機会がなかった。しかしそれはたいした問題ではなかった。彼女がもう自分のものだとということが分かっていたからである。朝になれば、いくらでも時間があるだろう。こう思うと心が安らぎ、長い一日の疲れがどっと出て彼は眠りについた。

墓地のそばにあるピーソカドの大木に巢食っている禿鷹が、糞で白くなった枝から飛び立ち、体と翼を立て直し、大きく輪を描きながら上空に舞い上がっていった。まだ早い時間であったが、フロローリーはもう出てきた。これからクラヴに行き、エリザベスが来るのを待って、正式に結婚を申し込むつもりだった。自分でも分からぬまま、ほかのヨーロッパ人が密林から戻ってくる前に急いでそのことを片付けたいと本能的に願っていた。

屋敷の門を出たところで、彼はチャウタダに新しいイギリス人が来たことを知った。手に針のような細身の長槍を持った若者で、白い小馬に乗って、広場をゆる駆けで横切っていた。インド土民兵のように見えるシーク教徒が数名、鹿毛と栗毛の小馬を二頭引いてあとから駆けつけてきた。若者が自分と並んだ時、フロローリーは道の真ん中で立ち止まり、大声で彼に挨拶した。若者の顔に見覚えはなかったが、狭い駐屯地では、初めて見る人にも挨拶するのが習慣になっている。相手も挨拶されたと知って小馬をゆっくり回し、道端で止めた。二十五歳ぐらいで、やせてはいるが姿勢がよく、騎兵隊の士官らしかった。顔はイギリスの軍人に多い兎のような顔であり、目が薄い青色で、前歯が唇の間から三角形にのぞいていた。しかしむぞうさな中にも、どこか恐れを知らぬ残忍と言えるところがあり、兎は兎でも強い軍用兎だった。馬の一部になり切ったみごとな乗り方をしており、しやくにさわるほど若わかしく強そうだった。若わかしい顔がほどよく日焼けして薄い目の色とみごとにつり合っており、白い鹿皮のヘルメット帽をかぶり、長い間使込んだ海泡石パイプに似た色つやのポロ用長靴をはいていると、絵のように優雅だった。この若者を目の前にして、フロローリーは初めから不快感に襲われた。

「初めまして。今ご到着ですか」

「いや昨晚だ。夜遅く列車で着いた。この地の無法者どもがごたごたを引き起こすのに備えて待機しろという命令で、兵士たちと当地に派遣されたんだ。名前はペロール、憲兵だ」少年のようにぶつきらぼうな口調であり、自分の名前は言ったがフロローリーの名前は聞かなかった。

「ああ、そうそう、そういえば誰かを派遣することは聞いてました。宿はどちらですか」

「当分は宿舎ホステルにいる。昨夜到着した時に、収税吏とか何とかという黒ん坊野郎がそこいたので、そいつを追い出してやった。うす汚いところだな」頭を後に動かしてチャウタダの町全体をさしながら言った。

「駐屯地のある小さな町なんてどこも似たり寄ったりでしょう。長く駐屯なさるんですか」

「有難いことにひと月ぐらいいかな。雨季にはいるまでだ。ひどいな、この広場は。草を刈ることはできないのかね。これじゃポロも何もできやせん」手にした槍の先で枯れ草を払いながら言い足した。

「ここじゃポロは無理ですよ。テニスぐらいが関の山です。全部入れてもイギリス人はたったの八人で、それも四日のうち三日は密林のほうですからね」

「まいったな。なんて町だ！」

このあと言葉は途切れた。背が高く、みごとなあごひげを生やしたシーク教徒の土民兵たちは、引いている小馬の前にかたまってフロローリーをじろじろ見ていたが、その目は少し冷たかった。どうもペロールはこのような会話にうんざりして逃げ出したいと思っっているようだった。自分がこれほど邪魔者扱いされているのと、これほど年をとってみずぼらしいのを感じたのは、フロローリーには初めてだった。フロローリーはペロールの乗っている小馬が美しいアラブ産の雌であるのに気づいた。首を誇らしげにしやんと立て、羽毛のような尻尾が弧を描き、美しい毛はミルクのように白く、数千ルピーはする逸物だった。もうたつぷり半日分の話はしたと思ったのか、ペロールは手綱を緩めて小馬の向きを変えようとしていた。

「みごとな馬ですね」

「まあね。ピルマ産の駄馬よりやましき。ちよつと杭抜き〔全力疾走中、馬上から槍先でデントの留め杭を抜く騎馬術〕をしに来たんだ。こんな薄汚いところでポロのボールを追い回しもならんから。おい、ヒラ・シン！」この若者はいきなり部下を呼んで、小馬の向きを変えた。

鹿毛の小馬を引いていた土民兵は、手綱を仲間渡し、四〇ヤード離れたところに行き、つげの木の細い杭を地面に立てた。ペロールはフロリーの方を振り向きもせず、槍を上げて杭をねらうように身構えた。インド人たちは馬上のまま邪魔にならぬところまで退き、食い入るような目でそれを見ていた。それと分かれぬほどに軽く、ペロールは両膝で小馬の横腹を押した。小馬は石弓から撃ち出された石のように飛び出した。やせて姿勢のよい若者は、名騎手のように榮らくと馬に身を伏せ、槍先を下げ、地上の杭をみごとに刺し貫いた。インド人の一人がぶつきらぼうに「みごと！」とつぶやいた。ペロールは作法通り槍を背に回し、小馬をゆる駆けにしたあとで向きを変え、刺し貫いた杭を土民兵に渡した。

ペロールは続いて二度杭に向かつて駆け、二度とも杭を仕とめた。比類のないほど美しく、珍しいほど荘重な技だった。イギリス人とインド人が一体になって、ただ杭を刺すことだけに夢中になっており、宗教の儀式のような感じだった。フロリーは相変わらず無視されたまま、帰ることもできずに突つ立っていた。ペロールの顔は、初対面で見えない相手を無視するにはうつつの顔だった。フロリーにすれば、相手にしてもらえないので、よけいにその場から離れられなかったのである。ペロールを見ていると、なぜかフロリーは恐ろしいほどの劣等感に襲われた。それで何とか会話を再開する口実を見つけようとしていたが、その時ふと丘の上を見ると、エリザベスの姿が目にはいった。淡青色のドレスを着て叔父の家の門から出てきたところだった。彼女は三度目の杭刺しを見たに違いない。彼の胸は痛んだ。いい考えが頭に浮かんだ。もつともそれは面倒な結果を招く向こう見ずな思いつきにすぎなかった。フロリーは数ヤード離れて立っているペロールに声をかけ、ステッキで小馬を指し示しながら言った。

「あの二頭も杭抜きができますか」

ペロールはむつつり顔で肩越しにそちらを見た。あれだけ無視されたんだから、フロリーは当然立ち去つただろうと思つていたので。

「何だ？」

「あの二頭もこれができるんですか」

「栗毛のほうはまだまああさ。ほうつておくと逃げ出すがね」

「ひとつ私に杭を抜かせてもらえないでしょうか」

「よからう。やつつの口を切らないでくれよ」ペロールが無愛想に言った。

土民兵の一人が小馬を連れてきた。フロリーはくつわの鎖を調べるふりをした。実はエリザベスが三〇フイートか四〇フイートのところに近づぐまで、時間をかせいでいたのだ。杭抜きは、ピルマ産の小きな小馬なら、まっすぐに駆けてくれさえすれば簡単にできる。フロリーは、ちよつどエリザベスを通りかかった時に杭を突き刺し、槍を杭に刺したまま彼女に馬を寄せることにしようとした。それが一番いい。馬を乗りこなせるのはあの赤ら顔の若僧だけじゃないことをエリザベスに知らせなけりや。あいにく乗馬に不向きなズボン姿ではあつたが、彼もご多分にもれず、馬上の姿が自分は一番立派だと信じていた。

エリザベスが近づいてきた。フロリーは鞍にまたがり、インド兵から受け取った槍を振つてエリザベスに挨拶した。しかしエリザベスのほうは答えなかった。ペロールがいろいろと恥ずかしいのだろうか、視線を墓地のほうにそらし、ほおを染めていた。

「行くぞ！」フロリーはインド人に声をかけ、膝で馬の腹を押した。

次の瞬間、馬がひと跳びした途端に、フロリーは宙を飛び、大地にどすんと音がするほど強く投げ出されていた。ひどく打つたせいで肩がはずれそうに痛み、何度も地面を転がった。運よく槍は遠くに放り出されていた。仰向けに転がった目に、青空とそこに舞う禿鷹がぼんやり映った。それから目の焦点が合い、シューク教徒のカーキ色のターバン、黒い顔、それに目のあたりから生えているひげまでがはっきり見えた。彼がのぞき込んでいた。

「どうなったのだ？」とフロリーは英語で聞き、やつとの思いで片ひじを突いた。シューク教徒はぶつきらぼうに何か答え、広場のかなたへ疾走して行く小馬を指さした。鞍が腹の下に回っていた。腹帯がゆるんでずり落ちており、そのために落馬したのだった。

上半身を起すと劇痛を感じた。シャツの右肩が破れて血だらけになっていた。ほおからも血が流れているのが感じて分かった。硬い地面で擦りむいたらしい。帽子はどこかに飛んでしまっていた。この時エリザベスのことを思い出して、フロローリーは胸が締めつけられる思いだった。彼女は一〇ヤード足らずのところまで近づいており、ぶざまな格好でっている彼を真つ向うから見ていた。ああ、まったく俺は何という馬鹿面をしていることだろう。そう考えると、落馬の痛みも忘れた。彼は思わず怪我したとは反対側のほおにある痣を手で押さえた。

「やあエリザベス。ねえエリザベス、おはよう」

フロローリーは、自分の馬鹿面を意識している者がよくやる、例の強く訴えるような声でエリザベスに呼びかけた。しかしエリザベスはその声が聞こえないのか、何も答えなかった。否、信じられぬことだが、姿さえ目にはいらなると言わんばかりの様子で、足も止めずに通りすぎた。

フロローリーはうろたえて、また叫んだ。「ねえエリザベス、落馬するところを見た？ 鞍が滑ってしまって。土民兵の馬鹿が……」

今度は確かに彼の声か耳にはいったようだった。彼女は一瞬、顔をまっすぐ彼の方に向け、彼などそこにはいないと言わんばかりに射貫くような目で彼を見すえた。それから遠く墓地の向こうに目をそらした。なぜか恐ろしい気持ちになり、フロローリーは通りすぎていく彼女の背に狼狽して呼びかけた。

「エリザベス、ねえ、エリザベスったら！」

エリザベスは何も言わず、何の素振りも見せず、振り向きもせずに通りすぎ、背を向け、ハイヒールを鳴らして足早に道を下っていった。

土民兵たちが彼の回りに集まった。中にはエリザベスに敬礼をした兵隊もいた。ペロールもフロローリーが倒れているところまで馬でやってきたが、エリザベスの方は見向きもしなかった。あるいは彼女の姿が彼の目にはいらなかったのかもしれない。フロローリーは身体をきりしませるようにして立ち上がった。ひどい打ち身を受けはしたが、骨折はなかった。インド人たちはステッキと帽子を拾ってくれたが、自分たちの不注意を詫びはしなかった。フロローリーが当然の報いを受けたのだとしても考えているのか、わずかながら軽蔑の色さえ浮かべていた。あるいは腹帯をわざとゆるめてあったのかもしれない。

「鞍が滑ったもので」フロローリーはこのような場合特有の弱よわしい間の抜けた声で言った。

「どうして乗る前によく確かめなかったんだ。インド野郎など信用できないのは分かっているだろう」ペロールは言葉少なに言った。

そう言うと、彼はもうこの事件は終わったと考え、手綱を引いてその場から離れていった。土民兵たちもフロローリーには会釈もせず、そのあとを追った。フロローリーが家の前まで来て振り返ると、連中はもう栗毛の小馬をつかまえて鞍を置き、ペロールがそれに乗って杭抜きをしていた。落馬のショックが大きかったので、フロローリーはまだ頭が混乱している。どうしてエリザベスはあのような態度に出たのだろう。自分が血を流し、苦しんで倒れているのに、彼女のほうは犬の死骸が転がっているほどにも気にかけて通り返さなかった。どうしてあんなことになったんだらう。本当に起こったことだろうか。信じられない。何か怒っているのだろうか。何か彼女の機嫌を損ねるようなことをしたのだろうか。召使が全員垣根のところまで出て主人を待っていた。みな杭抜きを見に出てきて、自分たちの主人が赤っ恥をかくのを見た。コ・スラは心配そうに途中で走って迎えにきた。

「旦那さまお怪我は？ 家までお背負いしましょうか」

「いや、ウイスキーと新しいシャツを持ってきてくれ」フロローリーが答えた。

家にはいると、コ・スラはフロローリーをベッドに腰かけさせ、破れて血のへばりついていいるシャツを主人の身体からはがした。コ・スラは舌打ちして言った。

「これはひどい！ 傷に土が詰まってるじゃないですか。初めて乗る小馬であんな子供っぽい遊びをするのはやめて下さい。旦那さまはもうそんなお年じゃない。危なすぎますよ」  
「鞍が滑ったんだ」

「あんな遊びは若い憲兵には似合うでしょうが、旦那さまはもう若くはないんですよ。旦那さまのお年では、落馬すれば必ず怪我します。もっとお身体に気をつけていただかねば」  
「年寄り扱いするのか？」フロローリーは怒って聞いた。肩が恐ろしく痛んだ。

「三十五歳です、旦那さまは」コ・スラは静かではあるが断固とした口調で言った。

まったくいい恥さらしだった。マ・ブとマ・イは一時的に仲直りをし、傷に絶対に効くのだと言って恐ろしく汚らしいものを何かポットに入れて持ってきた。フローリーはコ・スラに命じて、それをこっそり窓から捨てさせ、代わりに**硼酸軟膏**を塗らせた。そのあと生ぬるい風呂にはいり、コ・スラにスポンジで擦り傷の上を洗ってもらった。その間も彼はさきほどの出来事にまったく首をかしげ、頭がはつきりしてくと、なおさら狼狽の度を強めていった。彼女の機嫌を完全に損ねてしまったのは確かだった。しかし昨夜別れてから会っていないのだから、一体全体なぜ機嫌を損ねるようになったのだろうか。もともともらしい説明さえつきかねた。

コ・スラには、鞍が滑ったから落馬したのだと何度も説明した。しかしコ・スラは同情は示したが、言い訳など受けつけていないようだった。これじゃ、死ぬまで乗馬が下手で落馬したと思われることだろうとフローリーは思った。皮肉なことに、二週間前にはおとらしい水牛を平手打ちで追いかい、不相応な信頼を受けたのだ。運命の女神もかなり公平である。



フロローリーは晩さん後クラブに寄るまでエリザベスに会わなかった。彼女を捜し出して説明を求めてもよかったのだが、そうはしなかった。鏡で自分の顔を見ると気後れた。一方には痣、もう一方には擦り傷があつて実に悲しげで恐ろしく見えたので、昼間は人前に出る勇気がなかった。クラブの休憩室にはいる時は、蚊にひたいを刺されたという口実を使つて手を上げ、痣を隠そうとした。このような場合痣を隠さずにいるのは、彼の神経では耐えられなかつたであろう。しかしエリザベスはそこにいなかった。

その代わり、悪いがけない喧嘩に巻き込まれた。密林から帰つたばかりのエリスとウエストフイーールドが、不機嫌な顔で酒を飲んでゐた。『ビルマ愛国者』紙の編集者がマゼレガー氏を侮辱したかどで、たつた四ヵ月監禁されただけだというニュースがラングーンからはいつてゐた。エリスはこの軽い判決を聞いて、こみ上げる怒りをおさえかねてゐた。フロローリーがはいつてくるのを見ると、いきなり『べらべらいやみな』チビの黒ん坊のことで彼にからんできた。その時のフロローリーは喧嘩など真つ平だつたが、軽率な答をしたために言い争ひになつた。口論は次第に激しくなり、エリスがフロローリーを『黒ん坊相手のホモ野郎』と呼び、フロローリーのほうも売り言葉に買い言葉で言い返したりしているうちに、ウエストフイーールドまでかんしゃくを起こした。彼は人のよい男ではあつたが、フロローリーの過激な考え方には時どきいら立つことがあつた。あらゆることにはつきり正しい見解と間違つた見解があるのに、フロローリーときたら、いつも間違つた意見のほうを選んで喜んでゐるが、一体どういふ気持ちなんだろう、と思つた。彼はフロローリーに「ハイド・パークでアジ演説をしている野郎のような口をきくな」と言つた。それから『まことの紳士の五大幸福』を借りて、意地悪くかみつくような口調で説教した。

われらの威信を維持せよ。

強い手にピロードの手袋はかぶせるべからず。

白人よ団結せよ。

やつらは寸を与えれば、尺を望む。

故に団体精神こそ必要なり。

その間もずっと、早くエリザベスに会いたたいという気持ちにさいなまれていたので、フロローリーは相手の言葉などほとんど聞いていなかった。おまげにこんなことはみなラングーンに来て以来何度も、百回も、千回も聞いてきた。初めてラングーンに来た週に、会社の『立派な紳士』が（ジン浸りの老スコットランド人で、競走用小馬を飼育する腕はよかつたが、後に同じ馬を二つの名前前で走らせるという性の悪いことをして、競馬場から追放された男だが）現地人の葬式のところを通りすぎた際に、フロローリーがヘルメット帽を脱いだのを見て非難した。「なあお若いの、俺たちは紳士で、あいつらは野蛮人だということを忘れちゃいけないよ」そんなたわ言をまた聞かねばならないので、彼はむかつつとした。それで口汚く罵つてウエストフイーールドの話をさえぎつた。

「おい、やめてくれ、そんな話はうんざりだ。ベラスロミは実にいい男だ。いい加減な白人よりはるかに立派だよ。とにかく次の総会で俺は彼を会員に推薦するつもりだ。おそろく彼はこのひどいクラブを少しは活気づけてくれるだろう」

この大声を聞いてボーイ長が現われたので争ひは途切れた。クラブでの口論など大抵はこんなことで終わった。もつとも終わつていなければこれは重大な事態に発展したことであらう。

「旦那さま、お呼びですか」

「呼んではおらん、失せろつ」とエリスがむつとして言つた。ボーイ長は退いたが、差し当たりそれで口論は終わった。この時、外から足音と話し声が聞こえてきた。ラッカース

テイーン一家がクラブに着いたのだ。

一家が休憩室にはいつてきた時、フロロリーはエリザベスの顔をまともに見ることができなかった。しかし三人がいつもよりはるかにスマートな服装をしているのには気づいた。ラッカーステイン氏は季節の関係で白だったが、タキシードを着て、まったくしらふだった。礼装用ワイシャツと合わせ縫いのチョッキが、よろいのように身体をしんとさせ、気持ち硬直させていた。夫人は赤いドレスを着て美しい蛇のようだった。はつきりとは言えないが、三人は誰か身分の高い客を迎える用意をしているような印象を与えた。

飲み物を注文し、ラッカーステイン夫人が振りうちわの下の場所を占めると、フロロリーは三人の外側の椅子にすわった。まだエリザベスに話しかける勇気がなかった。ラッカーステイン夫人は妙な馬鹿げた様子で 皇太子 の話を始めていた。口調も急場しのぎで拔擢されてミュージカル喜劇の公爵夫人役を演ずるコーラス・ガールのような調子だった。一体どうなったのだとほかの者はひそかに思った。フロロリーはエリザベスのうしろの方にいた。彼女は流行の非常に短い黄色のワンピースを着て、それに合うようにシャンペンの靴下と上ばきをはいており、駝鳥の羽根の大扇を手にはしていた。あまりあかぬげして大人っぽく見えたので、フロロリーはこれまでになく気後れしたことがあるなんて思えなかった。彼女は、ほかの者たちには気やすく話しかけていた。時どき思いきって皆の話に口をはさんでみたが、彼女は直接には一度も答えてくれなかった。わざと彼を無視しようとしているのかどうかは分からなかった。

「ところで、どなたか三番勝負〔ブリッジ〕はなさいませんか？」とまもなくラッカーステイン夫人は言った。

彼女は気取って、はつきり『ラバア』と言った。一言ごとにますます貴族調になっていった。どうなっているのか分からなかった。エリヌとウエストフイールドとラッカーステイン氏が三番勝負を希望しているようだった。エリザベスが勝負に加わらないのを知って、フロロリーはすぐさま断わった。彼女と二人きりになれるのは今においてなかった。ゲーム室の方に行く時、エリザベスが一番あとからやってきたので、不安と安堵の入り混じった気持ちになった。彼は入口に立ちほだかつて、行く手をさえぎった。顔は真っ青になっていた。彼女は少したじろいだ。

「すみません」と二人は同時に言った。

「ちよつとお話できませんか」と彼は言った。どうしても声が震えた。「いいでしょう、ぜひ聞いていただきたいことがあるんです」

「通していただけませんか、フロロリーさん」

「お願いです。お願いだから。今は私たちだけです。しゃべらせていただければいいでしょうね」

「で、何ですか」

「ひとつだけです。お怒りをかうようなことをしたのなら、それが何かおっしゃって下さい。言って下されば、なおします。あなたに怒られるくらいなら自分の手を切断したほうがいいです。どうかおっしゃって下さい。わけが分からないままにしておかないで下さい」

「阿のことをおっしゃってるか全然分かりません。『どうして怒らせたのか教えてくれ』ですって？ なぜ私を怒らせたとお考えなんですか」

「でもそうにちがひありません。ご様子を拝見していますと」

「私の様子ですって？ あなたののおっしゃりたいことが分かりません。一体どうしてこんな無茶なお話をなさるんですか」

「でも、私に話しかけようともなさらないでしょう。けさもまったく知らないふりをされました」

「私がどうしようと、とやかく言われるすじはございませんでしょう」

「でも、お願いです。お分かりになりませんか。いきなりはねつけられるのが、どれほどのことか。いや、お分かりのはずだ。でもほんの昨晚ですよ、あなたが……」

彼女は赤くなつた。「そんなことをおっしゃるなんて、本当に、本当に卑劣ですよ」

「ええ、分かっています。みな分かっていますよ。でもそうする以外にどうできるんです？ けさあなたは、石のそばでも通るように私のそばを通りすぎられました。私がお怒らせたのだと思います。それを知りたいと言ったからって、私を非難できますか」

例によって、言えば言うほど彼は事態を悪化させていった。彼に何をされたにしろ、それを言えと強要されるほうが、彼のしたこと自体よりもひどいことだと彼女が思っていることに、彼は気づいた。彼女は説明するつもりはなかった。何も知らさないで彼をはねつけ、何もなかったふりをするつもりだった。それがごく自然な女性的態度というものだ。それなのに彼はまたせつないた。

「お願いですからおつしやって下さい。どのようなことがあったにしろ、二人の仲をこんな具合に終わらせるわけにいきません」

「仲を終わらせる？ 終わらせるようなことは何もなかったでしょう」と彼女は冷たく言った。

この言葉の無作法さに心を傷つけられ、すぐさま彼は言った。

「あなたらしくありませんね、エリザベスさん。男に愛想よくしておいてから、会っても素知らぬふりをし、理由を説明するのも拒絶するというのは。率直に教えてくれてもいいでしょう。私がどうしたのか、おつしやって下さい」

彼がやったことよりも、それを無理やり言わせようとする彼の態度に腹が立つのか、彼女は横目使いににがにがしく彼を見た。しかしこんな騒ぎは終わりにしたいと思ったらしく、次のように言った。

「どうしても言わせようとなさるのなら……」

「それで？」

「私は聞きました。あなたがいつわって私を、つまり私に……いえ、ひどすぎます。とても口にできません」

「続けて下さい」

「一方ではビルマ女を囲っていると聞いたのです。さあ、これで通していただけるでしょう」

そう言っただけで彼女は気取ってとでも言おうか、ほかに適当な表現がないが、短いスカートでひゅーと風を切って彼のそばを通り抜け、ゲーム室にせずしずとはいつていった。彼は驚きのあまり口も利けず、実に間の抜けた顔付きでそのうしろ姿を見送っていた。

恐ろしかった。そのあと彼女と顔を合わすことができなかった。彼は向きを変えてクラブから急いで出たが、彼女に見られるのを恐れてゲーム室の前を通るのさえはばかった。どろろとして逃げ出そうかと思いつながら休憩室にはいり、ようやくペランゾの手すりを乗り越え、イラワジ河まで続いている狭い芝生の上に飛び降りた。汗がひたひたから流れ落ちていた。怒りと苦痛で大声を出したい気持ちだった。なんたる不運だ。あんなことを見破られるなんて。『ビルマ女を囲っている』のはうそだ。しかし否定してもたいして役に立たないだろう。一体どんな不運な偶然で彼女の耳にはいったのだろうか。

だが寒のところ、それは決して偶然ではなかった。ちやんとした原因があった。それが、今晚ラツカースティーン夫人がクラブで奇妙な振舞いをした原因でもあった。昨晚、地震の直前、夫人は『文官俸給表』を読んでいた。ビルマ在住の全役人の正確な収入が分かるこの表は、彼女にはつきせぬ興味の源だった。その時も、かつてマソダレーで会ったことのある森林管理官の給料と諸手当とを合計していた。その時ふとペロール中尉の名前を捜してみようと思った。マソダレー氏の話では、ペロール中尉は明日、百人の憲兵を連れてチャウタダに到着の予定だった。その名前を捜し出し、次の語がそれに付いているのを見た時は氣を失わんばかりに驚いた。

それは『閣下』であった。

ウ・ナラツケ

『閣下』だ。中尉閣下なんてどこでもめつたにお目にかかれない。インド軍でもダイサモソドくらいに稀であり、ビルマではドーード一鳥と同じくらい稀である。五〇マイル四方で結婚適齢期の娘と言えば自分の姪だけだし、中尉閣下が明日にもはや到着の予定だということを知ったら、誰だって勇みたつだろう。エリザベスが、月給はせいぜい七〇〇ルピーで、酔っぱらいで卑劣漢のフローリーと庭園に出ており、フローリーがエリザベスにすでに求婚しているかもしれないと思つと、夫人はうろたえた。急いでエリザベスに中にはいるように叫んだが、この瞬間、地震という邪魔がはいつたのだ。しかし帰り道で話をする機会があった。ラツカースティーン夫人はエリザベスの腕にやさしく手を置き、これまで出したこともないような猫なで声で言った。

「もちろんご存知ね、エリザベス、あのフロローリーはビルマ女を囲っているのよ」

一瞬、この恐ろしい一撃は不承に終わった。エリザベスはこの国の風習に慣れていなかったもので、この言葉から何の印象も受けなかった。『女を囲っている』のは『オウムを飼っている』のと同じ意味しかなかった。

「ビルマ女を囲っているですって？ 何のためでしょう」

「何のためですって。まあ驚いた。一体何のため男が女を囲うと思ってるの？」  
もちろん、それで今日のような次第になったのである。

長い間フロローリーは河岸につつまっていた。月が出て、琥珀金の大桶のように水面に映っていた。外気の涼しさがフロローリーの気分を変えた。もはや怒る気力もなかった。起こったことは全く当然の報いであるということを肝に銘じ、当然ながら、ひどい自己認識と自己嫌悪を覚えていた。次の瞬間、幽霊の一隊のようなビルマ女の行列が、月明りの中で果てしなくそばを通りすぎていくような気がした。驚いた、何という数だ。千人、いや違う。しかし少なくともたつぷり百人はいる。「頭右かしら！」と元気なく心の中で言った。彼女たちの顔が彼の方に向けられたが、それは目鼻がなく、のつぺらぼうの円盤にすぎなかった。彼はここかしこに青いロンジーやルビーの耳飾りがあったのは覚えていたが、顔も名前もほとんど覚えていなかった。神は公正である。放蕩は実に楽しいが、神はそれから我われを苦しめる道具を作り給う。救いがたいほど身を汚してしまった彼が受ける当然の罰とはこれだつた。

彼はゆつくりとはずの茂みを通り抜け、クラヴの建物を回った。悲しみがあまりに深く、まだ不幸の痛みを十分に感じる事ができなかった。深い傷は大抵そうだが、大分あとから痛み出すのである。門を通りすぎた時に、何か背後の木の葉を揺すった。彼はぎくっとした。耳ざわりなビルマ語のささやき声があった。

「パイ・サン ペー・ライ！ パイ・サン ペー・ライ！」

彼は素早く振り返った。「パイ・サン ペー・ライ【お金ください】！」は繰り返された。女が一人、鳳凰木の陰に立っていた。マ・ラ・メーだった。用心深く月明りの中に出てはきたが、敵意をみせ、殴られるのを恐れてか、ある程度以上は近づかなかった。おしろいを塗りたくった顔は、月光の中で見ると気持ちが悪くほど白く、骸骨みたいにくっきり反抗的に見えた。

彼はぎくっとした。「一体ここで何をしてやがるんだ」と彼は怒って英語で言った。

「パイ・サン ペー・ライ！」

「何の金だ。どういう意味だ。なぜこのように私をつけ回すのだ」

「パイ・サン ペー・ライ！」と繰り返す声は金切り声に近かった。「お約束の金です、旦那さま。もつと金をやるとおっしゃいました。今欲しいんです、今すぐ」

「どうして今やれるんだ。来週やる。もう一五〇ルビーもやったじやないか」  
驚いたことに、女はふたたび声をありつけ張りあげて、「パイ・サン ペー・ライ」とかなんとか同じような文句を叫び始めた。ほとんどヒステリー状態だった。驚くほどの声量だった。

「静かにしろ、クラヴの連中に聞こえるじやないか」と叫んでからすぐに、しまった、余計なことを教えたと後悔した。

「ふふん。あなたの怖いのが何か分かったわ。今すぐお金をちょうだい。でないと助けてえつ、て大声出して皆をここに呼び出してやる。さあ早く、いやなら大声出すわよ」

「畜生！」と言って彼は女の方に近寄った。女は素早く飛び退いてスリッパを脱ぎ、挑むように立っていた。

「さあ、今五〇ルビー、残りはあすよ。出しなよ。いやなら市場まで聞こえるような声を出すわよ」

フロローリーは舌打ちした。今はそんな騒ぎを起こせる時ではなかった。仕方なく財布を出し、二五ルビーあったので、地面にその金を投げ出した。マ・ラ・メーはそれに飛びついて勘定した。

「五〇ルピーと言ったのよ、旦那」

「持っていないのに、どうしてやれるんだ。いつも何百ルピーも持ち歩いてると思ってるのか」

「五〇ルピーと言ったわ」

「おい、そこどけ」と彼は英語で言つて、押し通つた

しかし、このすさんだ女は彼を離そうとしなかつた。騒げば騒ぐほど金になるといわんばかりに、「バイ・サン ペー・ライ！ バイ・サン ペー・ライ！」と叫びながら、ふてくされた犬のようにあとを追つてきた。女をひとつにはクラブから引き離し、ひとつにはまいてしまうために彼は道を急いだ。しかし女は必要なら家までも付いてきそうな様子だつた。しばらくすると耐えられなくなつて、彼は女を追い払おうと振り向いた。

「すぐ立ち去れ。これ以上付いてきたら、もうアナもやらないぞ」

「バイ・サン ペー・ライ！」

「馬鹿つ。こんな真似をして何の役に立つんだ。今は一パイヌ（アナの四分の一）も持っていないのに、どうして金をやれると言うのだ」

「誰がそんなこと信じるもんか」

彼は仕方なしにポケットの中を探つた。うんざりしていたので、女を追い払うためには何でもやるつもりだつた。金製の葉巻ケースが指に触れたので、それを取り出した。

「そら、これをやるから立ち去れ。質に入れりや三〇ルピーにはなる」

ワ・ラ・メーは考えているようだつた。それからふくれつ面で「じや貰うわ」と言つた。

道路わきの草の上に投げてやると、女はそれをひとつかみ、取り戻されるんじやないかとばかり、すぐさまエンジーの胸に押しつけて飛びのいた。彼は背を向け、女の声から逃がれたのを神に感謝しつつ家に向かつた。葉巻ケースは、十日前に女が盗もうとしたものだつた。

門のところでは彼は振り返つた。ワ・ラ・メーは月明りを浴びて、灰色がかった小像のような姿で丘のふもとにまだ立っていた。疑わしいよそ者を隠れて見張っている犬みたいに、彼が丘が上がつていくのを見張つていたのにちがいない。それにしても奇妙だつた。二、三日前、脅迫状を送つてきた時と同様、今度の振舞いも奇妙で、あの女らしくないという考えが彼の頭をかすめた。予想もできなかった。実際、誰かに唆そそのかされているのではないかと思われるほどのがんばりを女は見せていた。

昨夜いさかいがあつたので、エリスはフロリーをなぶり物にできる機会を楽しみに待っていた。彼はもうフロリーに『ナンジー』というニッケネームを付け、ひどいスキャンダルをでっち上げていた。これは『黒ん坊相手の男娼』の上半分だったが、女性たちにはその意味がさっぱり分からなかつた。エリスはいつも喧嘩相手のスキャンダルをでっち上げたが、そのスキャンダルは、尾ひれを付けて繰り返されているうちに、いつの間にか長編小説にまで発展した。フロリーが不用意に吐いた、「ペラスワミ先生は本当にいい男だ」という言葉にだんだん尾ひれが付いて、やがて『デイリー・ワーカー』紙一回分はたっぷりある、悪罵や反乱罪の話にまで発展した。

ラッカーステイン夫人はペロールのあの一大秘密を知ったあと、急にフロリーがきらいになった。したがってエリスの話には喜んで耳を傾けた。「絶対に作り話じゃありませんよ、奥さん。絶対にね。昨夜のフロリーの言葉をお聞きになっていたら、爪先までぞっとしたことです」

「まあ、そうですか。実は私もつね日頃から、あの男が実に妙な考えを抱いているとは思っていたのです。どんな話でした？ まさか社会主義の話ではないでしょうね」「もっとひどい話ですよ」

例の話が、こと細かく長ながと繰り返された。しかしフロリーがすぐチャウタダを離れたので、彼をなぶる機会を逃がしたエリスは非常に残念がった。フロリーはエリザベスに肘鉄砲ロウを食った翌日、野営地に戻っていた。エリザベスはフロリーのスキャンダルをほとんど全部耳にした。もう彼の人物ははつきりと分かつていた。彼が相手の時に限って、自分がたびたびうんざりし、いらいらする理由も分かつた。フロリーはエリザベスが一番いやがるタイズ、つまりにせインテリというタイズで、レーニンや、A・J・クック〔英國の航海家〕、モンパルナスのカフェにたむろする薄汚い詩人崩れなどと同じ穴のむじななのだ。エリザベスにとってこのことはビルワ女を囲っていること以上に許せないことだった。三日のちにフロリーは手紙を書き、使いに持たせてきた。彼の野営地からチャウタダまでは歩いて一日の距離だった。弱よわしく大げさな言葉使いをした手紙で、エリザベスは返事も出さなかつた。

今は忙しすぎて考える暇もないことが、フロリーにはかえって幸いだった。彼が長い間留守をしていたので、野営地全体がごった返していた。三十名近い人夫が逃亡し、象は病気がいつそう重くなり、十日も前に積み出すはずの材木が機関車の故障でそのままになっていた。機械おんちのフロリーが機関車の内部をいじくり回したので、油で真っ黒になり、白人が人夫のするようなことをしてはいけません、とコ・ヌラに強くたしなめられた。機関車はやつと何とか動くようになった。と言つてもスピードは全然出なかつた。象の病氣はさなだ虫が原因だと分かつた。人夫が逃亡したのは阿片の支給が途切れたからだだった。彼らは阿片を熱病の予防剤として吸うので、これが切れると密林に残ろうとしないのである。ウ・ポ・チンは、フロリーをひどい目に合わせるために収税吏をそそのかし、彼の不意を襲つて阿片を押しさせた。フロリーはペラスワミ先生に手紙で助けを求めた。ポクターは闇で手に入れた多量の阿片と象の薬を使用上の指示まで添えて送り届けてくれた。象からはニーファイトもあるさなだ虫が出てきた。フロリーは日に十二時間も忙しく働いた。夕方仕事が一段落つくと、密林にはいり込んで、汗が目にしみ、いばらに刺された膝から血が流れるまであちらうちらうつき回つた。夜はつらかつた。過ぎし日のつらい思い出が、例によつて少しづつ胸に食い込んできた。

一方、一週間近くにもなるというのに、エリザベスはまだペロールの姿を一〇〇ヤード以内に近づいて見たことがなかつた。彼が到着の夜にクラブへ現われなかつたのは残念であつた。ラッカーステイン氏は妻にしつこく言われて着た夜会服が無駄になつたので、本当に腹を立てていた。翌朝ラッカーステイン夫人は夫をせつつき、宿舎あてに余計な手紙を書かせ、ペロールをクラブに招待した。しかし返事は来なかつた。それから何日か過ぎたが、ペロールはこの地方の連中と交際しそうな素振りをまったく見せなかつた。彼は公務の訪問も怠り、ワグレガー氏の事務所に出頭する手間さえ省いた。宿舎はクラブとは反対側の方であつて駐屯所に近いので、そこにいと非常に楽だつた。一定の日数がすぎると宿舎を引きはらうのが規則であるが、ペロールは波風を立てずにうまくこの規則を破つた。ヨーロッパ人たちは朝夕、彼の姿を広場で見かけるだけだつた。到着の二日のちに五十人の部下が鎌を持って広場に現われ、雑草を大きく刈り取つた。その後広場では、ペロールが馬で駆け回つてポロの打撃練習をしている姿が見られた。ヨーロッパ人が道を通りかかつて

見向きもしなかった。ウエストフールドとエリスは激怒し、ワグレガ一氏でさえ、ペロールの態度は「不愉快です」と言った。もしペロールが少しでも礼儀をわきまえておれば、一同は中尉閣下の足もとにひれ伏したことだろう。ところが彼が全然礼儀をわきまえない人物だったので、女性二人は別として、他の者は皆、初めから彼を毛嫌いした。爵位のある人物なんていつもこの調子で、賞賛的になるか、でなければ嫌悪の対象になるかどちらかである。他の連中と打ち解ければ、すばらしく気さくなお方だということになるし、連中を無視すれば、いやな俗物ということになる。中間はないのである。

ペロールは貴族の末っ子で、金は全然なかった。しかし令状が送られてくるまでは請求書に対する支払いを拒否するという方法で、彼が最も重要視している衣服と馬だけは何とかやりくりしていた。イギリス騎兵連隊の将校としてインドに來たが、インド陸軍に籍を移すほうが生活は安上がりだし、ポロも自由にやれるので、そちらに移った。そうこうしているうちに借金が増えたので、二年後には、金を残せることで悪名高いビルマ憲兵隊のほうに移籍した。しかしビルマはどう見ても騎兵向きの国ではないので、彼はビルマを毛嫌いし、もとの騎兵連隊に復帰願いを出していた。彼は望めばどの部隊にでも自由に移籍できるような軍人だった。チャウタダでの駐屯はせいぜい一ヵ月ほどにすぎないもので、この地のくだらぬ紳士連中に立ち交じる気など毛頭なかった。チャウタダのような小つぼけな駐屯地で交際する連中など、小利口ぶって嫌味な、馬にも乗れないくずの集まりであることは分かっており、そのような連中を軽蔑しきっていたのである。しかしながら軽蔑しているのはそのような連中だけに限らなかった。彼が軽蔑している人間のリストをこと細かに挙げるには、そうとう時間がかかるだろう。まずインドにいる民間人は、有名なポロ選手数名を除けば、片っ端から軽蔑していた。軍人も騎兵以外は軽蔑していた。インド軍は、歩兵連隊も騎兵連隊も全部軽蔑していた。確かに自らも現地人部隊に籍を置いてはいたが、これは一身上の都合のためにすぎなかった。インド人には何の興味もなく、彼が使えるウルドゥ語は悪罵用の言葉がほとんどで、動詞は全部三人称単数形で使った。部下の憲兵など人夫同様に見ていた。自分の剣を持たせた老インド人中隊長を従えて闘兵している時など、「畜生、救いようのない野郎どもめ！」とぶつくさ言っていることがよくあった。現地人部隊のことを齒に衣きせずに悪罵したために、困った立場に立たされたことさえあった。觀兵式のことだった。將軍のうしろに將校の一団が立っており、ペロールもその中にいた。インド軍歩兵連隊が分列式のため通りかかった。「某ライフル銃隊だ」と一人が言った。「見ろ、あのぎまっ！」ペロールが独特の少年のようにぶつきらぼうな口調で言った。

近くにいた白髪のライフル銃隊連隊長が眞つ赤になって怒り、あとで將軍にペロールのことを報告した。ペロールは叱責されたが、將軍もとイギリス軍將校だったので、その場限りで事件を片つけた。どういうわけか、どれほど生意気な態度をとっても、ペロールの身の上にはたいして深刻な結果は生じなかった。インド中どこへ派遣されても、彼が去ったあとには、侮辱された人びと、片付いていない仕事、未払いの請求書が必ず残っていた。しかし面目を失っても当然であるペロールのほうは全然面目を失うような目に遭わなかった。彼は言わば不死身の男であったが、彼が身を全うできたのは、名前に付いた肩書のせいだけでもなかった。彼の眼光には、借金取りでも、貴婦人でも、連隊長ですらたじろがせる威力があった。

彼の目は淡青色で少し出目気味だったが、澄みきったその目に見つめられると、なぜか人びとはどきまきました。五秒ほど冷たく眺めるだけで、相手を十分に見て軽重を計り、弱味を見抜いてしまうような目付きだった。相手が立派なやつ、つまり騎兵將校でポロをやる男なら、ペロールは相手をまともな男であると判断した。したがってその抜い方には無愛想ながら敬意さえ込められた。それ以外のタイアは心から軽蔑したので、かりにペロールが隠そうと努めたにしても、相手には自分が軽蔑されていることが分かっただろう。相手には金があるうとなかるうと、まったく関係なかった。社会通念から言えば、ペロールはそれほどひどい俗物ではなかったからである。もちろん、金のある家に生まれた者の例にもれず、彼も貧困を嫌悪し、貧乏人が貧乏であるのはつまらぬ生活習慣から抜け出さないと考えていた。しかし彼は柔弱な生き方も軽蔑していた。途方もない金を衣服のために費やして、いや、費やすというよりは借用していたが、反面、修道士のような禁欲的な生活も送っていた。絶えず残酷なほど厳しく自分を鍛え、酒と煙草の量を制限し、（おそろく絹のパジャマを着ながら）野営地のベッドに寝て、真冬でも冷水を浴びていた。鍛え抜いた身体と馬術だけが彼の信じている神であった。広場を駆ける馬蹄の音、たくましい身体にみなぎる安定感、馬と完全に一体になって鞍にまたがり、弾む手にポロ用のバットを持つて——これこそが彼にとって信仰であり、生命の息吹きであった。

ビルマにいるヨーロッパ人などは、大酒飲みで、柔弱で、顔の黄色いのらくら野郎どもにすぎない。彼らの生活習慣を考えただけで、文字通り彼の胸はむかついた。社会的義務などはすべて偽善であるとうそぶいて無視した。女性も毛嫌いした。彼に言わせると、女は皆サイレン（ギリシヤ神話の半人半鳥の海の精。美しい歌声に魅せられた身人は海に飛び込

んで死んだと言われている」と同じで、男をポロからおびき出し、テイ・ゲームやテニス・パーティーに誘い込むことだけを目的にしている生き物だった。とは言え、彼も石の地蔵さまにはなりきれなかった。さまざまな女が若い彼の気をわざと引こうとしたので、時にはそのような女の誘惑に負けた。しかししばらく経つと、自分の階層に我ながら嫌気がさした。したがって危機が訪れる項には実に無情になっているので、簡単に女から逃げ出すことができた。二年インドにいた間に一ダースもの女からそうして逃げ出してきた。

九一週間は過ぎたというのに、相変わらずエリザベスはペロールと近づきになることさえできずにいた。実にじれったい話だった。毎朝毎晩、エリザベスと叔母はクララの行き帰りに広場を通った。広場では必ずペロールが土民兵の投げるポロ・ボールを打っていた。しかし二人は完全に無視された。これほど近くにいなながら、あれほど近い存在だなんて！さらに不都合なことに、二人はペロールのことを直接口にすれば自分たちの品位に関わると思っていた。ある夕方のこと、強く打ちすぎたのだろうか、ボールが草を突き抜け、道を抜いている二人の前まで転がってきた。エリザベスも叔母も思わず足を止めた。しかしボールを拾いに走ってきたのは、残念なことに土民兵だった。ペロールは女たちの姿を見かけたので近寄らなかつたのである。

翌朝、二人が連れだつて門を出た時に、ラッカーステイーン夫人は立ち止まった。最近、夫人は人力車の使用を中止していた。広場の下の方では憲兵たちが整列しており、軍服の列が土色に見え、銃剣が光っていた。ペロールは兵と向かい合っていたが、軍服姿ではなかつた。ペロールは、たかが憲兵ぐらいを相手に軍服などは不要だと考えていたので、朝の閑兵に軍服を着ることなどめつたになかつた。女二人はペロールから目をそらし他の兵たちを見回していたが、その実、何とかしてペロールの姿を目的で捉えようとしていた。

フ・アロ・ホ・フ・ホ・ホ  
藪から棒に、と言つても、二人の間でこの話題に前置きなど必要なかつたが、ラッカーステイーン夫人が言い出した。「本当にいやねえ。叔父さんったら、もうすぐどうしても野営地に戻らなければならないのよ」

「どうしても？」

「でしようね。こんな季節に野営地に戻るなんて。蚊のことを考えただけでもぞつとずするわ」

「もう少しこちらにいられないのですか。もう一週間ぐらいは」

「それができそうにないの。叔父さんは本部に来てから、ひと月近くになるでしょう。会社に知れたら大目玉だわ。私たちも一緒に行かなければならないのよ。ほんとはいやだわね。あの蚊！ まったくぞつとずするわ」

本当にぞつとする思いだつた。エリザベスがペロールと初対面の挨拶も交わさぬうちに町を離れなければならないなど、考えただけでもぞつとした。しかしラッカーステイーン氏が町を離れるのであれば、それも仕方ないことだつた。夫ひとりを密林へやるわけにはいかない。たとえ密林にいても、ひよんなことで夫の胸に塵がささぬものでもない。その時、土民兵の隊列にさざ波のような動揺が走つた。まもなく行進に移るので銃から剣を取りはずしているのだ。兵は土煙をあげて左に回り、敬礼のあと四列縦隊で行進し始めた。宿舎の方から従卒たちが小馬を引きポロ用バットを持ってきた。ラッカーステイーン夫人はある雄々しい決心をした。

「どうかしら。広場を抜けて近道しないこと？ そのほうが道を回つて行くよりはるかに早いわよ」

確かに広場を通るほうが五〇ヤードほどははるかに早かつた。しかし歩いて広場を横切る者などいなかつた。雑草の種子がストッキングに刺さるからである。ラッカーステイーン夫人は思いきつて雑草の中に飛び込み、クララに向かうのだという素振りまでかなぐり捨て、まっすぐペロール目指して進んだ。エリザベスも叔母のあとを追つた。もつともどちらの女も、たとえ拷問にかけられ死ぬような目に遭わされても、自分たちが実は近道などしているのではないという本音は絶対に口にしなかつた。ペロールは女二人が近づいてくるのを見て、畜生！ とか何とか眩しきながら手綱を引いて小馬を止めた。今や二人が自分に話しかけるつもりで向かつてくるのがはつきりしたので、さすがの彼もまるつきり素知らぬ顔はできなかつた。くそ！ 厚かましい女どもめ。むつつりした顔でボールを小刻みに打ちながら、ペロールはゆっくり二人の方に馬を進めた。

「おはようございます、ペロールさまあ」ラッカーステイーン夫人はニ〇ヤードも先からサッカリンのような甘い声で叫んだ。

ペロールのほうは夫人の顔を見て、インドの駐屯地でよく見かける骨と皮ばかりの婆あにすぎないことが分かつたので、「おはよう」とむすつとした声で言った。次の瞬間、エリザベスが叔母と肩を並べた。彼女は眼鏡をはずし、広つばの帽子を手持っていた。日焼けなど気にしなかつた。短く髪を刈つた自分の魅力を十分に意識していた



からである。その時、風がさっと吹き抜けた。息づまるような暑い日にどこからともなく渡ってくる一陣の風は、何とありがたいものだろう。風が彼女の締の上着をつつみ、上着が身体にくっついたので、若木さながらに細くしなやかな身体の線が透けて見えた。いきなり若いエリザベスが日焼けした年増女のそばに姿を見せたのが、ペロールにはまったく意外だった。彼は一瞬ぎくりとした。それがアララ産の馬にも伝わったのか、馬があやうく棹立ちしこしらそうになつたので、ペロールは急いで手綱を絞らなければならなかつた。確かめもしなかつたので、今の今までペロールはチャウタダに若い娘がいることを知らなかつたのである。

「私の姪です」ラツカーステイン夫人がすかさず紹介した。

ペロールは答えなかつた。しかしポロのバットはさきほどすでに手放していたが、今度はヘルムット帽も脱いだ。彼とエリザベスはしばらくじっと見つめ合っていた。若わかしい二人の顔には、容赦なく降り注ぐ強烈な陽光の中でもあらかつ見出せなかつた。雑草の実が向脛むこすねに触れて、エリザベスは苦しいほどくすぐったく感じた。おまけに眼鏡を掛けていない目には、ペロールも馬も白つぼくぼやけて見えるだけだつた。しかし本当に幸せだつた。胸は高鳴り、顔は紅潮して、絵の具を薄く一掃きしたような色に染まつた。「こりや驚いた！ かわいい娘だな」という気持ちが一瞬、強くペロールの胸をかすめた。インド人たちはむつり顔で小馬のくつわを押さえながら、好奇の目でその場面をじろじろ眺めていた。若い二人の美しさが、彼らにも少しは感銘を与えたようだつた。

ラツカーステイン夫人が三十秒ほど続いた沈黙を破り、少し茶目つ気をまじえて言った。

「実はでございますね、ペロールさま。あなたがお越しになつてからずっと、つまりぬ私たちなど無視してらっしゃるのは、少しお冷たいのじゃないかと思ひますのよ。クラブでは新しい方がお見えになるのを心から待ち望んでおりますのに」

ペロールはエリザベスを見つめながら答えたが、声の調子がさきほどとはまるつきり違つていた。

「何日も前から何おうと思つていたのですが、宿舎の割り当てや何やらで恐ろしく忙しかつたものですから。申し訳ありません、お手紙の返事もまだ差し上げてなくて」ペロールは詫びなど言う男ではなかつたが、目の前の娘が稀な美人だと思つたので、手紙の返事が遅れた詫びまで付け加えた。

「いいえ、およろしいんですよ。事情は十分に存じ上げておりますわ。でも今宵はぜひクラブでお会いしたいものですわね。これ以上私たちを失望させますと、皆あなたについていけない方だと思ひ始めますわよ」最後のほうはいつそう茶目つ気がつぶりだつた。

ペロールはまた詫びた。「すみません。きょうはクラブにまいります」

もう話すこともなかつたので、女二人はクラブの方に向かつた。しかしクラブには五分もいなかつた。ヌトッキングに刺さつた雑草の種子が我慢できず、急いで帰宅して新しいヌトッキングに変えなければならなかつたからである。

その夜ペロールは約束通りクラブに姿を見せた。他の者たちより早く着いたが、五分もすると彼がいることはクラブ中に知れ渡つた。エリスがクラブにはいつた時、老ボーイ長がカード室から飛び出してきて、エリスを呼び止めた。ボーイ長は泣きわめいて、ほおに涙を流していた。

「旦那さま。ねえ、旦那さま」

「こいつめ、一体何事だ」

「旦那さまつたら！ 新しいご主人が私をおつていました」

「何？」

「私をおつていましたあー」彼の涙声は『おつて』のところから高くなり、あとが長く引き伸ばされた。

「お前をおつていた？ それもよかるう。誰がおつていたのだ」

「新しいご主人さまです。憲兵隊の旦那さまです。足でここをぶちました」自分の尻をこすりながら言った。

「畜生！」エリスが言った。

エリスが談話室にはいつて行くと、ペロールは『フイールド』誌を読んでいたが、バーム・ビーチ織夏服のスボンの先と、焦げ茶色に光る靴しか見えなかった。誰かが部屋にはいる音を聞いても、ペロールは身動きさえしなかった。エリスは立ち止まって言った。

「おい君！ 君は誰だ、あつ、ペロールか」

「何だ」

「君、ボーイ長を蹴ったのか」

ペロールの陰気な青い片目が、岩陰から覗く蟹の目のように『フイールド』誌越しに覗いた。

「何だ」彼は短く繰り返した。

「君がああボーイ長を蹴ったのかと聞いてるんだ」

「そうだ」

「いったいどういふつもりだ」

「野郎が口答えしたんだ。ウイスキー・ソーダを取りに行かせると、生温かいのを持ってきた。氷を入れてこいと言うと、最後の氷ですから大事にとか何とかごたくを並べやがって持ってこぬ。それで尻を蹴とばしてやったんだ。当然だろう」

エリスは怒りで顔から血が引いた。ボーイ長はクラブの財産だ。よそ者が蹴とばしてよい代物ではない。何より腹が立つのは、こともあろうにエリス自身がボーイ長のことを気の毒がっており、それで蹴ったことを責めているのだ、と思ひ込んでいたようなペロールの態度だった。

「当然だろう？ そりやあいつにや当然だろうよ。しかしそんなこたあ何の関係もないことだ。俺たちの召使を蹴とばしたりする権利がお前にあるのか」

「何をくだらぬことを。なあおじさん、蹴らなまきやならなかったんだよ。ここの召使はしつけが悪いぞ」

「この青ニオのチンピラめ。生意気だぞ。蹴る必要があるうとなかろうと、お前の知ったことか。お前はクラブの会員でも何でもなない。必要なら俺たちが蹴る。お前が出る幕じやない」

ペロールは『フイールド』誌を下ろして、もう一方の目も覗かせた。陰気な声のほうは同じ調子だった。彼がヨーロッパ人相手にかつとすることにはなかった。そんな必要はなかったのだ。

「おじさん、俺は口答えするやつは尻を蹴とばすことにしてるんだ。おじさんも尻を蹴とばして欲しいのか」

怒りが急にエリスから抜けてしまった。こわくはなかった。今までこわいと思ったことなど一度もなかった。ただペロールの視線には耐えられなかった。彼の目に見つめられると、ナイアガラ瀑布の下に立たされているような気持ちになる。口から出かかった罵りが消えてしまった。声さえ出なくなった。やつとぐちつぽく泣くような声で言った。

「でも、ボーイ長がお前なんか最後の氷をやらなくてよかったよ。お前のために氷を買ってるんじゃない。ここじや週に二度しか氷が手にはいらなないのだからな」

「じや、完全にお前たちの不手際ってわけだな」そう言ってこの問題は切り上げ、ペロールはまた『フイールド』誌の陰に頭を隠した。

エリスはなすすべを知らなかった。ペロールがこちらのことなどきれいに忘れ、落ち着きかかつて雑誌を読み出したのを見ると無性に腹が立った。この青ニオめ、思いつき蹴とばしてやるうか。

しかしなせか蹴ることはできなかった。ペロールは今まで何度も蹴られて当然のようなことを人にしてきたが、実際に蹴られたことは一度もなかった。これからもそんなことはまづないだろう。仕方なしにエリスはこそこそゲーム室に戻り、やり場のない気持ちでボーイ長に当たり散らした。ペロールは談話室を独り占めにしていった。

ワグシガー氏がクラブの構内にはいつた時に、どこからか音楽が流れてきた。テニス・コートの中の金網に絡みついた葎の間からは黄色いランタンの光がもれていた。その夜ワグシガー氏は浮き浮きしていた。ラッカーステイーン嬢とゆつくり話そうと決めていたのだ。あの娘は珍しく聡明だし、こちらには一九一三年にサガイン〔ビルマ西部地方〕で起こった

強盗事件という実におもしろい話がある。実のところ、その話は以前投稿したことがあり、『フランク・ウッド』誌に掲載ずみの話だった。エリザベスならその話によるんで耳を傾けるだろう。彼は胸をはずませてコートの金網を回った。コートでは、少し欠けた月と、あちこちの木に掛けたランタンの光を頼りに、ペロールとエリザベスがダンスをしていた。ボーイたちの手で、椅子が数脚と蓄音機を置くテーブルが一台運び出されていた。テーブルの回りでは、他のヨーロッパ人たちが立ったり、椅子にすわったりして、ダンスを見ていた。ワグレガー氏がコートの角を回って立ち止まった時に、ペロールとエリザベスが輪を描きながら一ヤードも離れていないところを通過した。二人は身を寄せ合って踊っており、彼女は彼の下で身体を弓なりに反らせていた。二人ともワグレガー氏には気づかなかった。

ワグレガー氏はコートを回ってそのまま進んで行った。腹の底まで冷えびえするような怪しい思いに包まれた。ラッカースティーン嬢との会話は諦めなければならぬのだ。しかし無理にいつもの陽気でひょうきんな表情を作って、彼はテーブルに近づいた。「舞踊のクベですね」と彼は挨拶したが、声は我知らず悲しげに響いた。

誰も挨拶には答えなかった。皆コートで踊っている二人を見ていた。エリザベスとペロールは他の者のことなどすっかり忘れ、滑りやすいコンクリートの上を流れるようなステップで回りながら踊り続けていた。ペロールのダンスは、馬術同様、比類がないほど優雅であった。蓄音機からは『帰り道を教えて頂戴』という曲が流れていた。この歌はペラストさながら世界中に蔓延し、ビルマまでも流れてきていたのである。

帰り道を教えて頂戴、

疲れて横になりたいの。

半時間前にお酒を飲んで、

少し頭が重たいの。

怪しく気が滅入るような安っぽい歌詞が、薄暗い木立や花の香りの間に繰り返して流れていた。ラッカースティーン夫人は歌が終わりに近づいたときに蓄音機の針を戻していた。地平線にかかっている黒い雲の上に次第に昇ってきた黄色い月は、ベッドから這い出したばかりの病氣女を連想させた。疲れも知らずにいつまでも踊り続けるペロールとエリザベスの姿は、薄明りの中で、妙に見ている人の官能をくすぐった。二人は一匹の動物のように完全に一体となって踊り続けた。ワグレガー氏とエリス、ウエストフィールド、それにラッカースティーン氏を加えた四名の男たちは、ポケットに手をつ込んだまま、言葉もなく二人のダンスを見ていた。蚊が足を刺したが、持ってきたウイスキーは灰のような味がした。年長の四人は羨望のあまり、はらわたがねじ切れそうに思っていた。

ペロールはラッカースティーン夫人のほうをダンスに誘いはしなかった。ようやく二人が腰を下ろした時にも、ペロールは他のヨーロッパ人の方を見向きもしなかった。そのあとなお半時間ほどエリザベスを独り占めにしただけであった。それからペロールはラッカースティーン夫妻にだけ言葉少なに挨拶し、他の者には口も利かずにクラブを出た。ペロールに長時間ダンスの相手をしてもらってエリザベスは夢見心地になっていた。あの方は乗馬に誘って下さったわ。小馬も貸して下さるそうだし。エリザベスはエリスが彼女の振舞いに腹を立てて、公然と無礼な態度をとりとうと精一杯努めていることにさえ気がつかなかった。ラッカースティーン家の三人が家に着いた時は夜も大分ふけていたが、エリザベスと叔母はまだまだ寝ることができなかつた。夫人の乗馬スボンのすそを短くし、ふくらはぎの部分を広げ、エリザベスの身体に合わせるのに、二人は真夜中まで大騒ぎをした。

「あなた、本当に馬に乗れるの？」

「もちろんよ、叔母さん。国ではそうとう乗ったわ」

そうとうと言うのは、十六歳の時全部で十回あまり乗ったことを言っていた。いずれにしても、何とかして乗りこなすつもりでいた。ペロールが一縷となれば、虎にだって乗る氣でいた。

やつと仕立て直しが終わった。乗馬スボンをはいたエリザベスを見て、ラッカースティーン夫人はため息をついた。こうして乗馬スボンをはくと、本当にこの娘はうつとりするほ

ど魅力があるわ。それなのに一日か二日すれば野営地に戻り、何週間も、場合によっては何カ月もチャウタダの町からも、これ以上望めないほどすばらしいあの若者からも離れていなければならぬなんて！ 本当に残念なこと。二階に上がろうとして部屋の出口まで来た時に、ラッカースティーン夫人はなにげなく立ち止まった。大きく、つらい犠牲をおおうという考えが胸に浮かんだ。彼女はエリサベスの肩を引き寄せ、今まで見せたことがないほど心から愛情をこめたキスをした。

「ねえ、こんな時にチャウタダを離れなければならぬなんて、本当にひどいことだね」

「ええ、少し」

「じゃ、こうしましょう。密林なんていやなところには戻らないことしましょうよ。叔父さん一人に行ってもらって、あなたと私はチャウタダに残りましょう」

暑さはますますひどくなつていった。四月も過ぎようとしていたが、もう三週間、いや五週間も雨は期待できなかつた。東の間のさわやかな夜明けもやがて訪れる長く目もくらむ時間を思えば台無しになつた。頭痛が起こり、きらきらした日差しが屋根を突き抜け、眠れないくせにまぶたがびったりくつついてしまうのだ。東洋人だろウトヨーロッパ人だろウト、この日盛りに目を覚ましてはびと苦勞だつた。一方、夜は夜で犬は遠吠えするし、身体中汗だくになり、あせもが痛むために眠れなかつた。クラブは蚊がびどく、いたるところに線香をたいておかねばならず、女たちは枕カパーに足を入れてすわつていた。ペロールとエリザベスだけが暑さを気にしていなかつた。どちらも若く、血が燃えていた。ペロールは大變我慢強く、エリザベスはませすぎで、氣候を気にする暇がなかつたのである。

最近クラブでは口論や悪口がとみに多くなつていた。ペロールは皆を鼻白ませていた。夜の二、三時間だけクラブに来るのが習慣になつていたが、他の会員を無視し、皆が差し出す酒を断わり、話しかけられると無愛想に生返事をするだけだつた。それまでラツカースティーン夫人に独占されていた揺りうち下の椅子にすわつて、気に入つた新聞を読んでいた。やがてエリザベスが現われると、一、二時間彼女と踊つたり話したりし、そのあと誰にもさようならとも言わずに立ち去つた。一方ラツカースティーン氏は、チャウタダに流れてくる噂によれば、独り野營地において、たくさんのピルマ女相手に孤独を懸めていたことだつた。

エリザベスとペロールは今では毎晩のように乗馬に出かけた。ペロールは朝の閱兵後の時間を必ずポロの練習にあてていたが、エリザベスのために腕の時間を割くことが惜しいとは思わなかつた。彼女はこの前狩獵が好きになつたのと同じように、当然ながらすぐに乗馬が好きになつた。本国では教知れないくらい狩獵をしたことがあるなどと、ペロールにぬけぬけ言ひさえていた。彼には一目で嘘だと分かつたが、彼女の乗り方も足手まといになるほど下手ではなかつた。

二人はいつも赤い道路を登つて密林にはいり、藪でおおわれた。ピーンカドの大木あたりで小川を渡り、次いで狭い荷車道を進んだ。この道は地面が柔らかく、馬を疾駆させることができた。ほこりつばい密林の中は息づまるほど暑かつた。雨も降らないのにいつも遠くで雷がごろごろ鳴つていた。小さなイワツバメが馬に速度を合わせて飛び回り、ひずめに追われたはえを捕らうとしてうるさく付きまとつた。エリザベスは鹿毛カモの小馬に、ペロールは白馬に乗つていた。帰りは、二人の膝が触れ合うほど汗まみれの馬を寄せ、並足で歩かせながら語り合つた。ペロールはその気になれば無礼な態度をとらず、非常に愛想よく話すことができた。エリザベスが相手なら話す気になつたのである。

二人で乗馬に出る歡び、馬の背にまたがり、馬の世界、つまり狩獵、競馬、ポロ、猪狩りなどの世界にはいはる歡びといつたら、たとえ他の点では愛してはなかつたとしても、生活に馬を持ち込んでくれたという点だけでも、エリザベスはペロールを愛したのである。かつて狩獵の話をしてほしいと言つてフローリーを苦しめたように、今度は馬の話がんでペロールを苦しめた。ペロールの口が重いのは事實だつた。話せることといつたら、せいぜいポロと狩りに関する短く歯切れの悪い説明と、インド国内の駐屯所や連隊の名前くらいだつた。だがどういふわけか、口数の少ないペロールが、フローリーの話では経験しなかつた身震いするほどの歡びをエリザベスに与えた。馬上の姿を見せられるだけで、どんな言葉を聞かされるよりも感情が高まるのを覺えた。

彼には馬と軍隊の雰圍氣が漂つていた。日焼けした顔と頑丈でまっすぐな身体に、エリザベスはロンツックで華麗な騎兵生活を見た。彼女は北西の国境と騎兵クラブを想像した。ポロ競技場、乾き切つた營庭、長い槍を構え、ヘルメット帽の日よけ布をなびかせて疾駆する褐色の騎兵中隊の姿が見えるようだつた。ラツパの音と掛車の響き、こわばつた華麗な制服を着た將校たちが眺さんの席についている時に、外で連隊付き樂隊バンドが演奏しているのが聞こえるようだつた。騎兵の世界ってなんてすばらしいんでしよう。それは私の世界だわ。私はその人間で、その世界のために生まれてきたのよ。近頃彼女はペロールとほとんど同じように生活し、考え、馬の夢を見ていた。「教知れないくらい狩獵をした」といふだけでなく、そのたわいな嘘を自分でも半信半疑するようにさえていた。

二人の仲は申し分なかつた。彼はフローリーのように退屈させたり、いらいらさせたりしなかつた（實際、最近ではフローリーのことをほとんど忘れていた。彼のことで思い出すのは、どういふわけか、いつもあの痣だつた）。ペロールが彼女以上に『インテリぶつた』ものがきらいだといふことが二人を結びつける絆であつた。ペロールは、十八歳の時以來、

本は一冊も読んでいない、本など「虫酸が走る、もつとも、ジョロックス〔十九世紀の英国の作家R・S・サーティーズの作品のスポーツ好きな主人公〕などは当然別だが」と言つたことがある。乗馬に出かけて三、四回目の腕、二人はラッカーズステーション邸の門前で別れの挨拶をしていた。ペロールはラッカーズステーション夫人の食事への招待を今まどうまく断わってきた。まだラッカーズステーション邸にはいったことがなかったし、そのつもりもなかった。馬丁がエリザベスの小馬を連れていこうとしている時、ペロールが言った。

「いいかね。今度出かける時、ペリンダに連れてあげよう。僕は栗毛の馬だ。君ならペリンダの口を痛めないように乗れるだろう」

ペリンダはアラブの雌馬で、二年前に手に入れて以来誰にも、馬丁にさえ乗せられたことがなかった。だからこれは最大の好意であった。エリザベスにはペロールの考え方が完全に分かつていたので、これが特別な好意であると察して喜んだ。

次の腕、馬を並べて家に向かつている時、ペロールはエリザベスの肩に腕を回し、鞍から持ち上げて引き寄せた。彼は非常に力が強かった。手綱を放し、空いた手で彼女の顔を自分の方に向けた。二人の唇が重ねられた。彼はしばらくその姿勢で彼女を抱いていたが、やがて下に降りし、自分も馬から降りた。二人は汗でぐっしよりの薄いシャツを押しつけ合うようにして、抱き合っていた。手綱は二本とも曲げた彼の腕にはさまれていた。

同じ頃、ニロイル離れたところにいるフローリーは、チャウタダへ戻る決意を固めていた。彼は密林の端にある干上がった流れのそばに立っていた。わざと疲れ果てるためにここまで歩いてきて、名の分からない小鳥が丈の高い草の種を食べるのを眺めていた。雄は鮮黄色、雌は雀に似ていた。小鳥は小さすぎて草の茎を曲げる力がないので、茎の方に飛び、空中で茎をつかみ、自分の体重で地面に押さえつけていた。フローリーはおもしろくなさそうに見ていた。小鳥は彼の興をそそらないので憎らしかった。退屈のあまり短剣を投げて追い払った。あの人がここにいるとすれば、彼女がいないと、鳥も木も花も、何もかもが耐えがたく無意味だった。日が経つにつれて、彼女を失ったことが生々しい現実になってゆき、ついに時間まで毒し始めた。

短剣でつる草を払いながら彼は少し密林にはいつていった。手足はだるく重かった。野生パニアのつるが灌木の上を這っているのに気づいて、身をかがめ、細く香りのよいさやの匂いを嗅いだ。その匂いを嗅ぐと、腐敗と死ぬほどの倦怠を感じた。自分は無数の生き物の中で孤立し、まったく独りぼつちなのだ。悲しさのあまり、思わずごぶでごぶで腕を傷め、ごぶしの指関節部を裂いてしまった。チャウタダに帰らなければならぬと思った。それは愚行かもしれない。二人の間のあの口論からやっと二週間経つたばかりだから。今できることといえば、彼女に忘れる時間を与えてやることだけだろう。それでも帰らずにはおれない。この死んだようなところで、無数の気心の知れない草木の中で、独り考えごとに耽つてはおれない。

よい考えが浮かんだ。監獄で乾燥してもらっている豹の毛皮を持っていけばよい。彼女に会う口実になるし、贈り物を持っていけば、まず話は聞いてもらえる。今度こそ言うべきことは言おう。説明と弁明をし、彼女の態度が不当であったことを分かってやるのだ。彼女のことを思つてマ・ラ・メーを追い出したのに、それを逆手にとつて責めてくるとはひどい。事実を知つたら、必ず許してくれるはずだ。今度は話の間中、彼女の腕をつかんだままであったとしても、絶対にこちらの話は聞かさなければならぬ。

その暇さつそく彼は帰路についた。わだちが残っている荷車道でニロイルの行程だったが、涼しいからという口実で夜道を歩くつもりだった。召使たちは夜道と聞いて、暴動でも起こしかねない雲囲気だった。出発の間際になってサミー老人が起こした発作は芝居とは言い切れなかった。ジンをうんと飲ませてやると歩けるようになった。月はなかった。一行はランタンの明りで進んだ。その光を受けて、フローリーの目はエマラルドのように、牛の目は月長石のように光った。日が昇ると、召使たちは足を止めて、木枝を集め朝食の仕度をした。しかしフローリーだけは熱に浮かされたようにチャウタダに帰りつきたがっており、独り先を急いだ。疲れは感じなかった。豹の皮を贈ろうと思いつき、途方もない希望で胸をふくらませていた。水面が輝いている河をサンパンで渡り、ペラスロミ先生の、バンガローに直行し、十時頃着いた。

ドクターはフローリーに朝食を勧め、女たちを適当な場所に追い出してから、まず身体を洗ひひげを剃るようにと浴室に彼を案内した。朝食の席ではドクターは非常に興奮し、『髑』の非難に終始した。見せかけの反乱が今にも勃発しそうだということだった。朝食が終わるまでは豹の毛皮のことを話すきっかけをつかめなかった。

「ところで先生。乾燥してもらうために監獄に送つた例の毛皮ですが、どうなりました？ まだできてませんか」

「いえ、それが」とドクターは当惑気味の口調で鼻をこすり、家の中にはいつていった。フローリーを室内に入れることにドクターの妻が激しく反対したので、二人はペリンダで朝

食をとっていたのである。ドクターはすぐに束に巻いた皮を持って出てきた。

「実を言いますと」彼は束を解きながら言った。

「わあ、こりやー一体……」

毛皮はまったく駄目になっていた。ボール紙みたいに堅くなり、皮はひびがはいり、毛は変色し、ところどころこすり取られていた。ひどい臭いもした。乾燥するどころかぼろろくに変わってしまった。

「これは無茶なことをしてくれましたね。一体どうしてこんなことになったんです、先生」

「すみません。お詫びしようと思っていたところですよ。これで精一杯なんですよ。最近では、毛皮の乾燥法を心得ている者が監獄にいないのです」

「畜生、例の囚人ならみごとに仕上げたんだが」

「ええそうです。残念ながら、あの男は三週間前に姿を消しました」

「姿を消した？ 七年の刑期だったはずだが」

「何ですって。じやお聞きになっていいのですか。以前皮を乾燥していたのが誰か、ご存知だとばかり思っていました。ガ・シュエー・オーだったんですよ」

「ガ・シュエー・オー？」

「ウ・ポ・チンの助けで逃亡したあの強盗団員ですよ」

「くそっ」

この災難に彼は恐ろしく落胆した。けれども午後になると入浴し、きれいなスーツを着て、四時頃ラツカーズステーション邸を訪れた。訪問には早すぎたが、エリザベスがクラブに出かける前にどうしてもつかまえないかと思つたからである。昼寝をしていて来客など予想してなかつたラツカーズステーション夫人は、淡い顔で、おかけ下さいとも言わなかつた。

「エリザベスはまだ上にいるんじゃないかしら。乗馬に出かける身仕度をしていきます。伝言を置いとかれたほうがいいんじゃないやありません？」

「ご迷惑でなければ、お会いしたいのです。二人で仕とめた豹の毛皮をお持ちしましたので」

夫人が彼を客間に立たせたまま出ていったので、こんな時誰もが感じるように、我ながら間が抜けて突に居づらかつた。エリザベスを連れてくる途中、夫人は部屋の外で機会をとらえてささやいた。「いいこと、できるだけ早くあのいやな男を追い払いなさいよ。こんな時刻に家の周りをうろつかれるなんてかなわないわ」

エリザベスが部屋にはいつてくると、フローリーは胸がどきどきし始めたので、赤みがかったもやが目の前を流れた。彼女は絹のシャツに乗馬ズボンで、少し日焼けしていた。以前よりはるかに美しくなつていった。彼は怖気づいた。たちどころにうるたえてしまい、奮い起こしてきた勇気がすっかり抜け落ちてしまった。進み出て彼女を出迎えるどころか、退いてしまった。うしろでがちゃんど恐ろしい音がした。臨時テーブルを引っくり返し、鉢植えのジニアが勢いよく床に転がったのだ。

「とんでもないことをしてかしました」恐怖にかられて詫びた。

「はいえ、少しもかまいませんのよ。気になさらないで下さい」

彼女もテーブルを起こすの手伝ってくれたが、その間中、過去に何もなかつたかのように陽気で気楽にしやべつていた。

「長い間留守なさつてたんですね、フローリーさん。まったく初めてお会いしたみたいですわ。クラブにいらつしやらないので、みな淋しがつてますのよ」というような調子だった。女が道徳的義務を避けようとする時に使う大げさでまばゆいばかりの明るさを兼ね、言葉を一つおきに強調して発音した。彼はこわかつた。彼女の顔を見ることができなかつた。葉巻ケースを取り上げて勧めてくれたが断わつた。手が震えて取れなかつたのである。

「あの毛皮をお持ちしました」と彼は抑揚のない声で言った。

起こしたばかりのテーブルに毛皮を広げた。持つてこなかつたほうがよかつたと思つたほどみすばらしくひどい代物だった。彼女は毛皮をよく見ようと彼に近寄つてきた。花のよう

なほおが彼のワンピース不足まで近づき、身体の暖かさが感じられた。彼女が恐ろしくなり彼はあとじさりした。同時に彼女も毛皮のいやな臭いで胸が悪くなったのか、あとじさりした。彼はひどく恥ずかしかった。悪臭を放っているのが毛皮ではなく、自分自身であるような気がしたのである。

「ありがとうございます、フロローリーさん」と毛皮からさらに一ヤードも離れてから言った。「本当にすばらしい大きな毛皮ですこと」

「以前はそうだったんですが、台無しにされてしまったようです」

「いえ、とんでもありません。ぜひ頂戴したいですわ。チャウタダには長い間おられる予定ですか。野営地は本当に暑かったでしょうね」

「ええ、実に暑かったですよ」

三分ほどは天候の話をした。今日こそは言おうとひそかに誓ってきた主張や弁解が、喉の奥で消えてしまった。「この馬鹿野郎、一体何してるんだ。こんな話をするためにわざわざニールもやって来たのか。さあ、言おうと思っていたことを言ってしまうえ。彼女を抱きしめる。無理にでも話を聞かせ、打つなり蹴るなりしてやれ。こんなたわ言で口を封じさせられているよりやました」しかし完全に絶望的だった。ロからは無益でつまらぬことしか出てこなかった。どんな言葉でもクラフの難談程度に落としてしまふこの明るく気楽な彼女の態度によって、口を開く間も与えられず黙らされているというのに、今さらどうして弁解や主張ができるというのだ。あおいやな明るいくすくす笑いを娘たちはどこで身につけるのだろうか。例の活発で近代的な女学校でだろう。テーブルの上に置かれた腐肉のような毛皮を見てみると、ますます恥ずかしい気持ちになった。彼はほとんど声もなくそこに立って、昨夜の寝不足で顔は黄色くしわが寄り、痣は泥をなすりつけたようで、醜いぶざまな姿をさらしていた。

彼女はこのあとすぐ彼を次のようにして追い払った。「どころでフロローリーさん、申し訳ございませんが、実は私……」

彼は突に歯切れの悪い口調で言った。「いつかまた一緒に出かけませんか。散歩とか狩猟とか」

「近頃は時間がほとんどございませんの。夜は全部ふさがつてます。きょうは乗馬に出かけます。ペロールさんと一緒に」と彼女は付け加えた。多分フロローリーを傷つけるためにわざと付け加えたのだろう。ペロールと交際していることを聞かされたのは、これが初めてだった。彼は次の言葉を口にする時、思わず重苦しく単調で、ねたましげな語気になってしまった。

「ペロールとはよく乗馬に出かけるんですか」

「ほとんど毎晩ですわ。ペロールさんつて、みごとに馬を乗りこなしますわ。それと突に立派なポロ用の小馬を何頭も持ってますのよ」

「ああ、もちろん私にはポロ用の小馬なんかありません」

彼は初めて真剣な口調になった。もつとも結果は彼女の感情を害しただけだった。しかしながら彼女は同じ陽気で気楽な態度でそれに答え、彼を送り出した。ラツカーヌステイン夫人が客間に戻ってきて悪臭を嗅ぎつけ、すぐ召使に臭い約の毛皮を外で焼き捨てさせた。

フロローリーは鳩に餌をやるふりをして、自宅の門に寄りかかっていた。エリザベスがペロールと乗馬に出かける姿は、つらくても見ずにおれなかった。あの女はなんと低俗で残酷な振舞いをしてくれたことだろう。喧嘩するだけの礼儀すら示さないとはいひどい話だ。まもなくペロールが白い小馬に乗り、栗毛の馬に乗った馬丁を従えてラツカーヌステイン邸に到着した。やがてペロールは栗毛の馬、エリザベスは白い小馬に乗って姿を見せ、早足で丘を駆け上がった。二人はしやべったり笑ったりしており、彼女の絹シャツの肩が彼の肩にくっ付かんばかりだった。どちらもフロローリーには目もくれなかった。

彼らが密林に姿を消してからも、フロローリーはまだ庭園をぶらついていていた。まぶしい光が弱くなつて黄ばんできた。植木屋がイギリス産の花の根株をせつせと掘り起こしていた。ほとんどどの花も日照りで枯れていた。掘ったあとには鳳仙花と鶏頭を植え、ジニアを植え足していた。一時間経った。元気がなく土色のインド人が、腰巻きをし、黄色に近い桃色のターバンを巻き、頭上に洗濯籠を載せ、邸内の車道をゆっくり近づいてきた。彼は籠を置いてフロローリーに額手礼をした。

「誰だ、お前は」

「本屋ブックス・ハウズです、旦那さま」



ビルで内地地帯の駐屯所を巡回する行商の本屋だった。本一冊に四アナを添えて出せば、他の本と交換してくれた。もつともどんな本を出してもよいというわけではなかった。文盲ながら聖書バイブルだけは見分けがつくのか、交換を断わるようになっていたからである。

本屋はいつも哀れっぽい口調で断わった。「駄目です、旦那さま」と、平べったい褐色の手で、非難するようにその本を引っくり返ししながら、「駄目ですよ、黒い表紙で金文字のこの本は。これは受け取れません。どうしてだか知りませんが、どの旦那さまもこの本を出されませぬ。でも誰も受け取ってくれません。一体この黒い本の中には何が書いてあるんですか。悪いことでしょうか、きつと」

「そのからくたを見せるんだ」とフロローリーは言った。

フロローリーは何かよいスリラー小説、エドガー・ウオレス〔英国のスリラー作家〕カフガサ・クリステイなどないかと捜してみた。胸から消えないいやな不安感を鎮めてくれさえすれば、なんでもよかつた。本の山に身をかがめている時、二人のインド人が大声を上げながら密林の端の方を指さしているのが目にはいった。

「あれ見ろ」と植木屋が干しぶどうを口にほおぼつたような声で言った。

二頭の小馬が密林から出てきた。しかし誰も乗っていないなかつた。腹の下であぶみをがちやちや揺すり、主人から逃げ出してきましたと言わんばかりの間が抜けてばつの悪そうな様子で、丘を早足で下ってきた。

フロローリーは、茫然として胸に本を一冊抱き締めたまま動かなかつた。ペロールとエリザベスは馬を降りてしまったのだ。事故ではない。どう考えても、ペロールが落馬するとは思えなかつた。二人が降りると、小馬が逃げ出したのだ。

二人が降りたのはなんのためか。いや、なんのためかは分かつていない。疑う余地はない。彼には分かつた。今起こっていることが目に浮かんだ。幻想ではあつたが、耐え難いほどこと細かで見たらな場面であつた。彼は激しく本を投げ捨てて家に向かい、本屋を失望させた。召使たちには、ご主人が家の中を動き回っているのが聞こえた。まもなく彼はウイスキーびんを持ってこいと叫んだ。飲んでもなんの効果もなかつた。次には大コップに三分の二ほども注ぎ、喉を通る程度に水で割って飲み干した。吐き気のような汚いウイスキーを続けざまにあおつた。数年前にも同じようなことをした。歯医者から三百ワイル離れた野営地で歯痛になつた時のことだつた。いつものように七時頃コ・スラがお風呂の用意ができましたと言いに来た。フロローリーは上着を脱ぎ、シャツの胸もとを開けて椅子にすわつていた。

「お風呂ですよ、旦那さま」とコ・スラは繰り返した。

返事がなかつたので、コ・スラは眠っているのかと思つて腕に触つてみた。飲みすぎて動けないのだ。ウイスキーの空きびんが床に転がっており、点々とこぼれた跡があつた。

コ・スラはバ・ペを呼び、舌打ちしながらびんを捨てた。

「これを見る。ほとんどびん空けてしまつてる」

「えつ、またですか。酒はおやめになつたと思つてたのに」

「畜生、あの女のせいだ。さあ、そつと運ばねば。お前はかかどを持って。わしは頭をもつ。そうそう。さあ持ち上げて」

彼らはフロローリーを別の部屋に運び込み、ベッドにそつと寝かせた。

「このおひとは本当にあのイギリス女と結婚するつもりなんですか」とバ・ペが聞いた。

「分かるもんか。あの女は、今は若い憲兵のものになつていそうだ。連中は我われとは違ふ」彼はフロローリーのズボン吊りはずししながら、「この人が今夜欲しいものは分かつていふ」と付け加えた。コ・スラは、主人の目を覚まさずに着替えさせるといふ、独身男の召使に必要な術を心得ていた。

召使たちは、主人がこのように独身者の習慣に戻ってくれるほうかうれしかつた。フロローリーは真夜中に目を覚ますと裸で、おまげに汗ずくになつていふ。頭の中でどがつた金属のかたまりが転がっているような感じがした。蚊帳が上がつており、若い女がベッドのそばにすわつて小枝細工のうちわで扇いでくれていた。感じのいい黒人系の顔をしており、鞞

濁の明りを受けて、銅像のように見えた。彼女は、私は商売女よ、コ・スラさんが一存でーオールピー出して呼んでくれたの、と説明した。

フローリーは頭が張り裂けそうだった。「すまんが何か飲物を持ってきてくれ」と力なく女に言った。女はコ・スラが冷やしておいたソーダ水を持ってきた。それからタオルを水に浸し、ひたいに湿布をしてくれた。太って気立てのよい女だった。名前はマ・セイソ・ガレイで、この副業に励むかたわら、市場のリ・イエイクの店の近くで米籠を売っているということだった。まもなくフローリーは頭痛が少し治まったので、煙草をくれと言った。彼女は煙草を持ってきたあと、「じや、裸になりましょうか、旦那さま」と無邪気に言った。

よかろう、と彼はぼんやり思った。女がはいる場所を空けてやった。しかし、あのなつかしいにんにくと椰子油の臭いを嗅ぐと急にせつなくなり、マ・セイソ・ガレイのふくよかな肩に頭を載せて、泣き出してしまった。十五歳の時以来、初めてだった。

聖朝、チャウタダは大騒ぎになっていった。久しく噂されていた反乱がどうとう勃発したからである。当時フローリーはあやふやな報告を聞いただけであった。大酒に酔ったあの晩のあと、彼は旅ができる状態まで回復するのを待ちかねて、急いで野営地に戻ってきた。だから、この真相を知ったのはそれから数日後、ペラヌワミ先生からの長い憤激調の手紙によってであった。

ドクターの手紙は文体が一風変わっていた。構文法が不安定で、大文字〔訳文ではルビつき漢字で示す〕を自己流に使うところは十七世紀の神学者に似ており、イタリック体〔片カナで示す〕を多用する点ではヴィクトリア女王にも負けなかった。手紙は小さくのたくるような筆跡で書かれており、八頁にもおよんでいた。

謹啓 冒頭からいやなことをお伝えします。罎の《タクラミ》は上達しました。反乱、《イワエル》反乱は完全に終わりました。残念ながら、予想以上の流血を見るに至りました。事態は私の予言通りに展開したのです。あなたがチャウタダに帰ってこられた夜、ウ・ポ・チンの《すばいタチ》は、彼が妄想した人びとがトンワ村に近い密林に集まってる、と彼に報告しました。その夜チンは警部ウ・ルガーシと警官十二名を連れて秘かに出發しました。警部はあり得ることか、チンに輪をかけた悪党です。一行はトンワ村を急襲し、反逆者たちに不意打ちを食わせました。反逆者は総勢わずか七名で、密林の中の荒れ小屋に隠れていました。ワックスウエル氏も反乱の噂を耳にし、旋銃ウイグルを持って野営地から駆けつけ、ウ・ポ・チンと警官隊に加わって小屋を襲撃しました。聖朝、書記のバ・セイソ、例のウ・ポ・チンの狐狼クワカで悪事下請人ですが、このバ・セイソが命令を受けて、できるだけ扇情的センジツキに、反乱だ！ 反乱だ！ と叫んで回りました。ワグレガー氏とウエストフィールド氏、それにペロール連隊長の三人が、警官隊のほかに旋銃で武装した土民兵五十名を率いて、トンワ村に急行しました。しかし村に到着した時には、すべて片付いたあとで、ウ・ポ・チンは村の中央にあるチークの木陰にすわって、威儀を正し、村人たちに説教していました。村人たちは恐れおののいて、額が地にくっ付くほど深くかとおじぎをし、永遠に政府に忠誠を誓っていました。反乱はもう終わっていたのです。《レイ》のサーカスの魔術師でウ・ポ・チンの奴隸的手先は、いつのまにかいずことも知れず姿を消していましたが、六人の反逆者が捕縛されていました。それで終わりというわけですが、もうひとついやなことをお伝えします。まことに残念なことですが、死者が一人出ました。ワックスウエル氏は旋銃を使ってみたくて《タアラナカタ》よう、逃げようとした反逆者の一人に発砲し、その男の腹部を撃って殺しました。そのため村人たちはワックスウエル氏に《オモシロクナイ》感情を抱いていると思われまふ。しかし法的に言えばワックスウエル氏に落ち度はありません。建中は確かに政府に対する反乱を計画していたのですから。

ああ、それにしても、貴下あなた、今度の事件で私がどれほどひどい立場に追い込まれるかはお分かり頂けるでしょう。この事件が、ウ・ポ・チンと私の抗争にどう影響するか、これが必ず彼をこの上なく《ユウリ》にすることもお分かりになるでしょう。

今度の事件は罎の《ショウリ》です。ウ・ポ・チンは今や当地の英雄です。ヨーロッパ人たちの《オキニイリ》です（エリスでさえ彼の行爲を賞賛したと聞いています）。反逆者は七名でなく二百名もいたのだとか、実際は警官隊とワックスウエル氏が小屋に忍び寄り、彼自身は《ハナシ》た《アンゼン》な《トコロ》から作戦を指揮していただけなのに、ピストルを手に飛び込んでいったとか、彼が今吹聴して回っている自惚コトバと《ウン》は、聞けば本当に吐気を催すことでしょう。彼は今度の事件に関して提出した公式報告書ケイギョウショを、ずうずうしくも「私の忠誠心から出た迅速ジュンジュンさと、向こうみずなほどの大胆さによって」などと書き出しています。彼は《コト》が《オコ》る数日前に、もう、このうその疑塊ウタガハシを用意してあったと聞いています。実に胸糞悪い話です。彼は今や勝利の絶頂にいますので、またぞろ思いのままに悪意を込めて私を中傷し始めるだろうと考えると、云々。

反逆者たちが隠していた武器がすべて押収された。仲間が集まれば、これらの武器で武装し、チャウタダに向かって進軍する手はずだったが、それは次のような武器だった。

一、獵銃一挺、左銃身破損。三年前森林官から盗まれた品。

一、鉄道会社から盗んだトタン製パイプを使用した手製の銃六挺。点火孔に釘を挿入し、石で打つことによつて発射可能。

一、十二口径用弾薬三十九個。

一、チーク材でできたおもちゃの銃十一挺。

一、中国製大型かんしやく玉数個。恐怖を与える目的で使用の予定。

のちに反逆者たちのうち二名には十五年の流刑、三名には三年の禁錮および鞭打ち二十五回の刑、一名には一年の禁錮刑が言い渡された。

このひどい反乱事件が完全に終わったので、ヨーロッパ人たちにはもはや危険はないと考えられた。それでフランスウエルも武器を持たずに野営地に戻った。フローリーは雨季にはいり、少なくともクララの総会までは野営地の方にいるつもりだった。総会には出席すると約束してあった。その時にボクターの選出を提案する腹だったのである。もっとも、自分の問題に頭を悩まさればならぬ今となつては、ウ・ボ・チンとボクターの暗闘など、考えても気分が悪くなる事柄であつた。

また何週間かが過ぎ、恐ろしく暑い季節になつた。その年は雨季が遅れており、そのためか大気が熱気をはらんでいった。フローリーは健康を損ねながらも休まずに働き、監督に任せてもよい雑用を氣にして、人夫や召使にまで嫌われていた。今では、一日中ジンを手放さないほどになつていたが、いくら飲んでも気分は晴れなかつた。エリザベスがフローリーの腕に抱かれていた場面が目の前にちらちらついて離れず、神経痛か耳痛のように絶えず彼を苦しめた。あのいやな場面が絶えず鮮やかに目の前に浮かんで来て、胸の思ひはかき乱されるし、寝入りばなに眠りを奪われた。食物から味まで奪われて、土を食つていような気持ちになつた。時どき急に怒り狂うことがあり、一度コ・スラを叩いたことさえあつた。何よりつらいことは、そのような場面を想像すればいつでもこと細かなところまで、卑猥なほど微に入り細にわたつて想像してしまふことだつた。こと細かに想像できること自体が、そのような場面の現実性を証明しているように思えたのである。

高嶺の花ではない女性に焦がれることほど野暮つたく恥ずかしいことがこの世にあるだろうか。この何週間かにフローリーが想像する場面は、必ずといつていいほど男を殺すか、女を犯す場面であつた。嫉妬はたいいていこのような影響をもたらす。かつては彼もエリザベスを精神的に、實際、感傷的にと言えるほどの態度で愛し、彼女に愛撫されることよりも共鳴してもらふことを願つていた。ところが彼女を失つた今は、卑しい限りの肉欲の疼きに苦しめられていたのである。もはや彼女を偶像視することさえできなかつた。今では彼女の本当の姿がぼぼ見えていた。彼女は馬鹿で、俗物で、無精な女だ。それでも彼女への疼きは治まらなかつた。治まりようがあるうか。夜には、涼しいようにとベッドをテントの外に引っぱり出すことがよくあつた。そのような時に、野獣の遠吠えが時々聞こえてくるだけで、ピロードのような一面の闇を見つめながら眠ることもできないで横になつていると、胸から去らぬさまざまな想像にとりつかれていゝ自分がおそましかつた。自分より一段上の、自分より立派な男をそねむなんて、実に卑しいことだ。そねみに過ぎないのだ。嫉妬という名で呼ぶ価値さえない。自分に嫉妬する権利などあろうか。自分には若すぎ、美しすぎる娘に言い寄つて振られたのだから当然のことだ。当然の肘鉄砲を食らつたに過ぎない。そう考へてはみてもなんの慰めにもならない。逆立ちしても二度と若かえることはできないのだし、顔の痣が取れるわけでもない。淋しさをまぎらわそうとして放蕩にふけてきたこの十年という歲月は戻つてこないのだ。自分より立派な男が彼女を奪つていくのを指をくわえて眺め、その男を羨ましがつていゝよりほかないのだ。ちようど……いや、このような例えは口にするのも恥ずかしい。羨望ほどこいやな感情はない。隠しようがなく、悲劇にまで高めることもできないのだから、羨望に苦しむのはほかの苦しみとは全然違ふ。つらいどころか吐気を催すほどいやな感情なのだ。

それはそうとして、事態はフローリーの想像通りに進展していったらうか。ペロールは本當にエリザベスの恋人になつたのだろうか。それはわからないが、どうもそうらしくなかつた。もしこれが事実だつたら、チヤウタダのような小さな町で隠しておくことはできなかつたであろう。他の連中はともかくとして、ラッカースティン夫人だけはこの真相にうすうす感付いていたようである。一つだけはつきりしていった。ペロールがまだ結婚の申し込みをしていないことである。一週間が二週間となり、どうとう三週間も過ぎ去つた。インドの小さな駐屯地では三週間といえは相当長い期間である。毎日夕方になるとペロールとエリザベスは並んで馬を走らせ、夜になると二人はダンスをした。しかしペロールはラッカースティン家に足を踏み入れたことさえなかつた。当然ながらエリザベスはいろいろ取り沙汰された。町の現地人は皆、エリザベスは当然ペロールの愛人だと考へていた。

ウ・ボ・チンは細かい点で間違つても、この本質は間違ひなく見抜く男だったが、その彼に言わせると、エリザベスは最初のうちはフロリーの内妻だったが、やがてフロリーを捨てて、金離れのよいペロールの方に鞍替えをした、というのであった。エリヌも、聞き手のラヴレガー氏がきままり悪く思うほどの話をねつ造していた。身内であるラツカーステイン夫人の耳には、さすがにそのようなわき話はいつてこなかったが、それでも彼女はだんだん神経質になってきた。夕方エリザベスが乗馬から戻ってくるたびに、エリザベスが「ねえ、叔母さん、どうお思ひになる？」と言つて、すばらしい知らせを持つてくることを期待し、煙を迎えに出た。しかしエリザベスはそのような知らせを一切持つて帰らず、叔母がいくら注意深く彼女の顔色をうかがつても、そこに何も読みとることができなかった。三週間過ぎた頃にはラツカーステイン夫人もいららし、少し腹さえ立て始めた。夫はいま野営地に一人で、いやー人じゃないかもしれないわ……などと考えて、彼女は思ひ悩んだ。(露骨に言わなかつたにしろ) 結局はペロールをもものにする機会をエリザベスに与えてやるために、自分は夫を一人で野営地に行かせたのだ。ある夕方、彼女は遠回しにエリザベスに説教し、彼女を脅し始めた。とはいへ、それはため息混じりで間合いの長い、一方的な話であつた。エリザベスが何も答えなかつたからである。

ラツカーステイン夫人は『タトラ』誌に載つていた写真の話を皮切りに、水着姿で歩き回つて男に自分を恐ろしく安売りしている今時の身持ちが悪い娘たちのことをそれとなく話し始めた。若い娘は絶対に自分を安売りしてはいけない。自分を、と言いかけて、待てよ、安売りの反対は高く売りつけることになるが、それはちよつと具合が悪いと考へ、ラツカーステイン夫人は話の方向を変えて、本国から手紙で知らせてきたという話をした。その娘さん、本当にかわいそうに、しばらくピルマにいる間についていかうかと婚期を逸してしまい、その後の苦勞といつたら、手紙で読んでも胸が張り裂ける思いがしたわ。このことでも分かるわね。年頃の娘は誰とでも、文字通り誰とでもいいから喜んで結婚すべきなんです。本当に気の毒に、長い間仕事もなく、食うや食わずの毎日だったようですよ。今じゃ、ようやく女中の仕事を見つけ、ぞつとするほど下品なコックにこつぴどく叱られながらこき使われているとか。信じられないわ。台所にはゴキブリがいるんです。ねえエリザベス、本当にいやだわね。ゴキブリなんて。

ラツカーステイン夫人はしばらく言葉を切つて、ゴキブリの効果を十分相手の胸にたたき込んでから、また話を続けた。

「雨季になればペロールさんが去つてしまうなんて實際残念だわね。あの方がいなければ、チャウタダなんてまったくつまらないわ」

「例年なら雨季はいつ頃から始まるんですか」エリザベスはできるだけ無関心を装つてたずねた。

「この地方では六月の初め頃よ。あと一、二週間ほどね。——ねえ、またさきほどの話に戻るなんておかしいけれど、でも頭にこびりついて離れないんです。本当に気の毒に、あの娘が台所でゴキブリに囲まれて働いているなんて」

その夜ラツカーステイン夫人の言葉には何度もゴキブリが出てきた。翌日になつて初めて、夫人はふとつまらぬわき話でもするような口調で言った。

「ところで六月にはいるとフロリーさんが戻つてくるわね。クラブの総会に出席なさるとおつしやつていたから。いつか折を見て食事にご招待しようかしら」

フロリーがエリザベスのところに豹の皮を持つてきたあの日以来、今初めて二人の間でフロリーの名前があがつた。何週間もほとんど忘れてしまつていたが、今二人は、気は進まないが、彼を急場の間に合あわせにしようとして思ひ出したのである。

三日後、ラツカーステイン夫人は夫にチャウタダへ戻つてほしいと伝えた。野営地で相当の期間を過ごしたので、しばらく本部に戻る権利ができたのである。彼は以前より赤ら顔になつて戻つてきた。本人は日焼けだと言つていたが、煙草の火もつけられないほど手が震えていた。それでも帰つてきたその夜に、帰れたことを自ら祝うために、うまく口実を設けて夫人を家から追い出し、エリザベスの寝室にはいつてきて、血気にはやつて煙を犯そうとした。

その間にも、要人の誰にも知られないところで次の反乱計画がひそかに進められていた。例の魔術師が(今は遠くに去り、革命の夢物語をマルタパンの村人たちに説いて回つていたが) 本人も予期していなかつたほど大きな効果をあげていた。いづれにしても、また反乱の起こる可能性が生じていた。もつともおそらくは孤立した小規模な反乱に過ぎないであらう。ウ・ボ・チンでさえこれは全然知らなかつた。しかし例によつて神々は彼の味方だった。というのは、あとで別の反乱が起これば、最初に起こつた反乱は實際以上に重大であつたように人びとの目に映り、それだけ彼の名声も高まるからだった。

西風よ、汝はいつ、小雨を降らせてくれるのか。六月一日の総会の日には、まだ一滴の雨も降っていないかった。フロローリーはクララの小径を歩いていた。つばから差し込む午後の太陽はまだ首筋に痛いほど強かった。植木屋が石油罐に水を満たして、てんびん棒でかつぎ、その小径をよるよる歩いてきた。胸が汗で光っていた。石油罐を置いたはずみで、やせた褐色の足に水が少しこぼれた。彼はフロローリーに額手礼をした。

「なあ、植木屋、雨は来そうかね」

植木屋はげくせんと西の方を指さした。「あの丘陵に阻まれているんです、旦那さま」

チャウタダは丘陵にほぼ囲まれており、この丘陵地帯が雨を捕えるので、六月の終わり頃まで雨が一滴も降らないことがある。くわ入れされて大きく不ぞろいな塊となった花壇の土は、灰色で固く、まるでコンクリートだった。休憩室にはいると、ウエストフィールドがペラソング近くをぶらつきながら河向こうを見ていた。すだれは巻き上げられていたのである。ペラソングの下ではボーイが日なたで仰向けになって、かかとで揺りうちわの綱を引っ張っていた。幅広のバナナの葉が顔を覆っていた。

「よお、フロローリーか。やせて、骨と皮ばかりだね」

「君もだよ」

「ふむ、そうだな。いま素晴らしい天候だ。酒以外は、食欲も起ころん。畜生、蛙の鳴き声をまた聞くのが待ち遠しいぜ。連中が来る前に一杯やろうじやないか。おい、ボーイ長」

「誰が総会に来るか、知っているか」フロローリーは、ボーイ長がウイスキーと生ぬるいソーダ水を持ってきたあとウエストフィールドにたずねた。

「全員だろう。ラッカーステインは三日前に野営地から戻った。畜生、あの男め、奥さんと離れて存分に楽しい思いをしてきおつた。うちの警部が話してくれたよ、野営地でどんなことがあったかね。娼婦が二十人もいたそうだ。わざわざチャウタダから呼んだにちがいない。女房にクララの請求書を見られたら、きつとどえらい目に遭うぜ。ウイスキーが二週間で十一本も野営地に送られたんだ」

「若いペロールは来るんだろうか」

「いや、彼は臨時会員にすぎない。まあ、あの若いのがわざわざ来ることはないだろう。ワックスウエルも来るまい。まだ野営地を離れないと言ってる。投票が行なわれるのなら、エリスに代弁してもらうと伝言してきた。だが投票するようなことはあるまい」と横目でフロローリーを見ながら付け加えた。どちらもこの問題で喧嘩したのを覚えていたのだ。

「それはワグレガーの決めることだろう」

「俺が言ってるのは、ワグレガーが現地人の会員を選ぶなんていうたわ言を引っ込めてしまおうってことだ。今はそんな時期じゃない。反乱などがあつたあとだぜ」

「ところで、反乱はどうなっているんだね」フロローリーは話題を変えた。今ドクターの選挙のことで争いを始めたくなかった。二、三分もすれば、うんざりするほどめどが起るはずだ。「新しいニュースは？ もう一度連中が蜂起すると思うかね」

「いや、残念だがすべて終わった。臆病者らしく降参してきたんだ。あの地域全体が女学校みたいに静かだ。失望のいたりだよ」

フロローリーの心臓が一瞬止まった。隣の部屋でエリザベスの声がしたのである。その時ワグレガー氏がはいつてきた。エリスとラッカーステイン氏もあとから付いてきた。女の会員には投票権がないので、これで全員そろつた。ワグレガー氏はもう絹服を着て、小脇にクララの会員簿を抱えていた。彼はいつもクララの会合のような小事にすら、多少公式的な票囲気を持ち込もうとする。

「皆さんお集まりのようですので」といつもの挨拶のあと話し始めた。「仕事に……ああ……取りかかりましょうか」

「かかつて下され、ワグダフ殿」の例のせりふを言つて、ウエストフィールドは腰を下ろした。

「後生だから、誰かボーイ長を呼んでくれ。俺が呼ぶのを家内に聞かれたくないんだ」とラッカーズテイーン氏が言った。

「議題にはいる前に」ワズレガー氏は他の者たちが皆一杯飲んだのに、彼だけは断つて次のように言った。「皆さんは、この半年間の会計報告をお聞きになりたいでしょう」特に聞きたい者はいなかったが、ワズレガー氏はこんなことが好きで、至れり尽くせりの報告をした。フローリーはあれこれ考えていた。もうすぐ大騒ぎになるだろう、ひどい騒ぎに。フローリーがやはりドクターを推薦すると知れば、皆は激怒するだろう。エリザベスが隣室にいる。騒ぎが起ころうとも彼女の耳にはいりませんように。私が他の連中にいじめられるのを見たら、彼女は一層慥蔑するだろう。今晚彼女に会おうか。でも話しかけてくれるだろうか。彼は幅四分の一マイルもあつてきらきら光っている河の向こうを見た。向こう岸あたりに一団の人がいてサンパンのそばで何かを待っていた。一人はカウンパソンをかぶっていた。こちら側の岸近くを大きく無格好なインド式ハンクが激しい流れに逆らつてのろのろ進んでいた。一漕ぎごとに、やせこけたドラビダ人の漕ぎ手が十人、船首の方に駆けていき、ハート型の水かきが付いた原始的な長いオールを水中に突っ込んだ。黒いゴムで出来た生き物が苦しんでいるみたいに、やせた身体を突つぱり、引き、船尾の方へ踏んばる。すると大きな重い船体が一、ニヤード前進する。それから再び漕ぎ手はあえぎながら船首にすつ飛んで行き、舟が流れに押し止められぬうちにオールを突つ込む。

「さてここで」とワズレガー氏は一層もったいを付けて言った。「議題の中心に移ります。もちろんその……ああ……現地人をこのクラブの会員に選ぶという問題です。不愉快です避けられません。以前この問題を討議した時——」

「なんだと！」

話をささぎつたのはエリスだった。彼は興奮のあまりいきなり立ち上がった。

「なんだと、おい。まさか例の問題をむしろ返すつもりじやなかるうな。いろんなごたごたがあったというのに、またクラブに黒ん坊めを選ぶ話か。けしからん、今度ばかりはフローリーさえ引つ込めたのに」

「エリス君は驚かれていますようですね。確かにこの問題は以前、論じられたことがあります」

「うんざりするくらい話し合つたぜ。みな言いたいたことは言つたはずだ。間違ひなく……」

「エリス君、ちよつとおすわり下さい」とワズレガー氏は寛大に言った。

「どんなでもない話だつ」とわめきながらエリスは椅子にどしんと腰を下ろした。フローリーが河向こうに目をやると、一群のビルマ人たちが船に乗ろうとしていた。長く無格好な包みをサンパンに積み込んでいる。ワズレガー氏は書類の束から一通の手紙を取り出した。

「この問題が生じた事情を最初に説明しておいたほうがいいだろうと思ひます。総弁務官のお話では、現在現地人会員がいないクラブは、少なくとも現地人を一人選んで自動的に承認するように、という趣旨の回状が政府から送られてきたそうです。回状にはこうあります。ああ、ここにありました。『高位の現地人役人に社会的侮辱を加えることは、間違つた政策である』私としては断固これに反対です。皆さんそうでしょう。実際に政治の仕事をしている我われは、上の方から邪魔立てをする、あの……ええつと、プロジェクト派議員連中と、考え方がまったく違います。総弁務官は私とまったく同意見です。しかしながら」

「いや、そんなのはみなまつたくのたわ言だ」とエリスが言葉をさしはさんだ。「総弁務官や他の連中になんの関係がある。畜生、自分のクラブじや自分がしたいようにできるはずだぜ。勤務外のことでは指図する権限などやつらにはない」

「その通り」とウエストフィールドが言った。

「君は私の言いたいことを先回りしています。総弁務官には、全会員にこの問題をばからなければならぬ、と申し上げておきました。彼が提案している方針はこうです。もしこの回状の趣旨をクラブが少しでも支持すれば、現地人会員を選ぶ。一方、クラブ全体が全員一致で反対であればこの件は打ち切りにする、ということですよ」

「よし、決まつた、全員一致で反対だ」とエリスが言った。

「じや現地人を入会させるかどうかは、我われ次第という意味かね」とウエストフィールドが言った」

「そのような意味に了解してもらってよいと思います」

「それじゃあ、一人残らず反対だと表明しよう」

「はつきり決めてしまおうぜ。こんな考えは今こそたたき潰してやろう。二度と息を吹き返さないようにな」

「そうだ、そうだ」とラッカーヌティーン氏がしがれ声で言った。「間抜けな黒ん坊など入れな。それが団体精神タテマツリ・カウチンというもののだ」

ラッカーヌティーン氏は、このような場合いつも、『健全な感情』をあてにできる人物だった。内心ではイギリス支配のことなどちつとも構っていない。白人であろうと東洋人であろうと、一緒に酒が飲めれば喜んでいいる。しかし無礼な召使を鞭打つことや、民族主義者を油煎にすることを誰かが提案すると、いつも待つてましたとばかりに大声で「賛成、賛成」と言った。残念ながら、ちよつと酒を飲みすぎたり何やらしているが、祖国には忠誠であることを彼はいつも誇りにしていた。これが彼なりの体面の保ち方であった。ワグレガー氏は全員が同意見らしいので内心ほつとしていた。東洋人が会員に選ばれるとすれば、医師ペラスロミにちがいない。しかし彼は、ガ・シユエー・オーの不審な脱獄以来ポクターには根深い不信感を抱いていたのである。

「では全会一致と思つてよろしいでしょうか」と彼は言った。「そうであれば、総弁務官に報告します。でなければ、選出する候補者のことを討議しなければなりません」

フロローリが立ち上がった。自分の意見を述べなければならぬ。心臓が喉までせり上がつてきて、窒息しそうだった。発言さえすれば、ポクターの選出を確実にすることができなければならない。なんにせよ、約束をしたからには、破るわけにはいかなない。ちよつと以前であれば、『善良なまことの紳士』フェア・アンド・ホーネスト・ジェントルマンとして、そんな約束など、いとも簡単に破つていたのであろう。しかし今はできない。やり過ぎなければならぬ。瘡を見られぬよう身体を斜め向きにした。声はがや一本調子の疾しい感じになつてくることが分かつた。

「フロローリ君、何か提案がありますか」

「ええ、私は医師ペラスロミをこのクラブの会員に推薦します」

他の三人から上がった驚きの叫び声あまり大きかつたので、ワグレガー氏はテーブルを叩いて、婦人が隣室にすることを皆に警告しなければならなかつた。エリスはそれを完全に無視し、また急に立ち上がった。鼻の回りがすつかり灰色に変わつていた。彼とフロローリは、今にも殴り合いをせんばかりににらみあつていた。

「おいこの間抜け、今言つたこと引つ込めろ」

「いや引つ込めぬ」

「へらず口を叩くな、卑劣漢め。てめえなど黒ソ坊相手のホモ野郎だ。こそこそしやがつて、この馬鹿野郎」

「静肅にっ」とワグレガー氏が叫んだ。

「だがこいつを見る、こいつを」とエリスは涙を流さんばかりの様子で叫んだ。「こいつは太鼓腹の黒ソ坊のために俺たちを裏切ろうとしてるんだ。あれだけ言つてやつたのに。しかも団結さえすりや、クラブににんにくの臭いなど永遠に近づけずにはすむという時にだ。おい、こんな振舞いするやつを見たら誰だつて吐気がするぜ」

「引つ込めろよ、なあフロローリ」とウエストフールドは言った。「馬鹿なまねはやめろ」

「まったくの過激思想だ、いまいましい」とラッカーヌティーン氏は言った。

「君たちの言葉など気にするものか。それは君たちの領分じゃない。ワグレガーが決めることだ」

「それじゃあ、君の決心は……ああ……あくまで変わらないと言うのだね」とワグレガー氏がむつつりと言つた。

「そうです」

ワグレガー氏はため息をついた。「それじゃ、残念ながら、そうするより仕方がないと思われるので……」

「よせ、よせつ」とエリスは怒りのあまりはね回りながら叫んだ。「こいつに屈服するな。投票にかけろ。野郎が他の者に合せて反対投票をしなけりや、まずこいつをクラブから



追いつく。そのあと——そうだ、おいボーイ長」

「お呼びですか」と言っておボーイ長が現われた。

「投票箱と球ボールを持ってこい」と言い、ボーイ長が返事したとたんに「早く失せろ」とあらあらしくどなった。

空気がよどんでいた。どういいうわけか揺りうちわが止まっていたのである。ワグレガー氏は不承不承ではあるが、裁判官のような態度で立ち上がり、投票箱から黒玉と白球がはいった二つの引き出しを取りはずした。

「議事は順を追って進めなければなりません。フローリー氏が、外科医師ペラスワミをこのクラブの会員に推薦しています。私の考えでは、これは間違い、大変な間違いです。しかしながら……。この件を投票にかける前に……」

「おい、なぜこんな大騒ぎをやらかすんだ。そらっ、これは俺の一票、もう一つはワックスウエルの分だ」と言っておボーイ長は投票箱に黒玉を二つ入れた。その時、突然激しい怒りの発作に襲われたのか、白球の引き出しを取って床に投げつけた。球が四方に飛び散った。

「そらっ。使いたかつたら拾え」

「この馬鹿。そんなことして何の役に立つんだ」

「旦那さまあ」

一同が驚いてあたりを見回した。ボーイ長が上がってきてペラスワミの手すりから身を乗りだし、目を皿のようにしていた。やせた片腕で手すりにしがみつき、もう一方の腕を河の方に振っていた。

「ねえ、旦那さまあたら」

「どうした」とウエストフィールドが聞いた。

みな窓のところに移動した。さきほどフローリーが見た時、河向こうにあったサンパンが、芝生のすその上手にあり、サンパンが揺れないように一人の男が灌木にしがみついていた。緑のガウンパンをかぶったビルマンがおりてきた。

「ワックスウエル配下の森林監視官だ」とエリスがさきほどはうって変わった声で言った。「こりや、何かあったんだ」

森林監視官はワグレガー氏を見ると、うわの空でそそくさと合掌をし、サンパンに引き返した。百姓が四人続いて降りてきて、フローリーが遠くから見かけた奇妙な包みを苦労して陸揚げしていた。長さ六フットで、ミイラのように布で包んであった。みな胸騒ぎを覚えた。森林監視官はペラスワミの方を見上げ、昇り口がないと分かる。クラブの正面に百姓たちを連れて来た。葬式で人足が棺をかつぐように、包みを肩にかついでいた。ボーイ長も休憩室に戻っていた。彼の顔でさえ、それなりに少し青ざめていた、つまり灰色になっていた。

「ボーイ長」ワグレガー氏がきびしく言った。

「はい」

「今すぐカーブ室のドアを開けてこい。あけるなよ。ご婦人方に見せてはいけぬ」

「はい、承知しました」

重そうに荷をかついだビルマンたちが扉下をやつて来た。はいつてくる時、先頭の男がよろめいて倒れそうになった。床に散らばっていた球を踏んだのである。ビルマンたちはひざまずき、床に荷物を降ろし、合掌をし、少し頭を下げて、両手を合わせたまま妙にうやうやしい態度で荷物を見下ろしていた。ひざまずいていたウエストフィールドが布を引きはがした。

「なんと、見る、これを。この気の毒なやつを」と言ったが、たいして驚いた風はなかった。

ラッカーズステーション氏は部屋の隅に退いて、山羊みたいな声を出していたが、包みが岸に上げられた瞬間、何がはいつているか皆分かつていた。ラックスウエルの死体であった。彼に射殺された男の親類のもの二人に、短剣でほとんどぼらぼらに切り刻まれていたのである。

ワックスウエルの死はチャウタダに大きな衝撃を与えた。やがてその衝撃はビルマ全体におよぶだろう。今度の事件は「チャウタダの事件を覚えているか」という具合に、気の毒なこの若者の名前など忘れられずとのちまでも語り継がれることであろう。しかし完全に個人的な立場では、誰もそれほど悲しんではいなかった。ワックスウエルなど取るに足らない存在で『いいやつ』だとは言っても、ビルマに一万という膚色の点で『いいやつ』の一人に過ぎず、おまけに親友は一人もいなかった。

ヨーロッパ人は誰一人彼の死を悲しまなかった。とはいえ彼らが今度の事件に腹を立てていなかったわけではない。それどころか事件当時は激怒していた。白人が殺されるなどという許すべからざることが起こったからだ。このような事件が起こると、東洋にいたイギリス人は思わず背筋が寒くなる。ビルマ人は毎年八百人ぐらい殺されるが、そんなことほどでもない。だが白人の殺害となると、途方もない神聖冒瀆である。気の毒なワックスウエルの仇を討つことになるのは間違いないことであつた。しかし彼が死んだと知って涙を流したのは一人か二人の召使と、前から彼を好いており、その死体を運んできた森林警備隊員一人ぐらいなものであつた。

一方、誰一人心から喜んでゐる者はいなかったが、ウ・ポ・チンだけは別であつた。彼はワ・キンに言つて聞かせた。

「これこそまさに天の恵みじゃな。わしが計画しても、こうもうまくはいかなくなつたらう。わしが防いだ例の反乱の重大さを皆の肝に銘じさせるにはちよつと流血沙汰が必要だつた。それが起こつてくれたのだ。いいから、ワ・キン、最近わしは、何か神意みたいなものがわしのために働いてゐるのだ、とますます信じ込むようになってきた」

「ワ・ポ・チン、あなたという人はほんとに恥知らずだね。よくもそんなことをぬけぬげと！ 人殺しの罪が胸につかえて身震いすることもないというのですか」

「なんだと、このわしが？ 人殺しの罪が胸につかえる？ 何を言つてるんだ。わしは生まれてこのかた、ひよこ一羽殺したことはないぞ」

「でもあなたはあの可哀そうな若者が死んだおかげで得をしてゐるじゃないですか」

「得してゐる？ そりや得はしてゐるさ。確かにね。しかし一体それが悪いことか。誰かが自殺する気になったら、このわしが悪いのかね。漁師は魚を獲つて罪作りをしてゐる。しかし魚を食つた者まで罪を作つてゐることになるのか。そんな馬鹿なことがあるものか。いずれにしる魚は死んでゐるんだ。それなら食つてもよからう。經典はもつと丁寧に読まんといかんぞ、なあキン」

葬式は翌朝、食事まゝに行われた。ヨーロッパ人は全員出席したが、ペロールだけは式にも出ず、墓地のほぼ真向かいにある広場でいつもとまったく同じように馬を走らせていた。ワグレガー氏が埋葬式文を読んだ。小人数のイギリス人たちが墓の周りに立ち、ヘルメット帽を脱いで手に持つていた。衣裳箱の底から引っぱり出してきた喪服には汗がにじんでいた。朝の強烈な光が皆の顔に容赦なく降り注いでいたが、一同が着てゐる野暮つたく粗末な黒服のせいか、光はいつもより黄色く見えた。エリザベス以外のどの顔も老けてしわが寄つてゐた。医師ペラスロミと数人の東洋人も来ていたが、懐み深くうしろに控えていた。この狭い墓地には、材木商会の助手や、役人や、今は忘れられた小ぜり合いで戦死した兵士たちの墓が十六個並んでゐた。

墓石には『不断の鍛練中コレラで倒れしインド帝国警察官故ジョン・ヘンリー・スパゲナル氏ここに眠る』などと刻まれていた。

フロローリーはスパゲナルをかすかに覚えていた。野営地でアルコール中毒の精神錯乱が二度起こり、二度目の発作が治まった直後に急死した男だつた。墓地の片隅には混血児たちの墓があり、木の十字架が立つてゐた。ジャスミンのつるが一面に繁つてあたりを覆い、芯がオレンジ色の小さな花が咲いてゐた。ジャスミンの間には、鼠が墓のままで続く大きな穴をいくつも掘つてゐた。

ワグレガー氏はまるやかな声でうやうやしく式文を読み終え、本国ならシルクハットに相当するヘルメット帽を胸に当て、先頭に立つて墓地を出た。フロローリーは墓地の門付近をぶらぶらしながら、エリザベスが話しかけてくれるのを心待ちにしてゐたが、彼女は見向きもしないで通りすぎた。今朝は誰もが彼を避けてゐた。殺人事件が起こつたために昨夜の彼の不美な態度が一層おぞましく思えるのか、皆彼を毛嫌いしてゐた。エリスはウエストフイールドの腕をつかんでゐた。二人は墓地のそばで立ち止まつて、シガレット・ケースを

出した。彼らが俗語混じりで話し合う声が、まだ土をかけていない墓越しにフローリーの耳にはいつてきた。

「なあ、ウエストフールド、そこに横たわっている気の毒な野郎のことを思うと、畜生！ 俺は腹わたが煮えくり返るぜ。腹が立って腹が立って一晩中眠れなかった」

「ひどいと思うね。まあいいさ、二、三人は絞り首にしてやる。うまくゆきやこちら一人に対して、やつら二人ぐらいはやってやる」

「たった二人！ 五十人は吊さなきや。そいつらを殺るにも大騒動だろうな。名前は分かっているのか？」

「まあね。この辺のやつらは皆、誰がやったか知ってるさ。こんな事件じやいつも犯人は必ず分かるものだ。ただ村のやつらに口を割らせるのが骨折り仕事でね」

「なあ、お願いだ、今度だけは口を割らせろよ。法律など気にすることはない。叩いて吐かせるのだ。拷問でもなんでもいい。証人を買収したけりや百や二百の小銭は俺が出す」

ウエストフールドはため息をついて言った。「そりや難しかろう。そうできりやありがたいが。おれの部下だつてこちらが命令さえすれば、蟻塚に縛りつけ、赤唐辛子を振りかけて証人を締め上げるぐらいは朝めし前だが、近頃じやそれは通用せんのだ。業いまいまいが、馬鹿げた法律とやらを守らなきやならんのでね。しかし安心しろよ、やつらはちやんと吊すから。必要な証拠は揃っている」

「よかろう。逮捕したあと、有罪にできる自信がなきや、撃ち殺してしまえ。いいか、撃ち殺せよ。逃亡を企てたのだとかなんとか口実を設けてさ。やつらを釈放するぐらいなら、なんでもよいから早く手を打つことだ」

「安心しろよ、釈放はせんさ。捕まえるとも、誰かはな。誰も吊さぬぐらいなら無実の野郎でも吊したほうがよい」最後は無意識に何かから引用したような言葉を用いた。

「それだよ、肝心なのは。やつらが吊されるのを見るまでは夜もぐつすり眠れん。参つたな、この暑さにや。早く逃げ出そう。喉が乾いて死にそうだ」そう言つてエリスはウエストフールドと連れ立つて墓地を離れた。

喉の乾きに参っているのは皆似たり寄つたりだったが、といつて葬式が終わるとすぐにクラブに飛んで行って酒を飲むのも具合が悪かつた。ヨーロッパ人たちはそれぞれ家へ帰つた。掃除人が四人残り、振り出してあつた灰色のセメントみたいな土を緞で墓に戻して、なんとか土まんじゅう形にした。

朝食のあと、エリスは細身のステッキを片手に事務所へ歩いて行つた。やり切れないほど暑かつた。水を浴び、シャツと半ズボン姿に戻つて出てきたのだが、半時間ほど暑い式服を着ていただけで、あせもが恐ろしいほどひどくなつていた。すでにウエストフールドは警部一人に部下数人を連れ、大型モーターボートで人殺したちを捕えに出発していた。ペロールにも同行を命じた。彼の手を借りたからではなく、ウエストフールドに言わせると、「ちつたあ仕事でもさせたほうが若僧のためだから」であつた。

エリスはあせもを我慢できず、両肩をやたらに動かした。苦汁のような怒りが腹の中で煮えくり返つていた。今度の事件のことを一晩中考えた。こん畜生め、やつらはこともあろうに白人を殺しやがつた。腰ぬけ犬めら！ こそこそしやがつて。犬畜生め、どう思い知らせてくれようか。いまいましい、どうしてあんなお上品な法律など作つたんだ。なぜ今までそのことに對して何も手を打たずにいたんだ。これが戦前のドイツ植民地で起こつたのであれば……。昔のドイツ人は立派だつた。やつらは黒ん坊の扱い方をちゃんと心得ていた。必ず報復した。厚皮製のむちで打ち、村を襲い、家畜は殺す、作物は焼き払う。おまげにやつらを大量に虐殺し、死体を大砲に詰めてぶつ放したんだ。

エリスは木の間から池のように流れ落ちてくる、ぞつとすると強烈な光に目を凝らした。緑色がかつた大きな目は悲しそうだつた。おとなしそうな中年のビルマ人が大きな竹ざおを担いでやつて来て、エリスとすれ違つた時に、ぶつとくさ言いながらさおを担いでいる肩を替えた。エリスはステッキを握っている手に力を入れた。この野郎が俺を襲つてくれさえすれば。いや何か侮辱してくるだけでよい。そうすりや、こやつをぶちのめしてやれるのだが。この腰抜けどもが少しでも目につくほどの鬪志さえ見せりや。このようににこそそ通り抜けて法律の中に身をひそめられては、こちらが報復する機会さえつかめない。本当に反乱らしい反乱が起ころぬものか。そうすれば戒厳令を敷き、やつらを容赦なく攻撃できるといふものだ。すばらしく血なまぐさい場面が心に浮かんだ。泣き叫んでいる現地人の群れを兵士が虐殺している。射殺し、馬蹄にかけている。馬に踏まれた身体からは内臓が飛び出し、むちで打たれた顔はすだれのように切れている、というものだつた。

高校生が五人並んで道路を下つてきた。男か女か区別のつかない、気持ちが悪いくらいほどのつべりした、子供つぽく意地悪そうな顔が一行に並んでいた。その顔がわざと傲慢な笑いをにたつと浮かべて彼の方に向けられているのがエリスの目にはいつた。彼らは白人の彼をなぶるつもりでいた。おそろくは例の殺人事件を耳にしたので、ご多分に洩れず民族主義者

である生徒たちは、その事件を自分たちの勝利だと考えたのだろう。エリスとすれ違った時に五人は真つ向から嘲笑を浴びてきた。彼らは公然と彼を怒らせようとしていた。法律が自分たちの味方であることを承知しているのである。エリスは胸の怒りが爆発するのを感じた。黄色い彫刻のような顔を並べて嘲笑してくるのに耐えられなかった。エリスはいきなり立ち止まってどなった。

「こら、坊主ら、何を笑ってるんだ」  
生徒たちが振り向いた。

「一体何を笑ってやがると聞いてるんだ」

一人が「おっさんの知ったことか」と答えた。実に下手な英語だったので、言ってる本人の気持ち以上に傲慢に聞こえた。次の瞬間、エリスは自分でも何をしているか分からなかった。彼はステッキを力いつぱい振り回したが、それが相手の目にまともにもびしりと決まった。相手は悲鳴をあげて後ずさりし、同時に残る四人がエリスに飛びかかってきた。しかしエリスが強すぎて四人の手に負えなかった。彼は四人を振りほどいて飛び下がり、ステッキを激しく振り回したので、誰一人近づけなかった。「近寄るな。近寄るともう一人打ちのめすぞ」

四対一だったけれども、彼の恐ろしい剣幕に四人は怯えて逃げ出した。目を打たれた少年はびざまずいて両腕で顔をおおい、「目が見えない、目が見えない」と泣き叫んでいた。突然、四人は向きを変え、二〇ヤードほど先に積み上げである道路補修用紅土クラットの方に走っていった。エリスの部下の事務員が事務所のベランダに出ていてこの出来事を目撃し、うろたえて飛び回っていた。

「旦那さまこちらへ、こちらへ早く！ やつらに殺されてしまいますよ」

エリスは走らずにわざとゆっくりベランダの昇り口まで行った。飛んできた紅土の塊が柱に当たって砕けた。それを見た事務員はあわてて建物の中に逃げ込んだ。しかしエリスはベランダに踏みとどまり、腕一杯に紅土の塊を抱えている下の少年たちの方に向き直った。彼はうれしそうにげらげら笑っていたが、やがて少年たちに向かって叫んだ。

「こら、薄汚い黒ん坊めら。さきほどは驚いたろう。四人ともこのベランダに上がって、俺にかかってこい。こわいんだろう。四人もいながら、たった一人の俺にかかってこれんのか。それでも男か。小汚い嫉鬼どもめ、こそこそしやがって」

エリスは急にビルで語にかえ、四人を人間と豚の合いの子と呼んで罵った。その間も四人は紅土の塊を彼目がけて投げつけていたが、なにしろ腕に力がないので、投げられた塊はとんでもない方向に飛んでいった。彼はそれらを全部かわし、一つかわすごとに勝ち誇った様子でげらげら笑った。やがて道路の上手から叫び声が入り乱れて聞こえてきた。こちら騒ぎが警察まで聞こえたのか、警官が数人、何事が起きたのか見に出てきた。少年たちは怯えて逃げ出し、エリスは完全に勝利を収めた。

エリスはこの騒ぎを心から楽しんだが、終わつたとたんになぜか無性に腹が立つてきた。それでラヴレガー氏に激しい調子の手紙を書き、現地人に気まぐれに襲われたので私に代わって報復してもらいたい、と伝えた。現場を目撃した事務員二人と召使一人を証人としてラヴレガー氏の事務所へ行かせた。三人は、「少年たちは何の理由もなくエリス氏を襲いました。エリス氏は身を守つただけです」云々と、口裏を合わせて嘘をついた。エリスのために弁じておくと、彼はこれが事件の真相と信じ込んでいたのである。ラヴレガー氏はちよつとあわてて、事件に関係した四人の高校生を見つけ出して事情聴取せよ、と警察に命じた。しかし少年たちはこの事態を予想して、じつと身を隠していた。警察は一日中市場を捜索したが、結局彼らを見つげ出すことはできなかった。夕方、目に負傷した例の少年がビルワルン医師のところ連れていかれた。医者は何かの木の実を砕いて毒薬を調合し、少年の左目に塗って、まもなく彼を失明させてしまった。

その夜もヨーロッパ人たちはいつもの通りクラブに集まった。ただウエストフィールドとペロールはまだ町に戻っていきなかつたので現われなかつた。誰も彼も不機嫌だった。殺人事件に加えて、エリスが何もせぬのに襲われた（という説明を一同は受け入れていた）ので、誰もが腹を立てていたし、恐れてもいた。ラッカーステイン夫人は「私たちは寝込みを襲われて皆殺しにされるわ」というような調子でしゃべっていた。ラヴレガー氏が、暴動の場合、ヨーロッパ人女性はずべてが終わるまで監獄に収容されるだけだ、と言って彼女を安心させようとしたが、それもないして彼女の懇めにはならないようだった。エリスはフロローリーに無礼な態度をとり、エリサベスも彼に素知らぬ顔をしていた。フロローリーはエ

リザベスと仲直りできるかもしれないという馬鹿げた望みを抱いてクララにきていたので、彼女がよそしい態度を変えないのを見てみじめな気持ちになり、その夜は大部分を図書館でこそ過ごした。八時頃、酒を何杯か飲んでやっとお互いに少しなごやかな気持ちになったので、エリスが提案した。

「どうだろう、ボーイたちを二、三人家にやって、食事をこちらへ持ってこさせたら？ その間、ブリッジの三番勝負でもやっておればいいだろう。家に帰ってぼんやりしているりはまじだと思うが」

ラッカーステイーン夫人は家へ帰るのがこわかったので、その提案に飛びついた。ヨーロッパ人たちは、遅くまでクララに居残りたい時には、ここで夕食をとることがあった。ボーイ二人が部屋に呼ばれたが、二人は用向きを聞いたとたんになんと泣き出した。丘を登っていけばマックスウェルの幽霊に出くわすと思っ込んでいたようだった。それでボーイの代わりに植木屋が使いにやられた。植木屋が出ていった時、フロリーは今夜も満月であることに気づいた。時の経つのは実に速い。今日は、夾竹桃の木の下で彼がエリザベスにキスをしたあの夜からちょうど四週間目だったのである。

皆がブリッジのテーブルに向かい、ラッカーステイーン夫人がびくびくして、つい規則違反の札を出した時に、何かがどしんと屋根に当たった。一同はぎくつくとして顔を上げた。

「ココナツが落ちたんでしょう」とラゲルガー氏が言った。  
「ここにはココナツの木なんてないぜ」とエリスが答えた。

次の瞬間、思わぬことがいくつか同時に起こった。前よりもはるかに大きな音がまたがーンと響きわたり、石油ランプが一ツラツツ掛けからはずれ落ち、地面に当たって砕けた。あやうくその直撃を食らいそうになったラッカーステイーン氏が叫び声をあげて飛びのき、ラッカーステイーン夫人が悲鳴をあげた。ボーイ長がいたんだコーヒーのような顔色で、ガウンパウンもかぶらず部屋に飛び込んできた。

「旦那さま、旦那さま！ 悪いやつらが来ます。私たち全員を殺しに」

「何、悪いやつら？ なんのことだ」

「旦那さま、村のやつらが皆外に押しかけています。大きな棒や短剣を手に跳びまわっています。旦那さまの首を切るつもりです」

ラッカーステイーン夫人は椅子の上でのけぞった。彼女があまり大きな悲鳴をあげるの、ボーイ長の声がよく聞きとれなかった。

「おい、少し静かにしてくれ」エリスは夫人の方を振り向いてつつけんどんに言い、皆にも言った。

「聞くんだ、あの音を」

外からは怒った巨人のうなり声に似た低くつぶやくような物騒な声が聞こえてきた。ラゲルガー氏はすでに立ち上がっていたが、その声を聞いて身体をこわばらせ、喧嘩早く眼鏡をかけ直した。

「何か騒ぎが持ち上がったようですな。ボーイ長、ランプを拾い上げなさい。お嬢さんは叔母さんを見てあげなさい。怪我してはいませんか。他の人は私と一緒に来て下さい」

一同は玄関の方に行った。ボーイ長が開めたのだからか、玄関は閉まっていた。現地人が一斉に小石でも投げているのか、何かがあられるように玄関に当たっていた。ラッカーステイーン氏はその音にたじろぎ、皆のうしろに隠れて言った。

「畜生め！ おい、誰かドアのかんぬきを掛ける」

「駄目だ、外に出なけりや。彼らから逃げ隠れしたら絶対にいかん」ラゲルガー氏が言った。

ラゲルガー氏はドアを開けて大胆に階段の上まで出た。二十人ほどのビルマ人が短剣や棒を持って庭の小径に群がっていた。外の道路には驚くほどたくさんのビルマ人が集まって左右に広がり、広場まで続いていた。少なくとも二千人は集まって、文字通り人の海になっており、月光の中で衣の白色と膚の黒色だけが見え、あちらこちらで反りの大きな短剣がキラツ、キラツと光っていた。エリスは落ち着き払ってポケットに手を突っ込んだままラゲルガー氏と並んで立った。ラッカーステイーン氏はいつの間にか姿を消していた。

ワグネル氏は手を上げてビルマ人たちを静め、きびしい口調で叫んだ。「これは一体何のまねだ」叫び声があちこちから上がり、クリケットボール大の紅土が数個、道路の方から飛んできた。運よく誰にも当たらなかつた。小径まではいり込んでいた男がうしろを振り向き、他の者に手を振って、まだ投げなつ、と叫んだ。それから一歩進み出てヨローパ人に話しかけてきた。三十歳前後の陽気なたくましい男で、長い口ひげを垂らし、膚じゆばんを着て、ロンジーを膝まではしょっていた。

「一体何のまねだ？」ワグネル氏はもう一度たずねた。男は陽気な笑いを浮かべ、それほど傲慢とも思えない口調で答えた。

「あなたには何も苦情はないよ、大將。<sup>マジョー</sup>材木商のエリスを捕えに来たんだ」(彼はエリスをエリトと発音した)「けさ奴に打たれた少年が失明した。エリトをここへ出してくれ。こらしめなきやならんのだ。他の者に手出しはしない」

「あいつの顔を覚えておけよ。こんなことをやりおつて、あとで七年は放り込んでやる」エリスが肩越しにフロローリーに言った。

ワグネル氏の顔は一瞬紫色に変つた。激怒のあまり息が詰まりそうになり、しばらくは口も利けなかつた。やつと口を開けた時には、我知らず英語でしゃべっていた。

「誰に向かつてものを言っているのだ。ここ二十年、こんな無礼な話は聞いたことがない。すぐ立ち去れ。でなきや憲兵を呼ぶぞ」

「早くしたほう身のためですぜ、大將。あなたの方のやる裁判にや正義はありませんからね。わしらは自分の手でエリトに制裁を加えなきやならなんだ。やつをすぐ出してもらいましよう。でないど皆さん泣きを見ることになりませう」ワグネル氏は、釘でも打ち込むような具合にこぶしを激しく振り動かし、久しく口にしたことのない悪罵を相手に浴びせた。「失せろ、こん畜生め！」

道路の方から雷のような叫び声がどろいて、同時に石が雨あられと飛んできたので、小径のビルマ人も含めて全員がその石に打たれた。一つがワグネル氏の顔に命中し、彼はあやうく倒れそうになつた。ヨローパ人たちは急いで建物の中に逃げ込み、ドアにかんぬきを掛けた。ワグネル氏は眼鏡が砕け、鼻血を出していた。談話室ではラッカース・テイーン夫人がヒステリーを起こした蛇のように長椅子で丸くなつており、ラッカース・テイーン氏は空びんを手を持って部屋の中のでぐずぐずしていた。ポーイ長は(カトリック教徒だったので)片膝でひざまずいて十字を切つており、ポーイたちは泣き叫んでいた。その中でエリザベス一人が、顔こそ青ざめていたが落ち着きかつていた。

「何事でしたの？」エリザベスが叫んだ。

「困つた事態になつたということさ。ビルマ人がここを取り囲んで石を投げってくるんだ。しかし騒がなくてもよい。やつらにはドアを押し破るだけの勇氣はないから」エリスは腹立たしげに言い、さきほど石が当たつた首のあたりに手をやつた。

「すぐ警察を呼べ」とワグネル氏が言ったが、ハンカチで鼻血を押さえていたので、言葉がはつきり聞こえなかつた。

「できんよ、そりや。君が連中と話してる間に見回していたんだが、やつらは回りを遮断しやがつた。警察隊の宿舎まで絶対にたどり着けない。ペラスノミ家の庭には群集があふれている」

「じや待つより手はないな。やつらもそのうちに散るだろう。ラッカース・テイーンさん、落ち着きなさい。本当に落ち着いて下さいよ。たいした危険はありませんから」

しかし彼の口調はたいしたことがないようには聞こえなかつた。その頃には、もう騒ぎ声は途切れることがなく、ビルマ人が何人も庭にただれ込んでいたようだった。騒音が急に大きくなり、声を張り上げない限りはお互いに話もできなくなつた。談話室の窓は全部閉められ、時どき虫除けに使う穴のあいたトタン製の日除けまでしつかり引き下ろされ、かんぬきが掛けられた。窓の割れるがちやん、がちやんという音が続きそのあと石が続けざまに四方八方から飛んできて、どしん、どしんと当たるので、薄い壁板は震えて今にも割れそうだった。エリスは日除けを開けて、びんを激しく群集の中に投げつけたが、とたんに十数個の石が飛び込んできたのであわててまた日除けを下ろさなければならなかつた。ビルマ人たちは石を投げ、どなり散らし、壁を叩く以上のこととはするつもりがないようであつたが、その騒がしさだけでも肝を潰すに十分だった。ヨローパ人たちは初めは音だけでも気が遠くなりそうだった。誰も騒ぎを起こした当人のエリスを責めようとは思わなかつた。それどころか、皆が同じ危険にさらされているので、目下のところは団結が強化されたようだった。ワグネル氏は眼鏡をはずしているの目がよく見え、部屋の中の真ん中にぼんやり突つ立ち、右手をラッカース・テイーン夫人が撫で回すのに任せていた。左足にはポーイが泣きわめきながらすがりついていて、ラッカース・テイーン氏はまたどこかに姿を消していた。エリスは激しく足を踏み鳴らし、警官の宿舎がある方に向かつてこぶしを振

り、女性がいるのも無視して口汚くのしつた。

「腰抜け警官めら、どこをうろついてやがる。きんたまが落ちたのか。なぜ現われんだ。これほどのチャンスは百年に一度だぞ。今ライフル銃が十挺もありや、あの豚どもをぶつ殺してやれるんだが」

「もうすぐ来るさ。あの人混みの中をかき分けてくるにや少し時間がかかるだろう」ワグレガー氏が、叫び返した。

「しかしやつらはなぜライフル銃を使わんだ。発砲さえすりや、豚どもを山のように殺せるのに。こんなチャンス逃すなんてなんというやつらだ」

石がトタンの日除けを破った。続いてそこからもう一つ石が飛び込んできて仏教画に穴をあけ、跳ね返ってエリザベスのひじに当たり、テーブルの上に落ちてやつと止まった。エリザベスのひじが切れた。外では勝ちどきが上がり、そのあと屋根に何か重いものが当たる音がドスン、ドスンと続いた。子供たちが木に登って屋根に飛び移ったのだ。彼らは屋根を滑り降りて大はしやぎしていた。ラッカーステイーン夫人が外の大騒ぎに負けないほどの悲鳴を張り上げていた。

「誰かその糞婆くそははの口を抑えろ。ぎやーぎやー豚でも殺すような声を出しおつて。何か手を打たなきや。フロローリー、ワグレガー、こつちへ来い。誰かいい手を考えろよ」

エリザベスは急に気がくじけて、わつと泣き出した。石の当たったところが痛んだのである。いつの間にか彼女が腕にすがりついていたので、フロローリーは驚いた。このような事態に直面しているながらも、彼女にすがられると彼はまず狼狽した。それまでは騒がしさに閉口しているだけで、たいして恐れておらず、平然と事の成り行きを眺めていた。東洋人がほんとうに危険だとはどうしても思えなかった。しかしエリザベスに腕をつかまれて初めて彼は事の重大さに気がついた。

「ねえ、フロローリーさん、お願い！ お願いだから何か策を考えてちょうだい。あなたならできるわ。できるはずよ。あの恐ろしい連中がなだれ込んでこないうちに、どんな策でもいいから、お願い！」

「誰でもいい、警官の宿舎までたどり着きさえすれば。イギリス軍将校が警官隊の指揮をとりさえすれば。どうしても行く者がなけりや、私が行つてみるより外ない」ワグレガー氏がうめくように言った。

エリスが叫んだ。「馬鹿なことを言うな。殺されるだけだぞ。やつらがなだれ込みそうになったら、俺が出る。しかし、畜生、豚どもに殺されなければならんとは！ 考えるだけで腹わたが煮えくり返る。警官隊を呼ぶことさえできりや、やつらを皆殺しにできるというのに」

「河岸つたいには行けないだろうか？」フロローリーが絶望のあまり叫んだ。

「駄目だ。そちらの方も何百人かうろつき回っている。完全に遮断された。三方はビルマ人、残る一方は河だ」

「そうだ、河だ！」分かり切っているためにかえつて思いつかない意外な考えがフロローリーの頭に閃いた。

「河だ、河だよ！ いても簡単に宿舎まで行けるじやないか。分らんか？」

「どうやって？」

「河を下るんだよ、河を。泳いでね」

「でかしたぞ！」エリスが叫んでフロローリーの肩をびしや、と叩いた。エリザベスがフロローリーの腕をぎゅつと握り、うれしさのあまり一、二度、文字通り小躍りした。「よければ俺が行こう」とエリスが叫んだが、フロローリーは首を振った。彼はもう靴を脱ぎ始めていた。ぐずぐずしてはいられなかつた。ビルマ人は今までのところは馬鹿げた真似ばかりしていたが、万一踏み込むのに成功すれば、どのような事態が起こるか知れたものではなかつた。ボーイ長はようやく当初の恐怖に打ち勝ったのか、芝生に面した窓を開ける準備をし、隙間から斜めに外を覗いた。芝生には二十人足らずのビルマ人がいるだけだつた。河で退路は断たれていると見て、クラブの裏手は警戒していなかつた。

「思いつきり芝生をつつ走れよ。大丈夫、君の姿を見たときにやつらは逃げ失せるさ」エリスがフロローリーの耳もとでどなった。

「警官隊に直ちに発砲することを命じ給え。君にその権限を与える」反対側の耳もとではワグレガー氏がどなっていた。

「依く狙えと言つてくれ。空に向けて撃つてはいかん。射殺するのだ、はつきり腹をすえて」エリスが補足した。



フローリーはペランダから飛び降りた。着地の際、堅い地面で足を痛めたが、六歩で河岸にたどり着いた。エリスの言った通り、ビルマ人たちは彼が飛び降りるのを見てひるんだ。石が二、三個、走り去る彼の背中に飛んできたが、誰も追ってはこなかった。多分彼が逃げようとしているだけだと思ったのだろう。それにこの見通しのきく明りで、逃げ出したのがエリスではないと分かったのであろう。次の瞬間、彼はもう灌木をかき分けて河にはいつていた。

深く水中に沈むと、河底の気持ち悪い泥に膝までのめり込んだので、足を抜くのに五、六秒はかかった。水面に浮かび上がると、黒ビールの泡のようなあぶくが生ぬるく口の回りに押し寄せ、何かふわふわしたものが口の流れ込み、のどに詰まって息もできなくなった。ほてい蔡の茎だった。やつとのでそれを吐き出した。気がつくくと、いつの間にか急流に乗って二〇ヤードは流されていた。ビルマ人たちは河岸をあてもなく走り回って叫んでいた。目の位置を水面すれすれにしているの、クラブを包圍している群集の姿は見えなかった。しかし連中の太く呪わしい叫び声は、陸にいるより河の中にいるほうがよく聞こえた。憲兵隊の宿舎あたりまで下つた頃には、河岸の人影はほとんど見られなくなった。なにか急流から抜け出し、泥の中をもがきながら渡り切ったが、左の靴下は泥にとられた。少し下手の岸で二人の老人が柵のそばにすわり、柵用の棒を尖らせていた。まるで百マイル先で起こっている暴動など嘘のように思えるほどのどかな風景だった。フローリーは岸に這い上がり、柵を乗り越え、ぐしょ濡れのズボンをたるませたまま、月光を浴びて白く見える練兵場を重い足どりで走り抜けた。物音一つしないことから判断すると、宿舎は空っぽのようだった。右手の馬小屋でペロールの馬が何かに怯えて跳ねまわっていた。道路まで走り出て初めてフローリーは事情がのみ込めた。

憲兵と警官が総勢一五〇名ほど、警棒だけで武装して群集の背後から攻撃を加えたが、そのうち群集の中へ完全に巻き込まれてしまったのである。混乱した群集は、まるでうず巻きながら移動している蜜蜂の大群みだだった。いたるところで警官が群がるビルマ人に囲まれて身動きできずにいた。必死にもがいても何の役にも立たず、四方から押し込まれて警棒も使えない有様だった。群がる人びとが、ラオコン〔二匹の海へびによって二人の息子たちとともに絞め殺されたトロイの司祭〕のように解けたターバンに巻かれてもつれ合っていた。恐ろしい悪罵が三、四カ国語で飛びかい、土煙がもうもうと立ちこめ、汗とキンセンカの入り混じった悪臭があたり一帯を包んでいた。それでいて誰も重傷は負ってはいなかった。多分ビルマ人たちはライフルの発砲を誘発するのを恐れて、短剣の使用を控えていたのだろう。フローリーは群集を押し分けて進み始めたが、すぐに皆と同様、その中にどじ込められてしまった。無数の人びとが押し寄せてきて、脇腹にぶつかったりして彼の身体をあらこちらに振り回し、熱気で息を詰まらせた。彼は夢でも見ているような気分でもがきながら進んだ。まったく馬鹿馬鹿しく現実離れのした状況だった。今度の暴動はスタートから馬鹿げていたのは、彼を殺してもおかしくないはずのビルマ人たちが、自分たちの中に飛び込んできた白人をどう扱ってよいか戸惑っていることだった。面と向かって彼を罵倒する者もおれば、彼の身体を揺さぶり、足を踏みつける者もいた。中には、白人だからというので道を譲ろうとする者までいた。彼は自分が助かろうと思っただけなのか、ただ人混みをかき分けて進んでいるだけなのか、はつきりと分からなくなつた。実に長い間、自分の両腕が身体に押しつけられてどうしようもない有様だったが、気がつくとき自分より力の強いずんぐりしたビルマ人と取っ組みあつていた。それからまた十数人が波のように押し寄せてきたので、彼はさらに群集の中へ押し込まれた。突然、右足の親指に飛び上がるほどの痛みを感じた。誰かに長靴で踏まれたようである。見ると憲兵隊のインド人中隊長で、みごとな口ひげをたくわえていた。非常に太ったラジプト族〔北インドに多い好戦的な種族〕の男だった。この男は群集に揉まれてはいる間にターバンをなくしていた。一人のビルマ人の喉もとをつかんで顔を殴りつけようとしているところだった。ターバンが落ちてしまつて禿頭から汗が流れ落ちていた。フローリーは中隊長の首に飛びつき、ようやく彼を相手から引き離し、その耳に向かって怒鳴った。ウルドラ語が急に出てこないのでビルマ語だった。

「なぜ銃撃を始めたのだ」

長い間、相手の返事が聞きとれなかったが、ようやく次の言葉を聞きとることができた。

「フクム・ネ・アヤ——命令を受けておりません」

「馬鹿野郎！」

この時、一群のビルマ人が二人の方に押し寄せてきたので、一、二分はそれに押されて二人は身動きができなかった。フローリーは中隊長がポケットにある笛を取り出そうとしているのに気づいた。ようやく笛を取り出し、十数度鋭く吹いた。しかし広いところに出ないかぎり、兵士を集めることはどうも無理だった。群集から脱け出すには恐ろしく骨が折

れた。船つこい海水に首まで漬つて歩いていようなものだった。時には手足が疲れ切つてしまい、何もせずに突つ立っているだけなので、群集に前進を阻まれて、うしろに押し戻されることすらあった。ついに彼が頰張つたからというよりも、自然に人波が運ついて、気がつくど彼の身体は外に出ている。中隊長も人波から抜け出しており、十数名の土民兵とビル人警部も一緒にいた。土民兵はだれもかれもくたくたになつて崩れ落ちるようになつて腰を下ろすか、足を踏まれてもしたのか、びつこを引いていた。

「おい、立て。宿舍まで全力で駆け足！ 各自ライフル銃と弾薬を持ってこい」

フローリーはビルで語で命令することさえできないほど疲れていたが、兵士たちは彼の英語が分かつたのか、重い足どりでのろろる宿舍に向かつた。フローリーも群集が再び押し寄せぬうちにそこから離れようと、連中のあとに付いていった。門までたどり着いた時、土民兵たちがライフル銃を持って引き返してきた。発砲の用意をしていた。

「白人の旦那、命令して下さい」中隊長が喘ぎながら言った。

「おい、お前、ヒンズスタン語は話せるか」フローリーが警部に向かつて叫んだ。

「はい、話せます」

「じゃこの連中に、銃口を上に向け、群集の頭上を狙つて発砲しろと言え。特に、皆いつせいに撃てと言え。皆にそう伝えろ」

太つた警部が言われた通り説明したが、彼のヒンズスタン語はフローリーよりひどかつたので、ほとんどは跳びはねたり、身振り手振りをするこゝろによつて命令を伝えた。土民兵たちは銃を構えた。とたんに鼻音が起こり、丘に反響してどろろき渡つた。一瞬フローリーは自分の命令が無視されたのかと思つた。というのは、彼らに一番近い群集がほとんど全部、乾草を刈るみたいに倒れたからである。しかし連中は度肝を抜かれて身を伏せただけだった。土民兵たちは再び発砲した。しかしこれは必要なかつた。すぐさま群集は河が流れの方向を変えるように、クラアの反対側へと退き始めていたからである。彼らは道路をどつと駆け降りてきた。武装した兵隊が行く手をさえぎっているのを見て先頭の連中は引き返そうとし、うしろの連中との間に争いが始まつた。やつと全体の輪が広がり、広場の上の方へ移動し始めた。フローリーと兵は引き上げて行く群集のあとについてクラアの方にゆつくり進んだ。人の波に巻き込まれていた憲兵と警官たちが、あるいは一人で、あるいは二人連れだつて、次つぎにもがきながら抜け出してきた。ターバンをなくし、ほどけたゲートルを長ながと引きずっていたが、受けた負傷と言え打ち身ぐらいであつた。警官の方はわずかにしる逮捕者を引っぱつてきた。クラアの構内に着いた時には、まだビル人たちが中から大挙して出てくる最中だった。若いビル人たちが途切れることなく次つぎと、垣根のすき間から、かもしかのようになごとな身ごなしで飛び出してきた。フローリーはあたりが非常に暗くなつたような気がした。白服の小柄な男が群集の最後尾から離れ、フローリーの腕の中に崩れるように転がり込んできた。見ると医師ベラスワミで、ネクタイは引きちぎられていたが、眼鏡は奇跡的に残っていた。

「先生じゃないですか」

「やあ、フローリーさん。ほんとに疲れました」

「ここを何してたのです？ 群集の真ん中にいたのですか」

「連中を引き止めようとしていたのですよ。あなたが来てくれるまでは絶望的でした。でも、このごぶしの一撃の跡を残しているやつが一人はいると思ひますよ」

ベラスワミはその一撃で痛めた小さなごぶしをフローリーの前に突き出して見せた。いつの間にか真つ暗になつてた。ちようどその時、背後で鼻にかかつたような声が出た。

「やあ、フローリーさん。もう片付きましたね。例によつて大山鳴動ネズミー一匹ですな。わたしら二人が揃えば、やつらは手向かいできませぬ。あつはつは」

近づいてきたのはウ・ポ・チンで、手にスチックを持ち、ベルトに拳銃をはさんで、格好だけはものものしかつた。服装はわざと膚じゆばんにシャンヌボンの寝間着姿で、家から大急ぎで駆けつけたのだと思ひせようとしていた。危険が去るまで身をひそめていて、評判が上がるのなら分け前にあずかるうと、今頃になつてあわててのこのこ出てきたのだ。

「あざやかな手際でしたね。ごらんなさい、連中がああのを逃げて行くさまを。わたしらでうまく連中を追つたようですな」ウ・ポ・チンは熱狂しているような口調で言った。

「わたしら？」ドクターが喘ぎながら、むつとして聞き返した。

「やあ先生。先生がおられるとは気がつきませんでしたよ。まさか先生まで戦つていたんじゃないでしょうね？ 大切な生命を危険にさらして。とても信じられませんな」

「あんだこそ、ここへ来るのに随分手間どったね」フローリーもむかつ腹を立てて言った。

「まあまあ、フローリーさん。わたしらの手で連中を遣っ払ったというだけで十分じゃないですか」とウ・ポ・チンは答えたが、フローリーの口調に気づいたので、小気味よさそうに付け加えた。「ですが、連中はヨーロッパ人の家の方に向かっていますよ。ごらんなさい。途中で略奪する気を起こすだろうと思いますね」

この男の機柄さは感心するほどだった。スレッジを小脇にかかえ込み、フローリーの身を護ってやると言わんばかりに彼と肩を並べて歩いたので、ドクターのほうは我知らず恥ずかしい気持ちになって、二人のあとに従った。クラブの門まで来て三人は足を止めた。もう異常なほど暗くなっており、月は隠れてしまっていた。頭上低く黒雲が獺犬の群れのように東に流れてゆくのがかすかに見えていた。ひんやりとした風が丘の上から吹いてきて、急に濃い湿った匂いが強くあたりにたちこめた。風が強まったので木が騒ぎ、やがて激しくぶつかり合った。チニコートのそばの夾竹桃に似た大木が、花を雲のように散らすのが闇の中でかすかに見えた。三人は急いで思い思いの方角に向きを変えた。二人の東洋人は自分の家へ、フローリーはクラブへ逃げ込んだ。とうとう雨が降り始めたのである。

翌日、町は月曜日の朝の大聖堂のある都市より静かだった。暴動のあとは大抵こうである。一握りの凶人を除いて、クラフアの襲撃に加わっただろうと思われる連中全員に乗じるすきもないアリアバイがあった。クラフアの庭園は野牛の群れが踏み荒らしたようになっていたが、略奪された家はなく、ヨーロッパ人のほうにも新たな死傷者はなかった。ただ事が終わってから、ラツカーストーン氏が球突き台の下でぐでんぐでんに酔っぱらっているのが見つかっただけだった。ウイスキーびんを持って、そこに避難していたのである。

ウエストフイールドとペロールは、マックスウエルを殺した男たち、とにかくマックスウエル殺害のどこでもなく絞首刑になるはずの二人の男を連れて朝早く戻ってきた。ウエストフイールドは暴動のニュースを聞いた時、暗い気持ちになったが、諦めた。また起こったのだ、本当の暴動が。それなのに現場にいなかったため、鎮圧できなかった。自分は何人殺しをできない運命にあるようだ、と思った。まったく気が滅入ることだった。ペロールはただひと言、憲兵に命令を下したのは民間人フローリーの出しやぶりだった、と言っただけである。

その間もほとんど休みなく雨は降り続いていた。目覚めて雨が屋根を打つ音を聞くと、フローリーはすぐ服を着て急いで出かけた。フロアがあとに残っていた。家並みが見えなくなるまで彼は服を脱ぎ、雨で身体を洗った。驚いたことに、昨夜の騒ぎで身体中傷だらけだった。しかし雨は三分足らずであせもの跡をみな洗い流してくれた。雨水の癒す力はすばらしい。フローリーは医師ベラスロミの家まで歩いて行った。靴はがぼがぼ音を立て、雨水がフェルト帽のつばから首へ一定の間隔をおいて滝のように流れ落ちた。空は鉛色で、旋風が次つぎと教知れず起こり、騎兵大隊のように広場を横切っていた。ビルマたちが通りすぎた。大きな木の帽子をかぶっているでも、彼らの身体には噴水を浴びているブロンズの神像さながらに水が流れ落ちていた。網状の細流が道路を洗い、石がむき出しになっていた。フローリーが到着したのはボクターの帰宅直後で、ベランダの手すり越しに傘の水を切っていた。彼は興奮してフローリーに呼びかけた。

「やあ、これはフローリーさん、お上がりください、さあさあ早く。よい時に来られました。オールド・トミー・ジョンを開けようとしてたんです。チャウタダの救世主フローリー氏の健康を祝して乾杯しましょう」

二人は長い間話した。ボクターはもう勝ったつもりになっていた。昨晚の出来事が、奇蹟的と言っているくらい彼の悩みを解決してくれたように思えた。ウ・ポ・チンの陰謀は崩れきった。もはや彼のなすがままにはならない。いやその逆だ。ボクターはフローリーに説明した。

「ご承知の通り、この暴動は——というよりむしろその際の際のあなたのご立派な活躍は、ウ・ポ・チンが予想もしていなかったことです。彼は名目だけの反乱を起こし、それを押し潰すという名誉を今までわがものにしてきたんです。反乱が起るたびに、それだけ名誉が高まると計算していました。私の聞いたところでは、マックスウエル氏が死んだのを聞いた時の彼の喜びようといったら、まったく」ボクターは親指と人さし指を重ね合わせた。「何と言ったらいいか」

「ぞっとする？」

「ああ、そうです、ぞっとするです。実際、躍り上がりながらんばかりだったそうです。これほどむかつく光景を想像できますか。そして『さあ今度ばかりは、連中もわしが扱う反乱を本気で考えるだろう』と叫んだそうです。人命をこの程度に考えているんですよ。だが、彼の勝利はもう終わりです。今度の暴動が仕事半ばで彼をつまずかせました」

「どのよう？」

「お分かりになりませんか。暴動から生じる数かずの名誉が彼のものではなく、あなたのものになったからです。それに私はあなたの友人であることが知られています。私はいわばあなたの栄光の中に立っています。あなたは目下英雄じやありませんか。昨晚クラフアに戻られた時、ヨーロッパ人のお友達は腕を広げてあなたを出迎えませんでしたか」

「確かにその通りだよ。まったく新しい経験だった。ラツカーストーン夫人は、ことのほか愛想がよく、今じや『ねえフローリーさん』などと呼んでくれる。彼女はエリスには深い恨みを抱いているようだ。エリスに糞婆呼ばわりされ、豚みたいにぎやーぎやー声を出すな、と言われたのを忘れていないんだ」

「エリスさんは時どき、どぎつい言葉を使いますね。前から気づいていました」

「ただ玉にきずは、群集を直撃せず頭上をねらうように、と私が警官に命令したことなんだそうだ。あれは政府の条令にも反するらしい。エリスはそのことで少し怒ったよ。『チャンスなのに、なぜやつらを撃たなかったんだ』と言うんだ。そんなことをすれば、群集に混じっている警官まで撃ってしまったらうと指摘しておいたがね。だが彼に言わせると、警官だって結局は黒ん坊にすぎないんだ。けれども私の罪はすべて許された。ワグレガーはラテン語で何か引用した。ホラテイウス〔ローマの詩人〕だったかな」

半時間後フローリーはクララへ行つた。ワグレガー氏に会つてボクサー選出の問題を片付ける約束をしていたのである。もう困難なことではないだろう。他の会員もあの馬鹿げた暴動のことを覚えていてる間は彼に逆らわないだろう。その気になれば、クララでロシアの革命家、レーニン支持の演説をしても、皆は我慢して聞いてくれるだろう。恵みの雨が頭から足までずぶ濡れにするくらい流れ落ち、数ヵ月も続いた無情なかんばつ期に忘れられていた土の匂いが、鼻孔を刺激した。彼は踏み荒らされた庭園を歩いた。植木屋が身をかがめ、裸の背中にびちやびちやと雨を受けながら、百日草を植える穴を移植ごてで掘つていた。花はほとんど全部踏まれて見る影もなかった。エリザベスが、彼を待つていたかのよう handsのペラソダにいた。彼は帽子を脱いでつばに溜まった水を払い、彼女のそばへ行つた。

「おはよう」低い屋根を打つ騒がしい雨音に声を消されないように、彼は声を張り上げて言った。

「おはようございます。とうとう降ってきましたわね。まるで叩きつけるようすわ」

「いえ、これはまだ本格的な雨じゃありません。七月になれば、ベンガル湾の水全部が、何回かに分けて頭上に注がれますから」

二人が会えば必ず天候の話をしなければならぬような感じだった。それでも彼女の顔は、月並みな言葉とは大いに違ふものを浮かべていた。態度が昨夜来、一変していった。彼は勇気を奮い起こした。

「石が当たったところはどうですか」

彼女は彼の方に腕を差し出し、つかませた。その様子は優しく、従順でさえあった。昨夜の手柄のおかげで、彼女の目に彼が英雄として映つてるのが分かった。彼女は危険が実はどんなに小さかったか知らず、一切のことを、ワ・ラ・メーのことさえ許していた。タイミンクよく彼が勇気を示したからである。もう一度水牛と豹の場面が繰り返されたのだ。彼は胸がどきどきし始めた。彼女の腕を撫で、指を握りしめた。

「ねえエリザベス……」

「人に見られますわ」と言つて手を引つ込めたが、怒つてはいなかった。

「エリザベス、話があります。密林からお送りした手紙のことを覚えてられますか、数週間前、あのあとで」

「ええ」

「内容は覚えてられますか」

「ええ、返事を出さなくてすみません。ただ……」

「あの時のご返事など期待していませんでした。あの時の言葉を思い出していただきただけです」

もちろんその手紙では、愛しています、どんなことがあろうと永遠にあなたを愛しています、と大変弱よわしく述べたに過ぎなかった。今二人は向かい合つて、身体をびったり寄せ合つたまま立っていた。あとで思い出しても実際に起こつたのだと信じられないほど素早く、衝動的に彼女を抱き寄せた。ちよつとの間彼女は観念し、顔を上げキスをさせた。それから突然身を引き、首を振つた。おそらく誰かに見られることを恐れたのかもしれない、あるいは彼の口ひげが雨でびしょ濡れだったからかもしれない。それ以上何も言わず、彼から離れ、急いでクララの中にはいつていった。彼女の顔には苦痛か悔恨の表情が浮かんでいたが、怒つて見るようには見えなかった。

彼はあとからゆつくりクララにはいり、ワグレガー氏の部屋に駆け込んだ。ワグレガー氏は上機嫌で、フローリーを見るや、にこやかに大声で言った。「よお、勝利の英雄が来たな」それからやや真剣な口調で、改めておめでとうと言つた。フローリーはこの機会を利用してボクサーのために少し弁じた。暴動の際にボクサーがとつた英雄的行動をあざやかに

説明した。「群衆の真ただ中で、虎のように戦っていました」といった調子で。誇張ではなかった。確かにボクターは生命を賭けたのだ。ラズレガー氏は感動した。他の人びともこの話を聞いて同じ反応を示した。東洋人にとつては、いつの場合でも、一人のヨーロッパ人の証言は千人の同胞の証言以上にありがたいものである。今はフロローリーの意見に重みがあった。事実、ボクターの評判は回復した。クラブの会員に選ばれるのは確定的になった。

しかしフロローリーがすぐ野営地に帰ることになっていたので、この案は最終的同意に達しなかった。彼はその脱出後、夜の間に進んだ。出発前に再びエリザベスには会わなかった。今では密林の旅もまったく安全だった。無益な反乱は明らかに終わったのだ。雨季が始まると、反乱の噂はめつたに聞かれない。ビルマ人たちは農耕で忙しくなるからである。いずれにせよ、水浸しの畑を大勢の人間が通行するのは不可能になる。フロローリーは十日のち、牧師の六週間ごとの訪問があるころ、チャウタダに戻ってくる予定だった。実はエリザベスとペロールがいるうちはチャウタダにいたくなかったのである。しかし奇妙なことだが、あの苦痛、以前彼を苦しめたいやらしい、むずむずするあの嫉妬心は一切が、彼女が自分を許してくれたことを知った今は、まったく消え去っていた。今、二人の間に立ちほだかっているのはペロールだけだった。彼女がペロールの腕に抱かれていると考えると、フロローリーはほとんど動揺しなかった。最悪の場合でも、二人の関係が終わるにちがいないことは分かっていたからである。ペロールはエリザベスとは絶対に結婚しない。ペロールのような青年が、名も知れぬインドの駐屯地で偶然出会った文無しの娘と結婚する可能性は絶対がない。エリザベスは単なる遊び相手だ。やがてペロールに捨てられた彼女は自分のもとに帰ってくるだろう。それで十分だ。望んでいたよりはるかにありがたい成り行きだ。真実の恋にはいくつかの点でちよつと恐ろしいような卑屈さがある。

ウ・ポ・チンは激怒していた。不意打ちを食らったことがあるとすれば、まさにあの嘆かわしい暴動こそ彼にとって不意打ちだった。彼の構想という機械装置の中に投げ込まれた砂みたいなものだった。ボクターの名譽を汚す仕事をまた一から始めねばならなかった。実際もう始まっていた。手始めに匿名の手紙が大量にばらまかれており、そのためラ・ペは丸二日間、今度は気管支炎という口実で仕事を休まねばならなかった。ボクターは男色オナホから公用の郵便切手を盗んだことまで、あらゆる犯罪を告発された。ガ・ジュエー・オーを逃がした看守は裁判にかけられたが、無罪放免になって意気揚ようとしていた。ウ・ポ・チンが証人の買収に二〇〇ルピーも使ったからだ。脱走の眞の演出者であるボクター・ペラスロミが無力な部下に罪を転嫁したという主張を詳細に立証する手紙が多数ラズレガー氏のところに送られてきた。ところがその効果は期待外れだった。ラズレガー氏が暴動を報告するため総弁務官あてに書いた親展の手紙を、こつそりと湯気を当てて開封してみると、驚くべき内容だった。暴動の腕ボクターが「最も賞賛に値する行動をした」と述べていたのである。それでウ・ポ・チンは作戦会議を召集した。

「猛攻撃を加える時が来た」ウ・ポ・チンが一同に言った。朝食前、正面ベランダでの秘密会議だった。ラ・キンがいた。パ・セイソウ・ペもいた。ラ・ペは十八歳の利口な顔をした有望な若者で、間違ひなく成功しそうな風貌を備えていた。

「我われは煉瓦の壁を叩いてるんだ」ウ・ポ・チンは続けた。「その壁はフロローリーだ。まさかあの腰抜けがあえて友人の味方をするとは思ってもしなかった。ところがそれをやりおつた。ペラスロミにやつつの支援がある限り、何をやつても効きめがない」

「クラブのボーイ長と話してきたのですが」とパ・セイソは言った。「彼の言うところでは、エリスとウエストフィールドの二人は、今でもボクターがクラブの会員に選ばれるのを望んでいないそうです。今度の暴動事件が忘れられるとすぐまたあの二人はフロローリーと喧嘩を始めるのじゃないでしょうか」

「もちろん始めるだろう。彼らはいつても喧嘩をしている。だがその間にも我われは痛手をこうむるだろう。あの男が選ばれてもしたら。そんなことになれば、わしは狂い死にしてみよう。いや一つ打つ手が残っている。フロローリー自身を費わなければならぬんだ」

「フロローリーをですって。でも白人ですよ」

「いつこうに構わぬ。今まで何人もの白人を破壊させてきたんだ。いったんフロローリーの面目を失わせれば、ボクターはお仕舞いだ。面目など台無しにしてやる。二度とクラブに顔を出せないように恥をかかせてやるんだ」

「ですが白人ですよ。どういう点を非難するんです。白人に対する非難など誰が信じますか」

「策略がないんだな、コ・パ・セイソ。白人の非難などはしないよ。現行犯でつかまえなけりや。犯行の最中に公然と恥をかかせるんだ。どう着手すべきかは今に考え出す。考えて

いる間は静かにしていてくれ」

話が中断した。ウ・ポ・チンは小さな手を背中中で組み合わせ、それを高原のような尻の上に置いて、外の雨を見つめていた。他の三人はペラソダの端から彼を見ていたが、白人を襲うという話におびえたのか、自分たちの手に負えない状況に対処する妙案が披露されるのを待ち構えていた。その光景は、三角帽を手に握りしめた司令官たちを待機させたまま地図を熱心に見つめているモスクワのナポリオンを描いたメソソニエ〔フランスの画家〕だったかの、かの有名な絵に似ていた。しかしもちろんウ・ポ・チンのほうがナポリオンより状況に対処する力があつた。

計画は二分ほど出来上がった。振り返つた大きな顔には極端な喜びがみなぎつていた。ウ・ポ・チンは踊りをやるうとしていた。ウ・ポ・チンが評したことがあつたが、それは間違いだ。ウ・ポ・チンの体格は踊り向きにはできていなかった。だがもしそうできていれば、この瞬間、彼は踊つたことであろう。彼はバ・セインを手招きして、二、三秒耳うちした。

「これはうまい手だろう」と彼は締めくくつた。思わず信じられないとでも言いたげな笑いが、バ・セインの顔にゆつくり広がつた。

「五〇ルピーもあれば、費用はすべてまかなえるはずだ」と笑いながら、ウ・ポ・チンがつけ足した。

詳しい計略が打ち明けられた。趣旨を了解すると、一同どつと笑い出した。めつたに笑わないバ・セインや、心底から不承知のワ・キンですらも堪らなくなつて吹き出した。本当に抗し難いほどよく出来た計略だつた。天才的と言えた。

雨はずつと降り続いていった。フロローリーが野営地に戻つた翌日は、三十八時間もぶつ続けに降つた。勢いが鈍つてイギリスの雨程度になることもあり、時には、今まで海洋全体が空に吸い上げられていたにちがいないと思われるほどのどしや降りになつたりした。屋根を叩く雨音は数時間後には気遣いじみてきた。雨間には太陽が相変わらず激しく照りつけ、泥にひびがはいり湯気が立つた。あせもが身体中に広がつた。雨季が始まると、甲虫カブトムシの群れがまゆから出てきた。かめ虫カメムシといういやな虫も発生した。これは信じがたいほどたくさん家にはいつてきて、食卓の上に撒らばり、食物を食えなくした。

ペロールとエリザベスは、雨がそんなに激しくない夕方方は、相変わらず乗馬に出かけていた。ペロールにとつてはどのような天候も似たものだったが、小馬が泥だらけになるのはいやだつた。ほぼ一週間が過ぎた。二人の仲は変わらなかつた。以前より近づきもしなければ遠ざかりもしなかつた。あると信じている結婚の申し込みはまだなかつた。それから驚くべきことが起つた。ペロールがチャウタダを去る予定だという話が、フグレガ一氏からクラブに流れた。憲兵はチャウタダに駐屯するが、ペロールの代わりに別の將校が来るということだつた。それがいつになるかは誰もはつきりとは知らなかつた。エリザベスは恐ろしく不安だつた。あの人があつたことを去る予定なら、もうすぐはつきり言つてくれるはずだわ。私のほうから質問するわけにはいかない。本當に去る予定かどうかさえたずねられない。あの人から話してくれるのを待つしかないわ。だがペロールは何も言わなかつた。ある晩、何の予告もなく彼はクラブに現われなかつた。それから九二日間もエリザベスは彼の姿を全然見かけなかつた。

恐ろしいことだつたが、なんともしようがなかつた。ペロールとエリザベスは、これまで何週間も一緒にいながら、どこかまつたくの他人同士みたいだつた。彼は他のすべての人びとから超然としていた。ラツカーズステイン邸にはいつたことさえなかつた。宿舎で彼を捜し出したり、彼に手紙を出せる程度にも彼のことを知らなかつた。広場での朝の闘兵にも二度と姿を現わさなくなつた。彼自身ももう一度姿を現わすまで待つよりはかなかつた。そして現われた時結婚の申し込みをしてくれるだろうか。きっとしてくれるにちがいない。エリザベスも叔母も（公然と口にしたことはなかつたが）、申し込んでくれるはずだという確信をひそかに抱いていた。エリザベスは苦しい希望を胸に彼の再会を心待ちにしていた。どうか神さま、あの人が出発するまでに少なくともまだ一週間はありますように。もう四回、三回、いえ二回でもあの人と乗馬に出かければ、万事うまくいきます。神さま、あの人はずつと自分のもとに戻つてきますように！

たださようならを言うために戻つてくるなどは考えられなかつた。二人の女は毎晩クラブに出かけ、夜遅くまでそこにすわつて、素知らぬふりでペロールの足音が外でしなやかと聞き耳を立てていた。しかし彼は現われなかつた。事態を見抜いているエリスは、エリザベスを観察して意地悪く楽しんでた。何より悪いことに、ラツカーズステイン氏が絶えず彼女を悩ました。彼はまつたく向こう見ずになつていた。召使の目に触れそうどころでも彼女を待ち伏せ、つかまえると、つかまつたり抱きしめたりして、いやらしく付きまとい

た。唯一の防衛法は、叔母さんに言いつけますとおどすことだった。幸いにも彼はぼけが回っていて、彼女がそんなことを実行する勇気がないことに気付かなかつた。

三日目の朝、エリザベスと叔母はなんとか激しい風雨に運わらずにクラブに到着した。二、三分ほど休憩室で休んでいると、廊下で足を踏みならして靴の水を切っている音が聞こえた。二人は、ペロールさんかもしれない、と思つて胸が騒いだ。ほどなく一人の若者が長いレインコートのボタンをはずしながら、休憩室にはいつてきた。二十五歳ぐらいの頑丈で陽気で鈍そうな青年で、血色のよい豊かなほおとバター色の髪をしており、ひたいは高いと言つていいくらい狭く、あとで分かったことだが、耳をつんざくような笑いの持ち主だった。

ラッカーズ夫人は聞きとれないような声で何か言つた。失望のあまりつい出してしまったのだ。しかしながらこの青年は、会つた瞬間から誰にでもなれなれしく話しかけられる人間らしく、すぐ彼女らに快活に声をかけた。

「やあやあ、星の王子さまの登場です。お邪魔つてんじゃないでしょうか。ご家族の集まりかなんかにしやしやり出たつてな具合じゃ」

「いいえ、少しも」とラッカーズ夫人は驚きながらも答えた。

「お分かりでしょう。クラブにちよつと寄つて様子でも見て、ついでに地元銘柄のウイスキーに慣れておこうと思つてね。実は昨夜ここに着いたばかりなんですよ」

「あなたはここに配属されたんですか」と不可解に思いながらラッカーズ夫人は聞いた。新参者を予想してはなかつたのである。

「ええ、そう。こちらこそよろしくつてところです」

「でもお聞きしてませんわ……あつ、そうだわ。あなたは森林局から来られたのでしょうか、お気の毒なワックスウェルさんの代わりに」

「えつ、森林局？ ご気遣い無用。新任の憲兵ですよ」

「新任の……何ですつて？」

「憲兵です。ペロール君からの引き継ぎですよ。彼は連隊に戻れとの命令を受け、あわてふためいて立ち去りました。万事とり散らかしたまま、あとはよろしくとね」

この粗野な憲兵ですら、エリザベスが突然青ざめたのに気づいた。彼女はまったく口が利けなかつた。数秒してやつとラッカーズ夫人が大声で言った。

「ペロールさんが……行かれるんですつて。きつとまだでしょう？」

「行かれる？ もう行つてしまいましたよ」

「行つてしまった？」

「実は、半時間後に汽車が出発する予定です。もう駅に着く頃でしょう。作業班を手助けに送りました。小馬を汽車に乗せたりしなければなりませんから」

説明はまだ続いたのだが、エリザベスも叔母も全然聞いていなかつた。とにかく憲兵にさようなさえ言わず、二人は十五秒も経たぬうちに正面の踏み段に出ている。ラッカーズ夫人はかん高い声でポーイ長を呼んだ。

「ポーイ長、すぐに人力車を正面に回しなさい。駅へ行きます。駅へ」彼女は車夫が現われると付け加えた。人力車に乗り込むと、傘の石突きで車夫の背中をつついて、出発の合図をした。

エリザベスはレインコートを着ており、ラッカーズ夫人は人力車の中で傘にかくれて小さくなつていたが、レインコートも傘もたいして雨を防ぐ役には立たなかつた。雨があまり激しく叩きつけてくるので、エリザベスのドレスは門も出ないうちにずぶ濡れになり、人力車は風を受けて倒れそうになつた。車夫は頭を下げ、うめきながら風の中に突っ込んでいった。エリザベスは苦しんでいた。あの話は間違いだわ、絶対に間違いだわ。あの人は私に手紙を寄越したが、それが途中でどこかに行つてしまったのだ。そうだからいいない。さようならも言わずに私のものを去るつもりだなんて考えられない。たとえそうであっても、希望は捨てないわ。最後にプラットフォームで私を見れば、見捨てるほど冷酷にはなれないでしょう。

人力車が駅に近づくと、彼女は人力車の後部に倒れ、血色を出すためほおをつねつた。インド人の憲兵分隊が足を引きずりながら急いで通り過ぎた。ぐしよ濡れの薄い制服はぼろ



同然で、皆で荷車を押していた。ペロールの作業班だわ。ありがたいことにまだ十五分ある。汽車はまだ十五分は出発しないはずよ。少なくともあの人に会う最後の機会に恵まれ、本当にやれやれだわ。

プラットフォームに到着した時、ちやうど汽車が耳をつんざくような音をたて、何度も蒸気を吹き出して、次第に速度を増しながら離れていくところだった。色黒で小太りの駅長が線路に立って悲しげに汽車を見送り、片手で防水カバー付きヘルメット帽を押さえていた。もう一方の手では、彼にお辞儀をして何か見てもらおうと必死になっているインド二人を受け流していた。ラツカーステイーン夫人は人力車から雨の中に身を乗り出し、動揺して叫んだ。

「駅長！」

「はい、奥さま」

「あの列車は何ですかの？」

「ワンダレ一行きの列車です」

「ワンダレ一行き？ そんなはずないでしょう」

「でもそうなんです、奥さま。間違いな／＼ワンダレ一行きです」彼はヘルメット帽を脱いで、二人の方にやって来た。

「でもペロールさんは——憲兵はまさか乗ってないでしょうね」

「いいえ、奥さま、あの方は出発されました」彼は雨と蒸気の中へ急速に消えていく汽車の方に手を振った。

「でもまだ発車の時刻じゃないでしょう」

「ええ、奥さま、まだ一〇分あります」

「じや、なぜ出発したんです」

駅長は弁解がましくヘルメット帽を左右に振った。黒い太った顔はまったく苦しげだった。

「分かってます、奥さま、分かってますよ。まったく前例のないことです。実は、若い憲兵が発車を強く命令したので。準備は完了した、これ以上待たされるのはご免だ、と主張しました。規則違反だと指摘しますと、構わぬと彼が言い、私がいさめ、彼が言い張る。そして要するに……」

彼は別の身ぶりをした。その意味は、ペロールは列車を十分も早く発車させるような問題でも、我意を通すタイプの人間だということだった。語が途切れた。二人のインド人は好機到来とばかり、突然泣きながら飛び出し、ラツカーステイーン夫人に見てもらおうと汚い手帳を差し出した。

「この人たち、何の用ですか」とラツカーステイーン夫人は困って叫んだ。

「飼料屋です。奥さま。ペロール中尉が彼らに大きな借金を残していったと言ってます。一人は干し草代、もう一人は穀物代だそうです。私の知ったことじやありませんよ」

遠くから汽笛が聞こえてきた。肩越しに様子をうかがいながら前進する背中の黒い虫のように、列車はカーブを曲がって見えなくなつた。濡れた白スボンが佻しく駅長の足もとではためいていた。エリザベスから逃れるために列車を定刻前に出発させたのか、飼料屋から逃れるためかは興味ある問題であるが、答えは出せなかつた。

二人の女は道を引き返し、それから時どき強風で教歩も吹き戻されながら必死に丘を登つた。ペラソダに着いた頃には完全に息切れしていた。召使たちが水のしたたるレイコントを受け取ると、エリザベスは頭を振って髪にたまった水を払つた。ラツカーステイーン夫人が、駅を出てから初めて沈黙を破つた。

「本当に、これほど不作法で、いやらしいことつてありません……」

エリザベスは、雨風に叩かれたのに、青白く、さえない顔をしていた。けれども胸の思いを漏らそうとしなかつた。

「別れのあいさつぐらいしていてもよかつたのに」とエリザベスは冷たく言った。

「ねえ、忘れちゃ駄目よ、これであんな男とはさつぱり手が切れたわけよ。最初から私が言っていたように、まったくいやな男なんだから」

入浴後、さっぱりした服に着替え、朝食のテーブルに付いた項には気分がよくなったのか、夫人は口を開いた。

「ところで今日は何曜日？」

「土曜日です」

「まあ、土曜日ね。じゃ牧師さんが今晚お着きになるわ。あすの礼拝には、何人ぐらい集まるかしら。もちろん皆集まるでしょうね。本当にすばらしいわ。フローリーさんも来られるでしょう。確かあす密林から帰ってくるとご本人がおっしゃっていたわ」彼女は愛情を込めた口調で付け加えた。「フローリーさん自身が」

夕方の六時近くになっていった。教会の六フイートはある錫製の尖塔ナブにある鐘は、ワッツ―老人が内部でロープを引くと、カーンカーンと間の抜けた音を出した。夕日が遠くの夕立で風折して、美しくぎらぎらと広場を照らした。日中、雨が降ったが、もうひと雨きそうな雲行きだった。十五人ほどいるチャウタダのキリスト教徒たちが、夕べの礼拝のため教会前に集まってきた。

フロローリーはすでに来ていた。ワグレカー氏は灰色のヘルメット帽などを着用し、フランス氏とサミュエル氏は洗濯したての綿布の服を着てはしやぎ回っていた。六週間ごとに行なわれる礼拝式が彼らの生活では大きな社会的行事だったからである。牧師は髪が灰色で、端正だが色の悪い顔に鼻眼鏡をかけ、背が高く、ワグレカー邸で整えたカソック〔黒の長い上着〕にサーブリス〔カソックの上に着る短い白衣〕を着て、教会の踏み段に立っていた。牧師は、お辞儀をしようと近寄ってきたほおがばら色のカレン族のキリスト教徒四人に、やさしいが少し頼りない態度でほほえんでいた。どちらも相手の言葉が全然分からなかったからである。

東洋人のキリスト教徒がもう一人いた。どの種族か分からない、悲しげな色黒のインド人で、懐み深くうしろの方にいた。いつも礼拝式には出席していたが、彼が誰で、なぜキリスト教徒であるのかは誰も知らなかった。明らかに、幼い頃宣教師に捕えられ洗礼を施されたようだ。成人してから改宗させられたインド人は大抵もとに戻ってしまうからである。ライラック色の服を着たエリザベスが叔父叔母に伴われて丘を下ってくる姿がフロローリーの目にはいった。二人はその朝クラブで会っていた。他の者がはいつてくるまでに一分ほどしかなかったので、彼は一つだけ質問した。

「ペロールは行ってしまうって……帰らないんですか？」

「ええ」

それ以上言う必要はなかった。彼女の腕をとって引き寄せると、進んで喜びの色ささ浮かべながら寄ってきた。それも彼の醜い顔を無慈悲に照らす明るい日光の中で。一瞬、彼女は子供のようすがりついた。まるで彼が何かから救ってやったか、身を守ってやったような感じだった。キスをしようとして彼女の顔をもち上げると、彼女が泣いているので驚いた。その場では、話をする時間、「結婚してくれませんか」と言うだけの時間さえなかった。そんなことはどうでもよい。礼拝のあと、たっぷり時間があるだろう。おそろく牧師がこの次（たった六週間後）に訪れる際に二人は結婚することになるのだ。

エリスとウエストフイールドと新任の憲兵が、クラブの方から近づいてきた。礼拝が辛抱できるようにと、酒を二、三杯ひっかけたのだ。ワックスウエルの代わりに派遣されてきた森林官がそのあとに付いていた。浅黄色で背の高い男で耳の前に残っているほおひげのような髪以外完全に禿げていた。エリザベスが着いた時、フロローリーは「今晩は」と言う暇しかなかった。皆がそろったのでワッツ―は鐘を鳴らすのをやめた。牧師が、胸にヘルメット帽を押し当てたワグレカー氏やラックスター一家、それに現地人のキリスト教徒たちを従えて教会にはいった。酔っぱらったエリスがフロローリーのひびをつねり、耳にささやきかけた。

「さあ一列にならべ。泣きべそ行進の時間だ。速足行進ハヤアシ！」

エリスと憲兵は腕を組み、ダンスのステップで一歩あとからはいって行った。憲兵の中にはいるまで、プアエの踊り子をまねて大きな尻を振っていた。フロローリーは、この二人と同じ座席に腰かけた。エリザベスの向かい側で右の方だった。思いついて彼女に痣を向けてすわったのは、これが初めてだった。「目を閉じて二十五数えろ」とエリスは腰かける時にささやき、憲兵がぐすくす笑った。ラックスター夫人は、机ほどの大きさの足踏みオルガンの前にすわっていた。ワッツ―は入口近くで、揺りうちわを引き始めた。それはヨーロッパ人がすわっている正面座席だけを扇いでいた。フロローリーが側席に鼻を押しつけながらやって来て、フロローリーの座席を見つげ、その下にすわった。礼拝が始まった。

フロローリーは時どき思いついたように礼拝に注意を払うだけだった。立ちたり、ひざまずいたり、果てしない祈りにアームメントつぶやき、エリスが彼のひびをつついて賛美歌集に

隠れて不敬な言葉をささやきかけてくることなど、かすかに気づいていた。けれども彼は幸福のあまり考えを集中できなかつた。地下界〔地獄のこと〕がエウリディケ〔ギリシヤ神話、オルフェウスの妻〕をまさに放免せんとしているのだ。黄色い光が閃いたドアから流れ込み、絹の上着を着たワグレガー氏の広い背中が金糸織りの布のように輝いた。

エリザベスが狭い側廊の向こう側、フロローリーの間近にいたので、服のサラサラという音が聞こえ、その身体の温もりが膚に感じられるように思えた。しかし他の者に気づかれはしないかと思つて、一度もそちらを見なかつた。オルガンは、ラッカーステイン夫人が擲れていないほうのペダルを踏んで十分な空気を必死に送り込もうとすると、気管支炎にかつたように震えた。歌声のほうは奇妙ですぎずして騒がしかつた。ワグレガー氏は懸命にどら声を張り上げ、他のヨーロッパ人は、はにかんだようにぶつぶつと歌い、うしろの方からは言葉にならない牛の鳴き声みたいなものが聞こえてきた。これはカレン族の声で、このキリスト教徒たちは賛美歌の節は知つてはいるが、文句は知らなかつたのである。会衆はまだひざまずこうとした。「畜生、また膝の訓練か」とエリスがささやいた。あたりが暗くなり、屋根に雨がパラパラと降つてきた。外の木々がざわめいた。黄色い枯れ葉がたたくさん窓辺を舞つていった。フロローリーは指のすき間からそれを見ていた。二十年前、冬の日曜日に、本国の教区教会の座席から、ちようどこのように枯れ葉が吹き飛ばされて鉛色の空にひらひら舞うのを見たものだつた。それ以後の幾多の汚れた歲月など自分とは無縁のものだつたかのように、もう一度人生をやり直すことが今ならできないのだろうか。

指の間から、わきのエリザベスをちらつと見た。彼女は頭を垂れてひざまずき、若わかしいまだら模様の両手に顔を隠していた。結婚すれば、異国ながら思いやりのあるこの土地で、二人はどんなに楽しく暮せることだろう。野営地で仕事から疲れて帰つてくる自分をエリザベスが出迎え、コ・ヌラがビールを持ってテントから急ぎ足で出てくる光景を想像した。一端に森林にはいり、サイチヨウが菩提樹にとまつて名も知らぬ花をついばんでるのを見たり、寒い季節には霧の中を鳴や小鳴を追つて沼地の多い放牧地を歩いていく姿を想像した。彼女が作り変えてくれる家を想像した。客間にはラングーンから取り寄せた新しい家具を並べ、テーブルにはばらのつぼみのようなピンクのバルサムモミの鉢植えを置き、本や水彩画や黒いピアノを備え、もはやだらしなない独り暮らしの感じがなくなつていく。そうだ、ピアノはぜひ必要だ。ピアノが頭から離れようとしなかつた。自分が音楽に縁のない人間だからだろうか。ピアノは安定した文明生活の象徴であるように思えた。過去十年のいかげんな生活、乱痴気騒ぎ、無数の嘘、放浪と孤独の苦痛、娼婦、金貸し、『まことの紳士』との付き合いなどから永遠に解放されるだろう。

牧師が説教壇にしている小さな木の朗読台に歩み寄り、説教集のひもをとき、せきばらいをし聖句を告げた。「父と子と聖霊の御名において、アーメン」  
「畜生、短かくやれ」とエリスがつぶやいた。

フロローリーは何分経つたのか分からなかつた。説教がのどかに左の耳から右の耳へ抜けていった。不明瞭なつぶやき声など聞いていなかつた。相変わらず、結婚したら、結婚したら、と考へていた。

おや、何事だろう。

牧師が言葉の途中で急にだまり込み、はずした鼻眼鏡を入口にいる誰かに向かつて当惑気味に振りかざしていた。恐ろしく耳ざわりな金切り声が出た。

「パイ・サン ペー・ライ！ パイ・サン ペー・ライ！」  
皆が座席から立ち上がつて、振り返つた。

マ・ラ・メーだつた。振り返ると、彼女は教会に踏み込み、マツツー老人を激しく押しつけ、こぶしをフロローリーに向けて振り回した。

「パイ・サン ペー・ライ！ パイ・サン ペー・ライ！ そう、その男、フロローリーのことよ。（彼女はポーリーと発音した）前にすわつてゐる黒髪の男よ。こつちを向いてよ、この卑怯者。約束の金はどうしたのよつ」

彼女は狂つたように叫んでいた。人びとはびつくりして身動きも口を利くこともできず、ぼかんと彼女を見ていた。女の顔はおしろいで灰色になり、ペとついた髪の毛は垂れ下がりに、ロンジーは裾がぼろぼろだつた。市場でいきいき鳴いてゐる豚みただつた。フロローリーは腹の中が凍りついたやうになつた。大変だ。この女が自分の愛人だつたのだというところが皆に、そしてエリザベスにもきつとばれてしまう。しかも皆が思い違ひをしてくれる可能性はみじんもない。彼女は何度も高く彼の名前を叫んだ。フロローリーが耳なれた声を聞

いて座席の下から這い出し、通路を走ってマ・ラ・メーのそばに行き、尻尾を振った。この恥知らずな女はフロローリーにされた仕打ちを詳しく大声でふれ回った。

「白人の皆さん、見て下さい。女の人たちも見て下さい。あの男が私を駄目にしてしまったんです。このボロを着せておきながら、あいつはあそこですわってこちらを見ないふりしている。嘘つき。卑怯者。あいつが私をのらふために門前で舐えさせようとしたのよ。ああ、でも私は恥をかかせてやる。振り返って私を見てよ。あんたが数え切れなくらいキスをしたこの身体を見てよ、さあ、見て」

彼女は服を引き裂きにかかった。卑しい生まれのビルマ女によって加えられる最後の侮辱だった。ラツカーステイン夫人が榮作的に身体を動かしたので、オルガンがまきまき鳴った。人びとはようやく我に返って、動き出した。何か言葉にもならぬことをぶつぶつぶやいていた牧師が、ようやく高い声で言った。「その女をつまみ出せ」フロローリーは真つ青だった。最初の瞬間が過ぎると入口から顔をそむけ、何でも無い風を装うと歯を食いしばっていた。しかしまったく無駄だった。

顔は骸骨みたいに黄色かった。汗がひたいで光った。フランスとサミュエルは生まれ初めて人の役に立つことをしようと、突然座席から飛び出し、マ・ラ・メーの腕をつかみ、金切り声をあげている女を外に放り出した。

彼女が引きずり出されて声が聞こえなくなると、教会は静まりかえった。今の出来事があまりにすさまじく見苦しかったので、誰もが度を失っていた。エリスでさえうんざりしていた。フロローリーは口を利くことも身動きすることもできず、じつと祭壇を見つめながらすわっていた。顔はこわばり、血の気がなく、痣は青ペンキのように浮き上がっていた。エリザベスは通路越しに彼をちらつと眺めたが、いやな気持ちにおそわれて、身体の具合まで悪くなりそうだった。マ・ラ・メーが言ったことは一言も分らないが、今の出来事の意味はきわめてはっきりしている。彼があの灰色の顔の気遣い女を困っていたと考えただけで、本当にぞっとした。だがそれより、いや何より悪いのは、この瞬間に見せた彼の醜さであった。その顔を見て彼女は肝をつぶした。真つ青で硬直し、老けこんで骸骨みたいに見えた。痣の部分だけが生きていた。今はこの痣ゆえに彼を憎んだ。その痣がどんなに不名誉で許しがないものであるか、彼女はこの瞬間まで知らなかったのである。

鰐のようにウ・ポ・チンは一番の弱点を衝いたのだ。言うまでもなく、この場面はウ・ポ・チンが仕組んだものだった。例によって機会をうかがい、マ・ラ・メーに彼女の役割を相当念入りに教え込んだのである。牧師はまもなく説教を終えた。すぐさまフロローリーは誰にも顔をあわさずに急いで外に出た。運よくあたりは暗くなりかけていた。教会から五〇ヤードのところで立ち止まり、人びとが連れだつてクラブに向かうのを見ていた。皆急いでいるようだ。当然だろう。今夜のクラブでは格好な話題があるのだ。フロローリーが連日でもらおうと足もとへ仰向けに転がって来た。「消え失せろ、こん畜生！」と言って彼は犬を蹴とばした。

エリザベスは教会の前に立ち止まっていた。運よくマダレガー氏が彼女を牧師に紹介しているらしかった。すぐ二人の男は今夜牧師が泊ることになっているマダレガー邸の方に歩き出した。エリザベスは二人の三〇ヤードほどあとから付いて行った。フロローリーは彼女を追いかけ、クラブの手前でやつと追いついた。

「エリザベス」

振り向いて彼だと分かったとたんに彼女の顔面は蒼白になり、口も利かずに急いで立ち去りそうな気配を示した。けれども彼は話したいあまり、その手首をつかんだ。

「エリザベス、話が、お話ししなければならぬことがあります」

「離して下さい」

二人は争い始めたが急にやめた。教会を出たカレン族が二人、五〇ヤード離れた薄暗がりから非常におもしろそうに見つめていたのである。フロローリーは声を低くして再び言った。

「エリザベス、このようにお止めする権利などないのは分かっています。でもお話ししなければならぬのです。お願いです、聞いて下さい。どうか逃げないで下さい」

「何をなさるんです。なぜ腕をつかむんです。すぐ離して下さい」

「離します、この通り。でもどうか聞いて下さい。これだけは答えて下さい。あんなことが起こりましたが、許してもらえますか」

「許すですって？ 許すとはどういうことですか？」

「私は面目を失いました。あんな恥ずかしいことはありません。ただ、ある意味では、私の責任ではありません。冷静になればお分かりになります。どうでしょうか、もちろん今じゃありません、あんなひどいことがあったんですから。でもあとになって、あの出来事を忘れていただけでしょうか」

「何をおっしゃっているのか全然分かりません。忘れるですって？ あんなこと、私と何の関係があるのです？ いやなこととは思いましたが、私には無関係です。なぜこんなことをお聞きになるのか全然分かりません」

この返事で九分通り彼は絶望した。彼女の口調や言葉遣いさえも、以前二人がいきかいた時と変わらなかつた。今もまた同じ手だつた。最後まで聞かず、はぐらかして逃げようとしている。自分に対し何も要求する権利はないのだというふりをして、彼をねつけようとしているのだ。

「エリザベス、どうか答えて下さい。ごまかさないで下さい。これは重大なことなんです。今すぐふたたび受け入れてくださるとは思っています。私がこのように皆の前で恥をかいたのですから、無理でしょう。でも、とにかく事実上、私と結婚の約束をしてくださったのですし……」

「何ですって！ 結婚の約束をしたですって？ いつそんな約束をしました？」

「言葉ではありません。それくらい分かっています。でも二人の間では了解済みのことでした」

「了解済みじゃありません。本当に恐ろしい態度です。もうクラブに参ります。さようなら」

「エリザベス、ねえエリザベス、聞いて下さい。話も聞かないで非難するのは不当です。私がやっていたことはこれまでもご存知だつたし、お会いしてから私の生活態度が変わつたこともご存知でした。今夜のことは偶然にすぎません。あのいまましい女は率直なところ、かつて私の……その……」

「知りません、そんなこと、聞こうとも思いません。もう行きますわ」

彼はまた彼女の首をとり、今度はしつかりつかんでいた。幸いカレンは姿を消していた。

「いや、話は聞いてもらいます。ことをあいまにしておくくらいなら、あなたを心から怒らせたほうがましです。何週間も、何ヶ月も一度だつてはつきりとお話できませんでした。あなたはどれだけ私を苦しめているか知らないし、気にもかけていないようです。だが今度は答えてもらいます」

手首をつかまれて、彼女はもがいた。彼女は驚くほど力が強かつた。顔には今まで見たこともないほど激しい怒りを浮かべていた。手首が自由であつたら彼を殴りつけたであろうと思うほど、彼を憎んでいた。

「放してっ、人でなし。放してよ」

「ああ、本当に困つた。こんなに争うなんて。でもこうする以外に、何ができると言うんです？ 話さえ聞かずに行つてもらうわけにいきません。エリザベス、絶対に話は聞かせます」

「いやっ。そんな話は結構です。質問する権利などあるんですか。離して」

「どうか許して下さい。これだけは聞かせて下さい。今じゃなく、あとになってこのいまわしい出来事が忘れられたら……結婚してくれますか」

「いや、絶対いやです」

「そんなこと言わないで下さい。それを最後通告にしないで。今はいやだとおっしゃるのなら仕方ありません……でも一ヶ月、一年、いや五年経てば……」

「いやと言つたでしょう。なぜそんなにしつこくしなければならんです？」

「エリザベス、聞いて下さい。あなたが私にとってどれほど大切な人であるかを打ち明けようと幾度も努めました。ああ、そんなことを言つても無駄です。でも、どうか理解するよう努めて下さい。この国での生活について少しお話ししたことがありましたね。ぞつとする死んだような生活です。腐敗、孤独、それに自己憐憫とでも言いますか。それらがどのような意味か、あなたが私をそこから救い出せる唯一の人だということを分かつて下さい」

「離してくれませんか。なぜこんなに恐ろしく騒がなければならんですの」

「愛していただけますし上げても何とも思いませんか。私があなたに何を望んでいるか、お分かりになったことがないでしょう。もしお望みなら、結婚してもあなたには指一本触れないことを誓います。一緒にいてくれさえすれば、そんなことどうでもいいのです。でも私は独りぼっちでは……いつも独りぼっちでは生きていけません。許してやろうという気持ちにはなりませんか」

「絶対、なりません。あなたが地上最後の男性であっても、あなたとは結婚いたしません。掃除人と結婚したほうがましです」

彼女は泣き出していった。彼には、今の言葉が彼女の本音だということが分かった。涙が彼の目に浮かんだ。彼はまた言った。

「これが最後です。あなたを愛している人間がこの世に一人いるということが、どうでもよいことでは決まらぬのだということを感じておいて下さい。あなたは、私より金持の、若い、しかもあらゆる点ですぐれている男性に出会うでしょうが、こんなにもあなたを愛している男には決して出会わないだろうということをお忘れ下さい。私は金持ではないが、少なくともあなたのために家庭を作れます。文明的で上品な暮らし方を——」

「もう十分お話ししたんじゃないやありませんか？」と彼女は少し落ち着いて言った。「誰も来ないうちにお離して下さい」

彼はつかんでいた手首をゆるめた。彼女を失った。それは間違いない。想像していた二人の家庭を苦しむほどはつきりと再び思い浮かべた。庭園を想像した。小径では、エリザベスが肩ぐらいに伸びた硫黄色の夾竹桃のそばで、ネロと鳩に餌をやっていた。応接間には水彩画を掛け、香油を入れた磁器の鉢がテーブルに影を落とし、本棚と黒いピアノが並び……。信じ難い神秘的なピアノはあのくだらぬ偶発事件が破壊したもののすべての象徴だった。

「ピアノは備えるべきです」と彼はやけに言った。

「ピアノなどひきません」

彼は彼女を離れた。これ以上続けても無駄だった。離してもらったと勝手に彼女は一目散に逃げ出し、クラヴの庭園に文字通り駆け込んだ。彼の存在はそれほど憎悪すべきものだった。木立の中で彼女は立ち止まり、眼鏡をはずし涙の跡を消そうとした。ああ、あの人でなし。本当に手首が痛かったわ。なんとも言いようのないひどい人。教会で見た恐ろしい痣が光っている黄色い顔を見ると、あんな男は死ねばよいと思つた。彼がやつたことでそつとしているのではない。いくらいまわしい行爲をしても許せたであろう。だがあの恥ずかしくみつともない出来事に出くわし、その時彼が見せた悪魔のように醜い顔を見ては許すなどまったく不可能だった。ついに痣のため彼は破壊されたのだ。

フロロリーを拒絶したと聞けば、叔母さんは怒るだろう。叔父さんの足つねりも予想されるし、双方から攻められるとなると、ここでの生活は続けられない。結局は結婚せずに本国に帰らねばならなくなる。ゴキブリだつて屁のカツパよ。あんな男と結婚するくらいなら、独身だろうと骨折り仕事だろうと構うものです。あんな恥さらしな男に屈する気は毛頭ないわ。それくらいなら死んだほうがはるかにましよ。一時間前には、エリザベスの胸に欲得ずくの考えがあつたけれども、今は忘れてしまつていった。ペロールにもてあそばされたことや、フロロリーと結婚したら面子を保てるだろうと考えたことさえ覚えていなかった。分かつていることといたら、彼が恥をかき、一人前の男の値打ちがなく、癩病らいびょう患者や狂人に劣らずおぞましい存在だということだけだった。本能は理性や私欲よりも根強く、呼吸を抑えられないように、彼への嫌悪感を抑えることは不可能だった。

フロロリーは走りこそしなかつたが、できるだけ早足で丘を登つた。なすべきことは早くやつてしまわなければならない。大分暗くなつてきた。未だに事態の重大さが分からぬいまわしいフロロリーが、蹴とばされたことを責めるように哀れつぽく鳴きながらすぐあとを早足で追つてきた。小径にさしかかると、風がバナナの木の間を吹き抜け、ぼろぼろになつている葉をざわつかせ、しめつた匂いを運んできた。また雨が来そうだった。コ・ヌラは食卓を用意し、石油ランプに当たつて死んだ甲虫を取り除いていった。彼はまだ教会での出来事を耳にしていないうだった。

「旦那さま、夕食の用意ができています。召し上がりますか」

「いや、まだいい。そのランプを貸してくれ」

フロロリーはランプを取つて寝室にはいり、ドアを開けた。ほこりと煙草の煙が混ざつて、よどんだ悪臭が鼻をついた。白くちらちらするランプの明かりを受けて、白かびが生えた本や、壁にとまったやもりが見えた。いろんなことがあつたが、彼は昔から一人で暮らしてきたところ、以前のこの居場所へまた帰つてきたのだ。

もはやこのような場所には耐えられない。以前は耐えていた。緩和剤として、本、庭園、酒、仕事、娯婦あさり、狩猟、ボックスとの会話などがあつたから……。

ところが、もう耐えられない。エリザベスが現われてから、もはや失つたものと思つていた苦しみには耐える力や希望を抱く力がよみがえり、それまで浸つていた多少は気持のよい無気力は消え去つていた。今苦しめば、はるかに悪い結果を招くだろう。しばらく経てば誰か他の男が彼女と結婚するだろう。そのニュースを聞く瞬間がはつきり想像できた。「ラツカーズナイアの姪がどうとう結婚することになったんだそうだ。気の毒に、誰それが結婚の相手だよ。かわいそうになあ」という具合だ。それを聞いて顔をひきつらせながらも、興味がないように装つて、「へえ、本当かい。で、いつ?」と何気ない質問をする。やがて結婚の日が、初夜が近づいてくる。ああ耐えられない。卑猥だ。よく見すえろ。実に卑猥だ。ベッドの下から引き出したブリキの衣類ケースから自動ピストルを取り出し、弾倉に挿弾子をすべり込ませ、いつでも撃てるようにした。

コ・ヌラの名が遺言書に書き加えられた。フローのことが残つていた。テールにピストルを置いて外に出た。

フローは、召使たちがまきの火を残しておいた屋外炊事場の陰で、コ・ヌラの末の息子バ・ジョンと遊んでいた。フローは小さな歯をむき出し、咬むふりをしながら回りを飛びはねていた。一方、少年は燃えさしの明かりで腹のあたりをほてらせ、笑いながらも、半ばこわがつつてフローを軽く叩いていた。

「フロー、フロー、こつちへ来い」

フローは彼の声を聞くと、おとなしくやつて来たが、寢室の入口で急に立ち止まつてしまった。何かおかしいと悟つたらしい。少しあとじさりして、はいりたくなさそうにおずおずと彼を見つめていた。

「さあ、はいれ」

フローは尻尾を振つたが、動かなかつた。

「さあ来い、フロー、いい子だ、来い」

フローは突然、恐怖にかられ、衰れつぽく鳴き、尻尾を下げて尻込みした。「こつちへ来い、畜生め」と彼は叫んだ。首輪をつかんで部屋に放り込み、ドアを開め、ピストルを取りにテールの方に行つた。

「さあ、こつちへ来い。言われた通りにしろ」

フローはうずくまり、許しを求めるように鳴いた。それを聞くと彼は胸が痛んだ。「さあ、いい子だ。お前を傷つけたりしない。こつちへ来い」フローは這いつくばるような姿勢で足もとにのろのろ這つてきて、フローリーを見るのがこわいように首を垂れてくんくん鳴いた。一ヤードの距離のところに来た時、発砲し、フローの頭蓋骨をこなごなに撃ち砕いた。

撃ち砕かれたフローの脳みそは赤いピロードみたいだつた。自分もこのようになるのだろうか。それじゃ、頭ではなく心臓にしよう。召使たちが部屋から駆け出し大声で叫んでいるのが聞こえた。銃声を聞いたにちがいない。彼はあわてて上着を切り裂き、シャツにピストルの銃口を押しつけた。ゼラチンのように半透明の小さなやもりが、テールの端ぞいに白い蛾の方に忍び寄つていた。フローリーは親指で引き金を引いた。

コ・ヌラが部屋に飛び込んだ。一瞬、犬の死体しか見えなかつた。それから、主人の足がかかとを上に向けてベッドの向こう側から突き出ているのが目にはいった。彼が大声で、子供たちを部屋に入れるな、と叫んだので、彼らはみな金切り声をあげて入口からあとじさりした。コ・ヌラがフローリーの死体の背後にひざまずくと同時に、バ・ペがペランダを駆け抜けてきた。

「ピストル自殺ですか」

「そう思う。ご主人を仰向けにするんだ。ほら、ここを見る。インド人のボックスを呼びに行け。大急ぎで」

フローリーのシャツには、吸取紙を鉛筆で突いたくらい孔がはつきりあっていた。完全に死んでいた。さんざん苦心してコ・ヌラは死体をベッドに運んだ。他の召使たちがそれに触れるのを拒絶したからである。二十分ほどしてボックスが来た。フローリーが怪我をしたという大雑把な報告を聞いただけで、暴風雨の中を全速力で自転車を飛ばし丘を登つて



きた。花壇に自転車を投げ出し、ベランダから急いではいってきた。彼は息を切らしていた。それに眼鏡越しではものが見えないので、眼鏡をはずして近視眼でベッドを見た。「どうしたんです？ フローリーさん」と心配げに言った。「怪我はどこですか」さらに近づいてベッドの上に横たわっているものを見て、あらあらしく声をあげた。

「あっ、これはどうしたんだ。何があったんだ？」

「ピストル自殺されたんです」

ボクターはひざまずいてフローリーのシャツを引き裂き、胸に手をあてた。苦悩の色がボクターの顔に浮かんだ。死人の肩をつかみ、手荒さだけが生命をよみ返らせる決め手であるかのように揺すった。片腕がベッドからだらりと垂れ下がっていた。ボクターはそれをもとに戻し、それから死人の手を握った。突然、涙があふれ出た。コ・ヌラは褐色の顔をくしゃくしゃにしてベッドのすそに立っていた。ボクターは立ち上がってから一瞬自刺心を失い、寝台柱に寄りかかって背中をコ・ヌラに向け、奇妙な大声をあげて泣き始めた。太った肩が震えていた。まもなく気をとり直し、ふたたび振り向いた。

「どうしてこんなことになったんだね」

「銃声を二発聞きました。確かにご自分で撃ったのです。なぜだか分かりません」

「計画的だったとどうして分かるんだ。事故でないとどうして言えるんだ」

返事の代わりにコ・ヌラはだまってるフローリーの死体を指さした。ボクターはちよつと考え、やさしく熟練した手ぎわで死人をシートでくくるみ、足と頭の部分を結んだ。死ぬとすぐに痣は色あせ、灰色のしみくらくらいのかすかなものになっていた。

「犬はすぐ埋める。連発銃の掃除中に起こった事故だとラゲルガー氏に言っておこう。犬は必ず埋めておけ。お前の主人は私の友人だった。自殺したなどと墓石に書かせはしない」

牧師がチャウタダにいたのは幸運だった。牧師は翌日の晩、列車に乗る前に正式に埋葬式文を読み上げ、死者の徳を称える短い言葉をのべることができた。イギリス人は諱でも、死ぬと高潔だったと言ってもらえる。『事故死』というのが公式の見解だった（ボクター・ペラスロミが法医学の腕を十分に發揮して、状況的に見て事故死だと証明していた）。墓石にも正式にそう刻まれた。

もちろん諱もそんなことは信じなかった。フロリー一の眞の碑文は次の文句だったはずである。「フロリー一？ ああ、痣のある色黒の男か。やつは一九二六年、チャウタダでピストル自殺した。女が原因だったそうさ。馬鹿なやつだよ」しかしこの文句はめったに口にされない。ピルマで死んだイギリス人はすぐ忘れ去られるのである。エリザベスを除けば、この出来事に驚いた者はいなかっただろう。ピルマのヨーロッパ人からはかなりの自殺者が出るので、驚くに値しないのである。

フロリー一の死によって、いくつかの結果が生じた。第一の最も重要な結果は、医師ペラスロミが、自ら予期したように破滅したことである。それまで彼を救っていた、白人の友人がいるという唯一の栄光が消え去ったからである。他のヨーロッパ人とフロリー一の関係は確かによくはなかった。それでも彼が白人であることに変わりはなく、彼の友情がある種の威信をボクターに与えていた。だから彼が死ぬとボクターの破滅は確定的になったのである。ウ・ポ・チンはしかるべき時を待って、かつてないほど激しい攻撃を再びボクターに仕掛けた。彼の手にかかると、ボクターは極悪人だという認識がチャウタダにいるすべてのヨーロッパ人の頭に植え付けられるのに三ヶ月もかからなかった。非難が公然と浴びせられることはなかった。ウ・ポ・チンはこの点に最も気を配っていた。エリスでさえ、ボクターがどんな悪いことをしたのか戸惑ったことだろう。

それでも、ボクターが悪党だということは一般に同意された。少しづつ彼に対する一般の疑惑が『ショ・デ』というピルマ語に結晶していった。ペラスロミは彼なりに賢明な男だと言われていた。事実、彼は現地人のわりには実にすぐれた医者だった。しかし今では完全に『ショ・デ』だった。『ショ・デ』の大意は、『信頼できない』ということである。現地の役人が『ショ・デ』だという評判を立てられると、もう終わりだった。

あの恐ろしい合図と目くぼせが上層部のどこかで交わされた。ボクターは外科助手に格下げされ、ワンダレー総合病院に転任させられた。今もそこにいる。おそろく生涯そこに留まるだろう。ワンダレーはちよつといやな町である。ほこりつぽく耐え難いほど暑い。戸で始まる五つの土産物がこの町にあると言われている。すなわち仏塔、のら犬、豚、僧侶、娼婦だ。病院の日常業務は気が滅入る。住まいは病院のすぐ外にあるパンガロー風の狭い製パン所である。その狭い家を波形トタン板の扉が囲んでいる。彼は減収を補うために、夜は個人診療所を開設している。さらにインド人弁護士がよく行く二流のクラブに入会した。クラブが第一の自慢にしているのは、一人だけヨーロッパ人の会員がいることである。ワックダウガルというグラスゴー出身の電気技師で、酔っぱらいのかでイラロジ・フロツテイヤラ社を解雇され、自動車修理所で不安定ながら生計を立てている。ワックダウガルは愚かな田舎者で、ウイスキーと磁石発電機にしか関心がない。白人にも馬鹿がいることを絶対に信じないボクターは、ほとんど毎晩この男を教養ある会話なるものに誘い込もうとするが、結果は非常に不満足なものだった。

コ・スラはフロリー一の遺言書によって四〇〇ルピーを相続したので、家族と市場で簡易食堂を開いた。しかし店の中で絶えず喧嘩をしている女二人をなだめねばならないので、潰れてしまった。コ・スラとバ・ペは奉公に戻らざるを得なかった。コ・スラは熱達した召使だった。女を取り持ち、金貸しをあしらい、酔っぱらった主人をベッドに運び、翌朝、生玉子で気付け薬を作るなどの役に立つ技師のほかに、縫い物やつくり、銃への実弾の充填、馬の世話、背広のアイロンかけ、刻んだ葉と着色した米粒ですばらしく複雑な模様を作って食卓を飾るなどのができた。彼には月五〇ルピーは払う値打ちがあった。だが彼もバ・ペもフロリー一に任えている間に怠け癖がついてしまつて、職場を次つぎと首になつた。彼らは一文なしのひどい生活を一年味わつた。バ・シン少年は咳が昂じて、息の詰まるような暑い夜、ついにひどい咳で死んでしまった。

コ・スラは神経症で絶えずがみがみ言う妻をかかえたランゲーンの米の仲買人のところで、二番手の丁稚をしている。バ・ペも同じ家で水運びの下男として働き、月十六ルピーもらっている。ワ・ラ・メーはワンダレーの売春宿にいる。かつての美しい顔だちはほとんど消え失せ、客はたつたアアナしかおれず、時どき蹴ったり殴ったりする。フロリー一が生

きていたよき日々のごとを、彼女は誰よりも未練に思っていることだろう。当時、彼から引き出した金を貯えておくだけの知恵もなかったのである。

ウ・ポ・チンは一つだけを除いてすべての夢を実現した。ボクサーが面目を失ったあと、ウ・ポ・チンがクララの会員に選ばれるのは必然的であり、エリスの激しい抗議にもかかわらず彼は選出された。結局、彼を選んだことを他のヨーロッパ人たちは喜ぶようになった。クララにとっては我慢のできる新参者だったからである。彼はそうしばしばクララには現われず、愛想がよく、気前よく酒をおごり、ちよつとの間にすばらしいブリッジのやり手になった。二、三ヵ月後には、チャウタダから榮転していった。引退前の九一年間、彼は副総弁務官補佐を勤め、その年だけでも、二万ルーペの賄賂を受け取った。引退の一ヵ月後にラングエーンの謁見室に呼ばれ、インド政府によって勲章が授与された。

謁見室の光景は印象的だった。旗や花が吊された演壇の玉座に、総督がフロックコート姿でうしろに副官や秘書の二団を従えてすわっていた。ホール周囲には、長三角旗付きの槍を手に総督を護衛して、背が高くひげをはやした現地人騎兵たちが、きらきら光るろう細工のように立っていた。外からは時どき楽隊の演奏が鳴り響いてきた。見物人席にはビルマ婦人の白いエンジと桃色のスカーフが華やかに並んでいた。ホールの中央部には百人ほどの人が勲章の授与を待っていた。燃えるようなアンダー・パニーを着たビルマ人役人、金糸織りのターバンを巻いたインド人の役人、剣のさやをちやりと鳴らしている礼装のイギリス人将校、後頭部で灰色の髪をくり、肩から柄が銀製の小剣をつるした村長などだった。秘書が高く澄んだ声で賞の一覧表を読み上げていた。インド帝国勲爵士〔C・I・E〕から、浮き彫りを施した銀箱入りの叙勲証にいたるまでさまざまだった。すぐ後ろ・ポ・チンの番が来て、秘書が巻き物を読んだ。

「退官した副総弁務官補佐ウ・ポ・チンには、長年にわたる忠勤、とりわけチャウタダ地区の非常に危険な反乱の鎮圧に際して、時を得た援助をした功績に対し」という内容だった。

その時わざわざそのために連れてきた二人の部下が、ウ・ポ・チンを直立させた。彼は演壇の方によちよちと歩いて行き、お腹の許す限り低くお辞儀をして、とどこおりなく勲章を授かり、祝いの言葉を受けた。マ・キンら支持者たちは傍聴席から熱烈な拍手を送り、スカーフをひらひらさせた。

ウ・ポ・チンはこの世の人間にできる限りのことはしてしまった。来世の準備、要するにパゴダの建立を始める時が来たのである。だが不運にも彼の計画がまずずいたのは、まさにこの時だった。総督謁見のほんの三日後、罪滅ぼしのパゴダを建立する煉瓦を積みもせぬうちにウ・ポ・チンは卒中に襲われ、二度と口を利かないまま死んでしまったのである。運命から身を護るよるいはない。マ・キンはこの不慮の出来事で悲嘆にくれた。たとえ彼女がパゴダを建立しても、ウ・ポ・チンの役には立たないであろう。自分の行爲によつてしか功德は得られない。ウ・ポ・チンが今いるにちがいないところを思うと、彼女は胸がひどく痛む。火と闇だけで、蛇と魔神が住む、本当に恐ろしい地獄をさまよっているのだ。たとえこの最悪の事態を免れても、彼が抱いていたもう一つの恐怖が実現している。つまり鼠か蛙に交えられてこの世に戻ってきているかもしれない。おそろくこの瞬間にも、蛇が彼をむさぼり食っているのではないだろうか。

エリザベスについては、本人が予期していたより事態が好転した。ラツカーステイン夫人はフロリーアの死後、あらゆる気どりをきつぱりと捨て、この恐ろしい土地には男などいない、希望はただ一つ、ラングエーンかマイミヨー〔ビルマ中部の都市〕に行つて数ヵ月滞在することだけです、と公言した。だがそう簡単にラングエーンやマイミヨーにエリザベスを一人でやることはできなかつたし、二人一緒に行くことは、残されたラツカーステイン氏をアル中による震えによつて死に追いやることを宣告するようなものだった。何か月か経つて雨季は頂点に達した。エリザベスは文無しで未婚のまま本国に引き揚げる決心をした。ちよつどその時、マグリガー氏が彼女に求婚した。彼は長い間そのつもりでいた。実はフロリーアの死後、適当な時間が経過するのを待っていただけのことだった。

エリザベスは喜んで求婚を受け入れた。ちよつと年を取っていたが、副総弁務官という地位は見くびれなかつた。確かに彼はフロリーアよりはるかにすぐれた結婚相手だった。二人は本当に幸福だった。マグリガー氏はほとと親切な男だったが、結婚後は一層思いやりの深い好ましい人物になった。声は前ほど響かなくなり、朝の運動もやめてしまった。エリザベスは驚くほど早く成熟した。以前からあつた冷たい態度が目立つてきた。彼女はビルマ語を話さないが、召使たちに恐れられている。『文官一覽表』を十分頭になたき込んでおき、楽しいささやかな晩さん会を聞き、部下の妻たちの高慢さをたしなめるこつを心得ている。要するに、自然の女神が最初から彼女のために予定しておいた役割、立派な奥様の役割をめぐりに果たしているのである。(完)

イギリスの作家ジョージ・オーウェル〔本名、エリック・ブリア、一九〇三～五〇〕の名は二つの政治諷刺小説、即ち『動物農場』（一九四五）と『一九八四年』（一九四九）、およびスペイン内戦体験記『カタロニア讃歌』（一九三八）等の随筆や評論によってすでにわが国でもよく知られている。近年彼の評論および書簡の大半が邦訳されたこともあってオーウェルへの関心は一層高まってきた。

ここに訳出した『ビルマの日々』（一九三四）はオーウェルが初めて世に問うた野心的な本格小説である。この作品は一見したところは自伝小説である。彼は一九二一年にパパンリック・スクールの名門イートン校を卒業。翌年十九歳で当時イギリスの植民地だったビルマに渡り、一九二七年までの五年間をラングーンとビルマ南東部、サンウイン河河口の町モウルメイソヤ、その他五つの駐屯地で帝国警察の警官として過ごした。このビルマ体験が彼の人生における一大転機となる。

当時ビルマでは反帝国主義感情が高まっていた。ビルマは一八八五年に第三次対英戦争に破れて以来長らくイギリスの植民地であるインドのそのまた属州という二重の隷属状態に置かれていたが、第一次世界大戦後、インドからの分離要求を軸として民族運動が急速に盛り上がった。帝国警察の警官として赴任したオーウェルはこの風潮をもろに浴びたのである。いたる所で現地人の憎悪と冷笑に満ちた目に出会い実に不愉快だった、とりわけ黄色の法衣をまとった仏教僧は最悪で、どてっ腹に風穴をあけてやりたいくらいだった、と彼はのちに自伝風エッセイ『象を撃つ』（一九三六）の中で述懐している。このビルマ時代のいやな体験から生まれたのが『ビルマの日々』だったのである。

このことに関して、当時現地でオーウェルと交際があり、ラングーン大学の副総長を勤めたことのあるビルマ人モン・テイソ・アウンは、オーウェルが余りに若くしてビルマに来たのはビルマとイギリスの両国にとって不運だった、後年のオーウェルであれば違った『ビルマの日々』を書いたであろうに、と惜しんでいる〔ミリアム・グロス編『ジョージ・オーウェルの世界』一九七一〕。しかしながらこれは決して単純な自伝小説ではない。時代も舞台も主人公も現実のオーウェルの体験そのものではないのである。主人公フロローリーは第一次大戦前からビルマに住んでいるチーク材会社の社員であって、戦後やってきた警官ではない。舞台もビルマ奥地にある架空の町チャウタダというところになっている。したがって、もともと作家志望だったオーウェルが、小説という形式を借り、自らの体験も生かして、植民地における白人の実態を描こうとしたのがこの作品である、と言った方が当たっているだろう。

ところでこの作品はストーリー面だけから見れば、善玉フロローリーが悪玉ウ・ボ・チンの策略にはめられていくという単純な陰謀小説であるが、これを白人と現地人の関係についての一考察と見るならば、重要な指摘が数多く読みとれるであろう。事実この小説はどのように歴史的、社会的な角度から多くの人びとに読まれてきているのである。

彼がこの作品を書いた時には、明らかにE・M・フォースターの小説『インドへの道』（一九二四）が念頭にあったようである。どちらともイギリス人と植民地の現地人との困難な関係を扱った小説ではあるが、残念ながらオーウェルにはフォースターほどの円熟さは見られない。つまり作者の生の感情が未整理のまま残されているのである。『ビルマの日々』は結果的にはイギリス人のビルマ理解に悪影響を及ぼしたといわれている。ビルマ人もこの作品に対してよい印象を持たなかったようである。たとえば先に名をあげたモン・テイソ・アウンは数少ない現地でのオーウェル理解者の一人であるが、それでも次の二点を指摘している。まず、作中においてインド人医師ベラスラミやビルマ人役人ウ・ボ・チンはヨーロッパ人クラブの会員に選ばれることを大いに光栄なことだと感じているようであるが、当時のビルマにはそのような雰囲気などなかったと述べ、一例として彼は自分の父親をあげている。次に、作者はウ・ボ・チンを必要以上にあくどい人物に仕立てているが、これには一九二〇年代前半に法律の改革により登用された若いビルマ人役人や特別昇進した中堅幹部たちへの現地イギリス人の反感がからんでいるのではないかと、という点である。

後年オーウェルはイングラント北西部で不況下の炭鉱地区に取材したルポ『ウイガン波止場への道』（一九三七）の中で次のように言っている。帝国主義を憎悪するには、その一部分として自ら機能する機会を持たねばならない、そうすれば比較的穏健に見えるイギリスの植民地支配も結局のところ弁解の余地のない圧制であることが分かってくる、さらに被圧迫人権という角度から見れば、イギリスの失業者や貧しい労働者も植民地の人民と同列に置かれるのだ、と。そしてこの考えを発展させていけば、その延長線上に不屈の論争家と

しての後年のオーウエル像が次第に浮かびあがってくるのである。

ところで『ピルマの日々』は最初ニューヨークのハーパー社から出版された。イギリスの各出版社が、このような作品を出版すれば現地から各警報損罪で告訴されることを危惧して尻込みしたからである。翌年の一九三五年になってようやく本国のイギリスでも、ロンドン・ゴラント社から出版された。この事情からでも分かるように、一九三〇年代になってはまだ本国で植民地問題について率直な発言をするのはかなり勇気のいることだったのである。オーウエルが帝国の前哨地点の倫理的雰囲気や鮮やかに描き出す勇氣と技量を持ち合わせていたのは事実である。彼はフオースターほど自由主義的ではなかったが、インド生まれの英国作家キアリングほど保守主義者でもなかった。オーウエルにはほとんどもとフエピアソ協会の漸進的社会主义にひかれる傾向があった。ピルマ行きの年の二月に英国ウエスト・サセックスのダンスフォードという所でパートランド・ラッセルやキングズレイ・マーンソといったケンブリッジの学究たちが主催する小規模な社会主義者会議に彼が出席したという記述が、マーンソの日記に残されている。とはいえ学校を出たばかりで帝国警察の警視補として植民地に赴任した彼が小説の主人公フローリーのような錯綜した植民地認識を持ち得たとは思えない。帝国警察の幹部候補生としてピルマの駐屯地を次つぎと渡りあるくなかで彼自身が体験したり、見聞したことこの省察を上台として、一九二七年に帰国後パリやロンドンなどでの放浪生活の過程で『ピルマの日々』の主人公像が次第に練りあげられていったと考えるべきであろう。このような創作過程を考慮に入れず、主人公フローリーの屈折した精神状態をピルマ時代の青年エリック「オーウエル」とだぶらせて考えるのは行き過ぎた推測であろう。

次にフローリーなる人物を中心とする作品の構成面に目を向けてみよう。「インド帝国は圧制だ——確かに慈悲深いところがあるが、窃盗を目的とした圧制であることに変わりはない」とフローリーは言う。しかしながら顔の痣ゆえに劣等感にさいなまれているこの主人公はまさにこのような革新的な政治認識のゆえにこそ、イギリス人社会で孤立していくのである。彼の友人といえばインド人医師ベラスロミと中国人の商人リー・イエイクだけである。彼の悲劇のみならず、この作品の価値をも決定しているのは、実は彼のこの友人関係である。友人に対する彼の態度はいかにも中途半端であり全面的な信頼に基づいてはいない。ベラスロミとの交友関係はイギリス人との交際の際につきもの憂さを晴らす場にはすぎない。フローリーが植民地支配を批判する、ベラスロミが慰めるということの繰り返しである。リー・イエイクとの関係はそれ以下である。さらに言うならば、ピルマ人との真の人間的交流がほとんどない。ピルマ人から見ればベラスロミもリー・イエイクもイギリス人同様外人であった。そのためこの作品の縦糸的役割を果たすべき帝国主義批判というテーマが主人公のひとりよがりになり、その言動の中に効果的な形で織り込まれず、中空に浮いてしまっている。個人としてのイギリス人とピルマ人との直接的接触が描かれていないために、植民地問題をめぐって対立しているイギリス人とピルマ人の図式的な対立関係しか浮かんでこないのである。政治的社会的集団の典型としての個人を徹底的に描くことによって、その個人の問題を政治・社会問題のレベルにまで高め、反帝国主義というテーマを追求しようとする作者のせつかくの意図が生かされなかったという根拠が残る。

友人フレイヴルの言葉を借りれば、オーウエルはこの小説によって読者に植民地支配の不正と害悪を充分に認識させることに成功したが、この問題に対する何らの解決策も示していない。白人も現地人もいたがらに醜さをさらけ出しあっているだけで、この障壁を越えて両者を結びつける共通項がほとんど示されていない。結局フローリーの悲劇は彼個人の間接的未熟さと孤独な性格がもたらした悲劇であって、植民地支配をめぐる困難な政治的情況抜きにしても起こり得たものだという印象さえ読者にあたえかねないのである。

『ピルマの日々』は、構成面から見れば以上のような難点を指摘し得るが、読み物としては成功した作品だというのが出版当時の一般的な評価である。オーウエルとマートンで同期生であった評論家シリアル・コソリイはこの作品を評して、「私自身としてはこの作品が好きだ。鮮明な怒り、写実的描写、見事な話術と興奮、さらに刺すようにきつい皮肉などをふんだんに味わいたい人なら誰にでも、私はこの小説を推薦したい」と言っている〔一九三五年七月六日付の『ニューステイツマン・アンド・ネイション』誌〕。壮大な自然の描写や屈折した登場人物の心理描写に見られる巧みな筆致は、作家オーウエルの大成を十二分に予感させるものであり、『ピルマの日々』は処女作ながらオーウエルの小説の中では、先にあげた二つの政治諷刺小説に次いで重要な地位を占める作品だと断言できるであろう。

『ピルマの日々』以後のピルマについて少し触れておこう。一九二八年にピルマはインドから分離され、新体制にはいった。これと呼応するがごとくアジアの解放を謳って英米との戦争に突入し、ピルマを占領して名目の独立を与えた（一九四三年）日本も、結局ピルマ人の信頼を得ることができなかった。ピルマが真の独立を勝ち取ったのは一九四八年になってからである。第二次大戦後の世界においては、ピルマは英連邦を離脱し、ピルマ連邦社会主義共和国として新しい第一歩を踏み出したが、資源大国でもないピルマは、ともすれば

等閑に付されて国際舞台から遠去かり、共産党の峰起、カレン族の反乱、福祉国家建設計画などによって時どき断片的な関心をもたれるにとどまっていた。

一九六二年のクーデターでビルマは軍政に移管して、鎮国に近い状態で仏教精神に基づいた社会主義国家の建設を目指してきた。一九八三年十月、ラングーンにおける韓国高官の爆弾テロ事件でにわかには世界の注目を集めたことくらいが、最近では大きく記憶に残るところである。現在、民政に復帰しているが、軍部の権力が強大であることに変わりはない。アメリカの政治学者ジョーゼフ・シルバースタインはその著書『ビルマの軍政と政治の停滞』（一九七七）の中で、現代ビルマの最大の政治課題は、少数民族の統合問題と、西欧化した少数のエリート集団と伝統を指向する多数の農民や貧しい都市移住者とのギャップをどう埋めるかという問題だ、と指摘している。余りにも長かった植民地支配は今なお民族統一と近代国家の成立を妨げる最大の要因となっているわけであるが、この指摘は半世紀近く前に書かれた『ビルマの日々』においてすでに読みとることができる。

翻訳に際しては早稲田大学の奥山康治教授、帝塚山学院短期大学の岸本利昭教授、西新祭田高校の難波勝平教諭、その他早稲田大学に本部をおく「オーウェル会」の諸先生方からも数多くの貴重な助言をいただいた。ビルマ語およびビルマ事情については大阪外国語大学ビルマ語科の故・原田正春教授、南田みどり助教授、ビルマ大使館の高橋二郎氏からいろいろとお教えいただいた。以上の方がたに心からお礼を申しあげたい。

この翻訳は一九八〇年に音羽書房から、本邦初訳として上梓され、その後、晶文社から「オーウェル小説コレクション」の一冊として出版された。（宮本靖介・上井一家）

〔記者略歴〕

宮本靖介（みやもとせいすけ） 一九三六年、大阪生まれ。六一年、大阪市立大学大学院修了。現在、龍谷大学文学部教授。著書に『ジョージ・オーウェルの栄光と悲慘』（一九九五、英宝社）がある。

上井一家（どいかずひろ） 一九四〇～二〇〇二年、和歌山生まれ。六七年、大阪市立大学大学院修了後、大阪医科大学助教授を勤めた。

◆ビルの日々◆

ジョージ・オーウエル／宮本靖介・上井一宏訳

2002年11月20日

著作権所有者 宮本靖介・上井一宏、(C) Seisuke Miyamoto, Kazuhiro Doi 2002  
ゲーテンベルク21 (Gutenberg21) は (有) ゲーテンベルク21 の商標です。

\* 本デジタルブックは著作権法によって保護された著作物です。個人的な利用にはむろん制限はありませんが、本著作物の全部または一部を不特定多数の人に配布あるいは公開することは、有料無料を問わず、著作権を侵害することになりますのでご注意ください。

\* 本デジタルブックに関するお問い合わせは、ゲーテンベルク21社にお問い合わせ致します。

〒156 東京都世田谷区松原1-2-17 (有) ゲーテンベルク21